女鑑

第拾六年

第參號

明治卅八年二月　文部省檢定濟

◎

阿多廣介先生
園田竹熊先生　編纂

再刊　女子補習讀本

菊判大和綴美本
定價　上　金廿五錢　下　金參拾錢
郵稅壹冊金四錢
郵券代用壹割增

本書は高等小學校卒業後更に補習科を修むる女子及び修業年限二個年の高等女學校技藝專修科生の使用に供せんが爲め編纂せるものにして力めて國定の小學讀本に連絡を求め其の材料は家事家政女工等を始め實業に關する事項國家公衆に對する必要なる心得及び美文和歌等の趣味を涵養するに足るべきものを選擇したれば●實用的並に文學的興味を兼有せる完全の讀本として學校は勿論家庭に於ても必須のものなり

重要目次

發兌元　東京築地二丁目　株式會社　國光社

女鑑　第十六年第三號　目次

論說……一

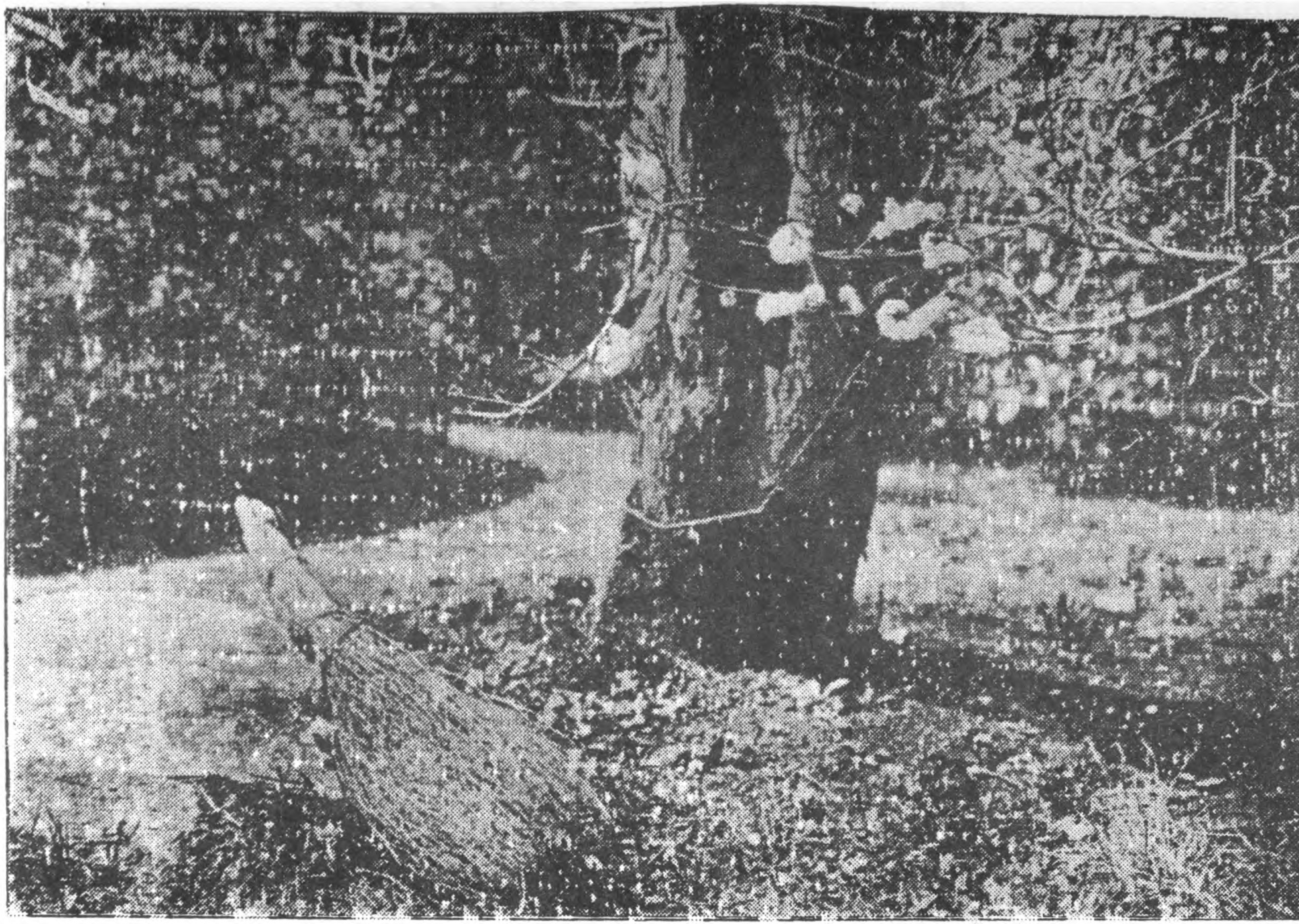
家庭……二

社會……二四

文藝……四四

家事……六〇

清香滿園



井伊直方君撮影

典侍柳原愛子君

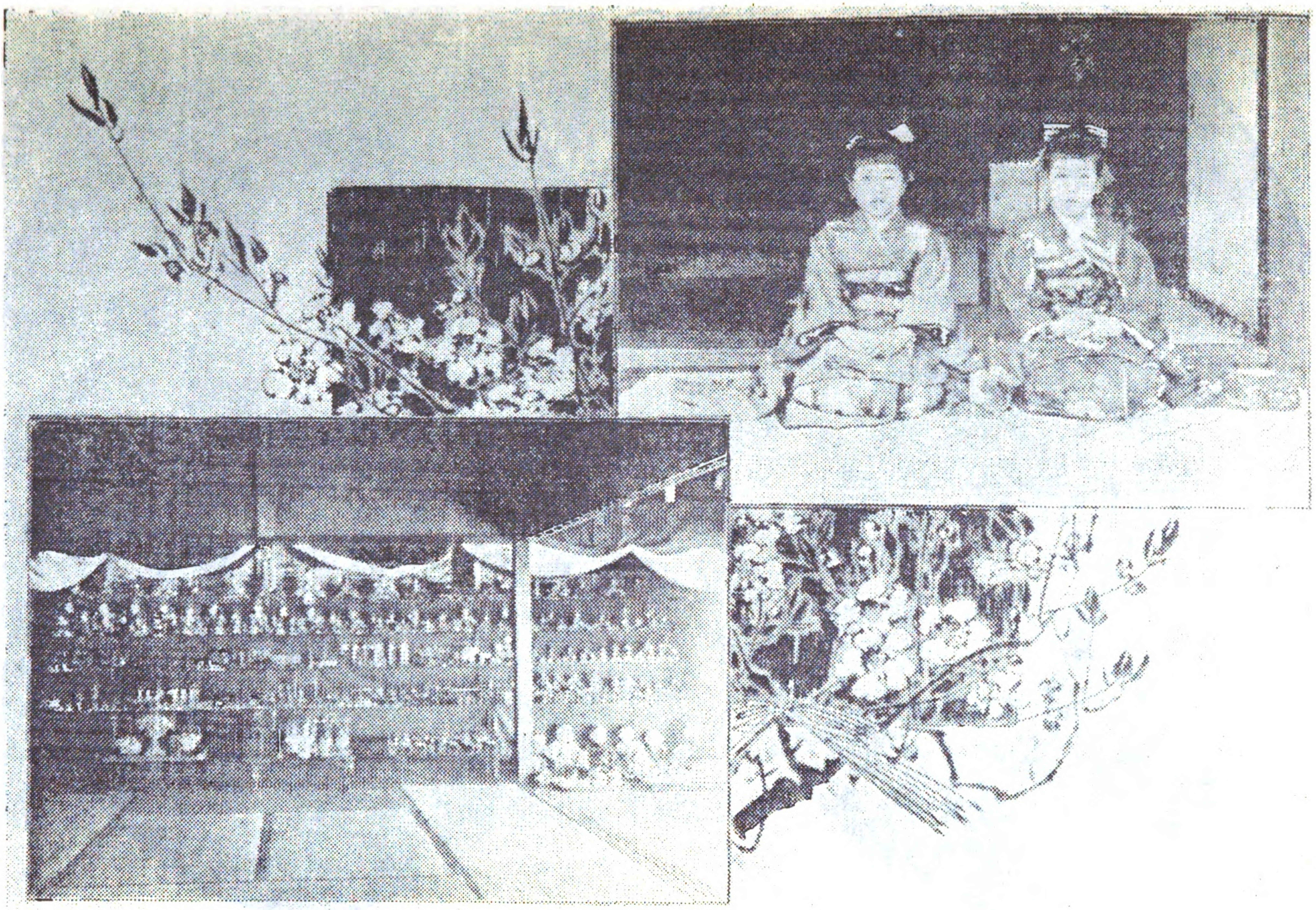


松平頼壽伯と令夫人





徳川家達公令孃



第五回博覽會褒賞受領

定價 壹袋壹錢
罐詰五錢



此名題洗粉は皆々樣の御引立に依り益々盛大に相成難有仕合に奉存候然るに近來諸方に名題洗粉の摸造品澤山顯はれ候に付弊舗製造品には袋の裏面に芝居櫓形の登錄商標を相印し御座候間何卒御求の節は篤と御熟覽の上多少に不限御用向の程偏に奉希上候也



東京淺草區黑船町
梅素亭謹製
電話 下谷 二三四

帝國貯蓄銀行

東京銀座一丁目河岸通り
（電話 新橋 八一六 二八〇八）

本鄉一丁目 本鄉支店
飯倉三丁目 飯倉支店
赤坂表一丁目 赤坂支店
四谷大通り 四谷支店
南品川一丁目 品川支店
横濱吉田町 横濱支店

牛込神樂坂 神樂坂支店
神田須田町 須田町支店
兩國米澤町 米澤町支店
淺草雷門前 吾妻橋支店

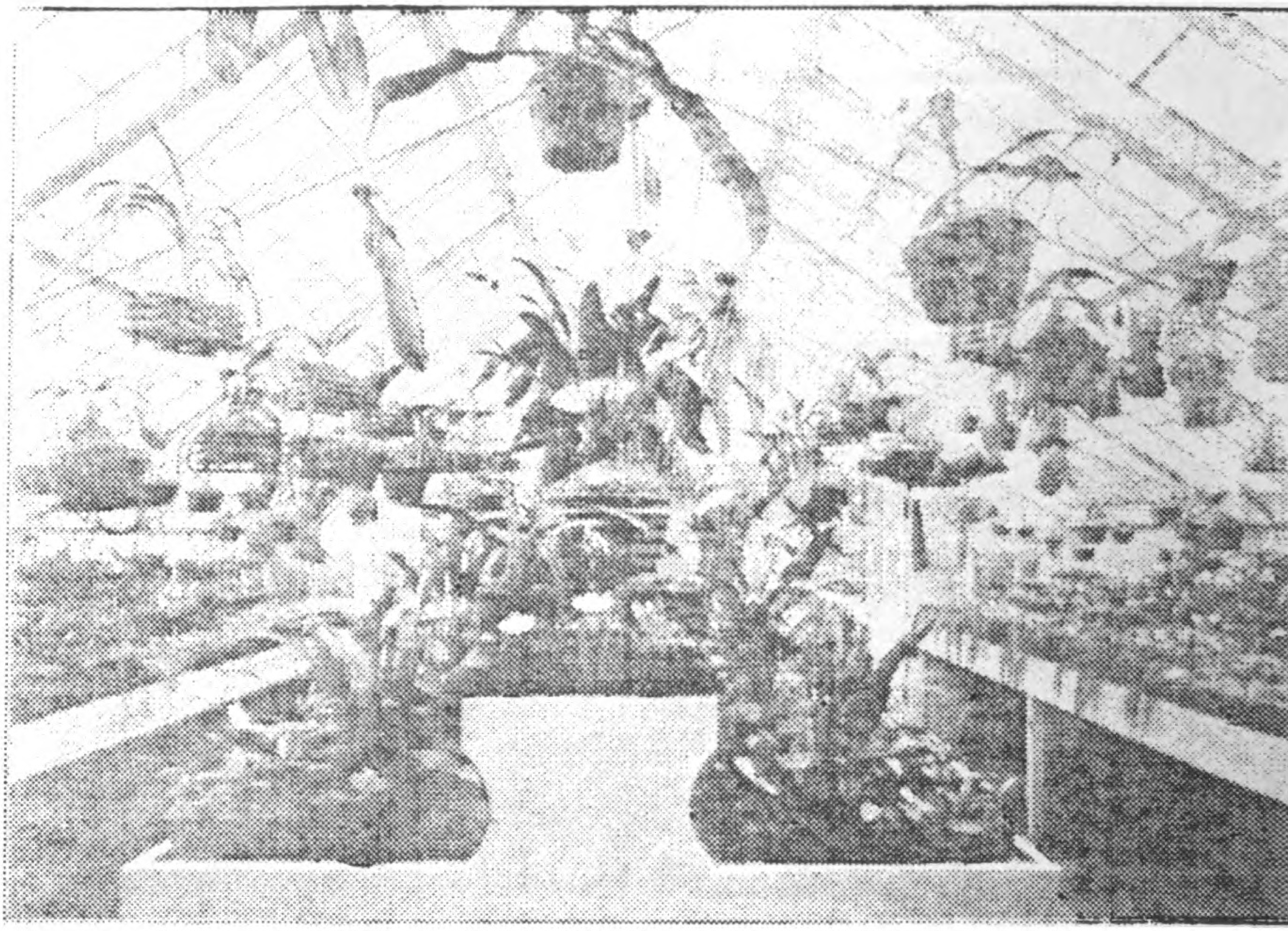
代理店
日本橋坂本町 田中銀行

●一錢以上何程にても御預り最も御便利に取扱申候
●毎月五日迄の御預け金は全月分の利子を付け申候

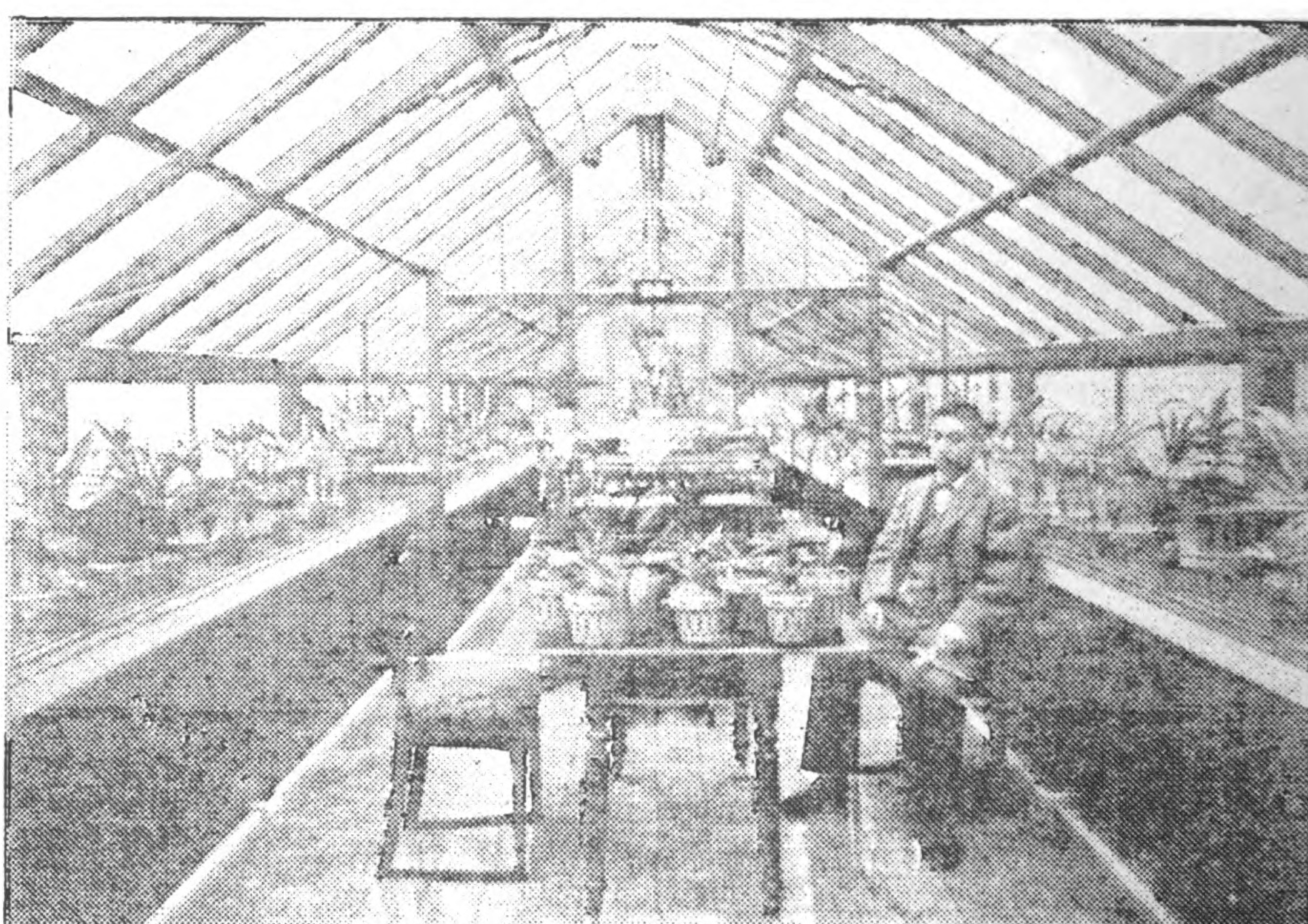
廣文堂發行圖書目錄

(東京市京橋區桶町廿壹番地)

酒井伯爵家の温室

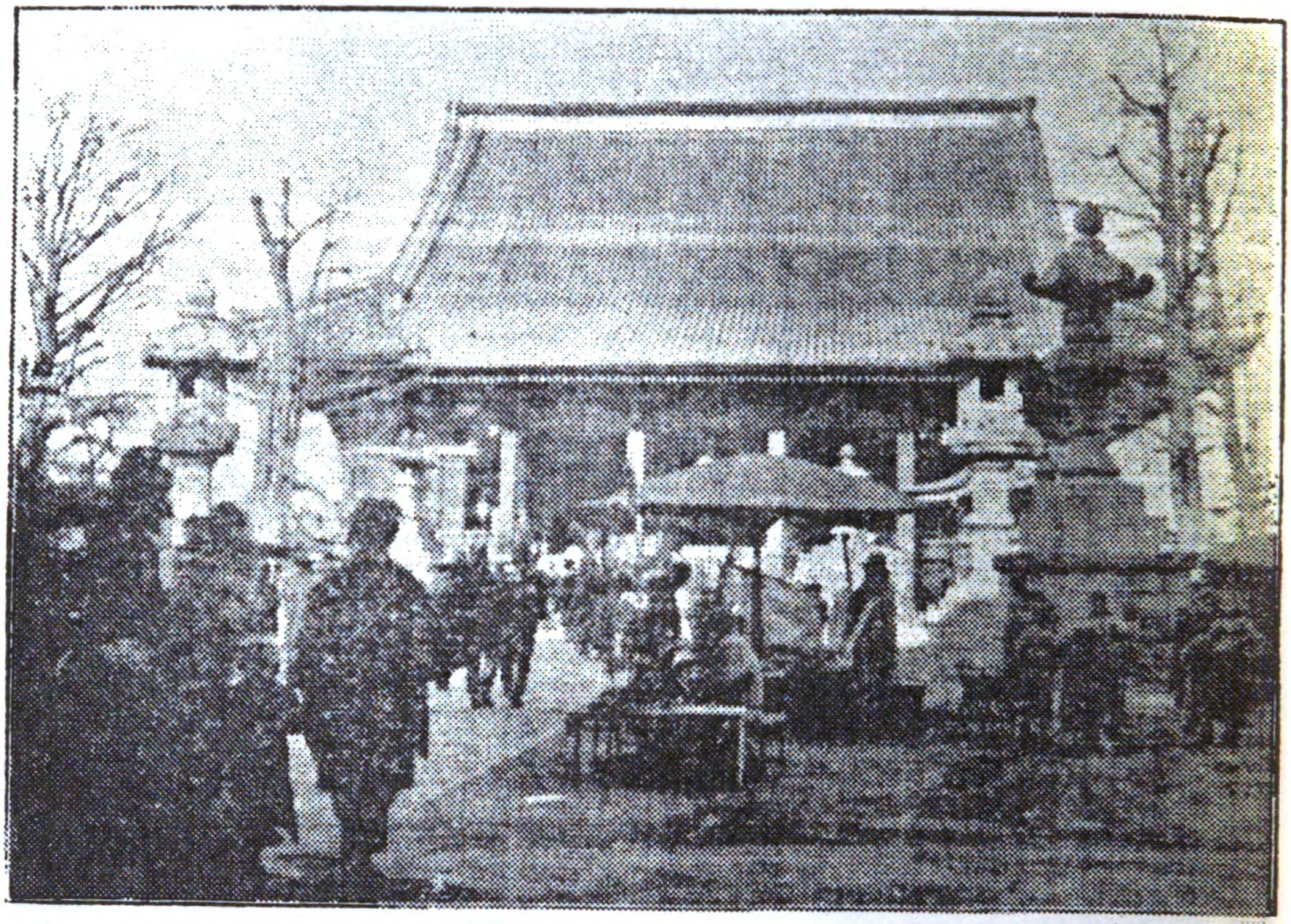


戰勝紀念室



蘭科植物溫室

淺草寺





德川男爵撮影

篤志看護婦會員



蒙古毓正女學堂



日本一手
發賣元



東京牛込
山本玉川堂

○プレスト洗粉は品質純良にして色を白くし皮膚を滑にし光澤を出す

○プレスト洗粉は普通の洗粉の如く多量に用ふ可からず壹袋を以て六七回の入浴に適す

定價　小袋入貳錢　大袋入拾錢
小鑵入七錢　大鑵入拾五錢

本年四月入學せしむべき當校私費家事専修科生三十名を募集す志望者は來三月十日迄に願書に履歴書戸籍抄本を添へ差出すべし
尙詳細は二月五、六、七日の官報又は當校に就き承知すべし
明治三十九年二月

女子高等師範學校

麴町女學校 生徒募集

校舍新築落成

本科一二三四各級若干

裁縫科一二各級若干

願書 三月廿五日限

東京市麴町區元園町二ノ四

華族女學校講師

大宮兵馬著

中等日本文典

菊判總クロース美本

定價五十五錢郵税八錢

本書は、文典初歩及文典の二冊を以て合本とし、中學程度の教科用に供せんとす。書中編述の事項は現今の普通文に向ひて直に之を應用せしむべき方法を以て各條を規定し併せて之を通俗言語と比較して其差異ある諸點をも會得せしめんと努めたり。其程度配置の如きは著者が授業上の經驗を以て基礎とすと雖もまた明治廿五年二月の發表の中學校教授要目にも準則すること勿論なり、委しくは本書を閲讀して知るべし

發兌元 東京築地 國光社




第十六年　女鑑　第三號

慈善心に訴ふ

賤や賤、賤の苧環、繰かへさゝらまほしきは、よからぬことなり、方丈記に曰く『いとあはれなる事も侍りき、さりがたき女男など持ちたる者は、その心ざしまさりて深きは、必ず先だちて死にぬ、その故は我身をば次になして、男にもあれ、女にもあれ、いたはしく思ふかたに、たま〳〵乞得たる物を、先づゆづるによりてなり、されば父子あるものは定まれる事にて、親ぞ先ちて死にける、又母が命盡きて伏せるをも知らずして、いとけなき子の、その乳房に吸つきて伏せるなどもありけり、』と、これ長明が人の世の恐ろしき一例證として、擧げたものにて、現時東北の飢饉地は、その一消息として如上の慘狀を吾人に傳へつゝあるにあらずや、文明の今日、幸に『笠うちき、足ひきつゝみ、よろしき姿し

たる者、ひたすら家ごとに乞ありく』といへる如きに至らざるこそまだしもの事なれ、さても執るに職なく、食ふに物なく、飢えて死を待つほど、人の世に淺ましくも、また悲しきものはあるまじ、東北飢饉地の慘狀は、日々の諸新聞にて諸孃の眼前を往來すべし、これを救恤する方法に至つても種々あるべし、彼等は官衙の午後何時退出の後にも、慘事を繼續せるなるべし、轍鮒に與ふる水、速に行渡らんことを願ふの切なると同時に、鈴木宇右衛門夫婦の如き人の、續出せんこと希望に堪へざるなり、

慈善を勸むるに就て

凡そ人たるものは、慈善の心をおし弘め、人に施すことこそあらまほしけれ、されば世の人に慈善事業をすゝめんとすれど、中にはさる慈善の行ひをせんにも、先づ我家のうちだに、萬足らはぬ事のみ多くて、世の爲人の爲に慈善の行を及ぼすべき、といふ人のなきにしもあらねど、さるものにあらず、たとひおのれに金錢はなくとも、深切なる心を本として、萬に慈善の趣意をとらば、身のほど〳〵につけての慈善はなし得らるゝものならんかし、たとへばはげしき坂路を上らんとする折に、老たる人の重荷を脊負ひて行なやむを見れば、徒らに見過ぎで、おのれ之に代りて助けんと思ひ、それ渡したまへ、運びてまゐらすべしと、眞心をもて云出でなば、老人もいかに喜ぶらん、あるは盲人が杖つきてたど〳〵と、溝などある方に向ひて危げなるを見て、これこちへと手をとり、廣き道に導きたらんには、盲人の心にいかに嬉しと思はざらん、またおのれ暇ありて、靜に月日を送る身にしあらば、よその多勢暮して、幼き兒など多くもたるが事繁くて困じ居る家などあらんには、其家の衣服の裁縫、何くれとなく心をつけて深切に手傳ふべしこれのみならず、すべてさる心だにあらば、萬に慈善はなし得らるゝものなり、まして家裕かなる際は、

今ぞ慈善の涙を、東北の雪に灑ぎて、冷えまさる人の心に、春風を通はすの時なる、

次に起る問題は

平素貯蓄といふ事の心掛ほしきものあり、されどおのれは一錢を儉約するは一錢を儲けたるものなり、といふ事を金科玉條とするものにあらず、否貯蓄に於ける第一義かも知らねど、金を蓄へると前に、事に勵むといふ心掛がほしきなり、身のほどを辨へて事に勵みなば、おのづから貯蓄といふ事も出來、かゝる人ばかりならんには、世の中に不景氣といふこともなくてすむなり、

事を爲すに當りて、金錢の多寡をも考へねばならぬことなれど、事を爲すことに忠實なる人と、金を集むるといふことに忠實なる人とあらば、前者には常に樂み多くして、後者には常に苦み多し、世の人のともすれば貯蓄々々と、只一念一向に貯蓄を勸むるものあれど、貯蓄し得らるゝ道によつて貯蓄したるにあらざれば、その貯蓄したる金も、たまりたる灰吹の穢き如きものとなりて、他の爲に用をなさぬのみならずおのれの爲にも用をなさず、而已ならず世の中に少しにても金錢融通の道を妨げる位のものなり、故に貯蓄に心掛くる內にも此の點には殊に注意すべきなり、

貯蓄は最肝要なる事には相違無けれど、たゞ貯蓄々々と其心のみ先に立たば、必ず禍の起るものなり、貯蓄は餘裕なり、金錢に限らず、學問も、信用も貯蓄すべし、貯蓄には相當の道と順序あるべし、貯蓄の前に先づ大に勞働をせざるべからず、正しき道を踏みて額に汗せば、おのづから貯蓄は出來得るなりそれと同時に貯蓄は散せん爲なることを怠るべからず、食ふ物も食はずして貯へる如きは、金の山を見ても餓える人なり、人はむつかしき事もして見よ、さても貯蓄はむつかしき事なり。



女子の獨立に就て

伯爵　松平直亮

近時女子教育の隆盛に赴き、其程度の進みたるは國家の爲賀すべきである、然るに教育を受けたる婦人中殊に女學生に往々女子の獨立を主張する事が流行するやうである、女子の獨立とは如何なる事かと云ふに女子が婚嫁を爲さず、一種の職業を求め、獨立して社會に活動しやうと云ふのである、即ち教育或は實業其他の業務に從事し、獨身にて此世を渡らうと云ふのである、如此論は全く女子が自己の天職を辨へざるよりして起るので、誠に嘆息の次第である、（獨身生活と云ふことは單に女子のみではない、男子にもあるが、玆には殊に女子に就て云ふ）而して女子の獨立と云ふことは、次の三點よりして否認しなければならぬ、

第一　天則に反し、生理上より否認しなければならぬ、

第二　女子の性能發展及天職より否認しなければならぬ、

第三　國家の組織上より否認しなければならぬ、

此他の點もあるが、此三要點より明かに否認するのである、女子は必ず婚嫁すると云ふ事は、即人間の常

道天則である、併し乍ら或場合に依りて所謂變法として獨立を是認しなければならぬ場合がある、即ち次の如くである、

第一不具廢疾の者、これは俗に言ふ片輪であつて、惡い病に罹るとか、怪我をするとか、或は先天的不具であるとか、即完全の身體でない人である、如此人は止むを得ず、婚嫁をせぬでも宜い、又實際婚嫁することの出來ぬ身體になつて居るのである、

第二遺傳染の病ある者、これは遺傳又は傳染すべき性質の病を受けて居る人で、其婚嫁する爲病毒を夫或は子孫にまでも及ぼす事になるからして、單に一家の爲のみならず、公德上國家の爲に婚嫁せぬ方が善いと思ふ、

第三結婚するが爲に重大の目的を果たす能はざる場合、此重大と云ふのは、餘程重要なる場合を指したので、女子が國家人類の爲、非常なる任務を帶びて居る場合、即ち他人を以て換ふ可からざる場合であつて若し其女子が獨身從事せざるときは、其事業の廢絶し、國家人類に大なる影響を及す場合である、如此止を得ざる時に當ては、國家社會の爲、將た人類の爲、枉げて婚嫁をせぬと云ふ事は、是亦赦して宜からうと思ふ、併しこれ容易に赦すべき點ではない、即天則常道を破るのであるから、十分愼重なる考慮を要するのである

第四止むを得ざる事情の爲婚嫁の時期を失せし者此時期を失する者の中に、生計上の爲に失したる者がある、即自分の父母等を養ふ爲、粉骨碎身して、其業務に從事し、爲に婚期を失し、遂に配偶を求むる能はざる場合である、又身體上の爲、時期を失することがある、即ち或る病に罹つて治癒する事が數年もか丶り、遂に身體虚弱の爲に、婚嫁の時期を失したと云ふやうな場合がある、其他種々な事情の爲に、婚嫁の

時期を失した場合である、即故意に過すにあらずして、止むを得ず、時期を取外した場合である、如此人は是亦婚嫁せざるも恕すべきであらうと思ふ、第五一度婚嫁せし者、此は婚姻を爲したるも、不幸の爲め或は事情不得已獨身者となりしものにして、一度婦人の天職を果したるものである、如此者に對しては婚嫁を再び强るには及はぬど思ふ婚嫁をせざるも可なる場合は、前五項の場合である、それで國家の組織上から言つても若し女子が個々獨身にて此世を渡ると云ふ事であつたならば國家は如何にして成立すべきか、極端に言へば、人類は遂に消滅に歸するのである、女子の婚嫁と云ふ事は即ち國家の爲、殊に女子の天職を果す爲に、最も必要である、即婦人の常道として守るべき點である、然らば女子の天職と云ふものは如何なるものかと言へば、即第一に人の妻となり家政を執り、良人をして後顧の憂なからしめ、人の母となつては、子女の敎養に力を盡し將來國家を繼續すべき良國民を作る責務を有つて居る、此責務が即賢母となり、

女子敎育に就て

◎女子敎育上の二大禁物　現今の社會の有様に於て、女子敎育上禁制すべきものは、小說と芝居なり、惟ふに今日世に發行せらるゝ小說の内、その構想淸健にして年小女子の心情を紊はしめざるもの、又絶無にあらざるべしと雖も、大抵は淫猥卑陋なる男女の戀愛を柱として、之に絡むに兩性の實感を挑發するが如き、情緒纏綿の筆致を以てし、靑春の血潮に充されたる、神々しき女子の胸を狂はしめて、夢の如き戀の淵瀨に沈淪せしめ、慾情の征矢に射らるゝところ、遂に一生涯を誤りて、薄倖の境地は陷るものなれば、一輪の花に憧れ、一閃め星に狂ひ易き靑年時代の女子に對しては、小說を手にすることを堅く禁制せざるべからず（假令淸健の小說なりと雖も一々鑑別の煩に堪へざれば）又之と共に芝居の如きも、時に婦德を奬勵し、女子の手本とすべき脚色なきに限らずと雖も、現今俳優の社會上に於ける品格、及び性行と觀客の種類等は、未だ以て高尙なる藝術美を解するものにあらざるのみならず、偶々以て年少女子を墮落せしむる階梯を與ふるものなれば、小說よりも一層嚴重に之を禁止すべきものと思考す、

◎日本女子の特長　歐米の婦人に比較して、日本婦人の秀でたる美所

良妻となつて盡すところの天職である、此等の責務を十分に盡すことを得たならば、婦人として重大なる責務を果したので國家に對して充分貢獻したものと云ふて宜い、然るに世間此婦人の天職たる賢母となり、良妻となると云ふ事を、充分了解せぬものが往々あつて唯獨身を以て社會に生活することを誇るもののあるは、最も誤れるの甚だしきものである、即天則の如何婦人天職の如何を解せざる者である、然らば此婦人の天職を實行する上に於て如何なる事を心に銘じて置かねばならぬかと云ふに、即ち

第一　女子の天職の性能を發展し天地の化育を助くる事

第二　日本帝國的賢母良妻たる事

第三　國家の分子たるを自覺する事

此の三要點である（此外は略す）即ち各自天性を發展し、其性能を全うし、天地の化育を助成するの心掛あると共に、我帝國的賢母良妻たるの資格がなければならぬ、又同時に自己が國家を組織せる一分子たるの自覺がなければなりませぬ、即ち自己の一擧一動は國家に大なる關係を有す

は、謹し貞操の一事なるべし、勿論西洋の婦人と雖も婦人の貞操を重んぜざる者なかるべく、又日本の婦人と雖も貞操を無視するものこれなしとせざるも、大體の上より批評するときは、日本婦人の貞操の堅固なることは、迚も西洋婦人の學び得るところにあらず、而して其原因はかの嚴格なる儒教の感化に由るものなるべしと雖も、中世これを武士道の鎔鑪に入れて日本化し、更らに精煉陶冶したる結果に外ならざるべし、かの大和魂なる靈格が、男子の胸底に潛みて、國家緩急の場合に華の如く爛發するを以て、大和魂は日本男子の特性なるが如き觀なき能はずと雖も、かくの如き遒勁健全なる思想を作り出したる者は、即ち日本婦人に外ならざれば、大和魂の本家本元は日本婦人の獨占するところにして、唯だその魂を主我的に外界に發表するの機會なきより、潛みて貞操の女德と爲り、發つて大和魂の正氣と爲りたるものなり。此の故に日本男子の強健なるは、其母たる日本婦人の強健なる所以にして、日本男子が世界に於ける最勇者たると共に、日本婦人は世界上の最勇者なりと云ふ敢て失當の言にあらざるべし、故に我輩は此の日本婦人の特長をして、單に歷史的の特長たらしめず、更らに進んで高尚なる學問の上に於て、いよ／＼向上進歩せしめ、以て健全なる國民を造る、健全なる母親たらしめんと欲す（河原一郎氏談）

る事を自覺せねばならぬ、殊に女子が家政に從事し又は女子の教養に充分なる効果を奏したならば、即國家に貢献するところは實に偉大なるものである、即國家に對し女子の一身が非常なる關係を有つて居ると云ふことは明かである、常に國家の一員である國家を組織して居る一分子であると云ふ事を自覺し、崇高なる抱負を有つて盡さねばならぬと思ふ、即一家の中にあつて、家政或は子女の教養に從事するに當り、常に人類の爲、國家の爲、女子の天職を盡すと共に、自己の一擧一動が國家社會に大なる關係を有することを確信し、勇剛忍耐以て女子の本務を盡されんことを望むのである、

婦人と永遠の觀念

三輪田高等女學校校長　三輪田眞佐子

あはれ、推移して止むことなきものは世か、變轉して常なきものは人か、されど世界及び人生を達觀せば秩序の整然たるものあり、從ひて、世に不動の理あり、人に不易の道あり、などか、疑ふべけん、これを以て、善因に善報あり、惡因には惡報あるべし、故に、われ等の執るべき行爲の標準は、道理の外にはあらじ、即ち、一言發するも道理に適ふや否やを顧るべし、一擧決するも、道理に合するや否やを慮るべし、果して然らば、神に禮拜せずとも、神の意に戻らざるべく、佛に歸依せずとも、佛の心に背かざるべし、近來わが國民に、宗教心の薄きを歎くものあるも、若し皆、道理を信仰する美風起りなば、宗教の形式を借らずして、自然に宗教の要求する實行は擧るべし、反之人々の宗教の形式のみを重んずるも眞に博愛、慈悲の德にして實現せざらんか、心を安んずるに足らざるなり、されど、世の實相を見るに、善人必しも榮えず、惡人必しも亡びざるあれば、所謂、道理の存在を疑

ふものあらんも、一旦永遠の觀念わが胸に起らんか、因果の關係は、寸毫も違はざるべし、即ち、少時の中に於ては、公平ならざるものあらんも、永遠を通して達觀せんか、善にして報はれざるはなく、亦、惡にして報はれざるものはなかるべし、古歌に、

うきふしもしばし待ち見よ竹の子の
生ひそふのちの蔭もこそあれ

と、實に、暫時の忍耐を要せば、おのづから、運命の盛なる春にめぐり逢ふらん、况んや、永遠に於てをや、亦、今日紅顏の美少孃も、明日は白頭嫗となるは免れず、されど、鏡に對して歎ずるを止めよ、彼の木葉の枯落するは、死滅にあらずして、更に新芽を生ぜんがためなり、人生僅に五十年と、言はゞ言ひ得んも、永遠の觀念を以て、社會を見んか、人生は無限なり、即ち子々孫々、生々として殆ど絕ゆることなかるべし、

果して然らば、婦人の天職は徒らに、花の色は移りにけりなどゝのみ悲觀せずして、身心共に充分の發達を遂げて、有道、而かも、幸福なる家庭を作り、母たる本分を全くして、子孫の進化を謀るにあり、思ふに、われ等の先代は既に、幾千歲經たりけんは知るべからざる如く、われ等の子孫は、更に、幾萬年經るらんも計るべからず、されば、世は永遠を以て形容し、亦、永遠を以て理想とせざるべからず、勿論、一個の肉體は、つかの間も平穩なるものにあらず、累々たる墳墓には、春草白骨の間に生ず、されど、其名譽と事跡は永續すべし、見よ、紫式部は影だにも見えすと雖も、其著源語は、不滅なるべし、クリミヤ半島の戰は夢と去りしかど、ナイチンゲールの道心は、吳竹の進む世と共に、益す活動すべし、楠公の母及孟子の母等は、黃土に入りて既に久しと雖も、永遠不朽の敎を垂るゝことは事實ならずや。

若し、かゝる遠大永續の者を懷かずして、我行爲を定めんか、朝夕の安逸のみを事とする、利己主義となりて、小にしては、一家子孫の謀を營む能はず、大にしては國民萬代の策を建つる能はざるべし、あはれ、生れて碌々として爲すなきものは、全く永遠の觀念なくして、姑息に安んずるためならんか、

次に、平和を以て理想とすべき婦人の大敵は、彼我の邪見を立つるにあり、そも〳〵、彼我は、差別の極にして、甚しきに至らば、己を厚くして、人を遇するに薄く、自ら、飽食暖衣に慣れて、他の寒さに泣き、飢に叫ぶを聞かんも、同情なきに至らんかし、茲に於て、博愛の敵となり、慈悲の敵となり、將た、仁の敵となるべし、などか、社會に平和なるものゝ實現せらることあらん、

尤も、今試に、今日富貴なる者の幾代か先きを逆りて考へよ、亦、現今貧賤なる者の幾代か後を下りて思へよ、永遠なる長時間を通じて沈思熟考せよ、富貴なるものゝ强ち誇るに足らず、貧賤なるもの特に恐るゝに足らず、一朝其位置の相顚倒することなきを保せず、古人が、高名富貴若し長へならば、漢水も亦應に西北に流るべしと、戒めし言を忘るべからず、

まことや、人生は夢にあらずして實なり、故に、これに應ずる婦人たるものは、夢に歲月を送るべからず一擧手、一投足將に眞面目なるべし、一時の僞善を行はずして、永遠の眞善を行ふべし、目前の肉體的安逸を貪らずして、永遠の良心的安心を求むべし、我が發する聲は、永遠の響と知れよ、我が決する行は、永遠の影と知れよ、眞に此心を以て婦人の道を開かば、家にありても、國にありても、良からざるはなし、



女子と物心と二生活

文學士　三輪田元道

古より聖人學者出でゝ、物心の兩義につき、種々の解釋を試みしかど、未だ、究極に至らざるこそ遺憾なれ、敢て問ふ、心とは如何、曰く心とは物の結合より起る勢力の活動に外ならずと、これ非か、物とは如何、曰く心の所造に屬する現象の往來に外ならず、これ是か、孔夫子は怪力亂神を語らずとの識見を懷きけりとぞ、實に、彼れは凡なるが如くして凡ならず、思ふに、實践的人道は善と信ずる所に向上すれば足らん、

抑も、世の所謂文明とは、物心の調和的向上發展する社會相なり、故に、心的生活のみを認めて、文明と稱すべからざると同時に、物的生活の増進のみを以て、文明と言ふべからず、如何となれば、物は心を以て其光を現はし、心は物に由りて其快を感ず、決して、絶對に物心の兩義は分離すべからざるなり、然れども、古來、東洋の道徳は、心的生活を以て高しとなせり、即ち、不義にして富み且つ貴きは、余に於て浮雲の如しとの抱負は、現今、他力の僥倖を事とする、薄志弱行者を慚死せしむるに足らん、一簞の食、一瓢の飲の樂は、高樓に安臥して、美味に飽くもの丶知る能はざる所ならん、亦、武士は食はねど高楊子の氣風は、日に月に、衰退するが如し、況んや、春色秋光に雅懷起りて、詩的生活を營むもの少く、釋氏に歸依して、眞如の實相を見んと試むるものも多からず、さりとて、基氏山上の十戒を躬行して、實に、野に咲く百合の花の味を知るものも絶えてなく、或は、カントの書を批評するを學びて、カントの如き心的生活を樂むものも殆どなから

ん、茲に於て、男女風敎の振ざるは怪むに足らず、勿論、今の世は讀書界の數量に於ては、明に進歩せんも、所謂、言敎を尊びて、心敎を重んせず、從ひて、朝に道を聞かば、夕に死せんも可なりと言はんも可なり、眞面目に心を修養するもの稀なるが如し、蓋し、目下、敎育を受けたる女子が、反りて、往時の敎育を受けざる女子にも劣るとの非難は、確に、修養如何の一點に存するならんか、

試に女子の理想なるものを開けよ、徒らに父祖の餘財に由りて、富豪なる家庭に、奢侈の物的生活を送るものを、幸福となすのみならず、嫁かんにも、肥馬に乘り、輕裘を着る社會にわらざれば、耻辱となし、錙ばかりも、良人なるものゝ修養如何を問はず將た、趣味と氣品の深さ價値如何と糾さゞるめり、これ全く、社會の表面に現はれて、愉快の境遇らしく見ゆる婦人は、物的生活に不足なきを想ひての、不完全なる歸納より來る結果ならん、

總て、社會の風潮は極端より極端に走るものなり、即ち、我國昔日の武士道的敎育は、心的訓練のみを主とせしかば、殖産工業の世務を輕んじ、施いて、貿易振はず、外交擧らざるを以て、物的活動を唱道せし必要ありき、現今は金錢なくば萬事止むと信ずる主義、益勢を得て、人間の位置と人格を計るに金錢を以てし、遂に、婚儀の如きも、心を撰ばずして、先づ物を採るに至れり、嗚呼、過ぎたるは及ばざるとはこれの意か、

固より、物的生活を離れて、山中獨禪せんも、得る所果して幾何ぞ、思ふに、人は心的生活をも忘るべからずといへども、俗に居りて俗を脱し、衆に和して衆に同せず、わが信ずる道に基きて、生活するこそ至當なれ、從ひて、我が力に由りて富み、而かも我道を妨げざる限りは、金殿玉樓に住むも可なり、山海の珍味を嘗むるも非ならず、唯、社會の程度に比して、奢侈に流れ、鰥寡孤獨に同情なくして、獨り我欲を充すことは、君子の與みせざる所なり、加之、他力の物を求めんとて權門に腰を屈し、自力の

物に由らずして門戸を高くするは、醜の醜なるものと言ふべし、若し、我が心は清く我が心は美ならば、たとひ、賤の伏屋に住み、巨魚膳に上らずとせんも、樂しき家庭は結ばるゝを得べし、即ち、奉養の資、豐ならざらんも父母の心を安んぜば、至孝と云ふを得ん、或は、粗糠を嘗めんも、不平の色なく能く良人をして、内顧の患なからしめんか、貞婦と言ふを得ん、或は、やけ野の雉子夜の鶴にも勝りて子を愛し、其立身の暁を唯一の快事とせんか、慈母と言はざるを得ず、斯くしてこそ、始めて女子の天職を全うし、我が心的生活をして、この世からの淨土に導くと知れ、人生何ぞこれより以上の目的あるべけん、



但し、好みて赤貧に陥り弊衣粗食の止むなきは、決して名譽にあらず、否一種の恥辱なり、我に心身あり、勞役するに適す夙に起き夜はに寝ねて、我が心身を活動せしめば家運おのづから、向上すべし、古人曰く、衣食足りて禮節を知ると、實に多くの場合に於て、貧賤はわが德を害するものなり、故に、人生常に勤儉の二字を忘るべからず、果して然らば、獨立獨行の眞人となるを得べし、彼の父祖の遺産に寄食するもの、恥辱なると同時に、

怠惰のために飢寒を訴ふるものは一層の恥辱なり、論じて玆に至らば、絶對の物的生活は無意味に終らざるを得ずといへども、亦、絶對の心的生活も不可能に終らざるを得ず、されば、物心の合致する一元的生活を以て、理想とするこそ至當なれ、即ち、一元的生活とは、世の所謂、天爵と人爵と一致し、高等の位置にあるもの、必ず高等の智德を有し、これに反して、精神の修養を主とするものも、亦、經濟の關係を辨へ、心的生活と物的生活とをして、相懸隔せしめざるにぞある、古來、字を知るを以て、憂患の始めと信ずる人多きは、心的生活の盛なるに、物的補給のこれに及ばざるため、遂に、不平の生涯を送るを知ればなり、さりとて、風前の燈の如き富裕に依賴して、心的修養を缺ぎ、身は飽食暖衣の境界に在らんも、醉生夢死の生涯を送るものも少からず、これ物的生活を以て、人生唯一の目的と誤りし罪なり、

要するに、余は家庭の主宰者たる女子をして、物的生活のみを理想とせず、亦、心的生活のみを幸福とせず、心物の一元的生活を營むを以て、人生觀とせんことを切望す、千代女の句に、清水には裡も表もなかりけりと、實に、人生に於て、心物の一を偏廢せんとするは、大なる僻見なり、余は感情の極端に走り易き女子をして、中途を離れ、ぬば玉の暗路に迷はしむるを欲せず、故に、稍、高尚に失せん恐れあらんも、諸子能く社會を通觀して思一思せば、釋然として悟ることもあらん、

繼母と繼子

華族女學校學監　下田歌子

世俗の諺に、繼子となるとも、繼母となるな、と云へる、げにさる事にぞあらん、血を分けたる生の子ならんには、たとへ無理云ひても、腹立ちても、母子の間に紙一重の隔ても無ければ、互に廻り氣と云ふもの、露程もなき儘に、今朝の怒りも、何時の間

にか忘れて、夕飯の卓には、那方からやら、はやほゝと打笑ひつゝ、雜談に興を催すめり、然るを、繼しき中となれば、遠慮深き婦人にありては、なさぬ子故、酷く取扱ふと云はれてはならじとの、氣兼過ぎて、知らず知らず、繼子を我儘者となし、又意地強き婦人にありては、繼母なりと、輕蔑されて、已れが品格を落さじ、母のしめし聞かれずと云はれてはならじと、勉むる故に、却りては、諍し、つれなしとも誹らるかし、扨又、世間姑母と云ふ者が、存外にうるさきものにて、ヤレ那所の繼母には斯う斯うの事ありと、針小棒大に觸れまはる程に、果ては繼母の耳にも入り、繼子の口も出で、互ひ〳〵の胸にうやむや迷ひて、遂に氣まづく成り初めては、何心も無くて云ひつのる事も、心に障り、不用意にして爲しつる事も、當てつけがましく思ふに至り、波風、やう〳〵家の内に立ちて、心火ます〳〵消ゆる時無く、氣より出だす鬼に、佛心も跡無く成りぬるど佗しき、抑も、生みの子は、我れに孝ならざるも

左程には心にとゞめぬを、なさぬ子は、孝なるも、猶不滿に覺ゆるは何の故ぞと云ふに、そはたゞ、一つの感じのみ、試に思へ、幼き頃に行方無く成りなどしたる子の、今は世にあらじと思ふが、姓も名も變りて、近きわたりにあればとて、何條我が生みの子の如く、慈まんの情が起るべき、さるを、一朝素性の解りて、我が子なりと知るに至れば、俄然として、愛情の湧き出づるも怪し、然るに、之に反して彼の昔物語に在るやうに、若し、假に、産蓐の中に取り換へられたる子の、大人るに及びて、他人なりと知れ、他人の子の、我が子なりと知るゝに及ばゝ母の愛は、必ず彼我相ひ反對して、是に薄く彼れに厚くこそ成り行くらめ、親子といふとも、精神を、ひとつやうに作り出でらるゝ者にあらざる限りは、其愛情も、多くは是れ、感じによりて生ずるなるべし、然らば則ち、よしたとへ、我が生の子ならずして、繼子に隔つる心ありとも、我が心に隔て無く、まこと、生みの子と思ひて、慈み養はんには、いか

でか、遂に、其眞心に感じて、孝なる子とならずやはあるべき、されど、凡人の淺ましさは、我れに惡き心無けれども、彼れに曲れる心ありて、つれなく疎々しくふるまふ時は、理は理として、猶、仇する人を愛することは難きものなる故に、この時に尤も大切なる心の主として守るべきは耐忍なり、むかしある心學先生のもとへ、一人の婦人來りて『先生、私は、緣ありて、某の家に嫁ぐことゝ定りましたが其家は裕かなれども、二人の繼子あり、これだけが缺點なりと媒つ人の申しまするが、いかなる心得にてまゐらば、能く母の道にかなひますぞと』と問ひけるに、先生答へて『其れは、段々心得べき敎へもあるが、先づ汝の心がけはいかゞなさるつもりなるぞ』と云はれて、婦人『私は、何でも、其繼子を、生みの子と思ひまして、慈みませうと存じます』と答へければ、先生首をふりて『汝が、生みの子と思ひても、先方が生みの母と思はずばどう成さる、』婦人詞窮して、さしうつぶきしかば、先生其時『其れはたゞ堪忍、堪忍といふ事さへ、寢ても覺めても忘れざつたならば、遂に必ず、汝の望みの如く、生みの子と思ひ、生みの母と思はれるやうになりませう、』と敎へられしかば、婦人は、げにもと悦びて辭し還れりしとぞ、まことにいみじき訓戒なりかし、生みの恩の高きは、富士山も及ばねども、養ひの恩の深きは、又、日本海の底も及ばじ、世に、親と呼ばれ、子と呼ばれて、其陰に生ひ立つこと、たとへ血を分けずとも、宿世淺からぬ緣なれば、繼母なりとて、つゆばかり心の隔てを置かず、思ひ及ばん限りは、孝行を爲すべし、よし、始めの程、繼母の心かど／＼しく、又曲けなどして、つれ無く侘しきやうのしむけありとも、決して、爭ひ逆ふ事無く、我れは能く、子たるの道を守りて、裏なくつかへまゐらすべし、至誠の淚は、鬼神の袖をも濕ほし、赤心を押す時は、岩も碎くるものとこそ聞け、諺にいふ長きものにはまかれよ、無我の心には、魔神入らず我れ我が行ふべき道を行ひ、云ふべき事を云ひ、已

れを修めて能く長上に從ひ事へば、遂には、心の鬼の角も折れて、佛菩薩と化したまはざらんやは、然るを、頑愚き子は、我より先づ、楯をつきて、繼子心を出し、眞直なる事をも、横に取りて、逆に車をおす故に、母子の中は、次第々々に離れ背きて、淺間しき狀態をさへに、現し出たすに至る、かへすぐも恐るべく愼むべき事なり、
ある人の歌に、

宿り木はおや木のかげにおほはれて
　ひとつみどりに生ひさかえけり

乃木將軍夫人の逸話

金剛堂主人

乃木大將の凱旋せられてから、都鄙の諸新聞に大將の逸事を掲載せざるものは一もなき有樣であるが、其夫人靜子殿に關する事は一向にないから、私は夫人の逸話を述べませう、是は今を去る十幾年前去る廿七八年の役、將軍が少將より中將に進み第二師團長に補せられ、遼東半島の某地に滯陣せられた頃の事であるが、或日伊勢山田の神宮司廳へ一人の男兒を伴つた、婦人が案内を請ひました、取次の禰宜が其風體を見ますると、至て麁末なる綿服を着まして帶も持物も甚だ質素を極め、其小供は中學校の麁末な制服を着けて、母なる人に引添ふて居る、禰宜の鑑定では先づ田舍の村長の妻君か、學校教員の家内でもあるかと思つて應接所へ通し、扨て用向はと問ひますと、婦人は慇懃に手をつかへまして、私は唯今外征の王師に從軍して居る、軍人の家内でありますが、我軍の大勝を得ます樣、二つには出征者の無事凱旋を得る樣、大々神樂を執行して頂きたく存じますが、費用は何程か丶りますでせうかと言はれました、其時禰宜は心中に此婦人何を云ふか、大々神樂と云へば莫大の金が掛る事だのに、どうして其丈の金が出せるものかと思ひ、輕蔑の色を面に現はして、其は御奇特の事ではあるが、大々神樂と云へば

二十五圓、三十圓、五十圓、其からまだ特別のもありますと云つて、婦人が定めて驚くであらうと其顔色を伺ふと、一向に平氣で其ではどうか之で萬事宜敷願ひますと、手垢の付かない、唯だ今印刷局から請取て來た樣な、十圓紙幣幾枚かを差出されたから禰宜は膽も潰れん許りに驚きました、遽に言葉も叮嚀になり、シテ貴殿樣はどなたの御内室樣で、御出征の御方の御名前は何と仰せられますか、大々神樂には其を承りませんではと問はるゝに、夫人は再三辭みしも、是非にと言はるゝに左迄秘すべき事でも

余が經驗したる新婚の媒妁

丸山名政

聖人は禮樂を貴ふ、婚姻の儀式は靜肅莊嚴を旨とすべきである、然るに我日本の結婚式は三々九度の献酬に「四海波靜にて國も治る時つ風、あいに相生の・松こそめでたかりける」と高砂の謡でお仕舞になり、跡は杯盤狼藉、謡ふ、踊る、花嫁に酒を強ゐ、いやはや話にならぬ殺風景を演出する、これは何とか改良する工夫のないものであらふか。

基督教の結婚式は靜肅莊嚴で良いと思ふが日本人が悉く基督教徒たらざる以上は、此儀式を普く適用することは出來ぬ、近頃は神宮教會で結婚式を行ふ人もある、日本人は神の末孫で、出雲の神の引合せで結ぶ縁とすれば、神前の結婚は確かに從來の小笠原流などより勝りて良いヿであると思ふ。

余の知人に海軍大尉某氏と云ふがある、今年二十九歳で、日露戰爭には、最初某驅逐艇に乘込み、旅順閉塞や封港に從事し、其後某一等巡洋艦乘込に轉じ、蔚山沖、日本海、樺太等の各海戰に從事し、殊勳を帶びて、去年十月橫濱港に凱旋した、余はさる仔細ありて、此人に余の親戚の娘よし子といふのを婚嫁せしむる媒妁人となつたのである、所が大尉の注文が斯ふである、余は一所不住の船乘、天涯の無宿者で妻を迎える家がないから、足下の家を借りて婚儀を擧げたいが、三々九度の遣り取りも舊式であるから、萬事簡單に宜しく賴むとのヿである。

余は某氏の依賴を萬事引受けた、さて愈よ結婚式の日午前十一時といふに、新郎新婦を始め親戚知友は余の家に集まり規則正しく式場に座を占めた、余は恭しく新夫婦の前に進み出で、此妙齡なる紳士淑女が眞實に人生の大事たる結婚の實を擧げ、且つ永久に苦樂を共にするの意思ありやを問ふた、よし子孃は淡紅色の顔を僅か羞しげにもたげて、「はい」と答へた、大尉は支那海、日本海の波荒き戰場で

幾たびか砲煙彈雨の洗禮を受けた豪勇の軍人なれど、斯樣な席には稍や臆したと見え、是れも僅かに「左樣」と答へたのみ跡は無言、酒杯の獻酬は一回にとゞめて最後に余は恭しく三寶に上せて置いた一書を取り上げ朗讀した。

教育勅語に曰く「爾臣民父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し朋友相信じ恭儉己れを持し博愛衆に及ぼし云々」と新夫婦兩君は此勅語を學校又は家庭に於て既に幾びか暗誦せられしならん而も之れ國民の守るべき一の訓言として唱讀したるのみ今や則ち然らず夫婦互に相和するの實行界に入り温き家庭を作らざるべからず。

勅語に又曰く、一旦緩急あれば義勇公に奉じ云々」と之れ國民の守るべき本分にして大尉は既に此奉公の大義務を卒へて凱旋したる人、之れが妻たるよし子孃は將來何時吾良人の身上に再び此の大義務の落ち來るや知るべからざることを心に銘し、平生其覺悟なかるべからず。

勅語に又曰く「斯の道は實に我皇祖皇宗の遺訓にして子孫臣民の倶に遵守すべき所云々」朕爾臣民と倶に拳々服膺して咸其徳を一にせんことを庶幾ふ」と此一語、畏れ多くも上 陛下より下萬民に至る迄遵守すべき倫理常道を宣示し給へるもの、新夫婦兩君は仰ては九重雲深き所 我 皇室の彌々榮へ給ひ、清く麗らけき御容儀を拜し、 勅語の好範を示し給へるを感ずると倶に自ら温健なる家庭を作り、忠良なる臣民の模範を世に示すべし、之を式辭となす。

式終りて後一同を菜茶亭へ案內し、結婚の披露を爲した、一同は祝杯を擧げて、新夫婦の前途を祝した、大尉は此四五年間劇職に在り殊に最後に二年間は戰役中とて三日と續けて陸地生活を爲したることなかりしが、今や名譽ある凱旋に當り、三週間の休暇を得其上新妻君を得たり、得意想ふべしである。一同は氣を利かせ匆々此宴會を切り上げ、新夫婦と行李とを新橋停車場に送り屆けた、大尉は勇んで滊車に乘る。一同はよし子孃が羞しげに進み兼ねて居るのを無理に滊車に押し込む瞬間滊笛一聲、兩人は箱根をさして、愉快なる新婚旅行に出發した。

ないから、自分等は乃木希典の家族でありますと答へました、此の一言は禰宜の耳には晴天の霹靂程に響きしか、飛わからん許りに驚き、扨ては今征清軍に鬼神と稱せらるゝ、乃木中將の奥方樣なりしか、左樣と存せず唯今迄の無禮は平に御容赦下さるべしと、平蜘の如くなりて謝罪するに、夫人は却て迷惑を感じられまして、モヂ〳〵して居らるゝ、軈て禰宜が引込んで行くと、今度は身分の餘程立派な神官

が立出て挨拶を致し、重ねて取次の不禮を詫び、扨大々神樂は明朝執行しますから、御參詣なさるゝ樣にとあつて、其翌日滯りなく執行して歸途につかれました、此時同伴せられましたのは、たしか一昨年旅順の攻擊に目覺しき働きして、討死せられた乃木少尉殿でありませう、扨其年神宮司廳よりは、戰地へ慰問使を派遣されましたが、其派遣使が金州なる乃木將軍の陣營へ參り、慰問の詞を述べて引取つた後、其副官の所を訪問しまして、過般夫人に對して甚だ不行屆であつた事情を述べ、私此度當地へ遣はさるゝに際し、宮司より能々御詫を申上げる樣にと申付りましたから何卒貴殿より、宜敷將軍へ申上げて呉れる樣にと依賴しましたから、副官より其事を將軍へ申通ずると莞爾と笑はれ、つまらぬ事をどうか御心配なき樣、貴君から御使へ申上て下さい、廿七八年の役終りて、凱旋間近になりました時、夫人には居宅とすべき處を定める爲に、仙臺へ往れた事があります、仙臺には宮城婦人會と云ふ、婦人の團體があり、師團將校方の夫人令孃を中心としたものですから、新師團長閣下の夫人が始めて、御來仙に付ては、御近付の爲とあつて、仙臺第一の料理店挹翠館に大會を催し、夫人を招待致しました、會員は今日を晴と着飾り、三越、白木、大彦等が意匠を凝らした衣服帶に贅を競ひ、花紅葉を一時に集めたるの盛觀で、夫人の御出今や遲しと待受けて居りました處へ、辻車を乘り附けて徐々と降り立ち、案内に從て坐敷の正面へ着坐せられた、夫人を見るとコハ如何に、いつに變らぬ質素極まる木綿服で、優然と控へられる之を見た會員連は、アット許りに打驚き銘々の身なりを顧みれば、目も覺むる許り、扨其夫や親の身分はと云へば、彼の綿服の人よりは遙かに下級なのが多いのであるから、何にしても恥かしくつて其人の前に出ることが出來ぬ、なんで又こんな立派な風をして來たかと、後悔すれども追付かず、或は遽に自宅へ使を走らせて、木綿着物を取寄せて着換へる人もあり、漸く挨拶を濟して其日の會を終

ましたが、是に懲りて夫人令孃の美服を好む風が、大に改まつたと申す事であります、

酒井伯を訪ふ

中川愛氷

酒井伯の温室を見た事のなきものは、園藝を談ずる資格がないと云ふてもよき程である、我國の園藝の進歩して居ないことは驚くばかりの中に、酒井伯の園藝に於ける研究、丹精、亦大に驚かざるを得ない去る二月五日この園藝博士酒井忠興伯を小石川の邸に訪ふた、兼て園藝談を伺ひたいと申入れてあつたので、直に面會せられ、談より先づ實地に就て見た方が宜からうとあつて、伯自ら案内の勞をとられ、廣々とした庭へ出たのであつた、この日の風の寒さは、昨年よりかけての第一であらうと思ふ位で、耳も飛ばんばかりであつた、

初め導かれた一棟、扉を開いて中に入れば、温室とて流石に正直なもの、今迄の寒さは何れへ行つたか數百の鉢には藤、牡丹、櫻、秋海棠など美を競ひ妍を爭うて、咲いて居る、伯曰く、これは素人受のよいばかりで、園藝家としては一つの遊びごとたるに過ぎない、

次の室は熱帶地方の蘭科植物、これ亦數百鉢の多きに及んで、種々の形狀、随つて名稱も異なつて居るものが幾種類かある、日本の蘭は主として其葉を賞美するが、熱帶地方の蘭は花なり葉なり、又別に袋の如きものあつて、それ〳〵奇なり麗なり、珍なり妙なり、形狀に特殊の評判に上る趣がある、その外奇草珍花、數へ盡せぬほど陳列せられて居る、

次は雲を突くばかりの芭蕉、青々として葉茂り、實を結び、珈琲、椰子其他の植物、宛も炎天八月の景を示して居る、室を出づれば、寒き風はもとの如く容赦なく吹くのである、

次のもやし室に入れば、根芋をはじめ秋の野菜物勢よく生育し、椎茸なども其中にあつた、

次に箱室とて、夏の野菜を生育せしめた擶ひがある、その中には胡瓜、茄子實を結び、また覆盆子の實の玉の如く結んで居るのをも見た、

それから戰勝紀念室といふのがある、入口に大きな雌雄の月桂樹を植ゑてある、中の結構は、英吉利新式によつて裝飾され、棚緣敷瓦の如きも、英吉利より取よせられたとの事である、壁色をカーキー色とせる如く、戰勝紀念としていろ〳〵の趣向がある、此室にも諸種の植物美しく飾られ、談話するには机椅子あり、電氣の裝置あり、風琴もあり、伯がベルを押せば、給仕珈琲を酌來る、

其外霜よけしたる植物があり、霜よけにては保たぬ溫室に入れるに及ばぬと云ふ植物の擶ひ場もあり、見れば見るに隨つて、珍らしく思はるゝことのみでこの巡覽中に、伯は絕えず、栽培法から種々の苦心談があり、室外の身顫ひするばかりの寒さ中でも、話は繼續せられて、園藝に就ての智識を少からず與へられたのであつた、その高話は次號より順次記述することにしよう、

さて伯が園藝に對する費用、流石はお大名樣の道樂と、見るほどの人の多くの口に上ることであるが、伯がそれ等の事は耳にも留められず、園藝に於ける工夫を積まるゝは、實に敬服に堪へぬ所である、而も伯の手に栽培せられたる植物、これを市場に出せば、優に收支償うて餘りありとの事である、

伯は斯の如く、日々造化の天眞に近いて居らるゝ故伯の心裡は常に鳥唄ひ花香る如きものがあつて、隨つて伯の率ゆる家庭は極めて純潔である、令夫人夏子の君は、和歌が上手で、音樂に堪能であるから、この純潔なる家庭が更に美しく潤色されるのである

埼玉の孝婦

貞節至孝克く家を治め、克く老母に事ふるの誠實四隣に高く、世の龜鑑として傳ふべき孝婦山崎いちは、埼玉縣入間郡川越町大字寺井十五番地の農にして、文久二年を以つて生れ、父を新太郎と呼び、母の名は多以、いちは其長女にてとみ、まつの二妹あり、いちは明治廿年一月同郡南眞合村大字南田家の岩田忠太郎の次弟虎吉を迎て夫とせしが、虎吉は明治卅九年病を得て病床に呻吟すること四ヶ年にして斃れたり、いちは四年一日の如く能く病夫に事へ、家政を處理

し、兩親に慰安を與へ居れり、而して父新太郎は、安政三年三十五歳の時眼疾を患ひて明を失せし故、母の多以之に代りて家政を執り居りしが、明治六年末子ちかを擧げ、産後の肥立良しからず、精神に異狀を呈するに至り、乳道杜絶するに至たりしを以て、ちかに乳を與ふるよすがもなく、隣保に乞ふて養育せんとせしも、多以は之を遮り「他人の乳は有毒なり」と之を諾せざりしかば、いちは齡十四歳にして畦間に在りて、戴星踏月の苦を積むの暇に、飯汁を造つて保育し來りしも、ちかは十二歳の夏暑氣に中りて不歸の客となれり、母は最愛の末子に別れし事とて、慟哭すること激しく、精心益紊亂れ、香を燒いて墓前に額き、稱名念珠して徹宵するに至りし事七年の久しきに及び、爲め、病を得て半身不隨となるに至れり、其の際いちは夜毎〳〵母に尾行して、保護を加へて一夜も缺さゞりしと、父は明を失するも、いちの勞を思ひて之を勞はりたるも、心亂るゝ母は如傺事に意を傾けず、却つていちを叱咤し、酒を求め煙草を求め、午前に一囘宛茶菓又は酒肴を求めて大聲怒號し、煙草を喫せんには手足の自由を缺けるを以て、いちをして之を喫付けしむる等又厠に上る毎に、いちをして一々之を清掃せしむる等、狂態至らざるなかりしが、いちは嘗て之に背きし事なかりし、元來父は田圃を耕すの傍ら、酒店を營み居りしも、病後の負債山の如く閉店するの止を得ざるに至りしが、いちは獨力にて小作をなし、夜は孤燈の下にて內職を勵み、或は他家に傭雇せられて孝養を盡し居れりき、如斯生計の有樣なればいちは夫を迎ふる時も衣類其他の調度に意を注がす、常に頭髮を櫛卷にして粗服を纏ひ父母に事ふるの外、他に何等の希望も要求もなかりし也、斯くていちは父に先立たれ夫に別れ、心狂へる母に事へて、生計に勤勞を辭せず、只管狂母の滿足を買ふに勉め居りしが、此事決して尋常一樣の女子には爲す不能、而して野に出づるも、母の聽許を得歸家の時を定めて、假令他家に雇はるるも、一刻たりとも之に遲れし事なく、三食の列食に至る事迄、母の嗜好を尋ねて之を供し、母の病高じて食を欲せざれば己れ亦之を患へて食を絶ち、夜は母を寢につかしめて、後夜業に就くを例とし居れり、さり乍ら狂母はいちの心中を知らず、常に分を越ゆる要求を爲すを以て、某人はいちに語りて「狂母の言ふ儘に分を越ゆる孝養を盡せば終に母子凍餓するに至るべし、寧ろ一喝して母の意を斥くに若かず、さりとて隣人は不孝兒と曰はざるべく、却つて其を當然とするならん」と勸めしに、いちは之に答へて「母は心狂へるも、妾の母として飽迄否狂へる程丈け其丈け孝養を盡すべきが當然なり母の欲する處を爲さざるは、妾の忍びざる處にして、妾は母の孝養を盡すを唯一の快樂とせり、之を爲さずんば死の勝れるに如かざるなり、妾は毎に家貧しく孝養の至らざるを悲む」と答へたりとぞ、至誠人を動かすべき此言を示せしいちは、幼き折しも二年間寺子屋に入りしのみにて、元より倫理道德の講話に耳を傾けし事なく、孝子烈婦の傳記を讀し事なく、口に人道の何たるを說明し得ぬ程の無學者なり、然るに三十年て久しき、一身を犧牲にして、父母に事ふるの事を考ふれば、至孝は天賦なりと斷定し得べく、現代の風潮滔滔として輕薄に流れ、父母に背き兄弟牆にせめぐも珍らしからざるに、身の貧しきを顧みず、母のあるを知つて、他を知らざる眞の孝女を見るに及びしこそ、嬉ばしき限りならずや、洵にいち女の如きは比隣の龜鑑とすべきものなり、



身體と裝飾

理學博士　坪井正五郎

世界諸地方の風俗を見ると、孰れ人間が、此の世の中に出た時分には、始め僅かな物を身に纏つたに相違ない、それが段々發達して全身を蔽ふやうになつたに違ひないが、始めて肌に物を着けると云ふ考は何處から起つたかと云ふと、僅かに腰の周りを蔽ふと云ふやうな事柄は、寒暑を防ぐと云ふやうな事から起つたとは見えない、暑いとか寒いとか云ふことは、身體全體の話で、身體の一部分だけが寒さ暑さに感ずると云ふことは無いのでありますから、寒さ暑さの防の爲に物を身體に着け初めたとは云へない

然らば禮義から始まつたかと云ふと、どうも古くから禮義と云ふ事があつてそれで着物を身體に着け初めたとも考へられない、然らば何の爲に起つたか、野蠻未開の國の事を調べて見ると、衣服の十分に發達しない處に於ても、裝飾と云ふことがある、何ぜ身體の或部分に物を着けるかと云ふことを考へて見るのに、啻に腰の邊許りでは無くして、外の部分に物を着けることも幾らもある、唯だ形が衣服とは違ひますから、吾々は着物の部類に入れて居りませぬけれども、肌に着けると云ふ點に於ては同じである之を上の方から言つて見れば、頭に髮を結つて、髷に何かを飾りに着ける、或は頸に玉を着ける、或は腕に輪を嵌める、所に依ると足輪と言つて足に輪を嵌める、或は胴の眞ン中に紐を附けて飾りを着ける處もあります、詰り身體に裝飾をする爲に、丁度縊れて居る所に物を着けると、それが落ちずに大丈夫に附いて居る、先づ身體の中で、最も縊れた頭と胴の繋がる頸等は、輪を掛けて置いて落ちずに大丈夫

に附いて居る、又腕も足も其通り夫れから、胴中を紐で括つて物を下げると、是は塡所が廣いし遠くからも見える、又大きな物を下げることも出來るのであります、そこで矢張裝飾を重んずる所からして、身體に物を着けたと云ふのが、極く始まりの順序でありませう。

身體に物を着けるには、取外しの出來る物を着けるのでありますけれども、着けた儘にして置くことも諸人種の中には隨分行はれて居る、先づ第一に赤いものや、白いものを塗ると云ふことがある、歐羅巴や日本抔に於ては、肌に塗るのには殆ど白いものに極まつて居りますけれども、所に依て黃色いものを塗る處がある、マレー諸島の爪哇邊りに行くと、生れ付き身體が黃色い上に、一層黃色くしやうと云ふので黃色い粉を塗る、又亞非利加の黑奴の社會に行くと、自然に黑い丈では滿足しませぬ、油に黑い粉を交せて塗附ける、それに付て最も可笑しく、吾々は感ずるのは、濠太利の土人は黑奴でありますが、其處に歐羅巴人も澤山行つて居るので、時として其間に雜種が生れる、其雜種兒はどうしても黑奴のやうに黑く行かない、鼠色である、そこで阿母さんが心配して、火を焚いて煙で燻して黑くしたと云ふやうな話もある、斯樣な處に於ては古來黑が好いとしてある、天然自然に白が好いとか、黑が好いとか、黃色が好いとか極まつて居るのではなく、其處々に依つて違ふので、白の好いと云ふ處では白い粉を塗るだけの話である、所が唯だ表面に塗るだけであると、或は汗が出て流れて取れて仕舞ふと云ふ憂ひがある、そこで一旦塗つたものは成るべく取れないやうに工夫をする、或は護謨のやうなものとか、油のやうなものに樣々の色を交せて、肌を色取ることが行はれて居る、此事盛に行はれて居るのは、亞米利加の土人でありまして、顏の半分を黑くして、半分を綠にするとか、或は半面を赤くして、半面は黃色くするとか云ふやうにして居る、能く芝居でやる『暫』と言つて、顏を赤く塗る事がありますが、あれ

は左右同じに塗つてあるから、それ程不思議にも感じないけれども、亞米利加の土人は、左右別々に塗つて居る事がある、又黒く手の形を附けたりして居るのがあるし、或は丁度着物か何かに模様を附けるやうに、顔に色で模様を付けて、それを以て美しい飾りとして居る、けれども斯の如きは、一時塗つた時には美しいけれども、汗を搔くとそれが流れて仕舞ふ處がありますから、さうしないでやつて居る處が、隨分ある、印度に於ては裝飾と云ふ點だけではなくして、宗教に關係して居るのでありますが、何宗の者は如何なる物を顔に附けると云ふことが極まつて居る、日本でも佛教に色々の宗派があり、又西洋でも耶蘇教に色々の宗派がありますが、何宗と云ふことは、其人に聞かなければ分らない、併し印度に於きましては、宗教に付て其信者の混雜を避ける爲に色々の標を附ける、

東京でも家の入口の所に、色々な札の貼つてある所がありますが、あれと同じ様に、顔に持つて行つて標を附ける、丁度薄い木の皮の様なもので、之を拵へるには膏藥の様なもので拵へるのでありますがそれは或は圓い形のものだの、或は金平糖のやうな形にしてある、それを朝顔を洗つて後に直ぐに附けるのであります、是は單に裝飾と云ふ點ばかりではなく、何宗旨の信者であると云ふ、其別ちを附けたのであります、曾て英吉利に於ても斯の如き風が行はれたのであります、日本でも斯樣な事を云ふ人があります、白い者を一層白く見せるには、何か黒い物を一寸着けるが宜い、それで顔に黒子でもあると一層白く見えると云ふので、歐羅巴に於ては黒子が無いと人爲で黒子を着けて、顔の色が白く見えるやうにすると云ふ風が、古くから行はれた、或時代にはそれが非常に發達して、唯だ圓いものを附けた許りでなく、段々花の形や舟の形を拵へた、一つの極端な例を言ふと、馬車の形を切拔いて、丁度日本で云ふと走馬燈の中に在るやうなものを拵へて、顔に貼つたと云ふことがあつた、隨分開けた國に於ても

此のやうに飾りにすることがあるのでありますけれども、それも矢張り取れる虞れがある、それで肌の痛いといふことゝ、飾りにしたいと云ふことゝを天秤に掛けて、肌の痛い位は我慢すると云ふやうな者になると、落ちないやうに肌に撫揣りつける、日本でも黥と云ふことがありますが、あれは針の鋭ひので突ッついて墨を入れるのでありますから、痛いには相違ないが、甚だしく害が殘ると云ふことは無い、決して善といふではありませぬけれども、酷く身體を害すると云ふことはありませぬ、野蠻未開の國に行くと、鋭い針が無いから、貝殼の斷片で抉るとか石の斷片で抉るとか、がり〳〵傷けて、其處へ繪の具を塗るのであります、北海道のアイヌの間でも黥が行はれて居りますが、是は婦人ばかりで、男子は致しませぬ、口の周り抔に一パイ墨を撫摩りつけるのであります是は明治十四年に政府が禁じたのでありますが、一度入れた墨を取ることは出來ませぬから、自から默許の姿になって、今でも北海道のアイヌの女を見ると黥をして居る、斯樣な側に於て最も進んだる所は何處であるかと云ふと、南洋の中ニユージーランドと云ふ處でありまして、今は歐羅巴人が行きまして、追々此風を失はせ



る樣に努めて居るのでありますが、中には顏半分丈黥したと云ふやうな人もあります、古來の風で云ふと此處では、婦人が黥をすることは少くして、男子の方に黥をするのが多いのであります、顏全體に黥をしても尙嫌ずして、髮や髯を拔いてまでも大きく黥をする者がある、斯の如くすれば拭ふても落ちる氣遣ひは無い、物を貼付けるより大丈夫である、併し日本で考へると、肌に黥をすると云ふことは、黑いものでありさへすれば宜いやうに考へるけれども野蠻未開の處で色の黑い人間の居る處では、墨の樣な黑い肌に同じく墨で模樣を附けた所が分らぬからそこで疵口の癒へないやうに、詰り蚯蚓腫れを起して泥を撫摩り込む、或は甘い物を入れて虫に舐させるとかして、高低で以て模樣を別つ、日本でも黥のことを文身と言ひますが、日本のは唯だ針で突ッつくだけであるけれども野蠻未開の國に於ては全く文身をする處があります、其取れない點に於ては都合はよいが厭きたからして、外のにして見やうと云ふことは出來ない、一旦文身をしたならば、死ぬ迄それを取ることは出來ない、それ故に痛さに堪へずに止めると云ふ許りでなく、種々の意匠を繞らして、色の違つた者を飾りにして見やうと云ふ考が進んで行くと、一旦附けた者が取れないと云ふのは不自由であるから、取外しの出來る形で飾りを附けやうと云ふことになつて來る、亞米利加の土人の如き、自身の肌に色を着けると云ふ者もありますが、其外に獸の皮に模樣を描いて身に纏ふと云ふ者もある、自分の身躰に描く代りに、獸の皮に樣々の模樣を描いて、それを身躰に纏ふ、斯樣な事から考へて見ると衣服に模樣を附けると云ふ樣な事柄も、極く開けない時分から其考はあつた、又衣服の無い時分から、身體に飾ると云ふことがあつた、或は腰の周りに布とか簑のやうなものとか、又は鋌のやうなものを纏ふと云ふことも、極々の始めに於ては、恰も肌に黄色いものとか白いものとか黑いものを塗ると同じやうな考で、裝飾として發達したに相違ない、世界の

諸人種の衣服と云ふものが、始め寒暑を防ぐ爲に出來て、其後に裝飾が發達したと云ふのでなく、事實は其反對で、衣服と云ふものが無い時分から、既に裝飾と云ふものがあるのであります、濠太利の土人でさへ、手や頭に物を纒ふと云ふこともある、木の實草の實を糸に繋いで、日本でも小供が珠數子玉と言つて遊ぶものがありますが、ア、云ふものを着けて飾りにすると云ふことは、全く着物の無い社會に於てもあるのであります、即ちどちらが先きであるかと云ふと、裝飾の方が先きであつて、それから追々着物が出來て來たのである、

所が一旦身體を蔽ふやうになつて、或部分を蔽ふと極つた物が、それが無いと云ふと、何だか物足らない樣な考を起す、有るべき筈のものが無いと云ふと何か缺けて居つて失禮であると云ふやうな感を起す始めには禮儀の爲に着るのでは無いけれども、一旦着る風が起ると、それを取去るのは無禮である、無禮であるから着ると云ふのではない、着る風俗のある所で着ないのが無禮であると云ふことになる、又衞生上のことから言ひましても、能く襟卷を卷付けたり、或は手袋を嵌めたりして居る人が、偶々どうかして襟卷手袋を忘れると風邪を引く、襟卷を卷き手袋を嵌めて居れば風邪を引かない、實に襟卷手袋は結構なものであると言ふけれども、又常に斯樣な物は身に着けない側から言ふと、襟卷手袋を着けなければ、風邪を引くと云ふやうな者は、自ら求めてさうしたと言つて宜しい襟卷手袋が無いからと云つて、別段病氣になることは無い、斯樣に申すことが出來るのであります、それと同じことでありまして既に身體を蔽ふ、肌を隱すと云ふ風俗が起つた後に於て、偶々之を取れば寒いやうな感じもする、人間が生れ出で暑さ寒さを自身の肌で受け付けて居れば別に着物を着る必要は無い、それ故に吾々が今日着物を着るのでは無い、着物を着る風が起つたから、偶々之を取れば寒く感じ、或は日に晒されて暑く感ず

ると云ふやうな、實に不自由な身體になつたと言ふても宜しい、開けた國に於ては、着物と云ふものは裝飾の爲にもなり、禮儀の爲にもなり、衞生の爲にも無論なりますが、また其外に社會の階級を示すと云ふやうな役にも立つ、又は職業を示す、如何なる着物を着た者はどう云ふ身分の人であるか略々知ることが出來る、又それを濫用して自分はどう云ふ身分の者に見て貰ひたいと云ふ爲に、故らに其服裝をすると云ふやうなこともある、併し元來衣服と云ふものは、今申ましたやうに複雜な役目を持て居るものであるから、一と口に衣服は何々であると短く言つて仕舞ふ譯には行かない、國々人種に依て裝飾ばかりの爲に、衣服を着る處もあらうし、又禮儀を兼ねて居る處もありませう、兎に角前に申したやうに開化した國に於ては、樣々の用を含んで居るのであります、斯樣に諸人種に付いて考へて見ると、衣服と云ふものは、唯だ肌を蔽ふだけのものであると云ふやうな簡單なものでなく、其出て來れる所も明かになつて衣服と云ふものはどう言ふ譯のものであるかゝ、正しく分かつて來るのであります、

英國婦人の理想

工學士　草野公羽

男のどんな特性を女が賞讃するやといふ問題は、男の方から見ても、また女の方から見てもすこぶる興味がある、併し之を男が解釋するよりは、女に聞くと一層面白いと思はれるから、左に英國婦人記者數名の談話を紹介しやう、而すればおのづから英國婦人の趣味、品位、及び程度もわかる筈である、

一　勇氣と親切

私が最も賞讃するところは、男の勇氣と親切であります、男の勇氣は女の重なる缺點を充分補ふてくれますので、從つて親切も厚くなると思はれます、徒らに男の外貌や地位や名義を喜ぶ女は、先づ女の價値がないといつても好いでしやうネ、

二　兩性の調和

女の溫順と同情とが、男の勇氣と强力とに調和して始めて男に賞讃すべき特性が表はるゝので、もし男丈ならそうは行くまいと私は信じます、

三　智體の兩力、

女は一般に誰れかにたよらうとするものですから、力を最も賞讃いたします、で、普通の女は體力にたよらんとして、軍人運動家を好みますが、教育ある女は腦力智力あるものを理想にもちます、智體兩力を備へて居れば、それに超す賞讃はありますまいよ

四　俠氣

心は男らしく、見えはやさしかれと或書に讀みましたが、實に男が俠氣で强ければ、女は必ず之に從ふて行きますし、またやさしければ之を愛するに違ひないです、

五　武士氣質

勇氣と親切とを含んで居る武士氣質が、最も女の心を引く樣です、或意味に於て女子は常に自分より優れる男、いはゞ事ふるに足る男を好みます、又氣のつかない女は氣のつく男、怒り易い女は落付いた男をすくといふ樣に、各々性質の違ふものを賞讃するは誠に面白いものです、マー女に對して武士氣質で親切な男なら、あくまで信用しても間違はありませんと存じます、

六　品格と氣力

樣子の上品なと、又時と場合に應じて何時でも凜々しく活動して見せると云ふ氣前の表はれて居ることなどは、最も女の心を奪ふのです、ですから、地球上どこへ行つても卑怯者を賞讃する女はあるまいよもしそんな女があつたらば、未だ男の美德を認ぬ愚者でありませう、容貌は殆んど數に入るゝに足りません、たとへ美貌の男でも樣子に禮法、品位がなかつたら、どんな女でも顧みませんからね、簡單に云へば女の最も賞するのは、男の品格、氣力、及眞愛であります、

七　無名の英傑

珍らしき古品　珍らしき商賣　珍らしき永勤

二千年前の婦人

これは埴輪土偶の話にて、該土偶は去る三十七年中武藏國兒玉郡丹庄村の古墳より發掘せる者なるが、其形狀の特異にして、人類學の參考上頗る有益なる物の由、聞及びしより、人類學教室にては、此程特に柴田常惠氏を出張せしめて、之を收容し、同教室の所藏品となしたり、

▽白粉の代りに朱　右土偶は二千年前の婦人の形態にて、總高さ一尺六寸顏の長さ三寸七分肩巾六寸にして、裾の所にても徑六寸あり、顏面には兩眼より斜に頰の邊りにかけて、太き一線の朱を塗抹しあり、頭上には高さ二寸の瓶を頂き、髮は潰し島田にて、櫛形の櫛を挿み居れり、

▽頭上にて物を運ぶ　元來古代にありては無論交通の便開けず道路抔も甚だしく險惡なりしより、凡ての物品を背負ひ歩行くよりは、之を頭上に頂きて運搬する方便利なりし故、斯の如くせしものなるが、此遺風は延て後代に傳はり、京都の八瀨、大原或は伊豆大島抔に於ては、今尚ほ此の風習あるも、之が起源に就ては其年代等を知るに由なかりしを、今土偶によりて、略ぼ之を知るを得たるなり、

▽西洋人は白粉を用ゆ　尙ほ頃ろ某外人が泰西と東洋との上古女子の裝飾を評論せる中に泰西にては顏に白粉を塗るに反し、東洋にては朱を塗りたり云々との說ありし時に當り、本邦の國學者連中抔は、其は何かの誤りなるべし、抔云ひ居りたる事も、又此土偶によりて、朱を以て顏面を裝ひたること確めらる、

▽上古の櫛　且つ又婦人が櫛を挿すことに就ても、古事記伊弉諾尊の御祓の條にも見へて、上古より用ゐられたるは明かなるも其の形狀等に至りては、果して如何なるものを用ひたりしかは、僅に葬禮私考附錄の櫛を挿したる土偶の圖によりて推測を下せるに過ぎざりしを、亦此土偶によりて確證を得たり、

△島田髷の起因　殊に島田髷の由來に就ては、寬文年中東海道島田宿の遊女が結び始めたるより起因すとて、物の本にも記載あり、誰とて其以前に於て斯る結び樣のありしことは知るもの絕へてなく、甚しきは上古は皆下げ髮なりし抔、何やらの專門の雜誌にさへ記載せられて、笑止の限りなれど、寬文と云へば二百四十五六年前の事にて極めて新しきものなるが、今此の土偶にては確かに上古より傳はり來りし事を認めらるゝに至りしなり、尙ほ頭上に頂ける瓶は、推するに朝鮮土器の類にて、僅に一斗以上のものを容るゝに足るものなりと、

湯の行商

社會百生活の中にも湯の行商などは最も珍らしきものなるべし、勿論深川區内には下

水内の鼠を捕ふるを業となす者ありこれも同區内なり、吾妻橋東詰本所割下水附近を日々車の上に麥酒樽の如き長形の桶を乗せ『お湯屋でござい、お湯は宜しか』と賣り歩く者あり細民町の女房連は手桶を持出し其樽より捻をひねりて湯氣の立つ湯を汲み入れ、若干の湯代を支拂ふを見かけて奇なる行商と段々調ぶれば、本所區業平町三十一木賃宿稲井屋事行方愼思といふが、去る三十五年中同町の製氷會社の癈物の湯を貰ひ受け、業平町より割下水邊を行商せしに荷桶一杯(但し七升入)を最初は五厘宛に賣りし所夏季は行水、冬季は洗濯湯に買ふ者多く追々繁昌して、多くの人を雇ふて賣歩かするやうになり、非常に重寶がられ同所附近の湯屋は此湯賣の爲、入浴者を減ずるやうになりしより、同區の湯屋營業者は數軒が協議し、行方の命主なる某を買收し製氷會社へは、一のパイプより湧出する湯代として月々十五圓宛納金する事となり、一昨年一時停止せしも、湯屋業者間には毎月十五圓の出金に就て苦情起り、遂に破約となりしより再び昨年より、行方が湯の行商を初めしが其營業法を聞くに、車一輛の樽は二石一斗入にて目方は百貫目あり、其の一車を湯代共一日廿錢宛にて貸與ふるものにて、目下其車を借りて行商する者十人に及び、其區域は業平町、荒井町、松倉町、表町、元町、新北町、若宮町、瓦町、原庭町、八軒町、横川町等を冬は午前六時より六七回、夏は午前九時より十一回位廻りて、一日の賣高八九十錢に上るを以て、車の貸代二十錢を差引ても二十錢以上の儲けあり、湯の賣直段は荷桶一杯七升入七厘、又水風呂汲込みとなれば割引にて、一荷(一斗四升)入厘、丸風呂にて八荷、角風呂にて十荷乃至十二荷なれば、僅かに七八錢にて風呂一杯の湯を得らるより、昨今は追々需用者多く、又湯も充分煮沸しあれば樽へ入れて引き廻りても、昨今の寒氣と雖も二時間位保つより、其間には大概賣盡す由、

四十五年勤務の下女

▽神田區塗師町四鐵物問屋三谷長三郎方雇女　南足立郡千住町中組八百五十八農兼薪炭商川奈助次郎長女せん六十一歳は、十六歳の時三谷方へ奉公住をなし、今日まで忠實に四十五年間勤續したるは、近頃珍らしき心懸の女なるが、同人は性質頑固の昔氣質にて、廿一二歳の頃には相當の緣邊もありたれど、不幸にして邪慳の良人でも持つては一生苦勞をする事故、寧ろ一生奉公せんと孰れよりの緣談も斷り、其儘三谷方に奉公し、目下勤續して立働き居り、身内は弟妹二人あるのみなるが、給料は更に無駄遣ひなどせず、老後の用意にと貯蓄し置き一時は妹の亭主に勸められ金を貸して利息を取りし事ありしも、其さへ貸倒れとなるを氣遣ひ、今は悉皆主人にあづけ、現金二百圓に上り居れりと、尚同家には他に女中四名居るも、せんは主人思ひの事とて野菜ものなどは、自身多町市場迄買出しに行きしが、老年故と主人の差止むるをも容易に聞入れざりしが、自分はまめまめしく臺所に立働き居る由、今のなま若き骨惜みの下女などは、これを聞きて何と考の起るべきや、さても珍らしき永勤の奉公人もあればあるものかな

男の弱いところを却つて女は賞讚するものだとラスキンは云つて居ります、而して男が充分男らしく働くことの出來ない時、女は滿腔の熱愛を捧げてくれるといろ〳〵の例證を擧げて說いてある、尤も憐憫の情は意志に逆つても愛を起すもので、時には判斷力さへ曲げてしまうものだ、世にはオセロの如く過去の關係やら、危難やらで愛せらるゝ男もあるが、併し私は之に反して眞に女が賞讚する點は、男の强いところだらうと考へます、萬一女の危險を强い男が救ふてくれなかつたら、それこそ女はどんなに成行くでしやう、そりや女だとて自身で財產も作りませう、自由自活の道を立てゝ立派に獨立することも出來ましやうが、悲しいことには、女は男の樣に斷へず確固とした判斷力を持つことが出來ないで、折々腦力が不信任になるものです、その時です男の力を借りねばならぬは、女の爲に男が憤然として斧を振りかざし、身の勞れと負傷を厭はず、荊棘を切開き岩塊を削りて安らかな道を作つてくれ、或は猛然として劒をぬき、ドット鬨の聲を上げて寄せ來る數萬の敵を鏖殺しにするか、但しは之を悉く追散らして樂土を過ぐるの感を與へてくれるなどは、何んといふ男の美しさでありましやう、多くの人は皆英雄豪傑を過去の產物の樣に云ひなすが、私は決してさうは思ひません、かやうに生命を堵しても女を助けてくれる男は、現在我々と共に生存して居るのですから、少し注意して見ますれば、隨分無名の英傑を見出し得ると存じます、それにはどうしても男が强くなければなりません、必竟私共より强いものを望むといふことは、いつの世でも眞の女の心より取除くことは出來ますまい、女の眼のある限りは、この男の美德特性を賞讚して、かりにも容貌やら談話やら小才などに氣を向けることは斷じてない筈であります、

八　靈性の力

女の賞讚するところは、誰れでも第一男の力だと申します、なる程筋肉の力は女の心を引つけ、精神の

力は女の思を左右し、又靈性の力は女の思想を全く支配することは明かな事實であります、誠に女は男よりは遙かに弱いものですから、天性男の保護を賴んで而して力あるものを眞の紳士と信じて居ります元來高慢、自負、卑怯、殘忍の惡性は弱い男の特徴で、自分に力がないからこんなことをやるのです、そんな男がどうして女の保護が出來ませうか、それに引き代へ力もあり意志も強く決心も固き男は、單に保護を賴み得る計りでなく、それは〳〵人の及ばぬ親切を盡してくれますので、賞讃するなといつてもせずには居られません、名醫が病者を正しく診察して九死に一生を得させるのも、經驗から來る一の力で、やはり人生にも斯樣な熟練が大切かと存じます、ところが此熟達が又力の有無強弱によりて天地の相違を生ずるのですから、薄弱な男を顧みず、強固な男を徹頭徹尾賞するのも無理ではありますまいされば女が戰爭の勇者でも平和の勇者でも勇者を喜んで迎へ、妻が自分の夫は武器に於ても意志に於ても充分賴むに足ると信ずる程うれしいことはないといふ結論になります、

九　腕力と勇氣

斯かる問題はナカ〳〵範圍が廣くて、女の階級種類によりて非常な相違があります、若い娘には單に外部丈の觀察に止りて、內部を見透すことが出來ませんから、眞に賞すべき男の特性を見ないで、淺はかにも身振りが味いの、服裝が似合ふのと一寸とした見えにだまされて、それ以上には何にもわからないのです、それから追々發達して來るとこんな盲目的思想を捨てゝ、やゝ男の男らしい點を認るが、同時に男は女の女らしい點を認め、又女は此に至つて始めて男の身體、性格、及び意志の強度を稱揚し、從て服從し崇拜する樣になります、全體人間は男女とも肉體美に感じ易く出來て居て、男が女の美を賞する樣に、女も男の美を賞するには違ひないのですが、マーこんなケチな考へを以て居る間は學校生活位で其を過ぎては誰も容貌美に欺かるゝものはありま

すまい、で、第一男の男らしい勇々しき美質を好んで來て、鞭の外は如何なる取扱を受けても支配をなされても少しも厭はず、如何にせば其男が幸福になるか理想的になるかと、女の渾身をさゝげて充分力を盡すものであります、たゞ忘れてはならぬものは尊敬の念で、たとへ男の美質を賞讃して居ても、其中に尊敬の念がないと愚弄の意味が表はれて甚だ見苦しいのです、然るに若し尊敬と熱愛を以て自分より優れる偉大なる美德を仰いで行けば、男の感化を受けることが無量甚大になります、普通女の缺點としてどうも小心で、淺はかで、邪推が深くて大體に氣がつかず、こせついて心配が多く、無暗にひねくれる傾きのあるせいですが、男のノンビリとした雅量、簡單なる性質、事物に對して明瞭なる解答、單純なる方法、老ゆる子供らしき益なき趣味感情を有して然かも忠實なる所が、まことに〳〵美しく見えます、ですから卑劣なる男は如何に飾つても到底女の賞讃を受けることは出來ません、又女は小説的を好むもので、種類善惡曲直を識別しないうちに、其小説的なるに魅せられて早や吾心を許さんとすることもありますが、女の眞に賞讃する所は終に男の膽力、勇氣、強壯に歸します、そこで昔の武士氣質がどれ程女の賞讃を受けたか、事新しく說かないでも明かでありませう。

十　精神の修養

どんな女でも宗教に關し或は軍職に在る人を好む事は一般の事實であります、之から見ると女の好みに有形無形の二つの區別がある樣です、疑もなく女は風采どことなく秀麗で普通より拔出て居るのを愛するに違ひない、唯普通の普通であつたら別に賞讃することもなからう、といつて顏の美しい、服の華やかなことは何にもならない、つまり強壯で能く發育していざといはゞ何時にても其地位に立つて、充分力を伸べ得る所を稱するのです、尤も軍服は女の眼に大層立派に見えるので、之は勇ましい姿と云ふ想像から、心も勇ましいに違ひないと不識の間に判定

する爲です、こんな判定が確かでありませうか、勿論有形に走つて大切なる無形を無視する愚はいふまでも有りませんが、然かも實際は見え許りで左右されて居るのですから實に口惜しいではありませんか默して此過ちを逃ろ、女は幸福といはねばなりません、初めに宗敎に關してといつたのは之は廣義の意味で、なにも僧侶牧師と限つたのではありません、一口にいへば精神の修養ある人を指すので、職業には關係しないのです、さて精神の修養といへば何でもないやうですが、最も大切で又容易に得がたき德であります、之を見別け之を賞讃するのですから、形體の話とは餘程違つて六つかしい、マー此點を賞讃する女は半分もないでしやう、何一ついふべきことは男の天才を稱することです、一度び天才の人に遇ふと狂氣の如く萬事忘れて喜ぶものですが果してどうですか、ジエン、カーライルが友人に向つて天才の人と婚禮する勿れと戒めたのは、或眞理を含んで居る樣に思はれます、次に道德上の問題ですがドーモ日常女が賞讃するところに、道德上の考を餘り少なく加味して居るのは驚くに堪へたりと申したいです、之は社會の上流に立つて大に女の賞讃を受けて居る男が、道德上どんな人であるかを少しく注意して見ればわかることです、ポープがどんな女でも放蕩漢を好むと說破したのも必ず不當ではありますまい、マー兎に角何れにせよ女は、有形無形に限らず力と勇氣を賞することは眞理でありましやう、で形體の力に對しては軍人を好み、道德上の勇氣に對しては精神の修養ある人を賞するのでしやう、

女按摩

豫見道人

枯柳の月にシヨンボリと立つた女按摩、まんざら書題にならぬでもないが、さて女按摩の境涯、風雅でないこと夥しい、

人間の生涯から、眼を差引いて、何の樂みがあらう

か、生きて居る張合もあるまいと思はれるのであるが、口と耳との働きが倍加して、眼明の考へるほどの不自由もないと見える、塙保己一が眼明ほど不自由なものはないなど丶云ふた例外のもある、さりながら盲人は人間の不幸者の第一に數ふべきもので、殊にたゞさへ三界に家なしと稱せられたる、女の失明者に對しては、大に同情の念に堪へぬのである、

女の盲人、藝がなければ、これほど厄介なものはあるまい、それは男とて變りはないが、どちらかと云へば、女の方が始末がわるい、

女盲人の職業はといへば、これからは追々出來るであらうが、今日迄の所は、盲人でなくとも、女の職業は男に比して極めて少い、然るを眼の不入用の仕事といふのであるから、さう澤山あらう筈はない、そこで女盲人の職業の十中の八九は、上の方で音樂の師匠、下の方で按摩と、この二つのうちを撰ぶことになつて居る。

盲人には幼年からなるのも、中年からなるのもあるが、按摩にならうといふには、兎に角に力業であるから、十歳以下では學ぶ譯には行かぬ、十二三歳位でその父兄が、按摩にしやうとなつたら、相當の女按摩に托するのである。

按摩には、杉山、吉田、百瀬、稻山などの諸流がある、その中吉田流では女按摩にも盲人ならぬのが多いとのことである、盲人ならぬ女が按摩にならうと云ふは、よい量見か惡しい量見かはさて措いて、今日迄の所、盲人職業の株を奪ふもので、偶々按摩は或方便の爲に覺え、あまり褒めた話でない行爲のものも少くないとの事である。そこで眞に按摩を天職とでも心得て居る盲人の女按摩について、いさゝか見聞した事を記さう、

女盲人が十二三歳になると、それ迄は痛はしく思ふた父兄も、何か本人が自營をして行ける職業を覺えさせねばならぬ、まして貧しき家であれば猶更の事である、そこで前述の如く太抵音樂の師匠となる準

鋪をするか、按摩になる仕度をするか、この二つであるが、音樂の師匠となると、手蔓も面倒である、さう一人の師匠で幾人もの世話をするものはないが按摩の弟子をとるのになると、幾人でも世話をするのがある、隨つて手蔓も求めよいから手取早い方に赴くが人情で、女盲人のこの二つの職業は、按摩の方が數が多い樣である、按摩は、自分一人で働くものと、弟子を仕立てゝ働かせるものと、自分も働けば弟子を働かせるのもある、そこで女の按摩を仕立てるのは女按摩である、さて自分一人で働くのは通例で、少し商賣氣のあるのは、弟子を仕立てゝ、自ら左團扇の算段をするのである、



さりながら不自由な身體を持つて居るのであるから自分一人で氣樂に世を送るものが多く、偶々弟子を取るものは、幾人でも手の屆く限り引受けることになつて居る、

そこでこの弟子を世話する女按摩のうちに、女盲人は入門して、他日一本立の按摩になる仕度をするのであるが、その弟子を引受けるに、十二三歲まで行儀も何もあつたものでない、我儘に、もしくは、こづきまはされて育つた、背道外れの人物

を引取つて世話をするのであるから、相當に算盤に乘るやうな事になつて居る、その弟子を世話するに二通りある、師匠按摩に身體ばかり持つて行くのと物になるまで食費を運ぶのと二つある、

いづれにしても、通例年期は七年で、その外に一年の禮奉公なるものがあつて、八年目の後師匠の手をはなれ、一本立となるのである、弟子の家から食費の仕送りあるものは、流し行く事を免されるのであるが、まづ家から食費の送らるゝ程のものは、音樂の師匠になるのが多いから、まづそれのないものとしてもよい位である、

さて我家でイビツナリに育つた女盲人が、他人の家に飯を食ふ事になると、其の苦しみは一方でない、目が見えぬとて用捨はない、水を汲まされるし、掃いたり拭いたりもさゝれる、目の見えぬものは、得て根性を僻めたがるものであるから、相弟子との折合も兎角うまく行かぬ、さア稽古になると、小さな指の先を使ふ仕事であるから、馴れぬうちは折れんばかり、間かな隙かな師匠の肩を揉んで、あゝでもないかうでもないと、小言の百萬遍、半年もかゝつて、不思議に指も折れず、半日でも一日でも指が動かせるやうになると、例の黄色の聲を絞つて、按摩上下三百文と、大道を流し歩くことになる、それが雪の日であらうが、雨の日であらうは、構はず午砲を相圖位から、夜の十一、二時迄歩かされる、定價三百文の按摩にでもかゝらうものなら、肩の骨をいためる位が關の山であるが、安いので揉ませるのと、可愛想なと云ふて揉ませるのがあつて、どうにか斯うにか、お客に有附き、偶に三百文の所を五百文もくれるのがある、それが日によると笛から出る聲が枯れるほど流し歩いて、更にお客に有附かぬ日がある、さういふ日になると、師匠の家へ歸つても、よい顏はされず、よい顏をされねは見えぬからよいとしても、頭から叱り付けられるには、勢泣出さずに居られぬ事になる、殊に雪の日に途中で履物の鼻緒を切らす、一軒の客にも有付かねば歸られず、さて

先へも行かれぬなどの當惑は、實にお話になつたものではない、さりながらそれらも段々馴れて左程にも思はぬやうになるが、それまでの辛抱は一通りでない、

さうして上下三百文が、四百文になる、段々上つて一貫になり、禮奉公の時には一貫二百文から、一貫五百文になる、百文一貫との稱へは東京の下等社會に行はれる錢の價で、百文は一錢、一貫は十錢の事である、

右の如くで、上下揉んで七錢も取られるやうになれば、流し行かずとも、師匠の家に療治の口がかゝると、師匠がそれ〳〵割振つて揉みに出す、客の方では七錢のが來るか、八錢のが來るか、それより高いのが來るか解らぬ譯である、そこで、安い所が氣に入るのも、高くとも上手だからと云ふて氣に入るのもある、であるから按摩を呼ぶことの多い家では、一度呼んで氣に入つたものゝ名を聞いて置いて、師匠の家に誰をよこしてくれと云ふ事になる、即ち名ざしで呼ばれることになる、客の注文が色々であるから、強ち上手下手ばかりで、客の多少を極める譯に行かぬ、隨つて始めは色々の客先を、甲へ乙へと割振られて揉みに行き、後には相當に自分を名ざしで來る得意客が出來るのである、

幼少からの女盲人が按摩になるのは、右の順序で、どうにか斯うにか物になるが、中年から盲人になつた女の、按摩を志願したものは、始めは例によつて師匠をとる、それは年期も七年が、五年に減縮されるのであるが、少し人の肩に掛つて、六錢でも七錢でもとれるやうになれば、師匠にロハ奉公をして居るのは馬鹿々々しいといふ考を早く起し、幸ひ按摩になるには何等の手續も入らぬのであるから、すぐに師匠の手を放れて獨立となる、世の中はヨクしたもので、それで藝が進歩せぬから、いつまでも纏つた金を取ることが出來ずに終ふのである、

成規の如く、師匠の家をはなれて獨立すると、云ふまでもなく師匠になる資格も出來たもので、これか

ら弟子を取る事は隨意である、弟子を仕立つれば、流し歩く三百文時代でも、晝夜四五軒あれば、食費位はあるのであるから、禮奉公を終へて、五十圓の賞與金でも與ふるまでには、師匠は相當の收入はある、

そこで收入は如何にするかといへば、女髪結などと違つて、何處までも金錢を便りにして居るから、大した道樂をするのは少く、それ〳〵貯金をする、師匠といふものになり通して居る女按摩は、收入の多い所から、それは一層大きくしやうと云ふので、金貸をするのが多い、而して借りた方でも、相手が盲人であるから、外聞も一方ならず惡い所から、倒すものが少ないとの事である、さうなると同情も表されぬのである、

女按摩の世帶は、看板の出し初めは、一人で二階借位から初まつて、一軒を持ち、追々傭女を置く、良人には身の程を辨へて、同じ按摩の男に緣を待つものが多いやうである、

まづ女按摩に就ては斯んな事であるが、杉山流では師匠の家に居た時の得意をそのまゝ申受けることも師匠の隣に看版を下げることも出來るが、他の諸流では、八丁四方以外に看版を下げ、得意の客は悉く新たに作らねばならぬとの事である、それも亦無理のないところもある、さりながら近年種々の按摩法が出來、人手を借らぬ電氣按摩などがあつて、年一年按摩渡世が心細くなつて來る所で、男按摩の方にも、盲目でないのが續々出來るやうであるから、女按摩は次第に立行かぬことになるであらう、そこで記者は女盲人の爲に、更に適當の職業を見出したいと苦心して居るのである、

◎前田侯令夫人婚禮の衣裳　同令夫人去十八日婚禮の當日着せられし襠は、京都高島屋の製に係る所謂別織の[illegible]地紬にて、紅梅色に[illegible]の地紋あり、上模様は梅の老木に唐織を縫出し、裳裾は蘇芳の羽二重地、一重は本紅地の羽二重に幸菱の地紋、袴は濃色の精巧織にて切袴、帯は緋の羽二重に、松に鶴の箔押しせしものなり

閨秀畫家の渡米

日本橋區蠣殻町一丁目四番地犬塚駒吉の三女絹子(二十二)は、東京女子美術學校を昨年度卒業せし女流の洋畫家なるが、繪畫及び圖案科專攻の目的にて、先月英國バーミンガム美術大學へ入學すべく渡航したり女史の兄は、新太郎(三十)とて高等商業學校の卒業生にして、現に三井物産會社の門司支店長たり、姉照子(二十七)はお茶の水高等女學校を卒業されたる者なり

婦人會の仕立物集配

麹町區永田町二の三〇に本部を設け、神田區仲猿樂町六に造花、刺繍の二部を有する同會は、今回更に各科に會員を募集するに就いて、上記の手藝に熟達せざるものには、料金を要せずして、其の製作法を教授し、同時に和服仕立物の集配員を、置き遠近に關はらず、同處へ通告あらば、件の集配員(婦人)を出して依頼の需めに應ずと、

小川直子刀自の參禪

十餘年間高輪御殿に於て常宮、周宮兩殿下の御教授職を勤められたる小川直子女史は、若き折良人を失ひ、亡き夫が友の勸に從ひ、生國なる加州金澤の女學校に教鞭を取り、其後青森縣師範學校へ招かれしが、幾千もなく上京して、本居豐頴氏に就て國學を島地默雷氏に就て莊子を、三島毅氏に就て孟子を、根本通明氏に就て易學を、重野安繹氏に就て詩經を研究せし後、再び京都高等女學校の教諭に聘せられしが、當時京都にては禪門の師家として名高き荻野獨園禪師あり、女史が修道心は忽ち動きて、爾後數年提唱を聞き、坐禪を凝らせりと、當時の口吟みに曰く、

めのまへにある極樂を餘所にして
　けふまで何にまよひきつらん
をそろしと思ふもおのがこゝろにて
　足ること知ればたのしかりけり

再び上京して、以來は鎌倉圓覺寺今北浩川師にも參禪したれば、其禪機は味噌臭き禪師などの及ぶ處にあらずと云ふ

文藝

越路の旅（三）

文學博士　横井時冬

四月三日

朝五時三十分發の汽車にて小松をいで、動橋をすぎて、大聖寺につくや、又往年この地より山中、山代あたりを漫遊せしことを思ひいだせり、大聖寺は往古白山五院中の一に、大聖寺ありしより地名となりし所にて、其城を津葉城といひき、こは津葉五郎の居城なりし故とぞ、其後前田利常、寛永十六年、幕府に乞うて、三男利治に七萬石を與へて、この地に居住せしめき、されば富山と共に金澤城の藩とも云ふべき所なりかし、この地陶器幷に羽二重を產す、ことに陶器の繪付をもて世にきこゆ、竹内吟秋、淺井一毫などおのれのしりたる名工なり、やがて納呂木、金津、新居、森田などをすぎ、福井に至るや、けふは神武天皇祭なる上に、鯖江分營に於て軍旗祭ある由にて、六七十人一時に乘りこみ、俄に賑ひしが、大土呂にて皆下れり、福井停車場をいでゝ、右方の山に新しきやしろをみたり、これ足羽山にして藤島神社をこゝに遷しまつりしなりと云ふ、山上六隧道あり、其間より敦賀の海を見るさまいはん方なし、ことに杉津の停車場より、つるがの海に面したる島を見るさま、蒔繪を見るこゝちせらる、往年金澤へ蒔繪など見にゆくとて、この山の下を過ぎて、

名もしらぬ磯山かげの老松を
　蒔繪にもがなと思ひけるかな

と口號せし所になんありける、これより又四隧道をすぎたり、其けしきいつもよろし、やがて敦賀につくや、蟹海老などを籠にいれてのりこむもの多し、

所柄とやいはん、柳瀬の隧道をすぎ、中郷にかゝるや、米原より來る車おくれたるよし報じ來り、十分ばかり待ちぬ、米原にて、名古屋行滊車との連絡いかゞと人々あせりぬ、かれこれのゝしる中に車來り、木の本、高月をすぎて長瀬につけば二百人許りの人待居て、競ひのらんとするさまをかしされどつひにのること能はざるもの多かりしかば俄に二臺をつけ加へたり、されば米原にて名古屋行列車に連絡することは、いよ〳〵困難になれりとてつぶやくもの多かりける、こは彦根において、井伊家祖先の三百年祭あるがために、かくは多數の人なうづるなりとぞ、しかし機關方の人々、大に力を盡しゝかば、米原に至り名古屋行滊車と連絡せり、人々の喜びおもひやるべし、この頃より天曇り風起りて、雨模樣となれり、雨のふらぬ間に名古屋につかましものと祈りつゝゆくほどに、二時二十八分、笹島停車場につきぬ、



おのれは直に車を傭うて、新町なる大光寺の先塋にまうで、それより友人の許に立寄り、廣小路にいづればはや雨ふりかゝりしかば、車を急がせて、笹島停車場のほとりなる、品屋支店に投宿せり、

四日

朝五時四十八分發の滊車にていでたちしが、雨いよ〳〵はげしくなりて、車窓をうつ音霰の板戸におつるが如くなりけるも、函山近づくに及びて、天次第〳〵に晴れわたり、國府津に至りて全く雨やみしかば、車窓より海邊を見るに、雨後のけしきはおもしろうみえぬ、且つうるはしかりき、やがて日もくれて六時五十七分、新橋停車場につきぬ、雨天なりし爲に、同車に人少かりしは僥倖とやいはん、且つ名古屋より同車せしは、越後新潟の人一家内四人と、讃岐の人一人、外に米國の宣敎師一人のみにて、互にうちとけて語らひつゝ來りしかば、新橋にて別るゝをものうきことにおもひ、他日再び逢うて物語りせんとて、名刺などとりかはして立別れぬ、この日おのれのことに感せしは、同車の宣敎師が名古屋を出でしより、停車場にて車のとゞまる毎に、雨を冒して布敎の爲に經典其他耶蘇門弟の傳記を印刷したるものを擲げる一事になんありける、宗敎の爲に、己が一身を犧牲に供するが如き、熱心のさまみえて覺へず敬服せり、きのふ、福井より同車せし東本願寺開祖三百年忌の爲に赴ける、本願寺の僧徒等は、俗人の群に入りて、煙を吹き酒をのみて、戲れをりしが、其中の一人は、誤りて名古屋行の滊車に乘りて關ケ原に至り、周章狼狽せしもをかし、甲と乙とを較ぶれば、其志のほどもおしはかられていと淺ましかりき、覺如、蓮如の心を心として、布敎に一心を委ぬるものなきは、返す〳〵も口惜しきことにてそ、筆のつひでにかゝることまでも記しぬ、(終)

花の春

鍋島榮子

瓶花

言の葉の花さへ添えて贈られし
　この山ざくら瓶にさゝばや

林中花

晝くらきすぎの林に目にたちて
咲こそ匂へさくらひともと

社上花

契りたる時も忘れて小ぐるまを
ひきでもかへさず花の下かげ

海邊春

貝ひらふ小女が影もかすみつゝ
みる目のどけき春の海ばら

桃花

小女子の雛かざりに手をるらむ
くれなゐ匂ふ桃のはつはな

落花

散りゆくを惜しと思はで幼子は
花のむしろに遊びくらしつ

朝はやく月にも遲くうかれたる
花は殘らず散りにけるかな

春夜

いひしらぬ花に浮れて疲れけむ

華嚴

よるを胡てふの夢心地して

大塚楠緒子

火を降らし灰を吐き、
山裂けて湧く湖の、
叫び躍り落とし、大瀑布、
年をへてこゝに幾とせ、
名は呼べり、
華嚴とぞ、

あゝ華嚴、華嚴八千尋、
かけわたす大白布に
なにを隠しなにを閉せる、
胸を打ちて汝れにひれ伏し
智に飢うる
人の子あり、

風に和し雲に答へ、
天に語り地にさゝやく
興やなに、やよ興やなに
人にのみ秘めて强れなの
氷なす、
水のつめたさ、

時ありき、さはれほこらむ、
凄まじの汝が懐に
安むじて守ると爲しゝ、
天の默示、地の記錄を
讀みに往にし
人こそあれ、

想待つ人の子ぞかし、
煩ふは高き煩悶
憂ふるも深き憂愁、
時ありて瞳据ゑては

ものかはの
大瀑布千尋、

くれなゐの頰や動きし、
こみどりの眉やにほひし、
百尺の巨巖の上に
立ちぬるは一少年、
飛沫受けし
そのほゝゑみ、

あゝ神秘、神秘のとばり
蹴はなちて入りし水底、
うたがひはよしや解けゝん、
往き往きて、往きにし彼れは、
かへらず
この世に、

星なりし玉なりし

花なりし若き齢を、
のろはれし、物の呪か、
ねたまれし、物の妬か、
あまりなる
ゆく迹よ、

あゝ華厳、いみじの犠牲に
智の庫の鍵やわたへし、
聲高く何を囁く
安らかに彼れ眠れるや
語れ、語れ、
あゝ、世は憂し、

胡蝶の日記

白井千代梅

いでや空蝉の世の人ことに、おのがじゝ樂とする業とり〳〵にあらめど、海山の眺めばかり心ゆくものはあらじ、されど白雲へだゝる遠きわたりは、旅衣思ひ立つべき身にしあらねば、只わが國津君のしろしめす境のうちなる名所をだに見てしがなと、とし頃思ひわたるを、早田氏の母刀自はらからなるなにがしは、吹浦の關もりをしるべ人にして、かしこのわたり、おちなく見めぐりてんと思ひたちぬ、そこにもいかにと、せちに誘かし玉ふにぞ、うらすの鳥の飛立ぬべき心地すれど、母君は人の物いひさがなかる世に、さる輕々しく行爲はいかでかはとゆるし玉はねば、げに理とは思ふものから、流石に本意なくて、てゝちさへわづらはしう覺ゆれば、打ちふしつゝ猶思ふに、思ひ堪へなで玉かづら、斯る折ならでいつかはと、强ちに乞ひ申せば、さらば彼の刀自の子うまごともなりてよと宣ふにぞ、いみじう嬉し、斯くて水無月末の五日、袖の浦までは船路をゆかむとて、已の時近きに船にのりぬ、やゝ漕ぎ出るほどに、川もいと廣らかになりて、遠近の山は雲のへだてもなう見渡され、日は高うなりつるものから、汀

歌御會始

勅題新年河

◎歌御會始　去二月七日午前十時宮中鳳凰の間に於て舉行あらせられたり

御製　あらたまの年たちかへる河なみにしめかざりせし船も見えけり

皇后宮御製　しづかなる世の年なみは神風の五十鈴河よりたちかへるらむ

東宮御歌　たひらかに年浪かへる五十鈴河かみのめぐみのふかさをぞくむ

威仁親王
河々の水も淀まず今年より
流行く世と成にける哉

德大寺實則
五十鈴河としの初日の神代より
かはらずうつす影ぞたふとき

田中光顯
君がためつみてさゝげむいさゝ河
としの初日にもゆる根芹を

點者　高崎正風
今年よりあめの眞名井をくみいれて
ありなれ河もすみ返るらむ

讀師　渡邊千秋
年とゝもに耳あたらしく聞ゆなり
いすゞの河の今朝のみな音

講頌　大原重朝
神風や五十鈴の川にこゝろをも
身をもきよめて初まうでせむ

發聲　綾小路有良
やま河にくだす筏ぞにぎはしき
御代ゆたかなる年やたつらん

奉行　長谷信成
君が代のながらの河のゝどかにも
けふ年なみのたちかへりけり

講頌　水野忠敬
おほ御代のひかりそひ行く年波や
たちかへるらん玉川の水

講頌　持明院基哲
船もみなしめかざりする河口に
としのひかりはうかびそめけり

奉行　鎌田正夫
あたなみはしづまりはてゝあすか河
うれしきせにもかへる年かな

講頌　長谷信道
みなそこのさゞれに千代のかず見えて
年立かへる加茂の川なみ

講師　滋野井實麗
霞はれし高嶺うつれる富士河に
年のはつ日もいまうかぶらむ

遠山稻子
なみならぬ年をむかへて河の瀬の
かみしもとなくいはふけふ哉

林　清房
家にある父はことしも谷河の
流れを酌みて年むかふらむ

山縣利貞
たゝかひは海にくぬかにかつら河
かちわたりてもおくる年かな

長尾ふみ子
河口はにぎはひにけり新たまの
年のはつ荷や今つきぬらむ

柳町久四郎
五十鈴河みなかみとほき神代にも
ためしをきかぬ年たちにけり

川出眞清
あたなみもしづまりはてゝゆく水の
音なし河に年たちにけり

高山益代子
ゆたかなる御代のひかりやあふるらむ
年たちかへる宮の瀬河に

名譽の二才媛

去月七日の歌御會始に於て御前披講の光榮を得たる七名の詠進者中、東京市内より二人の才媛を得たり、今兩女史の身の上に就て聞く所を記さんに

◎遠山稲子女史　女史は埼玉縣大里郡佐谷田村福本佐太郎氏の女にして、幼より學事を好み、志を立てゝ出京し、上六番町に講帷を垂れたる開成女學校を卒業したる後は進みて女子師範學校に入り、本科生として俊秀の聞へありしが、故ありて中途に同校を退き、爾來專ら心を歌道に寄せ、御歌所長男爵高崎正風翁の門に入り、熱心に請ふて其女弟子となり、翁の左右に侍すること年あり、此に其夫英一氏と言へるは、小出粲翁に就て歌道を修め、雜誌『敷島』を發行しつゝ、明治二十六年一月の勅題『巖上龜』を詠進し『いたゝきにのほりてれふる石かめをかさなる齢と思ひけるかな』と云ふが御前披講の一榮を得たるを、其頃高崎男の許に在て、一心不亂に歌學を勉つゝ有し稲子女史は、天晴女子と生れ、歌學に志す身にてある上は、斯る名家の主に嫁して、二なき命を歌道と歌人とに捧げたしと思ひ込みたる甲斐ありて、翌年即ち廿七年目出度も才子佳人は歌中の人となり、かさなる齢と思ひける龜の齢をぞ契りける、扨も其後遠山英一氏は、高崎男にも知られ、宮内省に入りて、現職に就き、女史は下田歌子女史の管理せる『日本婦人』の編輯を一手に引受け、内には二男一女を擧げ、家道益々隆なり、因に女史は歌道の外、文章は下田女史に學び、傍ら速記をも能くし『日本婦人』に掲げらるゝ名流の談話は、總て其手に成れりと、

▽長尾布美子女史　新潟縣北蒲原郡葛塚町の人にして、家は商買を業とせしが、父なる人は明治七年廿七歳にて上京し、職を警視廳に奉じ巡査となり、西南の役には抜刀隊に伍して軍に從ひ、斬獲の功を建て、爾來三十二年勳績の榮を荷へり、布美子女は即ち其長女なり、十五歳にして築地女學校に高等小學の課程を卒へたる後は、家に在て母を助け裁縫水仕業は言ふも更なり、四人の弟妹を撫て愛しみ敎へ導き、餘暇を以て國語傳習所に通學せしも、夫さへ暫時にして家事の爲に中止されぬ、女史の學歷は上記の外に出ざれども、父數種の叔父幸助と言へる人醫を業とし、兼れて歌道に造詣深く、數種氏は幼時其指導を受け、一通り詠吟の心得あり、卅餘年勳績の間も手帳の端には和歌を記さぬ事もなしと言へば、女史が今日の名歌も淵源ありて流れ出たるものと云ふべし、登種氏は女史に高等の女學を修めしむる能はざるを遺憾とし、非番の夜な／＼叔父に學びし歌道をば女史に傳へ課題を與ふるに上達の徵著しく、三年前より御歌所參候鎌田正夫氏に添削を乞はしむることゝせり、去れども貧しき家庭の世話役なれば、固より机に凭て思を凝らし、古今の書籍に想を發ふと云ふにはあらず、一週間に七題與へられまして一題に六七首位づゝ詠みまするので、一月に二百首から詠まればならぬのですが、全く閑がござりませんので、思ふやうには參りません明日は詠艸を先生に上げると云ふ間際に成ましてから大急で詠ますので、骨は折れ善ものは出來ませんとは女史の直話なり。

の葦に音づれわたる風の、船にも吹入れて、夏も忘る丶心地す、

　川瀬にはまだきに秋や立ぬらむ
　　とま吹きいる丶風のすゞしさ

水草の花清げに咲けるは、折りもとらまほしけれ、浅瀬になれば船子は下り立て網手苦しげにひく所もあり、汀に柳、葦などむつかしげに生ひ茂りて、空も見えず、最といぶせき中を漕わけつ丶行くに、心も悩ましうなりぬ、刀自はよべ物したゞむる等にて甚う更かしつるにとて、臥し玉へば、己れもより添ひてふす、爰よりなん最上川に成りぬといふにぞ頭もたげぬ、膝行いでゝやをら見出すに、水の色さあをにて、右の方には木立もなく、高からぬ砂山などあるぞ、只海原に漕ぎ出でたらんやうにて、すくせの山の高ねに横雲棚引きたるさま、田子の浦わも斯くやあらんなど、いひしらへば、黒森坂のへなどのわたりこそ、爰にをかしき眺望なりしを、など夢にのみ過ぎけむといふ心を唐歌に作りて、さかたぬしの笑ふにぞ『楽しさはねぬにまさりの波枕、もろこしかけて夢にみつるを』と刀自のいらへ玉へば、われも、

　波まくら結べる夢のたのしさは
　　ねぬにもまさると人はしらずや

刀自はまた、をさなき人なればか丶やかしうもあらで、斯る事をもきこえかはしつ、遥々とゆほひかなる水の面に、夕日かゞやきわたるは、黄金の波よするかと見ゆに、船よる袖の浦の港も近くなりて日和山なる五重の塔も、夫れかあらぬか最ちいさく見ゆらんもをかし、

　心あらば梶な早めそ夕ばえの
　　あかぬ眺めも船ながら見む

と思へと程なくはてゝ、出町なる某の家に宿りぬ、いで日和山は最近し、暮ぬ間にとて立出れど、山に登ればいと暗うなりて、さだかにも見渡されず、月夜ならましかはと人々も云ふ、星の影かと思ふまで幽かに火二つ三つ沖邊に見ゆるは、海士のいさり火

にやわらん、湊の船にもみな火點したり、こゝもとに見下さるゝは船場町とか、樓ごとに花燈籠かけ渡し、人あまた酒くみ交して遊ぶ、男女の差別は見えねど、扇など持て立舞ふさまめなれずをかし、風いと清しう吹て草村にきほへる虫の音などはたあはれなり、麓の方は砧の音きこえければ、

吹かへす袖のうら風身にしめば
　　秋をも待たで衣うつらむ

やがて歸りぬ、軒近き松の梢に風さや〳〵と吹渡るを、旅宿の秋風といふ心を詠めと刀自の宣ふにぞ、

夕ざればいとゞわびしな結び初めし
　　草のまくらにかよふあきかせ

廿六日、空いとよし、佐かたぬし昨夜の題に夢にて斯く作りぬ、今朝なん思へばよくはあらじなど書て見せ玉ふ、男文字なればよくも讀みえず、皆忘れぬるぞ惡きや、其はしに、

草まくら露けかる夜も風流士は
　　ゆめにぞ結ぶ玉の言の葉

辰の時過るころ立出づ、今町といふをかゝれば、左は寺小路といふとぞ、名は聞き偲ぶ尼君の御寺も近からむと思えど、

いかにせむ袖のうら浪たちよりて
　　みるめをだにもかるよしのなき

野邊に出れば、朝げの風最すゞしく吹きて、やゝ穗に出し初尾花の打まねくのみにて、千草の花も見えねば。

野邊はまだ萩も匂はぬころなれば
　　旅の衣になにをすらまし

といひつゝやゝ行けば、野菊、月草、なつかしげに咲きて、露面白うおきわたしたり、濡ての後はなど刀自は口ずさみ玉ふ、又撫子のいと果敢げに打しほれしを見て、

露ふかき野邊に匂へる撫子の
　　あはれをわけぬ人はあらしな

とて過ぎぬ、花紅葉の折ならねば、山はたゞ翠の松のみぞながめなりけり、藤塚、市神、など云ふ里過

ぎて、小港の渡しに出づ、川は廣けれど水淺くて、漣うち寄するも涼しげなりや、渡し守は都鳥などをしゆべくもあらぬ賤の女なりけり、藤崎山はすべて小松原にて、翠の色なつかしう生ひ並みたり、

　末とほき小松が原にちぎりおきて
　　木高かる世にまたも分け來ん

此藤崎は昔時砂山にて、麓は荊棘、枳殼生茂れる荒野なりつるを、藤崎藤藏といへる男、山には松を植ゑ野には新墾して田とはなしぬ、藤崎が遠つ祖は、志田修理とて、東禪寺の城を守りし武士なり、然る者の嫡子なればこそ、斯る功績をあらはしつることも理なれと、大内東月大人文に作り玉ひ、鳥嶽の翁かき給ひしをゑりたる石碑ありと聞つれば、いたうゆかしう思ふものから、さる事いひ出んもつゝましさに、徒に打過ぐるこそ念なきわざなりかし、茂き林をわけつゝゆくに、蟬の苦しげになくを聞けば、いとゞ暑さも忍ひがたくて、しばしとて草のむしろに休らふ、水をと乞へど泉もなし、人々みな困じあへるに、供なるめのとが、斯る折にこそとて、今朝なむ需めてもたらしつるを、いざとて小やかなる給袋に桃の實いれたるを取出たるは、彼の唐土の桃の林にも立まさりて、こや仙人の園の内なるのにこそあれなど、いひはやすにぞ、

　玉ぼこの道の疲れも三千とせの
　　桃の實ゆゑにわすれつるかな

たゞ暑さにのみ侘て、此處かしこに休らひぬれば、日もいたう傾きたる頃吹浦に到る、板びさしならねど、關屋は所狹ければとて、離れる家にてあるじ設けす、此處の後ろに、出つぼてふ泉の侍り、見玉はすやと主人の女の案内するにぞ、行つゝ見るに、げに壺の如くなる岩の中より湧出で前なる川に流れ落つ、皆立よりて掬ぶにいみじう清し、あはれ今日の山路にあらましかはなど言ひしらふ、兩所といふ山も程近けれど日も暮ぬべしといへど、人々また床しがりてゆく、石のみ坂を登りて左の方に御手洗あり古りたる松が枝さしおほひて、晝さへ暗かるべききさ

まなり、石の燈籠いくつもあるに、御わかし参らせつれば、けさやかに見渡されて、木立神々しく生ひ茂り、よろづ物ふりたるさま、いひしらず尊し、大物忌の御神と、月山の御神とをうつし祀いまつれば両所とはいふとぞ、神社の後ろの岩のくぼみに、湧出るともなく水の溜れるが、六月の照りつゞくにも涸るゝ事なくいかに雨ふりつゞくとも増すことなしなど語る、いと奇しきことになむ、

千壽姫

伊藤銓子

たちまふ袖のうすぎぬも
　花の姿にたとふれば
面影見えてなさけなき
　機織女こそうらまるれ
ふしおもしろき糸竹も
　力なげなる舞ひめの
態をし見ればなか〳〵に
　やまぬがいとゞ恨みにて
晝は湯殿になか〳〵と
　夜はくるしき酒むしろ
思ひあはせて痛ましく
　うたひ出たる此の歌よ
一つ木蔭に宿かるも
　同じ流れを汲む人も
知らぬむかしに結ばれし
　契りの糸のすゑならん
いざ琵琶の音にわが琴を
　しらべ合せてこの君の
心のうさを慰めむ
　わが思ひをも通はせん
折しも風の吹入りて
　前のともし火消えにけり
心のやみに踏まよふ
　人をばいかに迷へとか

殘るひかりもほの暗き
　ともしの下にひきとめて
別れを惜むわぎもこが
　こゝろちすぢの湊川
夜ふかく耳をそばだてゝ
　そともに歌ふ聲聞けば
勝をよろこぶその歌は
　あはれ楚國の歌にして
別れを惜むとうたひてし
　妹脊の中にあらなくに
馴るればいつか捨がたき
　思ひもむねにつきそめつ
奈良の都の夕かせに
　散りまよひつゝ聞しより
心づよくもおはしけむ
　その昔さへしのばれて
馴れてはいつかわかるべき
　行方と知りてうき目をば
人に見せじと石木にて
　おはしましけんいとほしさ
此の世に思ひのこすこと
　なき身ながらに後の世を
弔ふ人のなきをのみ
　悲しきことにのたまひき
いざこゝろをばうちあけて
　いとまを殿にこひまつり
とくぬきかへんきなれたる
　花のころもを墨ぞめに

春の歌

坂本乙子

隣家梅

垣間よりあるじゆかしきうめの花
　にほひをこめて咲いでにけり

山家立春

山里はおくれがちなるしらゆきの

のこれるかどに春は來にけり

山路梅　有島幸子

山人のたきゞにそへていへ土産に
手折り來ぬらんうめのひと枝

聽鶯

咲かての花まちがほにうぐひすの
けふも來なくか聲のきこゆる

春雨

文机によりてはいれどいぎたなく
ねむりもよほす春さめのころ

春月　照內清子

梅が香も身にしむばかり夜は更て
かすめる月のかげぞさむけき

春雨

さゝ波のよするみぎはに花ちりて
さしもしづけき春さめのそら

春風

たなびきしかすみをもれて春風の
いとのどけくも吹わたるかな

春望

見渡せば汐路はるかにうちかすみ
鳥かしら帆のかげものどけき

梅　麻生春子

軒のはに梅のひとえだ咲きしより
朝かせかをるはるとなりにき

蝶

菜の花に羽袖やすむるてふ〳〵の
いかにのどけき夢や見るらん

初春　八幡貴與子

雪消えて草もみどりのいろそふる
野邊にのどけき春は來にけり

春雪

降ると見し夢にも似たり草の上に
はかなく消ゆる春のあわゆき

春曙

遠方にひゞきわたれるやまでらの
鐘の音かすむはるのあけぼの

悲謠曲

阿井　飛洋

霞に染むる花さへも、
嵐の妬みあるものを、
空や水なる月かげも、
雲に妬のあるものを。

此世の中に寄居する、
人に奈でか憂き事の、
胸に宿らぬ事やある、
いかに表は見ゆる共。

さりとは思ひ捨つれども、
あまりうき身の悲しさに、
いつなみだの晴間とて、
こゝろのどけき時もなく、

せめて寝間とまとどめば、
夢おそろしく目はさめて、
あやにくたれの家ならむ、
乳はしさにや稚兒のなく。

母なる人の腕かき、
手に枕して眠るさへ、
なにを心に充ぬにや、
夜を泣明す事あるに。

その母親に別れたる、
稚兒の夜寒や奈な覧、
我子の上か思ひ出で、
またも涙の一しぐれ。

うきに染みたる我身には、
泣くこそこゝろ休まるれ、
むかしのことをしのぶ草、
さびしき窓のあけくれに、

あつきなみだの有たけを、
うたひ出てはたのしまむ、
あだなるふしと世の人の、
口にやよしやかゝるとも。

今悲さの身にしむも、
嬉しき昔あればぞや、
思ひいづれば過し年、
親しき人の仲だちに。

見え初たるその人は、
學びの術も淺からず、
心ばへさへ優しきに、
今の我身に成むとは。

やなぎに暮るゝ春の日は、
花に暮るゝをわすれつゝ、
空すみわたるあきの夜は、
月にふくるもわすれつゝ、

笑顔ならべしたのしさを、
あたりの人にうらやまれ、
二とせ三とせゆめの間に、
すごすともなく過しけり、

今は緑のかすがひと、
思ひ兒さへも生れて、
紅葉なす手にかざ車、
まはる月日を指折て。

その行末を樂しみつ、
暮せしことも泡沫の、
果敢なき夢も斯迄と、
思掛なしせのきみは。

他しこゝろにあられども、
うきたるとにはあられ共、
いのちをかけて戀ひつる、
そのこゝろねの愛しさに、

かはるを人のこゝろとは、
いかでか思ひおよぶべき、
我よりさきに千代かけて、
契りかはせしをみなあり、

野邊の若草萌出づる、
春の心にさそはれて、
たゞ假初に思ひそめ、

霜初けむいつしかに、
たみな心に秋は來て、
滿る間もなく缺て行、
月にも似たる身上を、
我から招く淺ましさ。
斯るむかしのあらむとは、
誰かはわれにしらすべき、
よきえにしぞといふ儘に、
よき日迎へてまみえたる、
其の折ふしに目にあたる、
たみなの品のふたつ三つ、
ありにし時のかたみとも、
いかでか思ひうかばなむ、
頓て月日を經る儘に、
忘れ果けむせの君の、
昔を偲ふさまもなく、
足ぬ勝なる此身をば。
吾玉のつる嬉しさに、
世はいつまでも此儘に、
過行ものと思ふうち、
人の嫉やかゝりけむ、
いまは我があふせの君に、
我からわかれのすれたる、

そのたみな氣の淺ましく、
ふたゝび思ひいでにしが、
賤の苧だまきくりかへし、
むかしを今になすゝべの、
あれかゝものと人づてに、
すがりつきけり幾そたび。
遂に捨しをみなへし、
徒手にするも厭しく、
思し給けむせの君は、
空ふく風に任せつゝ、
取合ふ樣も見えね共、
斯りし處の有しかと、
憂思さへこきまぜて
始めて知りしその昔。
我身のうへにくらぶれば、
さこそ歎きのふかゝらむ、
思ひやるだにいとほしく、
初めてなみだおほへけり、
さりとも知らぬその人は、
我にこゝろもかけもせで、
わがせの君をひとすぢに、
慕ふこゝろのうらめしや、
それに心の動かさる、

我せの君にあられども、
其折からの忌はしく、
何をか思ひ惱みつゝ、
み顔の色見るにつけ、
唯悲しさの逢瀬なく、
我身しなくば中々に、
斯る歎はなかるらむ。
わがせの君のやさしさを、
深くも身にはしみつれば、
あとにこゝろの殘るべき、
いとし兒さへも預けつゝ、
たゞこのゝちのとし月を、
安かれかしといのりしは、
なみだ勝なるいまの身に、
をゝしと計りしのばるれ、
人の歎をしかすがに、
わがせの君の汲分て、
仇なる節に靡かれど、
我と妹脊の語らひは、
その時よりぞ絶果し、
他の閨居を見るにつけ、
よその稚な兒見るにつけ、
空にしられぬ一しづく。



溫室植物の培養

伯爵 酒井忠興

園藝に志したる動機

私は、性來、身體が非常に弱いものですから、戸外で運動するやうにと醫師から勸められました、それ故、早速、運動場を邸內に設けました、盛にベースボールとかローンテニスとかクリッケットとか種々の運動を試みてはみましたが、どうも、植物の培養が性質にも身體にも最も適當して居るやうに思はれましたから、爾來は、專心斯道に從事するやうになりましたのです、それでかく專ら身を園藝に委ねましてからといふものは、まるで生れ變つたやうに身體が强壯になりまして、今日では殆んど病に臥すといふやうなことはなくなりました、

溫室建設の苦心

園藝に志しましたのは極幼少の時でありますが、段々面白くなるに從つて、花壇を設けたり、簡單な溫室のやうなのを造つたり致しました、最初は、まづこれに甘んじて居りましたのですが、園藝の趣味の日一日と進んで來るに從つて、遂にはこれに滿足することが出來なくなりました、

それから、溫室の新設を思ひ立ちましたが、我國には、まだそれに經驗のある大工がありませんので、種々苦心して居りました、その時は丁度、大隈伯の新しい溫室が出來た時でありましたから、伯に相談致して、その大工をこちらへ廻して貰つて漸く溫室を拵へることが出來ました、

これは三間に十二間の溫室で只今バナヽの植へてある室に接續して居るので御座います、この溫室の建築中、私は、出入の大工を每日邸へ通はせまして、

様木の附け方や、硝子の張方、その他温室築造の一般を見させて置きました、

其後、私は世人のまだ手を下さない面白い事をやつて見度と思ひまして、高さ五間程もある緑室を拵へました、其時は、私が總て設計をしまして、出入の大工に築造させさせました、

この緑室の落成する頃丁度當地に到着するやうな日取で、小笠原島とハワイから、食料にして最も適當なバナヽを取寄せて、これを室内へ植付けました、これは明治三十四年の事でありますが、それから二年經たぬうちに結實するやうになりました、

三十七年の九月、遼陽大捷の報の傳へられました節私は戰捷紀念の爲めに、温室建造を思ひ立ちまして早速工事に着手して、その年十一月三日落成の式を擧げました、

この戰捷紀念温室は、間口二間、奥行六間、中央に仕切を設けて、一方は陳列場とし、一方は蘭科植物を配置する仕組にしてあります、また、館の入口には月桂樹を植付け、入口の階段の左右には、紀念の文字を現はす爲めにクロカスの種子を蒔き。用材はすべてカーキー色に塗る杯、總て戰捷に因みあるものを用ひました、なほ、構造上の詳しい御話は、後段に申述べることヽいたしませう、

園丁養成の困難

目下、我國に、適當な園丁のないのは、園藝家の頗る困難を感じて居る所でありますが、まづ當分は、常に勞働に從事して居る性質の良いものを選んで、自ら指揮して、段々と園藝の術を授けるより外はないと思はれますので、已に、私は、それを實行して居ります、これは、他處目では、極易いものヽやうに見えまするが、實際は中々さうでありません、彼等は、大抵學問のないものでありますから、まづ植物の名稱から敎へてかヽらなければなりません、勿論、原語の讀めよう筈はなし、殊に何千といふ植物の種類があるのですから、何時まで經つても、それを覺え込む筈はないのです、

時々思ひ切つた亂暴＝善意の＝をやられるのには實に閉口するのです、先年、私はアメリカから、ある植物の種子を取り寄せて、それを播いて、その發芽を待つて居りました、處が幸にも芽が出ましたから此分ならばと存じまして、大に樂みにして居りますと、いつの間にかそれが全くなくなつてしまひました、不思議に思つて、これを園丁に質しますと、平氣な顏をして、あの雜草は摘み棄てゝしまひましたと答へました、かういふ風に誠に見さかひがないので頗る困却致しましたから、何とか方法があるまいかと思つて、いろ〳〵考へて見ました、處が、彼等が日々勞働に從事して居る所を觀ますと必ず俗謠か何かを口吟んで居りますからその代りに植物名を讀み込んだ唱歌を作つて、これを敎へたならば、知らず識らず植物を覺えるであらうし、また一つには風致の上にも多少の裨益があらうと存じまして、早速、作歌に着手し、譜を附けて、これを歌はせることに致しました、こゝに是を御披露致しませう、

春夏秋冬差別なく、或は紫あるは赤、白に黄色の花ざかり、艶に
美しき色香かな、
深く心を籠められて、集めたまひし萬國の、植木の名をば語らなん、いでや語らんその名をば、
人の知るなるベコニヤは、是ぞ日本の秋海棠、天竺葵は緣日の、
植木屋さへも賣ると聞く、
アヂアントムヤは谷渡り、シダの種類も數多し、見に來む人の驚くは、セーロン島のベンケイ草、
其葉を取りて空中に、懸けばそれより自から、遂に芽を出し、根を出す、造化の妙もきはまれり、
今も昔の影見えて、ギリシヤの國のオリンピヤ、其古事も偲ばる
、椰子の葉影の床しさよ、
ヤシの種類を數ふれば、アレカ、ジエノマあるは又、チレラドク
サヤフエニツクス、プチコスペルマも數多し、
今を盛とくれなゐの、色を湛へるポインセシヤ、月に見るさへも
涼しきは、アスパラグスの八重一重、
千年木やコロカシヤ、アベラの如き蓬萊シヨウ、あなたこなたに
蔓なせる、シチスの色の美しき、
チデヤ、クロトン、ザスチリヤ、ツヽアナヽスやゲスチリヤ、ト
ラデシカンシヤ、アヤメネス、カンナの花の美事なる、
花の形の珍らしき、アリストロキヤ、エレガンス、匂ひのよきは
ヘリオトロ、ペラヤシクシヤの花ぞかし、

ピルベルギヤにセンジユラン、ストレプトカアプス、タラマゴケ、ヘーマンチユース、イツシベリヤ、グレエーチエニヤにサツマシメ、カミカヤツリや狹竹桃、ゴムの木、タコの木、三遊花、支那のはちすと知られたる、花見事なるヒビスカス、
グロクスニヤやエピスシヤ、リウセツランやフリンジヤ、アピテイロンの花盛り、開業式とまがふなり、
花にはあらで葉をめづる、アマランチスやコリユウスの、錦の如き彩りは、見る目驚くばかりなり、
キンチヤク草と知られたる、カルセチラリヤ其外に、パンクラチユーム、アマリリス、アイリスの花の美しき、
サルビヤ、ヴバリヤ、ピガクンバ、クレロデンドラムトムプソ子ー、ウツボカツラと知られたる 奇草はこれぞ子ペンセス、
アルラマンダー、チトセラン、ニーレンベルキヤ、アロカシヤ、プロエ、トレニヤアチヤチカ、海芋、マクレツ、三段花、
パインアツプル、へごの木は、南洋諸島にありと聞く、パンジープリムラ、シ子ラリヤ、春の初の花ぞこれ、
躑躅、牡丹に藤の花、百合の花さへ一月の、中頃なるはきさらぎの梅に先立ち開くなり、
フヒロデンドラム、シクラメン、サンベルヂヤにユーチヤリス、ホソス、石楠木プイツトニヤ、弘法大師が石の芋、
ニホヒタバコの花の香を、匂ひおこせる夕風は、見るも涼しきだん竹の、小笹の露やはらふらむ、
アンヂヤ、睡蓮、木あふひ、リユーピンダイヤ姫菖蒲、アンスリユームの單瓣花、ゆかり床しきストレジヤ、
新宿御苑を始めとし、あるは帝國大學の、植物園やあるはまた、大隈伯のそれよりも、
殊に勝れて種類さへ、多きをほこるカラジユーム、實に美しき芋の葉は、伯が苦心のたま物ぞ、
マニラ濠州あるはまた、シンガポールや欧米の、蘭科植物これぞこの、グリンハウスの光りなる、
蘭の根本にヂヤが芋を、置けるいはれを尋ぬれば、甘きを茲に埋きて、虫を除かん手だてとや、
シプリペデユームの種類には、アルプラトムやバーバトム、ダランテー、セデニー、ホクサリー、フヒリツピ子ンサスカリシノム、アーガス、カルトム、カーロツム、ニピヨム、コンコラー、ヂバヤニカム、日光附近に産すてふ、熊谷草も此種類、
エリヤ、エリデス、ソプラリヤ、デントロピユームやカタセトム、バンダの種類に名高きは、サンデリヤナとトリコロル、
セロジネ、アシネタ、ホリドタや、グラマトフヒーラム其外に、ランシデユームとカトレヤは、蘭科の中の花の王、
フアレノツプシスの種類にて、桃色なるはシレリヤナ、雪を欺くアマビルス、共に蘭科の珍ときく、
ヴアニラ、カランス、ニユーメンラン、シルホーベタルム東方ラン、日本の蘭にてめでたきは、ナゴラン、カクラン、白竹蘭、
レーナンテーラ、コクシ子ヤ、ユピテンドラムシリアレー、シプリペデユームの種類にて、さきにもれたるザエニストム、

スタンホペーナの色香よき、花は其根に聞くなり、あるはオドントグラッサム、ペリステリナの花のいろ、サーカンサスやイフレピス、サツコラビユームやミルトニカ、レリヤ、リカステ其外の蘭科植物數多し、

（秋山四郎作歌）

乳の話

農學士 牧 忍

其一　乳の生成に就て

乳汁が動物の體內で、如何なる方法で出來るかと云ふことは、餘程六かしい問題でありまして、現今に至るまで、種々雜多の說がありて、一定しては居ませぬが、世俗に云ふ血液の滲濾物では有りませぬ、必ず乳腺細胞內に於て、新陳代謝の生產物でなければなりませぬ、其理由と申せば、若し乳汁が血液の直接の滲濾物であるとすれば、乳汁の成分は血液の成分と類似すべき筈です、然るに事實はさうではありません、例へば乾酪素、脂肪、及び乳糖は、乳に特有な成分でありますが、血液の中には決して其痕跡を認めることが出來ませぬ、又乳汁脂肪の中には特有なる脂肪が有りますが、それは勿論血液の中にはありませぬ、其外乳汁の灰分（灰分とは乳汁を煮詰めて固形體許りとして、それを燃燒したる殘りのもの、即ち無機物のみのことであります、有機物は熱燒の際に、炭酸瓦斯、水蒸氣及び『アンモニヤ』等となりて飛散します）は血液、灰物とは全く其割合が違つて居ます、是等の點から考へて見ますれば乳汁と血液とは全く別物であること明です、又乳は乳腺細胞より單に分泌されたものとも認めることは出來ませぬ、昔から此乳の生成に就て澤山の學者が研究しまして、從つて其說にも種々ありますが、其中で最も眞に近くて、現今多數の學者に因て認識されて居ますのは『ホイト』氏の說です、今それを簡單に述べますれば、乳汁は乳腺細胞內に於て、齒精細胞が溶解して、乳房より出て來たものであります、新に出來た齒精細胞が退化して、其上液化して、乳

腺細胞内で淋巴液と混合して出るものが即ち乳汁です、それですから、乳汁を多量に生産する婦人や牝畜は、歯槽細胞の生成と其退化作用の盛なるからであります、之に反して乳の分泌量の少いのは、其作用の遅緩なるからであります、

家庭小言

文學士　山本無極

家政の要道は儉勤二字の外なきなり、儉勤以て身を立て家を興し奢慢以て身を滅ぼし家を失ふ興亡の巷は一歩の踏出如何にあること知るべし、内政の主婦たらんもの愼まずんばあるべからず、

天の道は盈るを缺ぎて足らざるを補ひ、地の道は盛なる所を減じて衰ふる所を扶く、貧と雖ども弱きにあらず憂ふべからず、富と雖ども強きにあらず喜ぶべからず、貧富強弱畢竟午睡の夢、覺め來れば元是れ乾坤の一裸虫のみ、萬類皆な麁に生じて精に至る衣服素より美なるにあらず、人工之を美にす、故に今日玉堂の人も儉勤を踏まざれば忽ち是れ破屋倒產の人たり、矮舍の住人も家政其宜しきを得て怠らざれば天福降ること春雨の如し、一家の良風は引て一鄕の良風となり、一鄕の良風は進んで天下國家の綱紀を齊ふ、嗚呼婦女内政の忽緖に附すべからざる又責任の重且つ大なる知るべきなり、

余は今婦女諸孃の爲に、家政上に於ける古人の叢譚名訓を摘記し、以て家政圓滿を得るの資料に充つ、是れ徒らに理論を騈べんよりは其益却つて多ければなり、

古人云く夫婦の中の親しみも禮あるうちは珍らかにしてその情至つてあつし、禮を失ふ時はその情自然と薄くして離別もまた遠きにあらず、仁義遜讓は禮を厚うするの媒にして、此禮媚諛と背を合はす、智は痴とさしむかひ、誠は嘘と隣る、されば、心安だてと愛想づかしはいつも同居と知るべし、と味ある言葉ならずや、

男女打まじりて酒宴を開き花を見る繪の贊に曰く
おもしろの世の中や、恩を忘れぬほどあそべ
おもしろの酒もりや、こゝろみだれぬ程に酌め
と盈れば缺くるの理り能く分限を知り、分量を謹めば其身常に安樂、其家常に繁昌す鑒みざるべけんや

柳里恭秘藏の香箱あり、ある方へ之を賣るとき、人の云へるは左ばかりの名器人も知るところなれば持ちたへ玉へと、いたく止めけれども里恭は賣りたり里恭後に人に語りて云はくおもふに武家にて武器を賣らば耻辱なれども、衣服をはじめ茶器などは賣り拂ひたりともいさゝか瑕瑾といふべからず、井戸熊川の名物、金岡元信が名畫たりとも、國民の飢餓を救ふの德なし、ある諸侯領國の飢饉のとき重寶の名器を賣りて窮民を救ひじことありとありがたき仁政と民皆いひあへりと、

關東の人は身代不如意にありし時といへども、家の重器を賣ることを後にし、江州邊の人は其家不手廻に及ぶときは先づ第一に贅澤品を賣りて後に不動産に手を着く故に江州邊には、破産する人比較して少なしと語りし老人あり、

此等の話大に家事上の整理に省る充分の價値あるものなれば、心して讀むべきを望むなり、何事も物の少きは長久の基にして、多く物を貯ふるは身を勞するの媒なり、古より財寶の奴隸となり一生人の彈斥を被むり了る人少なからず、甚しきは財寶の爲に身命を亡すものあり、故に集めて能く散するの道を知る者こそ、經濟家政に長せし人といふべけれ、

家庭理科（承前）

山下謙堂

火の燃える事は何人も平生見慣れて居て、別に何とも思ひませぬが、少し心に留めて考へて見ると、實に不思議至極な現象でありまして、此等の研究の話は、中々面白みもあり又心得にもなる事でもありますから、此處に其の概略を述べませう、

前にも申した通り、元素と元素が化合する時には大變化が起り、其の時に多くは熱が起り、熱が強いと光りを發します、酸素は能く物を燃やすものであるといふ事を前に申しましたが、其の燃やすといふのが即ち化合する時に強い熱を起し光りを發する事をいふのであります、斯樣に物を燃やす事は、他の元素にも無いでもありませぬが、先づ大抵は酸素が他の物と化合する時の作用であります此の酸素と化合する事を酸化といひます、されば火の燃えるのは皆此化合が行はれるので、大抵は酸素と他物の化合即ち酸化の作用であります、



少し事實に就いて申し上ます、水素と酸素を一つ器に混合して之に火を附けますと、凄じい音を發して爆發します、此れは酸素と水素が火の媒により急に化合して燃えた爲めであります、又水素を硝子管の尖から續いて出る樣にして、空氣中で之に火を附けると水素は空氣中に混つて在る酸素と順次に化合しますから、一時に爆發せず、青色の焰を上げて靜かに燃えます、此の時冷えた硝子皿でも其の上へ蔽ひますと、其の器に水の小球が附きます此れは今新に出來た水の蒸氣が冷えた皿に觸れて凍るのであります、

それから彼の木片の餘燼を酸素中に入れると、直に

焔を上げて盛に燃えるといふのも、木の中に含まれて居る水素や炭素といふ元素が、酸素と化合する爲に起る作用であります、木片は空氣中でも燃えます此は空氣中の酸素と化合するからであります、

此處で炭素の事を申し上ます、此れも極めて必要な元素で、人間其の他の動物草木等、一も炭素を含んで居らぬ物はありませぬ、此の元素は酸素水素の樣な瓦斯でなく、固形物でありまして色は大抵皆黑であります、木炭や石炭は種々の混り物がありますが先づ大方は炭素であります、それから鉛筆を作る黑色の物も金剛石も炭素であります、又草木でも人間鳥獸等でも、火で燒くと跡へ黑い物が殘るのは皆此の炭素であります、又鍋釜の尻につく黑い物や煙突の煤も炭素であります、

此の炭素も前の水素と同樣に酸素と能く化合して燃えます、通常薪や蠟燭の燃えるのも全くそれであります、薪や蠟燭杯の中に最も多く含まれて居るものは炭素と水素でありますから、之に火を附けると、其の熱の媒によつて空氣中の酸素と化合して燃え始めます、一處がさうなると其の次も亦其の熱を受けて化合し、段々引續いて全く燃えるのであります、我々は毎日斯樣に薪と空氣中の酸素とを化合させて其の化合の際に起る熱を利用して、飯を炊いたり肴を煮たりして食べて居る譯であります、

さて右の薪や蠟燭の燃える化合作用によつて新に出來る物は何かといひますと、薪や蠟燭の中に含まれて居る炭素は空氣中の酸素と化合して炭酸といふ瓦斯となり空中に散り、水素は酸素と化合して水を生じます、

寒い時季に釜や鍋の下に火を燃すと、釜鍋の尻に汗の出たやうに水の滴が附く事がありますが、此れは火の燃える時出來た水の蒸氣が、釜鍋の冷えて居るのに觸れて凍るのであります、

又火を燃やす時空氣の流通が悪いと、酸素が不足しますから、炭素が化合する事が出來ず煙となりて上ります、

薪を燃すにも炭火を起すにも空氣の流通を好くする事が第一であります、薪や石炭を煙りにして逃がしては、熱を起らす煮物も煮えず、折角價を拂つて買つた燃料を無益に費す事になります、

薪が空氣中に燃える時其の中の炭素が炭酸となるのは、唯其の內の僅かで、其の大部分は少しの間は炭火となつて殘ります、之を水に入れるか、又は空氣の通はぬ器に入れて酸素の道を塞ぎますと、木炭が殘ります、炭屋から買ふ堅炭杯は木を蒸し燒きにして、成るべく炭素の多く殘るやうに作つたのであります、此の木炭も炭火の儘で空氣中に置きますと、段々酸化して終には炭素がなくなりて火が消えます此の木炭の費つ事も至極奇妙な現象でありますが、何人も不斷見慣れて心に留めませんで、炭火は時が經てば段々減つて、終に無くなつて仕舞ふ、跡に少し灰が殘るばかりで、其の餘は全く消えた物だと思ふ樣でありますが、其の實は唯形や素性が變つただけで、少しも減りも消えもしたのではありませぬ、木炭は前申す通り大方炭素で、唯少しばかり他の元素が混つて居るのでありますから、其れが酸化したのが灰になりて跡に殘るだけで、其の他の大部分の炭素は酸化して炭酸瓦斯に變つたので、決して無くなつたのではありませぬ、若し之を集め採つて灰と共に其の目方を量つて見ると炭の時とは目方が殖えて居ります、此れは酸素が化合して加はつたから其の目方だけが增したのであります、油や蠟燭杯が費つのも皆此れと同じ事であります、斯樣に形こそ變れ、其の實質は決して減りも消えもせぬ事は、炭素ばかりでなく、萬物皆同樣であります、

次に炭酸の性質を申しますが、此れも無色の瓦斯で目に見えませぬが、酸素と反對に物を燃やす力なく又生物の呼吸を保續する事も出來ぬ物であります、それで如何に好く燃えて居る火でも、之を炭酸瓦斯の中に入れると、忽ち火は消えて仕舞ひ、又生きた物を入れると、直に窒息して死にます、此瓦斯は空氣よりは重い物でありますから、古井戸杯に溜つて

居る事がありまして、人が其の中へ下りると窒息したり、燈火が消えたりするので、怪物井戸だ抔と恐れるのがありますが、全く炭酸の爲であります、斯樣な場所には、初め燈火を下して見れば、其の火の消えるか否かで、炭酸の有無が分ります、

炭酸は燃火や炭火からばかりでなく、生物の呼吸からも生じます、其れは生物が空氣を吸ひますと、其空氣中の酸素が肺臟中に入り、薄膜を透して血中の炭素と化合して出來るのであります、

芝居寄席など人の多く集つて空氣の流通不十分な所に居りますと、頭痛がしたり眼が眩んだりするのは、多くの人の呼吸によつて、空氣中の酸素が段々吸ひ減されて炭酸に變はり、其の炭酸の多い空氣を再び吸ふからであります、

一室内に閉ぢ込めて戸障子を締め切りて居るのも右と同じ理で、衛生の害になります、其れに室内に火鉢の火でもあれば、室内の空氣中にある酸素は、一方では人間に吸はれ、一方では炭火の酸化に取られ段々に減つて行き、其の代りに人の口から呼き出すのと炭火から出るのとで炭酸が多くなりますから、注意して適宜に新空氣の流通する樣にせねばなりませぬ、

寒中火鉢や火燵の火を起す爲に、炭火の上に顏を差出して吸ふては吹き吸ふては吹きして居る間に眩暈を起す事があります、此も炭酸を吸ふた害でありますから、火を吹かねばならぬ時は、炭火より離れた方の炭酸の無い空氣を吸ふ樣にする事が肝要であります、

嘗て子供が戯に箱の中に隱れ蓋を堅く締め居たるが、遂に窒息して死んだ事があります、此も前申す通り酸素を吸ひ盡して、炭酸に變じ其の炭酸を吸ふて窒息したのであります、

右に申した處を見ると、炭酸は人間其他動物には甚しい毒の樣に見えますが、右は呼吸するに害になるだけでありまして、體中に入れば必害をなす譯ではありませぬ、通常ビール、ラム子等には多分の炭酸

が溶解して居ります、ビールやラムチの瓶の口を開ける時に烈しく沸騰するのは、炭酸瓦斯が離れて出やうとするからであります、それから通常の飲料水にする水道の水でも、井戸の水でも多少炭酸が溶解して居らぬのはありませぬ、

家庭料理

花涙女史

凡そ一家の主婦たるものは、食物の調理法を心得おくべきことは言ふまでもなきことなれども、亦それと共に經濟及び、衛生、時間等のことをも考へざれば、却て一家の不利益を來すことあるべし、故に主婦は自ら其の品物の性質を探知して良否を極め、買物等は下婢に一任して敢へて顧みざるが如きことある可らず、其他炭の使用方及び、器物の洗ひ方に注意し、手順をよくすることを怠る可らず、手順惡しければ些少の物を煮燒するに、徒らに長時間を費しそれと同時に多くの薪炭をも要することとなれば大に不經濟の基となるなり、

炭の用ひ方

凡て七輪に用ゐる炭は必ず一旦水をかけて用ゆべし斯くすれば火力強く、火のもちもよろしければ三割方の得あり、（炭の種類は多けれども就中丸びん、角びん、びん淺其他うばめ、樫等を最上とす）

器物の洗ひ方

鍋釜椀皿小鉢に至るまで洗ひ方よろしからざれば、入れたる食物の腐敗を來すこと早し、殊に唐銅製の鍋などは、注意してよく洗ひ、終りに熱湯を注ぎ、水氣のたまらざる樣布片にて拭ふべし、

だしの取方

鍋に水を入れ、七輪にかけ、鰹節をかき、湯の煮立つ時に鰹節を入れ、（鰹節を入れたる後は必ず蓋をなすべからず腥くなればなり、）煮上りたる時上に浮べる泡を手早く掬ひ取りて、（此泡は腥きものなり）鍋をおろし、鰹節の沈みし頃直に他の器にうつすべし

（鰹節は、諸國より多く產すれども殊に土佐及び、伊豆產の物を良とす、總菜用には薩摩產を良とす、總じて鰹節は大よりも小さき方味ひ美なり、鰹節は外部及び黑き部分を總菜用に供し、中身の赤き部分を吸物用として常に蓄へ置くべし）醬油の種類は他日紹介すべし、

砂糖あくぬき法

料理上に用ふる味淋に代用すべきものは、あくぬき砂糖なり、而して砂糖のあくを取るには、砂糖一貫目までは、玉子の白身一ツを用ひ、五百目までは半分にしてよし、水は砂糖百目に付き、一合の割合にて、始めに鍋に玉子の白身を入れ、箸にて泡立せて水を入れ、其中へ砂糖を入れて、火にかけ、若しザラ目ならば時々杓子にて燒付ざる樣攪きませるべし煮立てば少し水を入れて沈ますれば、あくのみ上に浮き上る故、それを掬ひ取り、凡そ五六回も水を入れて、あくを浮き上らせては掬ひ取り、而して鍋をおろして、其上に紙を張りおき、他の器物にうつし取れば、あくは悉く其紙に着て取れるなり、右の如くなせば透通りたる蜜の如き物となるなり、又砂糖の着きたる紙は水にて洗ひ落し、あくの糟と共に少しの水にて煮立て、布片にて漉せば、二番を得るなり、二番は別に取りおきて總菜用に供すべし、斯くの如くして凡ての料理に用ふれば、其味美にして衛生に害なし、（砂糖は普通多く三盆白と稱する物を用ふれども、ザラ目を用ゆる方味もよく且つ價廉なり）

小鰭の鹽燒

小鰭の鱗をよく取り、鰓をぬき、腹をあけて腸を出し、水にてよく洗ひ、而して裏表より鹽をふり暫くして串をさし、ざつと裏表より水をかけて洗ひ除り强過ざる火にて燒くべし、燒加減は大抵魚の目の色白くなつたるを度とすべし、

蓮根胡麻酢

蓮根の皮をむき、薄くきざみ、湯の中へ少し酢を入れてゆで（酢を入るれば色白くなるなり）直に水に取り、よく洗ひて搾り、酢に鹽を加へたるもの丶中

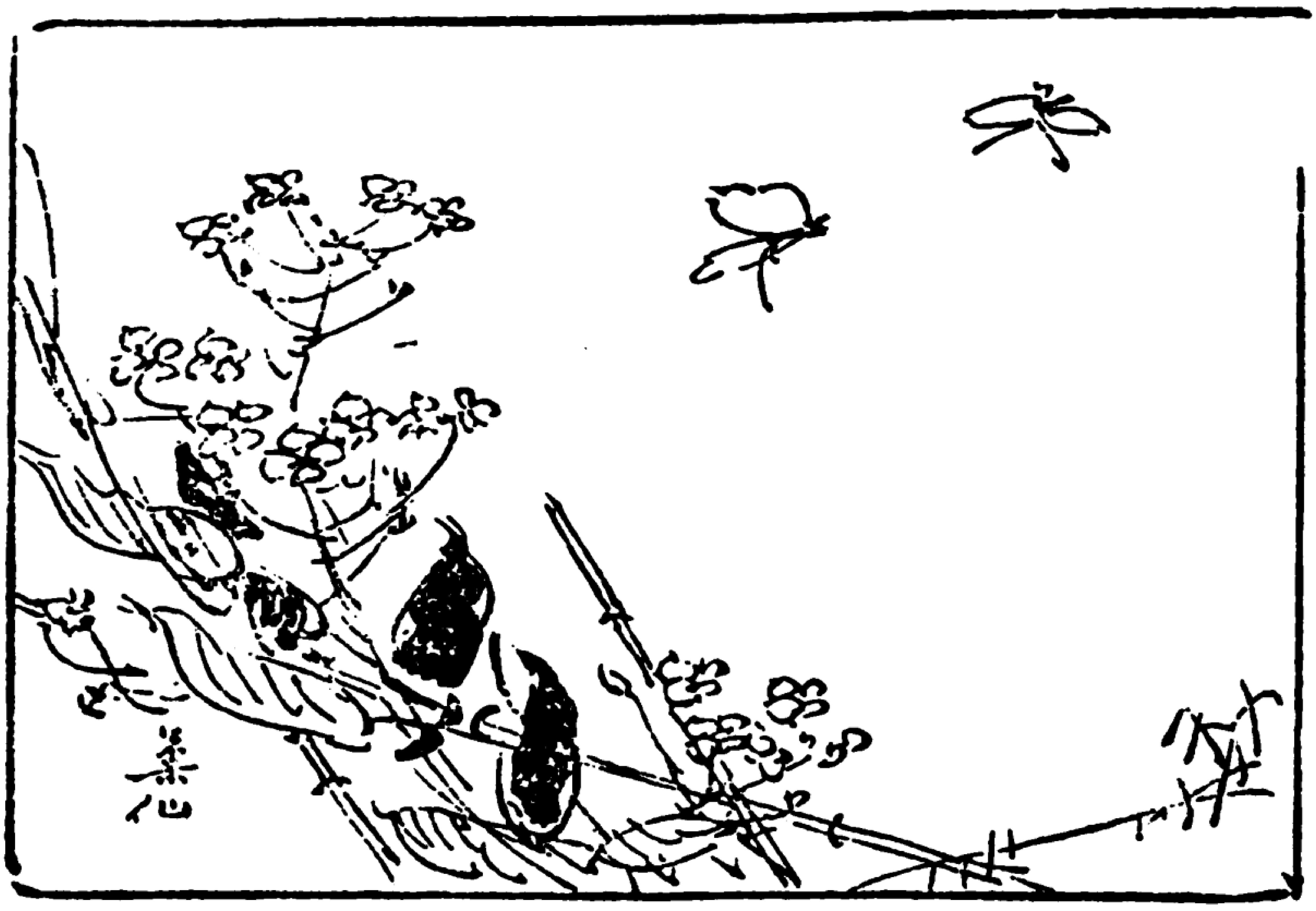
に浸し、ざつとしぼりて、白胡麻を煎りてよく擂り
あくぬき砂糖にてゆるめたるをかけるなり、但しこ
れは隠し胡麻とて餘り多くかけぬ
方上品にして風味よし、

菠薐草からし漬

菠薐草をよく洗ひ、鍋に湯を多く
してゆで、笊に取り、よくさまし
揃へてしぼり、皿に入れ醤油をか
け、よく溶きたるからしを菠薐草
の間へ詰め置き暫時して一寸位に
切り、燒肴の傍へ蓮根と二品を付
合すべし、

流したまご

は始めに鰹節のだしをとり、醤油
を常の吸物よりも少し辛めに入れ
あくぬき砂糖を少し加へ、煮立た
る頃葛を水にて溶きて入れ、(少し
どろ〳〵する位にてよし)、煮立てば玉子の溶きたる



を、網杓子の如きものよりざら〳〵と流し込み、ざ
つと煮立てば直に鍋をおろし、椀に盛るべし、やく
味には干のりをよくあぶりて揉
みこむなり、(此仕方は二人前に
玉子一個にてよし)

今出川豆腐の拵へ方

通常の燒豆腐を、酒と水と醤油
少しませて、極薄露に仕立て、
燒豆腐を煮ぬき、別に胡麻を煎
て、味噌に擂ませ、鍋に入れ、
砂糖に、味淋にて、あぢをつけ
よく煉上おき、さて豆腐をあみ
杓子にてすくひあげ、椀に盛り
上に胡麻味噌をかくるなり、

引ずり豆腐の仕やう

豆腐をよろしき程に切りて、崩
れぬ樣注意して、葛湯にて暫く
煮込み、あみ杓子にて掬ひ、椀に盛るべしさて、味

噌を擂鉢にてよく擂り、鍋に取り、砂糖を加へ、水を入れ、火にかけ、少しかたき位に煉り詰め、山葵の卸したるを此の内に交せ、而して椀の蓋の裏に付け置き、客にすゝむるなり、客は蓋を返し、此の上に右の葛煮したる豆腐を引ずり食する物なり、

獨活胡桃拌の拵やう

獨活をよく洗ひ、一寸六七分位に切り、二つに割り（大なるものは三つ或は四つ割になすべし）て湯煮し又胡桃を擂り、鹽と砂糖をよろしき程入れ、よく擂り、右の獨活を拌へるなり、但し胡桃の皮を去るには、一日程水に浸し置き、揚げて水氣を拭き取り火にて炙ればよく口の明くものなり、

脚氣の豫防法

脚氣には乾性、濕性（水腫性）急性（衝心性）の三種ありて、其原因或は一種の傳染病にして、固有黴菌によるものとし、或は靑魚科の魚肉中毒、又は食物中の含窒素物と含炭素物の比例よろしきを得ざる等、營養の障害に因るとするなど、諸說區々にして一定せざれども、畢竟するに胃腸の健康完からざるに因て來るものなるが如し、日本人今日の生活狀態を仔細に考ふるに、誰しも正月は喰過ぎ飲過ぎが多く、大方は正月過ぎより二月の初めにかけて、胃腸の疾患にかゝるもの多く、搗て加へてこの時期は、寒氣酷烈なれば自然起居ともに溫暖期程に活潑ならず、三月に入りては初旬に節句あり中旬以後は花見の運動會のとて、又しても飲食の事多く、爲めに消化器は過度の使役より免るゝの時なく、疲勞に疲勞して、健康によろしからざる梅雨期に入り、遂に右の脚氣病を惹起して、俄に麥飯を喰ふとか、靑魚科の魚類を攝取せざる樣注意するとか、其狼狽一方ならざるも、脚氣は其時突然に襲來せしにはあらず、胃腸を暴使ひし爲に、其の疲勞せし虛に乘ぜられしなり、扨て如何にせば、脚氣に罹らざるを得べきかとの問題に解釋を與ふれば、兎角の沙汰に及ばず、只だ胃腸の健全を心掛くるにあるのみ、胃腸健全なれば、假令へ固有の脚氣菌侵襲するとも、靑魚の中毒にあふとも、但しは又炭窒比例を誤るとも、夫等に對する應變の處置を執り得べければなり、彼の世人が最も恐怖する虎列剌菌の如きすら、健全なる胃中にはよく生存する能はずして自滅するものなれば、脚氣菌（よし在りとするも）のみ單り其威を逞ふし得べき筈なし、尙こゝに一言すべきは、地方より出京せる學生等に脚氣患者の多きことなり、之くは其原因いづれにありや、土地氣候の具合なりとの說重きを置かれ居るも其實食物と胃の關係大にこれあるを見る、元來地方より出京せる人人は、何を口になすも比較的鄕里にて食せしものよりは美味に感ず

る故、不知不識の間に過食して、往々消化器を害し、遂に脚氣病を發するに至る、この病が比較的青年に多きも、全く右に因來するものにして、人には春秋の二季俗に「渴き」と稱して、食慾亢進する時あり、この時胃腸は必らず過度に使役されて疲勞を來たし、斯くて前に云るが如き結果を來たすものなれば、兎角暴食をなし易き青年輩は、別してこの邊の注意を忘れず、乃ちこの時期に於て胃腸の健康を保つことをはからば、夏季に入りて脚氣病を患ふることなかるべく、其既にこれをわづらへる者も再發の患より免かるゝを得べし。（（三宅博士談））

家庭敎師ハマー孃

數年前島津家の敎師として、同家に招聘され、爾來當主忠重公（目下江田島海軍兵學校入學中）及び目下陸軍幼年學校に入學中なる忠備氏以下三名の男子を敎育し、日夕起居を共にして、永田町なる島津家に於て熱心に敎鞭を執りつゝある事なるが、同孃は日本軍の將卒が天皇陛下の萬歲を唱へて、名譽の戰死を遂ぐるもの多きを聞き、大に日本國臣民の陛下に對し奉りて忠勤を抽んで、且つ祖先を重んずる事の深厚なるに感激し、殆んど寢食を忘れて、島津家の令息方に精神的敎育を施し居れり、同孃は最初三年の契約にて招聘されたるも、其の敎育は純然たる歐羅巴的に日本的精神を加味したる方針にて、曾て獨逸國皇太子殿下の敎師たりし英國人ハマー孃は、大に島津家の信任を得たるにより、尙契約期限を向ふ三箇年間繼續する事となり、西園寺侯も此事を聞かれて、大に感激せられ、廣く日本の貴族社會に之を及ぼしたしとて、此程態々島津家を訪問し、敎授の現況を視察の上、同侯の令弟なる住友吉左衛門氏の家庭にもハマー孃の紹介を以て、英國より一名の女敎師を雇入れたる由。

東京基督敎女子青年會

◎發起委員の研究　日本基督敎女子青年會の發起委員は、兩三年前より青年會の活動すべき事業の區域を調査しつゝありしが昨秋を以て、之を中央委員と改稱するに至れり。十一月中特に東京の必要に應じて執るべき事務を組織せんがため、津田梅子氏を會長とし、ババ夫人を副會長として、其の他十三の知名の貴婦人を委員に擧けたる一地方委員會の創立を見たり、斯の如く多事にして多方面なる事務に當らんとするや、委員の第一に研究せざるべからざる問題は、極めて夥しけれども、年少女學生のために基督敎的寄宿舍を設備するの一事は蓋し其の最も直接なる事業ならん、其の緊急にして、瞬時も閑却する能はざるは言を俟たずして明なり、年少女子の保護は、現時日本の社交的生活に於ける最も重大なる一問題にして、彼等が基督敎の感化力に圍繞せられ其の新に得たる自由と責任との危險に陷らざらんがため、周到綿篤なる保護を受くべき家庭の新設は愛性主義の賦る實際的なる良法なりと、云はざるべからず（二六）



散浮く花

山田枯柳

一

弘前市は、陸奥國の西南隅にあつて、青森縣第一等の街である、昔は津輕侯の累世の居城地で、十萬石の藩高を以て、津輕全郡を管した城府、又その昔は鷹ヶ丘といつて物淋しい丘陵であつた、維新この方街の樣子は、一時はさびれたが、その後おひ〳〵回復して、今は中々の繁昌、さびしい陸奥國に、このやうな町があつたか、と旅人が不思議に思ふ位、

同市茂森町に一戸三郎右衞門といつて、中々の資産家がある、味噌醬油製造業を營み、縣下は申すに及ばず、北海道へも澤山荷を積み出し、商賣は益々繁昌する、主人の三郎右衞門は、五十五六の昔氣質の巖牆男、子供に二人の娘がある計りで、母も息災延命で、小賣の醬油を手づから升に量り、おまけも柄杓の底につくやうな客はやらず、長くたらしても、滴の中絶ぬ程の愛嬌者なり、

この母親、中々の子煩惱で、自分は、手織木綿の糊附洗濯物で年中すましてゐても、二人の娘には、奇麗な物を着飾らせ、稀にすなる物見遊山には、母はお附の女中としか見えぬ、

姉はお町といつて、當年二十三歳、三年前に婿をとつて、夫婦中よく家に暮してゐる、背のすらりとした細面で、生際のきれいなのが何よりの呼び物である、妹は今年十七の春を迎へた許り、中肉中脊で、ふつくりとした頬、すゞしい眼の下に淡紅をたゞよはせ、固く結んでゐても、微笑の見ゆるやうな花の唇、紅をさゝいでも至つてうるはしい、名は聞くも優しい、お文といふのである、さる人の惡口に、草深い奥州三界には、鼻から聲の出る化物ばかりだと云ふのがあつたが、この姉妹は花のお江戸にもめづらしい美婦であつた、かゝるめらす(娘)の親たちは、如何ばかり嬉しからう、街の人々が此娘を見てどつてん(驚)するも、無理はない、草深い奥州と侮るなかれ、君見ずや鷹ヶ丘城の花二輪と、土人の詩人が新體詩とやらにつくりさうな娘であつた、

二

妹のお文は、もう年頃になつたから、然るべき家に縁づけて、一安心しやうと、母親は、自分の家に出入する誰彼に、この事を依賴した、すると、魚屋の勘六と云ふのが、よこへす(宜しう御座います)とひきうけて、水をきらした鮒のやうに奔走つた結果が、本町の質商赤貝須之助の惣領息子で九佐といふのが是非貰ひたいといふことで、話を一戸家へ持つてゆくと、案外相談が早くまとまり、四月の始めに婚禮の式を擧ぐるといふことになつた、

お文は、母から用事をいひつかつたので、早々茂森町の自宅を出たが、近頃は婚禮の一件があるので、何やかと心配になつて、歩行もはか／＼しくない、やう／＼本町の進々銀行の前に來た時、

「わら、お文さん……」

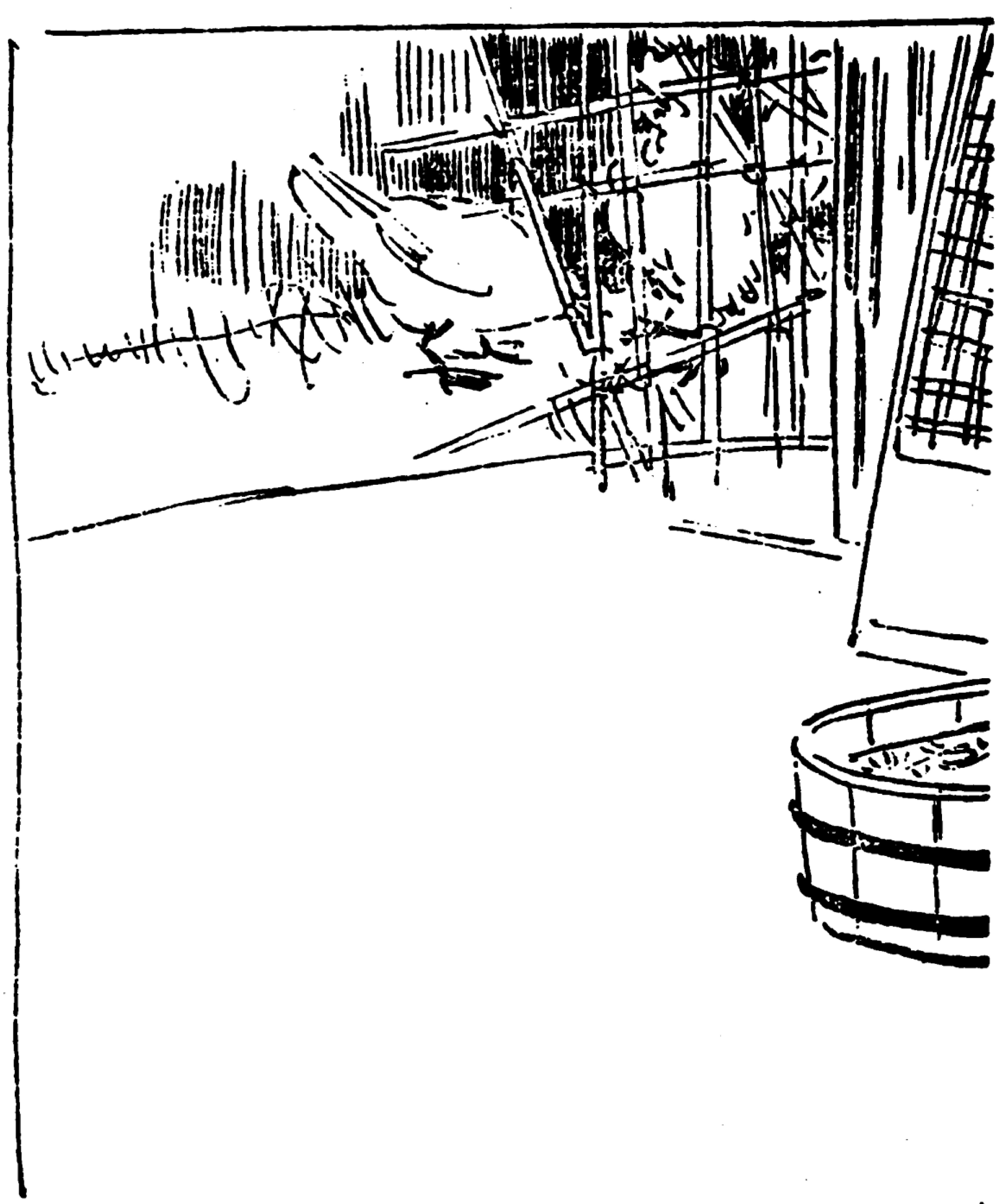
と向ふから聲を掛けたのは、脊のひくい肥大女で、顔の形は蟹の甲羅のやうに頬骨が高く、肉色は鰤の黑

身のやうで、その聲は法螺を吹くやうだとは、ちと作者の法螺であるが、兎に角あまり美くしからぬ娘で、お文の學校友だちであつた、

お文は、下向て居た顔をあげ、懐かしさう



な眼で、件の娘を看めた、娘は一寸笑つて
『お文さんお目出度……嬉しいでせう……』
お文は莞爾笑つて見せるかと思ひの外、少し怨めしさうな眼つきをして、
『由ちやん、そんなこといつてお呉でないよ、わたしやちつとも嬉しくないわ、お嫁に行くのが何んで嬉しいものですか……』
『あら、あんなこといつて、ぢや何故お嫁になるの？』
『お母さんが行けと仰しやるからだわ、お母さんや、お父さんに御心配を掛けては済まないから、わたしや御孝行だと思つて行くのですよ、わたしや何時までも家にゐる方がいゝのですけれど……』
と云つて、物思はしげに下向いてしまつた、由ちやんは、あまり意外なので、只さへ小さい眼を圓くして



お文を看め、小時は言葉もなかつた、
『お文ちやん何處へ御いでなさるの？』
『わたし？一番町まで行くの、』

『ぢや一緒にいきませう、わたしは寺小路の伯母の處へ行くのですから』

二人は歩き出した、歩きながら何かしきりに話してゐた、市役所の前で別れねばならぬ、お文が由ちやんを見て『左様なら』といつた、その眼つきも、その聲も、平常とは異つて居たので、お由には、何となく哀なやうな、悲しいやうな、又一人の朋友を失つたやうな一種不思議な感じが胸にひし〳〵とこたへた、

三

三々九度の杯事も式の如くすんで、この家に暮してから最早一月餘りとなつた、お文は實家戀しく、朝夕その事のみ思ひつゞけ、薄闇い中の間に悄然と立つて家内の人にあやしまれることも度々であつた、そも斯の如く彼女があるといふものは、唯乙女心の一すぢに父母が戀しいからといふ計りでなく、他にも原因があるのである、お文は固より優しい温なしい娘であるから何事も云はぬ、併し作者が今その原因を考ふるに、その原因は、第一婿の九佐といふ男が生意氣にして馬鹿なること、第二舅の赤貝須之助が梟眼をして嫁をにらむこと、第三姑の老婆が人悪い慾張の情しらずの因果屋なること、第四家の疊を五六年も仕變へず姑老婆さんの黒鬢附と共に黒光して心地が悪るくてゐられぬ事、第五傭人に人らしきもの少きこと、其他何々と數へて見れば、天竺は恒河の砂の數よりも少いには相違ないけれども、如上の五件よりも尚多いには相違ない、それはとにかくこの赤貝一家は、誠にはや因果を集めた一家で、表面は質屋だけれども裏面は高利貸をやつてゐるので、二割の手數料に、一割五分の利、期限は三ヶ月、容赦はなしの人困らしである、されば須之助が朝飯の折糠くさき汁椀を取上げ、汁の實の干大根を食べ玉ふ時にも、利息の計算を忘れ玉はず、息子の九佐も嘗て東京に出で丶二三年さる法律學校にゐたとかで、時々法律や屁理屈を云ひ出し、親爺と好一對の人物たることを證明する、又老婆は鐵漿の剝げて紫色になつた齒莖を顯し、何が

と嫁の評論をする、あゝ此のやうな家に、優しい、やさしいお文のやうな女が如何して無事に日を送ることが出來やう、父母が戀しかつたり、家に歸りたがつたりするのは、別に不思議はない、人情の自然である、併しこのやうな家でも、一度嫁に行つた以上は、嫁から去るのは不合理である、運命とあきらめて――即ち約束事とあきらめて、長い〳〵一生涯をこの闇黑なる一家の中に葬らねばならぬか、只『嫁に行つた』といふ事一つで、花のやうな女を痛ましく鬼のやうな人々の犧牲に供せねばならぬか、或る老した人に聞いて見ると『そのやうな家でも辛抱してゐるのが貞婦ぢや』といつた、さては『貞婦』と『幸福』とは兩立しないものであらうか、

四

お文は、まだ世の中のことはちつとも知らぬ娘であるから、嫁といふ者はこんなつらい者であると了知して、悲しい、淋しい月日を送つて居た、

生れた家にゐた時は、此のやうなこともなかつたのに、冬には手に胼も切れ、時としては、凍瘡も出來た美くしくふつくりしてゐた顔も、幾分か黑くなり、且つ身もやせた、以前は温柔い娘であつたのに、哀れや今は陰氣な妻君となつた、世の運命は、婦人に對してかくも殘酷なのであるか、否殊に優しいお文に對して斯くも殘酷であつたのか、

夫それは妻の幸福の製造者たるべき夫が、今すこし優しかつたなら、お文はかくまで世の苦勞にやせなかつたであらう、夫の九佐は、初めのうちこそお文をとやかく愛したが、半年もたゝないうちに、早くもその愛は衰へ、お文の云ふことには耳を傾けず、屡々夜おそく歸つて、お文には優しい言葉の一つもかけず、何かいつても簡單な返事、心優しいお文もあんまりだと度々恨むこともあつた、

それにまだ一つの難物は、九佐の母即ち姑といふものであつた、自分の息子の嫁が何故そう悪いのか、朝夕ろくに用事を命せず、さりとて何もしないでゐれば、皮肉な蔭口、何かすれば、仕た事が氣にいらないのか、たゞしは仕かたがわるいといふのか、自分で再び仕直す、一寸物を言つても急に返事をしない、お文は事毎につらい思ひは絶えなかつた、偶に實家に歸つて、何にも知らぬ——實はお文が何にもいはなかつたので母親の手に縋るのが何よりの心やすめで、若し此のやうなことがなかつたなら、お文はとても生きてゐることが出來なかつたであらう、然るに、その實家へいつても、少し歸りが遲くなつたり、或は土産物が姑の氣にいらなかつたりすると、又々種々の陰言や、諷言や、皮肉な言葉を聞かされるのである、

譬へていはゞ慰の光の一線もない闇黒の中に、お文は嫁といふ字の爲に、出來難い辛抱をして、人知れぬ涙をそつと襦袢の袖でぬぐつて、春とすぎ秋とくらして、いつしか二年以上は、夢のやうに、それは至つて苦しい夢のやうに過したのである、

その年の春の暮、ふとした事から、お文は眼を煩つた、さわかうなると他人の家はどつらい者はない、思ふ通りに働くことは出來ず、姑の小言は益々甚だしくなる、舅も苦い顏をすれば、夫の九佐もます／＼お文を疎んずる、お文は、氣は氣でなけれど、病氣に勝つことは出來ず、毎日／＼涙で日を暮し、眼病はます／＼増るばかりで、早や一月を經過したが、急によくなる樣子もない、お文はあまり氣の毒なので實家へ歸つて療治することにした、

實の母ほど有難い者はない、母はお文を下にも置かず彼是と心配して、醫者に見せる、水で冷す、夜は傍を離れず、色々いたはつて呉れる、何が好き、何が嫌ひと、少しも不自由のないやうにする、お文は、わ

ゝ有難いと、今更親の恩に感じた、しかしこの御恩は、何時お返し申すことが出來るか、又病氣が直つて彼家に歸るやうになれば、どんなに辛いかと、兎や角思ひつゞけて、その小さい胸に心配の絶ゆることはなかつた、不幸のやうだけれど、寧そこい儘死んだらどれ丈け幸だか知れぬ——と哀れな考を心に浮べることもあつた、

東北地方の短い夏は、早や昨日の夢と過ぎて、袷羽織の秋となつたが、お文の眼病は、未だはか〳〵しく治らない、で、母親の心配は一通りでなかつた、

長い間、見舞にも來なかつた赤貝家から、突然使の者をよこして、『離緣』の話をもちだした、その口實は樣々あるが、『家風に合はぬ』とか『子が出來ない』とか、實に確乎とした條件とならないことを條件として、無理に離緣を要求したのであつた、

五

お文は、赤貝家に是非居たいとは思はぬ、否、かの家にゐるのは、實に辛い〳〵思ひである、しかし、その心でも、一旦嫁入りしたからは、萬事温柔くして一生をその家に暮す決心であつたのである、されば、實家にゐて母親の愛の下に、不自由なく暮してゐても、やはりその家の事が思ひ出されて、病氣が治らば早く歸つて姑を助け、夫につかへ、家事に與からうと、今の今まで思つて居たのに、突然離緣の話が出たので、流石に驚き、悲しまざるを得なかつた、萬事自分の不足からとはいへ、別に何の科も罪もないのに離別するとは、あまり情けないことで、自分は人に向ける顔もないと、お文は泣伏した、母の切なる慰も此時だけはその甲斐がなかつた、

幾日かの間深い思ひに沈んであつたお文は、やう〳〵心を決して、人知れず家を逃げ出でた、云ふまでもなく、世を果敢なみ、死を決したのである、

影のやうに裏の小門から出て、流石に足の運も遅く、とぼ〳〵と町を辿つて、いつしか下白銀町に來た、

お文は考へながら弘前公園にその羊の歩を運ばした、

仰ぎ見れば、一輪の明月は、秋の澄み渡つた空に浩々たる光を放つて、下界は晝を欺くやうである、併し夜も遅いので、人の足音は中絶へ、四邊は沈々としてゐる、お城の方を見れば、松柏の茂み、ものすごく淋しさに身の毛もよだつやうである、お文は痩細りたる影を地に印して、悄然としていつたが、偶と木の下に立止まり、淋しい、蒼白い顔をあげて、ぢつと月を看めた、お母様や、お父さまに對しては、誠にすみませぬけれど、妾は今宵此世を逝りまする、お詫は未來で致します、不幸な子でも妾の心をあはれと思つて下さるなら、死んだ後は、花の一本も、どうぞお母様、妾の墓に手向て下さいまし、眞實に妾は今迄世の中を夢のやうに暮しました、これからも長い〳〵夢を見るのでありませう……お文は力のない手を顔にあて、少時涙にむせんでゐた、

ふと人の足音が聞えるやうな氣がしたので、人に見られてはと、お文は直に森の茂みに身をかくした……

今年の春から、お茶の水橋を毎日、照る日も降る日も缺かさず通行する一人の女學生がある、衣服は質素な手織木綿なれど、海老袴茶長くうがちて、歩もしとやかである、物好な作者が、強てその傘のうちをのぞくと、豈測らんや、勿驚、これは鷹が丘城の名花であつた、

死を決したお文は、さる僧侶に助けられ、生命は尊いものであつて、自分でも自分の生命を棄ることは出

來ないものであると云ふことを『懇々説諭されたので、死を思ひ止まつた、そして赤貝家とは關係を絶ち
お文は將來獨立して暮すと云つて、勉強の爲め上京したのである、
殘忍なる赤貝家では、お文が女學生になつたのを『なれのはて』だと、嘲つて居るとの事である、

加茂の川風

上

酸漿女史

年中ピイ〳〵風車の池大雅堂と云ふ男がある、此男は繪畵に堪能であつて、其名が早も洛中洛外に廣がり遂には日本全國誰知らぬものも無い程であつた、であるから諸國に飾付けてある大名達は、此男の繪畵を贅澤物の一つとして、此男の一筆に千金を惜まぬ位であつた、併し此男が其等の金に眼が眩んで、繪心を臺なしにする程の幸福者でないから、氣に向けばロハでも描くが、氣が進まぬと來た日には千兩萬兩眼の前に積んでも、うるさいとばかりで、なか〳〵急ぐ間には合はない、かう云ふ鹽梅であるから更に金儲にはならず、もと〳〵財產があるわけでもないのだから、勢ひ米櫃にも影響する、それらを何の絲瓜とも思はず、衣裳は着た切雀尾羽打枯らしてお宿は堀川邊でおしゆん傳兵衛君の隣り、九尺二間に雨月漏りのあばら屋、臺所の隅に蕈か生へて、其傍に瓦三枚の屛風箆に、鍋釜兼帶の焙烙一個これも大かた蜘蛛の網の張るに任し、板朽ちた流し元に、魚の頭、葱の尻尾など埋くなつて、水の融通少しもきかず、お負に身體の洗濯が月に一度、居間の掃除が大抵三月目と云ふ始末であるから、此男に家を貸した家主さんこそ迷

惑、その中に閑居して不善をなさぬ所、兎も角も大人物である、女房を娶るは厄介なり、傭人は居付かずといふ、まだ此男が獨身の時、朝飯ぬきの午飯時となつて、自炊するも面倒と、戸締りに安心なる我家を出で七條の通りをぶら〱と、那染の温飩屋へ行かうとする途中無頓着男の眼にも入つたは、此男が遠縁の親類で、近江屋源兵衛といふ糸屋、代々繁昌し來つた煖簾を、放蕩息子の爲にはづされ、其日は借金の片附にとて、身代物の競賣をせんと、其用意の最中であるから、見捨てゝも行けずと、腹の空いたのも忘れて『御免』と訪うた、すると此男は變人と名を付けられて、親類中誰一人相手にする者もない位であるから、折も折、この取込の中へ貧乏人が舞込んだと主人源兵衛にか〲しくは思ふたれど、まさかに何をしに來たとも言はれず『これはようお出でなすつた、さアお上りなさい』と、通り一遍の挨拶をしたばかりで、茶を一杯汲むでもよく、何一つ話しかけやうともせぬので此男即ち繪畫の名人大雅堂も、まんざら無神經ではないから、怪しかる事とは思ふたれど、多寡が算盤玉をはじくより外に能のない人間を、相手にして理屈をいふも大人氣なしと、さも平氣に内の樣子を見て居ると、何れも身代を早く人手に渡さうと、夢中になつて騷いで居るのだから、大雅堂も見かねて、更に取合うてもくれぬ源兵衛に『親類のこの私に、けふの事を何で報して下さらなんだ』と一理屈はじめる、源兵衛せゝら笑うて、成程それは手ぬかりであつた、しかしお前さんに報して上げたところが、何の役にも立つまいやじないか』と、さりとては見さげた言草、大雅堂強いて氣にはせぬが、態と怒を装うて『それはおぢさんのお言葉とも思はれん、ハヽア何の役にも立たんと仰るのは、私に身代をたゝき賣つて仕舞ふ腕がないが、成程それもさうであらう、私しには玆に並べてある品物を、賣らぬ工風はないかといふ相談なら、それは隨分出來ないではないが、外の御親類方のやうに、喰つぶしに來て賣こかして仕舞うな

んど、どうもさういふ不人情な眞似は出來ぬから』と、人も無氣に氣焔を吐く、すると間接に罵倒されたる、同家の親戚平八と云ふは、少しは話せる男で、かねて大雅堂の腕前を知つて居れば、此際何か利用する道もあらうと、にがり切つて居る源兵衛をとりなして『なるほど傍で聞いて居ましたが、大雅さんの仰やる事は一々御道理、なにしろ斯ういふ騒ぎでございますからツイ御沙汰もしませんで、どうも〳〵重々不都合でございます、當家も御存知の理由で御見掛の姿でござい升から、どうか御名案でもございますれば、聞かしていたゞきたい者でございます』と、いつもになき甘口を並べるに、これまた小癪にさはらぬにはあらねど、今の場合、それを彼是論する時ではない、たゞ疎まれても親類の好誼、この窮狀を救ひたいといふのであるから『承知しました、拙者に名策があるから、兎も角も店頭に飾つてある道具をお片付けなさい』と、以ての外の言葉に、源兵衛はもしや大雅堂が、狐にでも誑まれたのではあるまいかと、横合から『それには二百兩の金子がなければ』と露骨ないひやう、大雅堂は委細構はず『それも承知じや併しまだ朝飯も食はぬのじやから、何か御馳走を』と、こゝらが呑氣の行止りであらう、

中

越えて三日目には、池大雅堂が、五條の橋の袂で、辻畫を描くといふ廣告が、所々方々に貼出されたものであるから、名人の筆を執る所、見る丈でも話の種と、五條の橋の上は、卯の刻より人の黒山を築いて大雅堂の店出しを今やおそしと待つて居る、此方には近江屋の源兵衛、今日の景氣はどうであらうと件の場所へ樣子を見に出掛ると、右の始末にて非常な人出であるから、大さうな人氣だと悉く感服をして其趣を大雅堂に話すと、大雅堂はすましたもので『それはおじさん分つた話じやないか、兎も角もそろ〳〵出掛る事としよう』と、手傳ひの男二三人引連れて、やがて五條の橋にぞ着にけるとなると、かねて評判の構

はぬ屋ではあるが、十二月の下旬になつて世話する人も世話する人で、先づあきれ返らざるを得ぬは、浴衣の裏打したる上に、裏付の蚊帳絽を羽折つて、更に頓着しないのである、さて役員は一人は紙を取出す自分は筆を執る、一人は印を捺す、一人は金を受取るといふ鹽梅に、それ〴〵手分をして仕事に取掛る、所が如何に辻講とは云へ、捧二本引いてこれは火箸で候、丸を拵へてこれは輪で候、四角なものを造つて此は裁板で候といふ有様であるから、誠に其の講はお粗末なものである、併し落款の直價が大したもので會計課長は眼を舞はす程である、斯く三日間辻講を描く積りの所、二日目の午頃に至つて、既に二百兩以上の金高にのぼつたものであるから、一方で『えらいものじや、はや二百兩の上を出た』と、思はず小聲で饒舌たものだから、大雅堂ははやくも耳に入れて、さらば役目は相濟んだ』と、忽ち筆の手を留めて仕舞うた、すると人は意地なもので、いま一枚もう一枚と、金に糸目をつけぬ望み人が降るほどある、されど大雅堂は早くも繪道具片附けて、跡をも見ずにすた〳〵歸つて行く、そこで驚いたのは多くの客衆より、慾氣の離れぬ手傳ひの人々で、『何とした氣の利かぬ人であらう』とは飛んだ罰當りなれど、このお蔭で近江屋は家勢を挽回して、再び大暖簾を飜すやうになつたものであるから、常に大雅堂大明神の御利益を唱へて居る、

此の逸事誰れ言ふとなく、世上に噂高くなつて大雅堂の名は日の出の勢ひとなつた、されど相も變らぬ呑氣もので、一茶の所謂何のその、百萬石も笹の露と、貧乏性は拔けぬものであるから、あたら好男子も煤にくすぶつて居る、所が此男に一番思ひ込んだのは祇園町の才女百合で、一人娘のお玉といふのを、是非女房にして貰ひたいといふので、人傳に大雅堂へ右の趣を申込んだ、其お玉と云ふのは名詮自性實に無類の美婦人で、公卿高家の公達、大店の若旦那などに、男を下げさせた事もあつたが、蓼喰ふ虫の世にはあ

れど、妙な人好であると、大雅堂は寢耳に水のいたく驚いたが、もとより獨身で終るほど世の中を厭とも思はれねば、自分の技量に於ても自負心のないではないから、天より我に授けたる美人お受申さぬも恐れ多しと、强いて好ましからぬ縁談にもあらねど、さりとては天下の美人を迎へるほどの用意は、何一つとしてないのであるから、まづ拙者の宅から御覽の上で更にお申込を願ひたいといふので、百合はそれをお氣にする程の、氣少なお方とは思はなんだと、流石にうた娘と歌はれし女だけに、なか〳〵腹の中が垢拔して、人物の或點に於て、大雅堂より役者が一枚上の所がある、何にしても厭と仰せられねば千萬有難しと、緣談は速にとゝのひ、末は誰が生活の花と、千人に氣苦勞させし祇園町の美玉は、遂に京の田舍の貧乏人の手に落た、即ち好配が出來た、實に似た者夫婦といふは、此時からでも始まりしものか、妻君お玉は母百合の仕込によつて香花茶の湯などのはした事はさらなり、讀書裁縫の業も人にすぐれて、歌でゝろ書でゝろなどの氣高き所はあるが、育ちし塲所柄にもなくぞべりした衣服をきらひ、其他すべて、手數のかゝる見得を好まぬから、間がな隙がな良人を師匠にして、畫の稽古は怠らぬが、筆を手に取ることなどは珍らしいものゝうちに數へてもよい位であるから、云はゞお玉の輿入した日より、引さがし人が殖ゑたやうなものである、斯る鹽梅であるから、夫婦仲の睦しい事は誰羨まぬものもない程であるから、偶々泊り客がある時などには、夫婦の寢道具をすつかり引渡して、夫婦戸板の下に畫用紙にくるんで、暖き夢に入る事などがある、兎角するうちお玉の畫はます〳〵上達し、號を玉闌と呼びて、大雅堂と肩を並ぶる腕前となつた、されど夫婦の香氣さ加減は、幾年の後までもつきまとふたが、流石の大雅堂も香氣に構はれない一事が起つた、そは餘の儀でもない、この度宮中に御慶事があつて、嵯峨の御所より畫師の人撰に預り新年河の課題で、揮毫せよとの御沙汰が出たのである、

下

南洲と海舟とが意見の投合したる如く、早朝と深更とが時間の接近したるが如く、極端に呑氣なる大雅堂は、極端に呑氣でない所がある、即ち其呑氣でない所が大雅堂を、繪畫界の大立物にしたる所以で、繪畫に就ての苦心經營は、到底尋常の人の想像の及ばぬ所である、であるから平素一枚の紙を黒くするにも苟も筆を卸さない、ましてや、天覽に供し奉らんとする、一世一代の手腕を揮はうとするのであるから、殆んど半ヶ月ばかりは、寢食を忘るゝばかりに夢中になつて、百方意匠を凝したるが、遂に苦心空しからずして、一つの名圖案が出來た、ヤレ嬉しやと小躍して、いざ一氣呵成すべしと、墨の用意は滞りなく出來たるが、まさか、畫箋紙にも描かれぬので、絹地となるとなか〳〵買置をする程の餘裕はない、折の惡い時は仕方のないもので、其日には小遣錢にも困る程であるから、あたら名案も空しく腹の中で嗚咽流涕して居る、これが間に合はせの畫師であれば、御褒美を當込んで、他より預りの絹地に、手も附け兼ぬ所であるが、そんな卑劣な心はすこしもなく、自分の無一物は金看板なれど、妻君の身の廻りまで無一物にしてのけた跡なれば、金策の道は全く絶え、實に心外千萬であるが、舊恩を肩に着て近江屋へ走る程の勇氣もなく、また出來ぬを知つて女房に氣を揉ませるでもなしと、意地骨は突張つて見るものゝ、日限は一兩日にさし迫つて居るし、如何にせばよからうと呑氣畫伯もなか〳〵呑氣では居られぬ、詮方なしに、注文の用紙に十八番の富士を描いて、漸く絹地二枚の代を得たから、これで一安心と、例に依つて妻君に取敢ず買はせにやる、其の日は非常な大風であつたが、玉蘭更に厭な顏もせず、清水坂の繪絹屋まで出掛けた、歸り途に五條の橋へかかると、頃は師走もはや半ばを過ぎて、加茂の川風がピユー〳〵と吹通ふて居る、折節何くよりか木の葉がパラ〳〵と飛び來て、碎くる波に躍つて居るから、忽ち繪心にかられ、寒さ

をも忘れて暫く見とれて居る油斷に、辛うじて得たる繪絹を一枚無殘にも風に奪はれて、アレよと思ふ間もあらばこそ波の上を高く低く舞うて、チラ〳〵と手にも取れぬ、又捨てられぬ風情があるので、殘りの一枚をも好奇心に任して、惜氣なく吹飛させると、更に又一點の興味があるので、いつの間にか妙圖の腹案が出來た、これが後に玉蘭唯一の大作となつた、やがて時經て氣が付いて宅には良人が待兼ねて居るであらうといふにも、風に飛したる繪絹が、大切な品であるといふことにも氣が付いた、しかしもはや後の祭りで、詮方なく手ぶらで我家に歸つた、すると大雅堂は果して妻君の歸りを待ち兼て居る、『この寒いのに御苦勞であつた』と、そこは夫婦の情合で、いたはると、玉蘭は『さう仰られては消えて仕舞ひたうござります、大切な絹地、ツイ五條の橋の上で風にさらはれ其の飛さまのおもしろさに、うつかり惜しい事をしました、どうぞ御勘辨を』と、思ひも掛けぬ仕末、流石の大雅堂も大へこみにへこみたれど、それ位の風流心がなくては、到底名人にはなれるものではないと、疲我慢ながら思ひ返し、『さうであつたか』とばかり、又絹地の算段に取かゝるに、玉蘭も氣の毒になりて、『まさかの時にと思ふて、仕舞うて置いたお金がござります、いま一走り行つて參りますから、どうぞお待下さりませ』と、又仕度して出やうとするので、大雅堂は呼びとめ『外ならぬ御所の書であるから、何うも打捨て置く譯にはゆかぬ、さう云ふ器用な金があるのなら、暫時借用して、こんどは己が行つて來やう』と、夫子自ら出馬して繪絹を買求め、例の五條の橋を通行すると、相變らず加茂の川風、の得意げに行人袂を飜へして居る、大雅堂も知らず識らず好奇心が出で二枚の内一枚は餘計な物と試に風に與へて見ると、玉蘭の風流心を誘うたも無理はない、猶一枚をと思ふたのがフト心附いて無事に新年河の名畫となつた、

▽懸賞小說は次號より順次發表すべし△

松浦潟

[illegible]袖女史

上

江海に望んで高きに立てる石あれば呼んで望夫石と稱ふる例多しとかや、こもまた此たぐひにやあるらん、一年漁村に夏知らぬ夏おくりける夕、漫歩して、こゝの望夫石と稱へふりたる巌の傍に憩ひたり、此望夫石の由來知らまほしと思ふ折しも、白髪婆娑たる翁に出遇ひぬ、就て事を問ふに、翁は斯くぞ答へける、

我名は狹山十郎、此石に少なからぬゆかりあり、事は古にたり、語らふ我もはや老の身とはなりにけるよ、げにや亡國の遺臣ほど世に口惜きものはあらじ、想ひ出づるさへ堪へがたきに、さなり今は唯此石の名のみ事を語り出でなんか、

✿　✿　✿　✿　✿

二十三夜の殘月西の出鼻に光なく、曉天海面に稍白めど、此濱十里磯馴松の外に、碎くる波に和せん音もなし、苫屋の夢もなほ靜かなる頃、岩間の千鳥も思ひよらずや、濱風に衣吹かして此砂路に丈夫二人、心せぬ歩みもこゝらあたりの浦人とは見えず、「狹山殿、いつまで送りたまふも名殘は同じうこそ」

「げに……」

「昨夕にて語らん程は語りつ、こゝに御身あれば我は思ふまゝに天下を歩み申すぞや、尚も住代の事なにくれと賴みまゐらす、さらば又の日」

「さらばよ、吉見殿、一片の友誼を道の伴侶として」

留まる我は程嬰ならねど杵臼の昔忍ばれつ、こゝの渚を立ちも去らず、君父の爲に灑がん涙こゝに一滴、絞るとすれば吉見帶刀の姿は砂山の陰にかくれて苫屋の軒に立ち初めし煙、大空に入りて末定めなし、

✿　✿　✿　✿　✿

我を知り我心を知りたらんもの、主家に英士乏しからねど、我には唯吉見帶刀のみなりけり、さるからに我もまた彼が胸底をよく知りつ、今朝別れに托されし住代への一書、彼が慘憺の情も此中にやあるらんと思へば、昨日今日と思ひし過去の事も思ひ出さる、住代は、其父不幸に死してより、賢夫人の聞え高かりし帶刀の亡母に養はれし乙女なり、帶刀の父母みまかりし後、帶刀の家に十九の芳紀を迎へぬ、其頃守殿住代を見たまひ、こよなく愛でゝ我にまゐらせよと望みたまへることありしが、帶刀思ふよしありとて親しく守殿に謁しまつりて申す事あり、殿は賢き君にて渡らせたまへば事なく聽かれけるも、げに世は小人の住家ぞ多き、「こは帶刀、住代を己が望みてなり、むざと殿の仰せ聞かれまじきよ」といつか藩中斗背の語り草となりけり、之を聞いて先づ怒りしものは我なりき、憎くや小人腹、我友の廉潔知りてか、嫉てか、さるにても我友などていさゝか

の證明も立てずや、立てられし名は武士の此上なき恥辱ぞ、殿は『なしき若者に傷つくるな』と聞捨にし賜へど、この我を濟まされず、煮えし腸其前に曝さばやと帶刀を訪づれたり、
帶刀の靜かなる言葉に我は我言はづかしく、『無從の辯解ぞ、殿は我心知りて御座するに』と、微笑れし折は不思議にも胸安く、小人のかごとに凝せし筋弛み、煮えし心に風薫らしぬ、
此時よりぞ我は心に思ひ定むるふしあり、守の殿にも願ぎまつらんと待つも暫しや、不時の災に今亡國の臣とはなりけり、

下

漁村の春　今日は一つ名殘なり、網引する聲も霞の奥にやひそむらん、こゝ磯より三町も隔てたれば、寄せてはかへす波の音も靜けく西に小高き丘あれば、茜さす夕陽を遮りて、燈かゝぐることも早かり此山陰の草の屋に片敷く袖に孤臣が涙、哀れは獨り秋の夜に窓にうつ雨の音のみかは、君を思ひ、友を懐へば、胸の熱血も凍りやすらむ、鍛へし骨も碎かれて、今昔の感今宵はふかゝり、互の談論に膝たゝき、意氣に煽りしきのふの燈火は、同じ光をてらせども、一間は闃として音もなし、人なきかと見れば障子にうつる二人の影、
住代は今しも讀み終れる文を取つて傍に置き、端然として座せる姿ゆかしく、火影にそむけし眼に露か雫か光り添ふたり、我も乙女の、心推はかりて、暫しは共に默せしが、
『吉見殿の胸底讀まれてか』
乙女はなほも無言なりしが、
『恥しき……今ぞ始めて、吉見樣の御胸底、養ひ賜はりし御恩は高く斯くまでとは知らいで、さても我身の愚かさに、人の噂を眞に受けて、歎ひ參らせては嫌はしく、唯身を避けて仕へまつらんことも缺ぎ、厚き御教も僻める耳には、唯冷やかに聞ながして、……今も御言葉と此御文を見まゐらせずば、所詮深き御心をいかで、今は申すも、此文見そなはして、
文は唯住代が父母の事、帶刀の家に養はれし事、父の遺命、其他二三の教訓、住代の爲にとて帶刀の遺したるなり、さては帶刀はものいふよ、知れりと思ひしは我は知らずよ　温厚の君子とのみ見し我眼は中々に深き胸底まではとゞかざりけり、俠膽、廉潔君の馬前の塵とならんこと、此のみはよも帶刀に劣らじと思ひし我ぞ恥しき、我を諭せる温容に此の鋭き光りはいづこぞ、
西なる岡に巖あり、巖の下に窟穴あり、梢は幾たびか緑すれども吉見の影は見えず、眞帆片帆西に東に横ぎれど帶刀は來らず、住代は常に此丘に登る、あはれ望まんとにあらず、寂けき窟穴の中に默想する姿は不動、靜かに見上ぐる巖に月落ちて、心の泉にうつれるは誰ぞ、さては我思へるふし成らずして成れるか、

✿　✿　✿　✿　✿

此巖望夫石ぞと翁の聲の絶ゆると思へば、身は望夫石下の一夢より覺めぬ、波にくだけし夕陽もいつか跡なく、濱風歌ふ松が枝に半輪の月白し、



東西の繪畫

子爵　秋元興朝

今繪畫を製作しつゝある人に、舊來の流派に從つて之を描き現はす者と、歐羅巴の學術を聊か應用して光線とか遠近とか云ふものを加へて描いて居る者とがある。先づ舊來の方法に從つて描くと云ふことに就いて考へて見ると、玆には所謂巨勢と土佐派とは姑らく措いて問はぬことにして、周文以下の流派に就いて言つて見ると、周文雪舟の如きは實に足利時代の大家で、其描いた畫は今に至つて皆、人の珍重する所であり、實に其時代を代表したる畫家であることは決して疑を容るべからざるものである。然し其方法に至つては如何にも單純で、一種の好味がないとは決して云はれぬが、今日の進んだ世の美術思想をあれだけの方法で描現はすと云ふことは到底困難であらう、して見ると周文、雪舟、探幽の如き畫法に則つては今日以後大なる進歩を見ることは、殆ど出來ない話であらうと思ふ。

又彼れの長を採り此れの短を補ふと云ふ議論の下に纔に西洋流の遠近、光線位を參酌して居るものがあるが、それも學識の足らざる所から、動ともすると光線の取方が學術的で無かつたりなどして居る。さう云ふ手段を以て畫法を改良しやうと掛らば、尙以て面白くないやうになるであらうと思はれる。

然らばどうしたら宜からうか、どうしても歐羅巴の學術と、日本の古來有り來りの繪畫の描法とは根本的に一致すべからざるものであらうか、又は精細に之を取調べたらば、隨分調和が出來るものであるかと云ふことが、將來繪畫の改良を計る上に於て、先づ研究すべき順序であらうと思ふ。而して其研究の

結果は十中の八九到底調和の見込がないと云ふことに歸着するであらうと思ふ。果してさうであるならば、如何なる方法を採らば宜からうか、日本在來の周文、雪舟、探幽、光琳、應擧、南宗畫等の中で各々其長所と爲す所を調和して、一の日本畫と云ふものを作出して、それで學術界の進歩したる今日の美術思想を描現はすことが出來るかと云はゞ、それも餘程難かしい。さうして見ると殘る方法は、全然歐羅巴流を採用すると云ふより外、仕方がないと思はれる。

然し舊來の日本畫も、何とかして遺して置きたいと云ふやうな考もあるならば、水墨畫即ち墨畫と云ふものを、水彩畫の一部として置いたらどうかと云ふ考を持て居る。着色畫は着色と云ふと同時に必ず寫生と云ふことが幾分か其中に含まれて居るものと考へられる。然し墨畫と云ふと、世の中に黒い山とか黒い水とか云ふものが天然にある筈がないのであるから寫生と云ふ意味は有たなくなると思ふ。斯の如きものに其精神が幾分か類した描法が歐羅巴にもあると云ふことを聞いて居るが、日本の此の墨畫の如く全く寫生を離れたものはなからうと思ふ。して見ると此れは眞に理想的の繪畫で、畫家の精神と筆力と丈けで描現はす特種の方法と思ふ。故に日本畫として是非存して置きたいと云ふならば、水彩畫の一部として、墨畫を保存する外はないと考へる。墨畫の特色を喩へて云つて見ると、或外國人の評に日本には完全なる文章にもあらず又詩にもあらざるものが、極簡單なる語句の間に、優美なる思想を言現はす調法なる方法がある。『即ち一と聲は月が鳴いたか郭公』『初雪や犬の足跡梅の花』と云ふやうな類で、是は到底英文なり獨逸文なりで、あれ丈けの短い句の中にあれ丈けの意味を有たして書くことは出來ない、と云ふのを聞いたことがある、墨繪の特色は丁度其通りで、極單純の方法の中に、一種言ふべからざる趣味を有つて居ることは、發句と好一對と考へられる、

さて歐羅巴流をスッカリ用ゐると云ふことは油の繪具に依つて描くとか、其外器械を用ゐるとか、光線の取方、遠近法等の描法を用ゐるとか、凡て學術界の繪畫に關係のあることはスッカリ用ゐると云ふことでなければならぬが、繪畫を描く精神に至つては自ら日本では、日本の精神を以て描くと云ふことにならなければ、何處の國の畫であるか、何處に特色があるか、少しも分らなくなつて、面白くないものにならうと思ふ。

序ながら玆に話して置くのは、或る洋畫家の話に、此頃或る人から依頼されて美人の畫を描いたが、描いて見るとどうも錦繪のやうになつて、日本の嗅味が拔けなくて困る、と云ふて居るのを聞いた、自分の考ではそこが研究の仕處であらうと思ふ、書道にしても支那人の書と、日本人の書とでは同じ王羲之とか顏眞卿とか云ふ書風から出たにしても、各々違つて居るやうである、至つて單純なものであるから殊更意を用ゐて書くのではなからうが、自から人の氣風が違ふから異つて來るのであらうと思ふ、繪畫も如何に歐羅巴の通りの方法を用ゐて描いても、自からそこに自然の相違が起らうと思ふ、此の相違が出て歐羅巴風に行かないと云ふことを前の畫家は頻りに憂へて居るのであつたが、自分の考では其れと反對で相違が出た方が宜いと思ふ、唯だその出方は惡るく出ては困る、能く日本の思想が其間に發顯すれば、それが即ち日本の特色であるから最も好ましいのである。

詰り描く方法は西洋のに依るけれども、描く精神は日本の精神に依ると云ふのが、本旨でなければならぬと思ふ、卽ち西洋の方法を日本人がマスターリングするので、日本人が西洋の方法にマスターリングされるのでないと云ふやうにならなければいけまいと思ふ、之を喩へて見ると恰も日本の陸海軍の如きものである、陸軍は獨逸式に依り、海軍は英吉利式に則つて居る、さうして砲銃彈薬の類に至るまで、一として外國の方法を採らぬものはなく、其採るに

當つては最も好いものを撰んで居るが、偖戰爭に際しては大將より兵卒に至るまで、皆大和魂を基として、是等の文明の利器を應用するのである、而して日本人は戰爭に於て甚だ勇敢であると云ふことを日清戰爭、北清事件、日露戰爭等に於て賞せられて居るが、丁度それと同樣に畫を描くにも、繪具其他學術の應用等は、ソックリ歐州風に倣つて、さうして日本の精神を以て、マスターリングしづゝ進んで行つたならば、一の日本の優美なる美術思想を自然に發揮して歐州のものも及ぶべからざる進境に達し、日本が勇武に於て優れたると均しく、美術に於ても世界に優れたる國であると云ふ賞讃を博するに至るであらふと思ふ。

女子と能樂

池内如水

維新前の能樂は、徳川幕府の御用式樂といふことであつたから、當時男尊女卑の折柄とて、女子は能樂に近づく可きものでないといふ風で、親しく其の技藝を修むることが出來なんだのみならず、甚しきに至つては、之を見物することすら隨意ならぬといふ位のものであつた、維新後既に四十年近くも經つた今日でも、まだ其の餘習が殘つて居つて、舞臺へ、婦女子を登すといふことはせぬといふことになつて居る、是は能樂其のものが、保守的のものであるから、從つて其の道の人にも頑固な人が多く、容易に習慣の打破されぬといふが、重なる原因には相違ないが、又一つには婦女子の方に於て大いに自ら顧みられねばならぬことが無いでもない、

從來婦女子の能樂に關係されし實際を見るに、其の初歩の時に於ては、概して男子程不器用な人はなく或る程度迄の進歩は、必ず男子に先んじて進まれるが、先づ一通り間に合ふといふ位の程度に達した以上是れからが、愈々眞正の技藝ともいふべき場合に進み、人に聞かせても面白いと云ふ位の度合になつ

て來ると、どうも男子に乗り越されてしまつて進歩の度が甚だ遅鈍になつて來る、是は啻に能樂のみでなく、從來婦女子當然の職としてゐる、裁縫とか、音曲とか云ふ種類のものでも、精密の度に及んでは常に男子に讓つて居る樣である、是は日本婦女の天性として結局男子に及ばぬのであるか、習慣の然らしむる所であるか、大いに講究すべき問題であつて又大々的婦女の奮起されねばならぬ所であらうと思ふ、能藝に於ても一度婦女子の之に參加すること、なりたる上は、駸々として其の技能が進歩し、忽ち男子に卓越すると云ふ時は、女子をして舞臺へ登らしめぬなどいふことの出來ぬは勿論、舞臺を反つて女子の專領に歸せしむるも易々たる事であるのだ。

西洋の婦人の事を聞いて見ると、文學とか美術とかいふことには、能く通して居る樣子で、苟も交際社會に立つものに、文學美術の話の出來ぬ人はないといふことです、過日も亞米利加の婦人七名が、喜多催しの能を見に來たから、或人を介して其の所感を聞いて見ると、詞が通せず、譯したものが無いから詳しいことは分らぬが、第一其の大體の趣きが、希臘古代の樂に似寄つて居るから、東西遙かに隔りし地に於て、舞臺の上に其の軌を一つにして居ると云ふ點が面白く、第二には何となく靜肅莊重の趣きが在つて、心が清々とし、餘り體を動かさずして、呼吸を詰めて舞ふ所に至極良い感じがして面白いといふことで、終始靜肅に觀覽し、中には携ふる鉛筆を以て、其の寫生をやつて居た人もあつたが、日本の能講師が恥かし位な繪が出來て居つた、

能の起原に就きては、數々說があつて一定して居らぬが、各種の技藝の粹を集めて大成したる日本的舞樂であつて、今日世上に行はれて居る歌舞伎は勿論各種の歌舞音曲の起礎であると云ふことは誰人も疑を容れぬ所である、然るに日本の婦女子に於て西洋婦人と交際し、其の西洋婦人から、貴國には能といふ高尚な舞樂があつて誠に結構なものだと拜見するがわれは何時の時代から行はれしもので、どう云ふ

經歷があり、如何に變遷して居るか、能樂といふものゝ美は果して如何なる所に於て感受するか、何々といふ能はどう云ふ意味のものであるか、能と狂言の關係はどうであるかなど問はれた時には如何なる返答をさるゝであらうぞ、恐らく大略の答へも出來ぬ樣なことではあるまいか、西洋風の戀愛小說に就ては、お話が出來るか、日本固有の舞樂たる能の事は一向に存せぬと申して良い譯であらうか、此の邊のことも少しは注意して頂きたいと思ふ。

能の舞の手は、總て武術から出て居るのであつて、能樂と大和魂といふことには餘程深い關係を持つて居る、日露戰爭の結果、日本の武士道といふことは、世界の注意を惹いたが、其の武士道と能樂には離る可らざる關係があつて、敎育と音樂の關係上、後來必ず大いに世人の注意を惹く問題となることゝ信じて居る。

子女の敎育といふことに就て大任を受けて居る婦女の方々は、亦此の大切なる武士道と云ふことにも大いなる注意を要することであるから、其方の側から考へても、能樂といふことには後來最も意を止めるゝが必要であらうと思ふ。

又唯一個の慰みといふ方からいふても、現今行はるゝ所の芝居とか、俗曲とかいふ類は、兎角淫逸の風に傾いて居て、貴婦人、令孃達の觀覽物に適せぬものが多い、能樂は最も高尙なる理想美のもので、露程も淫猥の氣を含んで居らぬから、品性涵養といふ上からいふても、必要な觀覽物ではあるまいか、婦女敎育に從事せらるゝ方の御意見を伺ふのである。

敎育と音樂

東儀鐵笛

德川氏時代

近代の德川氏に至つては如何かと云ふに、應仁以後は戰鬪相次ぎ、世は亂れて麻の如く、人心騷擾とし

て、爲に音樂も衰頽して地に墜ちた、而して此時に於ては、古より朝廷の御儀式に用ゐる處の樂さへ衰へて了うた、否此頃は音樂のみならず、毎年行はるる御式すら廢せられた位故、音樂の衰頽は元より思ひ遣られる、後織田信長、豐臣秀吉等交出で、遂に德川家康が出で、天下を一統してより、四海殆ど無事に歸し、德川氏が明治維新の前まで、大凡三百年間の太平の基礎を作つた、

德川氏時代の音樂は、前と違つて非常に能く分る、之を三つに區別して御話をしやうと思ひます、又前に申し落したことを玆に補ひますが、足利氏時代以前は上層の音樂と、下層の音樂とは異つて居つたかどうだか、或は異つて居つたかも知れませぬが、足利氏以前の俗樂と云ふ樣なものは今日に傳つて居りませぬから、詳しく調べることが出來ません、又その社會の上層の音樂も、一種であつたか、或は何種もあつたかは解りませぬ、けれども德川氏時代の音樂は今日まで傳つて居りますから、音樂の數も上層下層の區別も大抵解ります、

さて德川時代に至つて、先づ民間は俗樂、上流社會は雅樂、或は能を致した、而して雅樂は何う云ふ方で用ひるかと云ふに、上は天子を始め奉り、京都の禁裡の官人、並にそれに關係の有る其の以下の者であつた、是は從來應仁以前に於ても皆爾うであつた其證據には今でも宮中に笠置の笛と云ふ御名の御笛がある、是は後醍醐天皇が御愛翫になつたもので、恐れ多くも笠置に行幸の時にも、是を御携へになつた、然るに申すも恐れ多い事ながら、其時はしなく御落馬になつたので此御笛も破れて了うたが、今御倉にありますのはその破れたる笛を元の如くに繼ぎ直したるもので、非常に立派なものである、此御事を思ふに、後醍醐天皇があの亂世の中に於ても、音樂を遊ばしたと云ふことが解る、其風習が引續いて德川氏時代まで、天子は申すに及ばず、公卿以下の者も皆音樂を學ばれたのである、

武家方では如何なる音樂を用ひたるか、即ち能を以

て式樂としたけれども、後に議論が起つて來たので、諸侯方でも隨分雅樂を用ゐる樣になつた、民間は無論俗樂のみである、

ソコで官家では雅樂を以て敎育の一部分に用ひ、又武家方で能を用ひたのも、やはり遊興に用ひたばかりでなく、敎育的に用ひた、官家の方で申すと、音樂の嗜み無きものは殆ど官家の方の人で無いかの樣に言つたのである、其有樣は足利氏前と同じで、つまり天子が遊ばす爲に、皆遣らなければならぬと云ふことに爲つて居つたのである、ソレから武家方の能をしたのは、能役者と云ふ者が有つて、務めたに違ひないが、能役者以外の者が樂みに、或は樂みばかりでなく、敎育上に用ひたと云ふことに就て、最も見易き例は寺子屋で謠を敎へたのは事實である、けれども、是は必ずしも敎へたのではない、今の言葉でいふと、音樂は隨意科のやうになつて居つたのである、ソレであるから、今でも頭の禿げた人に會うと、大槪謠曲の一節位は知つて居る、是は即ち武家の方で、德川氏時代に隨意科ながら、敎育の一部分に音樂の用ひられた事が解る、此事はまた詳細には調べぬから、此位の事に止めて置く、ソレで武家方では、始めは能のみを用ひて居つた處が、彼の荻生徂徠、新井白石等の諸大家が出て、德性を涵養する側からして、能樂より雅樂の方が非常に善い音樂であると云ふことを唱へたので、諸侯方も樂役と云ふものを置いて、雅樂を習うた、德川氏の如きも、初めには無かつたが、後には紅葉山に樂人を置いて京都よりわざ〳〵名人を聘して習うた、殊に水戶家などは、此雅樂と云ふものが充分盛に擴がつた、

此時に當つて女子の敎育はどう云ふ工合で有つたか是は無論申すまでもなく、今の學校的の敎育ではない、故に完全不完全を論ずる事は出來ぬけれども、要するに音樂と云ふものが、敎育の中に在つたと云ふことが解る、ソレは何う云ふ譯かと云ふに、裁縫は申すに及ばず、糸竹茶の湯挿花等は、德川氏時代の女の是非遣らなければならないものであつた、即

ち女子の敎育の中に、糸竹の道と云ふことがあつたのは、從前の通り女子の敎育の一部分に、音樂の有つたと云ふことを知る事が出來る、而して其種類はどう云ふものかと云ふに、一般には先づ琴、中には雅樂をした人も、能をしたものもあらうけれども、一般には琴が多いやうであつた、併しながら極下層になればいろ／＼有らうが、其事は省く、ソレと云ふものは、德川氏時代には、下層の社會には殆ど全く敎育は無かつた、敎育を受くるものは、武家以上の者で、立派な武士、立派な婦人にならうと云ふので、敎育を受けたので、其以下は全然放擲して更に顧るものが無かつた、而して士分以上の敎育は、男子も女子も槪してなか／＼嚴重で、音樂としては能琴等が其中に這入つて居つた、而して是は遊藝と云ふ側では無い、遊藝といへば三絃でも彈ひて大騷ぎをするのを云ふ、士分以上はサウ云ふ側から音樂を習はせたものではない、ソレから又演劇は藝に傾いて居る爲に、士分以上即ち帶刀せるものは、成るべく避けて見ない方が宜いと云ふことになつて居つた殊に徂徠先生の如きは、演劇は避けなければならない、音樂を學ぶには必ず敎育的のものでなければならないと言はれた、

○嫁入道具とピアノ　音樂流行熱は次第に其度を高めつゝあるが、其れかあらぬか、近來嫁入道具として、ピアノをも其數に加ふる人多く、曩には石倉學士の新婦の之を持來るあり、津輕伯の令孃の婚儀にも此ピアノ亦嫁入道具の數に入り、其他昨年十一月以後今日に至る間、重なる人々の婚禮にピアノの簞笥、長持と相交はりて行るゝもの既に十數組に及べりといふ

○學生間の舞踏流行　昨今男女學生の間に舞踏を研究する者少なからず、流行の徵を示しつゝある有樣なるが、市內に在る研究會を擧れば神田淡路町舞踏同志會の江原素六氏を會頭とし、齋藤高師教授主宰の下に在るを首めとし、女子大學內の舞踏會大森小學校內敎員有志舞踏會本鄉眞砂町代用習性小學校內の同研究會神田錦町日本音樂學校の舞踏會、其他女學校等の學生の處々に集合して研究に餘念なきあり、從つて舞踏に關する著書等は非常の賣行なりと、喜ぶべきとか、悲むべきことか。

女鑑新聞

紀元二千五百六十五年　西暦一千九百四年　明治三十九年三月一日木曜日　きのえたつ　清暦光緒三十一年

▼投書　この新聞誌面にも和歌俳句短文など歡迎す、續々おもしろき作を投稿あれ

▽定價　女鑑の附物にて女鑑の讀者には自然ロハで見らるゝ、譯也
▽廣告　一行十五字詰金二十錢にして百五に限る

發行人　紫式部　編輯人　清少納言　印刷人　赤染衞門

發行所　東京築地　株式會社國光社

論説

玩具の改善

玩具製造の有望なること、及び改良の必要に就ては、元來邦人は手工業に長ずるを以て、精巧なる物を製作し得れども、從來廉價の物のみを作りたる習慣自から性をなして、歐米向に適せざるもの多し、故に今後の輸出玩具は、單に兒童のみを目的とせず、大人の賞玩をも目的となして、一種美術品を製造する必要あらん、又玩具の堅牢なるは、技術の精巧と相待て一層の價値を發揮するものなれば、之が爲に多少の費用を増加するも、輸出を減少せざるは勿論、却つて今日に數倍する需要を喚起するに至るべし、次に玩具を實用的ならしむるは、主として教育の方面にあり、例ば船舶、汽車、馬車、自轉車其他建物等は、工藝上の庶物示教となり、古今英雄の像は修身教育の材料となる、此點に於て日本の玩具は誤魔化し物多く、且つ非實用的なるを以て、歐米人中には日本品の如き玩具は、兒童の堅實なる精神を失却せしむべしと極言する者あり、此れ製造者の一考を要する所ならん、又玩具に紀念的性質を加味するは宮島、江島、日光等名所舊跡の如きを玩具の模型とせば、一たび此地に遊ぶもの其土産の細工品によりて永久紀念となすの傾向あるべし、單に神社佛閣に限らず現代英雄の肖像、或は都市、温泉場、海水浴場等皆其土地特有の紀念たるべき玩具は、其趣味と實益とに於て、大に面目を一進するものあらん、我國の如き天然の景勝に富み、且つ天賦の手工的技倆を以てせば、決して歐米諸國の製品に讓る所なかるべしと信ず、改善せよ、改良せよ、

文苑

折にふれて　中山　幸子

あはれさよ人の心をうつしなば月も霞みて見ゆるなるらん

心せよ月にむらくも花に風おもふまゝにはならぬ世の中

こし方を思出せばなか〳〵にうきことの多くもあるかなめ

柳

青やぎのいとあたゝかき春の日の緑色添ふ空ののどけさ

青柳の糸よりながき春の日に繰かへしつゝ歌よみにけり

春風の柳の糸のむすぼれをとくかと見ればまたも結びぬ

うら〳〵と霞ながるゝ里川の岸のやなぎに春風ぞふく

水にうつる柳のいともおもしろく風のまに〳〵髪あらひつゝ

隅田川堤のやなぎ打たれておのが姿を水にうつしぬ

里川のながれにそひし青柳のいとうらゝかに見ゆる春かな



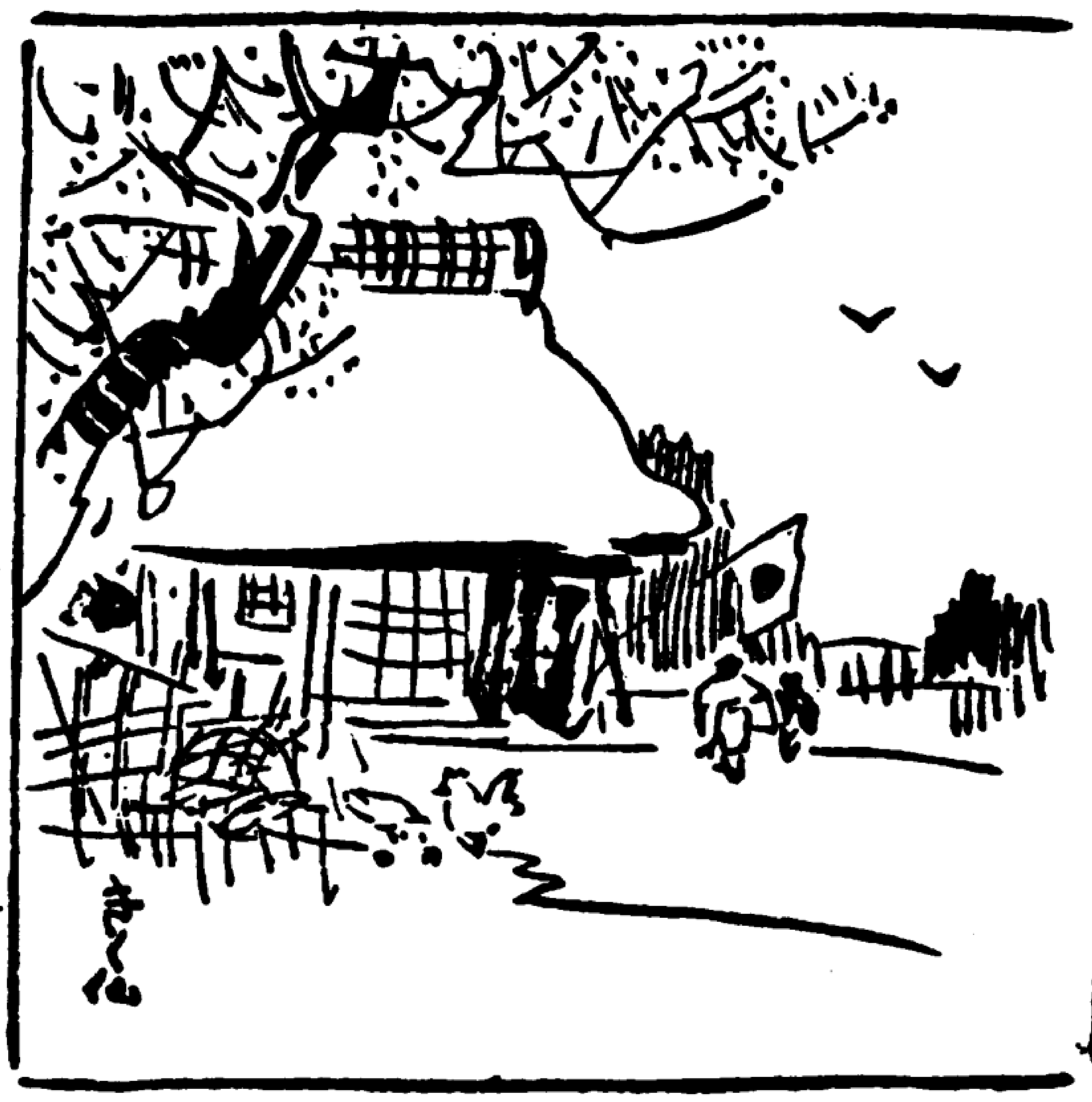
雜報

今代少女の理想

神田今川小路三丁目四番地廣瀬武子の三女芳子(十二)といふは目下同區西小川小學校尋常科第四學年生にて、怜悧なる少女なるが、母武子は大日本婦人弘道會の幹事をも勤め、子女の教育に最も力を注ぎ居れり、扨て此の頃愛女芳子が玩弄紙幣六萬三千八百七十五圓(一葉五厘の物を切ると六萬三千餘となる)を買ひ來れるを見て、武子は芳子に向ひ、和女は其のお金を什麼いふことに使用せんと思ふぞと尋れたるに、少女は良久しく思案しつゝ鉛筆を執りて、

一金六萬三千八百七十五圓也
一金五萬圓　銀行あづけ
一金一萬圓　生命ほけん
一金二千九百圓　雜品食物
一金百圓　じぜん金
一金八百圓　よそへやる物
一金七十五圓　學つき

と數へ上げたるが、右の中他處へやる品物は贈物に要するもの、及び交際費にて、學つきとは樂器の意、百圓の慈善金は悉く東北の饑饉地へ贈るつもり、又七十五圓にてピヤノを買ふとは、何處までも面白く、又以て今代少女の理想として見る可きか、因に記す少女の姉美津子(十四)は、東亞女學校に通學中にて、件の芳子は將來音樂家たらんと言ひ居るよし、



◎四代に仕へし忠婢　神田塗師町四番地金物問屋三谷長三郎方の下婢せん(六五)は、千住の生れの者なるが、十二歳の時仲働きに住込み、爾來主家の代は四代迄替りたれど、せんの忠勤は聊かも異りなく、五十年間一日の如く、曾て夫を持たず、給金の餘りを以て生家を扶助するを樂みとし居るは、時節柄珍らしき美談なり、

◎次號より、本誌の面目大に新たまると同時に、この女鑑新聞も大々的珍趣味をもてるものとすべし、

手輕の料理

◎手輕の茶菓子　乾柿の種子を拔去て、よく水洗ひして、漬物屋にいつでもある千枚漬と紫蘇の葉に包んで、二三分ほどの小口切にす

◎一種の午蒡料理　成るたけ若き午蒡の皮をこさげ去り、細かに庖丁して水に投じ、灰拔をして沸湯へ投じて茹で、淡味に下煮をして煎胡麻に砂糖醬油をすり交ぜ、深皿か猪口へ盛るなり、

◎タナゴの料理　いづれにしても、、、、はらわたを出す方よし、鮒のやうに甘露煮にしてよけれど、古生姜薄切を入れて、味淋と醬油で氣永に煮れば結構である、又天麩羅に揚げて、芹、椎茸などの澄汁に入れるのも可し、

◎鯉のうろこ汁　さし身庖丁で皮ごとそぎとり、それを八丁味噌か何かの味噌汁で煮込むのであるが、これは一種の物數奇で、筒切に胡椒を加へたやうには行かぬ、

論説

米國婦人の心得方

◎其の一　能く己を制する事をつとめ、柔和にして忍耐なるべし、
◎其の二　不快、困難、病氣等の折は、祈禱の力を以て之を和らげ其不幸と其思ひ誤りとを避くるやう氣を注けよ、
◎其の三　よく〱考へたる上ならでは努め〱憤怒の言葉と行ひをあらはすことなかれ、
◎其の四　物云ふことは實に有益なれども、云はぬは云ふに優ることあるをも忘るべからず、
◎其の五　他人に分外の所望をなすなかれ、何事につけ己れとおもひて、他人にやさしくせよ、
◎其の六　角立ちてにが〱しき音聲を出すことなかれ、汝に物爭ひて端を與ふる原因なればなり、
◎其の七　何事によらず、人より先に不同意の色を現はすこと勿れ
◎其の八　やさしき音聲もて、物いふやう氣を注けよ、
◎其の九　折あらば何時にても心よげに語れ、
◎其の十　能く人々の性質を察して、其困難を見し折は、いかに些細の事なりとも、充分の思ひやりを表すべし、
◎其の十一　他人を樂ましむる事柄なれば、如何に小事なりといへども粗忽にすべからず、
◎其の十二　にが〱しき風情は努めゆめ人に見することなかれ、
◎其の十三　何事につけ我身を謙りて、善事はすべて他人に讓るやう氣を注よ、
◎其の十四　私事に立ちはさまる人は遠けよ、
◎其の十五　善事と知らば自ら行ふことを勉めよ、

感ずべき兒童

栃木縣宇都宮尋常小學東校の第三學年渡邊友次郎は同市小袋町の水車業友吉の二男なるが、性質從順孝悌にして、正直勤勉同情等の諸徳に富み、家庭にありては、父母の命に從び、能く家業の手助をなし子守、ランプの掃除、點火及び家屋内外の掃除朝飯の炊事、又日曜日には雑巾掛膳椀皿鉢等より、勝手道具に至るまで、洗濯するを以て勤とし、殊に朝飯の炊事の如きは、毎日晩食前米を洗ひ置きて、翌朝未明に起出で飯を炊き、汁を煮、香の物を出し、喫飯の準備をなす事、九歳の時より十一歳の今日に至るまで、未だ曾て一日も休みたることなく、其行爲誠に奇特なるのみならず、一般兒童の好模範たるを以て、同校の内規に照し去る十一日の紀元節の式後、其善行表彰式を擧行したりとぞ、

◎束髪かんざしの製造者　百五十人あり、組合の設ありて、競爭濫賣する等なしと、無風流の花かんざしを浮世物と稱する由

流行のいろ〱

▽廂髪用かんざし　白金製ダイヤ眞珠入りの雪の花、花唐草、新年の河、長壽等の圖を彫刻せる温雅で華麗なるもの歡迎さるゝも、彫刻は密なるよりはあつさりとしたる方人氣あり、價十八圓以上卅八圓
▽櫛とかんざし　本鼈甲、金地蒔繪の外、螺鈿の一種なる貝細工模樣金蒔繪研出しは、從來の螺貝芝山入等より數等立優れる粋なるもの嗜好さるゝ傾きあり、價二十五圓内外
▽ホーア　の流行は頂天に達したるやを覺えしむ、目下實行の最も多きは、駝鳥の白毛、又は白黒取交ぜ、純黒、茶白鼠、茶の六種にして、價は一本十圓内外、其他、鷺、鷲、眞鶴の羽製等の如きものは、十三四圓より二十五圓、

音樂

日本人と音樂趣味

鳥居龍燄氏談

◎日本音樂と西洋音樂との比較に就ては、何れも特長があるでせうけれど私は音律上到底角力にならまいと思ふのです、將來は必ずピアノとかヴアイオリンと云ふ樣な洋樂に勝を制されて、琴だの三味だのは、ホンの一部の骨董品として紀念さるゝ位になると信ずるだから、此際絶對に洋樂の趣味を家庭に入れて、出來るだけハイカラ化して差支へなきのみならずそれで丁度日本人の頭に音樂なるものゝ味が解かる樣になると同時に、或は日本音樂の特長と、洋樂の長處とが折衷して、邦人に適當な固有音樂が出來上るようになれると思はる

◎現今の日本に於ける趣味の程度は、上流中流の社會よりも、却て下等社會の方が遙かに無意識の發達を遂げて居る、現に中流以上の家庭では、娘が嫁入前にでもなれば、琴の一曲位は知らでは叶はぬと云ふので、單に形式一片に師匠に就かせはするが、これはホンの嫁入道具の資格の一として、景物にやらせるにすぎぬのだ、此に反して下流社會は、假令裏屋住居でも亭主が晩酌の一杯機嫌で、鼻歌の一も唸れば、女房が調子を和はして、爪彈をやるとか、又は女房が清元の師匠なら、亭主が踊の師匠で、お互にアノ調子が上り過ぎたとか、アノ振が三味に乘らぬとか云ふ樣に、兎に角趣味だけは解し合つて居る、畢竟役者と藝者などが、重に夫婦となる原因は、趣味の一致から來たことである、然るに上流社會の家庭を見ると、亭主が毎日如何なる仕事をして居るかと云ふことすら知らぬ細君が多い位だから、趣味の問題などに餘裕のあらう筈がない

評　鳥居先生も一般の論者と其罪を憎み其人をも惜む人なり日本音樂は下流の人の手に委ねおるを以て、勢ひ下等臭くなるのにて、今少し上流社會に用ひ、日本音樂の美を向上發展せしめたいものである、

薄茶の點て方

茶道利休流家元　黒澤宗月

濃茶の手前終りて主客ともに暫く話し合ひ、よき頃を見計ひ薄茶を進む、此時は、主人まづ勝手口をあけて出で、水指を右の脇におき挨拶す、時に客は總禮にてこれをうく、それより主人は水指を運び、客は小切目におき、亦茶入茶碗を運び、之を大切目におき合せ、次に建水をもちいで、然る後勝手口をしめ、座につき、容貌を直し、柄杓を左にとり、右へ持替へ、蓋置を左にとりて右へ移し、腰の右手の前へおき、柄杓を其上にのせ、柄をひき落す（此時安座の會釋には及ばず）次に左に茶碗をとり、右にて身の前と茶碗の間におく、帛紗を行に捌き、茶入の蓋をふき、（爐縁と建水との間を割りておく）また帛紗を眞に捌き、茶杓を右の手にとり、帛紗にて行に（中のひなか則ち節の處より露先まで二へん拭ひ、茶杓の裏を返し、節より露先まで拭ひ、飛白形の處にて返し、表を出し柄のところまで拭きさぐ）拭き茶入をかけ、茶筅をとり、茶入をおき合せ、柄杓をとり、帛紗を右に移し、左へ柄杓を構へ、帛紗にて釜の蓋をしめ、蓋の上をゆの字に拭ひ、とりあげ、露をきり、蓋おきへのせ帛紗を腰につけ、茶巾を釜の蓋へのせ、柄杓を右の手へかへして、湯を汲み、茶碗へ入れ、柄杓を釜にかけ、茶筅をとり、常の如く三度茶筅とうしをなし、滌ぎて露をきり、元の座におき、茶碗を右にとり、左の掌にのせ、滌ぎ、茶巾をとり、湯をあけ、茶巾にて三ふき半に廻りをふき、中をゆの字にふき、其儘前へおき、右にて茶巾を出し、疊み直し、（茶巾の裏を返して四つにをり、又二つに折り、緣をつまみ二つにをるなり）次に右の手にて釜の蓋へ直しおき、手を清め、茶匙をとり左の手にて茶入をとり、茶碗のうち中程まで持出し蓋をとり、右の膝と茶碗の間へおき、茶碗になかばかゝるほどに引きわげ、茶を焗く（ひとすくひ又は二すくひなり）凡そ棗と茶碗とのわきは大棗なれば

小棗の高さほどにわけ、小棗なれば大棗の高さほどにて宜し、さて茶入に葢を爲し、元の座におきつゝ、茶杓をかけ、柄杓をとり、湯を一杯に汲む、よき加減に茶碗へ入れ、殘り湯を釜へかへし、柄杓を釜へかけ茶をたつるものとす、客は主人が茶匙をとりしときに菓子器をとり、二客と自分との間の向ふの疊におき、次客へ勸む、次客はこれを辭す、此に於て上客は菓子器を引寄せ、懷紙を出し菓子をとり、菓子器を次客の間へおき、茶の出るを待つ也、

主人は茶を點て、茶碗を取上げ、左の手に載せ、點工合を一見し、茶碗の表を客の方へ向て環付へ出す、此時上客は主人へ一禮を爲して茶碗をとり、茶碗の表を横へ廻して一口飲み、服加減の挨拶して飲み終り、茶碗の表を主人の方へ向けて返て、主人則ち其茶碗を取り、左の手へのせ、飲口を見て廻し、前におく、此時飲みたる客より挨拶す、主人は之をうけて茶碗へ湯を汲み入れ濺ぐ、次第に右の通りになす、(茶筌の扱を常の如く眞行艸と順になすべし、茶巾は其都度常の如くたゝみなほすべし、末座より茶碗をかへし、菓子器を上客の前へ出せば、上客これをうけとりておく)次に主人は茶碗をとりあげ、見て前におき、湯を汲みいれしとき上客より最早おしまひ下されたし、然し御自服下されたしと挨拶し、菓子器を茶碗の出づる處の下へ出す、此に於て主人は、然らば御相伴致すべしとて、茶巾をとり、湯を流し拭ひ、茶を點て、上座へ出し、今一服如何と挨拶し、客は一統にて最早充分頂戴せりとて辭す、主人然らば御相伴致すべしと挨拶して、茶碗をとりあげ、之をいたゞき、我前におき、菓子をとり、又頂き、もとの座へ出しておき、茶を喫するなり、かくて戴き終り茶碗をもち、座をくり、前におき、湯を汲み、濺ぎ、又前におき、仕舞の挨拶し、水を汲み入れ、茶筌とじをなし、茶碗を右にてとりあげ、左へ移し茶巾をとり、建水へ流し、茶巾を茶碗の中へ入れ、茶を右へかへし前におき、茶筌をとり茶碗の中へしまひ、帛紗を眞に捌き、茶杓を拭ひ、帛紗に

付け、茶を建水の上にて拂ひおとし、又拭ひ直して茶匙を茶碗の上にのせ、帛紗を腰につけ、茶碗を大切目へ割りておき、茶入をとり、茶碗をおき合せ、柄杓を眞にとり、水を釜へ入れ、（一度三度或は五度と半數に入るゝなり）湯返しをなし、露を切り、陰に返して左の手へ持ち、構へて釜の蓋をなす、（此時は手にて蓋をなす）柄杓を右にもちかへ、蓋置へのせ、水指のふたをしめ、（此時客より茶入茶杓等拜見の所望あらば、柄杓をとり、建水の上へのせ、蓋置を柄杓の柄の下へおき、茶入をとり、身の前におき左の手にて茶碗を大切目へ直し、帛紗を行に捌き茶入をとりあげふたを改め、茶入を拭ひ、帛紗を藥指と小指との間に挾み、右の手にて茶入を出し、帛紗を眞にたゝみ、茶杓を卓にふきて出しおき、帛紗は腰にはさむなり（又常の品なれば客より所望するは失禮なり）柄杓蓋置をもち、建水を左にもち、勝手口をあけて出る茶碗を引き、水指を引き、客より茶入茶杓を返すまで通口にて待ち居る、（品客の見樣は濃茶と同じ）勝手口に挨拶をなす、此時客より總禮をなし、薄茶すみたれば客は程よき時分を見計ひ退散すべし、當日は主人も疲れ居るゆゑ、長談等すべからず、是は客に心得ありたきことなり、此外三人以上の客あるときは、重ね茶碗と稱へ茶碗二つにてたてることあるなり、

挿花の話

折柴園主人

挿分と添物

挿分とは同種異樣の花を取り、根を一つになし、上にて二種に分けるやうに挿けるものなり、同類の花にあらざれば挿分とは云はず、添物とは之と反對にして異種の花を傍らに生添ふるなり、

根締と根分

根締とは眞に花なき木を生ける時、草物の花あるものを閑靜に木の根元へあしらふものにて、根分とは

眞の花と添物の花と、根元を二つの株に分けて挿るものなり、

木挾と草挾

三種の花を挿けるに、眞に草物を挿す時は、行草何れかへ草物を遣ふべし、双方を木を遣ふを木挾と云ふ、又眞に木を挿せば、草行のうち何れへか木物を遣ふべし、双方へ木を遣ふを嫌ふこと木挾みに同じこれを草挾と云ふ、

眞添の適合

眞にあしらひて、適合よろしきもの
▽松、竹、梅▽松と長春▽紅葉と小菊▽槇と白菊▽柏と小菊▽柳と水仙▽菊と椿の類▽梅擬と黄菊、白菊▽葉蘭と菊▽梅と金盞花▽桃と山吹▽大繭と河骨燕子花▽木賊と瞿麥、仙翁花▽南天に白菊、水仙▽蒲と水葵、河骨、澤瀉▽秋草七種（白萩、朝顔、女郎花、桔梗、苅萱▽菊▽瞿麥、

眞添の不適合

眞に添ふるに、挿合せのものあり、左の如し、
▽柏と紫苑▽竹と薄▽梅と桃▽松と桃▽南天と竹▽榎と瞿麥▽椿と山茶花▽槇と葉蘭▽萬年靑と鳶尾花
▽赤色と紫色▽枝垂物二品
夜は黄色の花、白と紛ひやすし、故に客を待つ時は挿るべからず

眞添の八嫌

添挿しをなすに、最も嫌ふべきもの八つあり
▽今古　とて一季過ぎたる花（死花）と當季の花（生花）とを併せ挿すこと、
△遠近　とて木は山に擬らへ、草は木に擬ふものなれば、木を前に遣ひ、草を後に挿すこと、
▽三木　とて眞に木を三本挿し、添に草を四本挿す時は『身継死する』と云ふに聞ゆる故、
▽四草　とて五種挿る時、木を一種遣ふて草を四種つかふこと、凡て添挿しには木の數多く、草の數少なかるべきなり、
▽投木　とて添物に主なる花の根を隠すこと、
▽助老　とて木の枝に草を持せかけること、

▽捻り　とて木物を草物と根本を混雜すること、

▽十文字　とて草木の枝入りちがひて、十文字をなすことなり、

指合の草木

食物に喰合せの嫌ある如く、草木にも亦指合あり、菓物の二種、廣葉の二色、枝垂もの二種、白梅に川楊、紅梅に梅擬、藜蘆組の時、しやが、水仙花、杜若、澌、射干、廣葉、やきは笹、いちはつ、一つ葉

松竹梅指合

松は緑を以て賞翫するものなり、故に緑ある花を會釋すべし、緑といふは凡て花咲ける時若芽の出づる類は皆緑なり、これを禁ずべし、又庭松植ありて床に松を生ること差合なし、元來松は千歳の齡を保ち祝ひ壽く群木の長たり、また雪霜を經て色を變せずこれを貞心に比べて貞木と稱す、故に幾所ありと云ふも苦しからず、庭に何程植ありとも差合の遠慮に及ばず、竹を生ける時はあしらひの花に節あるものを插すべからず、くれ竹は節を以て賞するものなり又庭に竹植あるとき床に竹を挿ること苦しからず、竹は松と徳をひとしくして千代を壽ぐものなれば、入千代幾千代と重ねるを賞するなり、梅は紅白を挿合すにいづれも名花なれども色の見切葉を用ひず、此故は白梅は諸木に勝て賞翫の花なり、是に依て見切葉に及ばず、然れども紅白二種ばかり用ひず、是は梅花は葉なき上に一色にもあらず、二種まで合せ生る事なれば、葉ある花をあしらふを傳とす、尤も紅白の花の類は梅にさし合故寒菊を用ゆべし、挿方は白梅を以て心を極む、凡そ陰の口に生る時は、白梅を心に、紅梅を留とし、寒菊を流に用ゆ、又陽の口に生る時は、白梅の心に紅梅の流し寒菊の留と心得べし、又梅を挿るとき匂ひある花を添ふべからず、梅花は匂を賞翫の第一とす、故に同じ香ある花を添ゆるは梅花の香を損ふなり、これによつて堅く禁す、又庭に梅の植ある床に梅を挿ること苦しからず猶以て賞翫なり、此譯は梅花は香を第一に賞翫す、匂ひは所により來るを好む、臭氣風に誘はれて來る

故に伽羅を焚て多く穢れをはらふ、庭に梅あるときは庭へ吹來る穢れを拂ひ、床に梅あるときは座敷の不淨を拂ふが故に梅におきては差支なし、又庭にある梅の匂ひも床に挿けある梅の匂ひもいづれも同じ花の香なれば、双方の匂ひ合して一入に香甚しく賞翫多しといふ、それゆゑに掛物屛風の繪等同花の挿合をいはざるものなり、

世界のいろ〳〵

亞米利加の器械熱

亞米利加では器械熱が社會の上下を壓して居る、其れで或る一人の嬢が、一人の佛蘭西人と結婚せんとして種々の新發明の器械を彼に示した所、其佛蘭西人はサモ遊い顔をして、予は器械師と結婚する事を好まぬと云つた、これは善く亞米利加人と佛蘭西人との意向を代表した話と云はれて居る。

鳥と蟲の速力

鳩は一時間に四十五哩、燕は九十二哩、白嘴鵶は廿五哩を飛び、孰も速度の早い方だが、或時鳩と蜂との競走を賭けた者が有る、十二羽の鳩と十二疋の蜂と三哩の競爭で有つた、然るに最初の蜂は最初の鳩よりも十五秒先きに着き、且全體に於て鳩は全體の蜂に負けた而も其發足の時に蜂が勢揃するに非常にまごついて、鳩よりは少し後れて出たので有る、以て蜂の早い事を證明する、

晴雨計代用の草

金盞草は良き晴雨計なり翌日晴天ならば、本日の三時若くば、四時頃に開き若し雨天ならば數日開かず、

倫敦婦人倶樂部

世界中で婦人倶樂部の最も發達して居るのは倫敦である、今から廿一年前迄は婦人倶樂部などは薬にしたくも無かつたのであるが、此頃になると倫敦市中に三十もあつて、其總會員は無慮二萬以上に達し、男女混合の倶樂部の婦人會員は、一千人位あり、而して文學好きでも、音樂好でも美術好でも政治熱のある友達を倶樂部へ伴れて行つて、一所に食事を仕たり又而會したりするのである、婦人がお轉婆だとか、蓮葉だとか、或は社交的だとか、云はれて居る米國ですら、婦人倶樂部は甚だ少いので、紐育には只一つ會員二百五十人許りのテレデイス、ソロシスと稱する倶樂部がある許りで其外にチカゴに一つヒラデルヒアに一つあるのみで、其外の都會には皆無である、又佛蘭西の巴里でも有力な婦人倶樂部を建てやうと努めて居るが成功しない、獨逸の伯林では漸く此頃手を付けた許りで、成功を論する樣な塲合に立ち至つて居らぬ、比較的質素な英國に、斯樣に倶樂部が發達して居るのは、一つの不思議であるが、此を以て直ちに英國の家庭生活が廢れたと言つて好いであらうか如何であらうか、社會學者の研究が必要であらう、而して此等の婦人倶樂部へ今では男でも出入することが出來るが、初めの中は假令男の出入を許すとしても、試驗的に許して居つたので、或る倶樂部の如きは七歳以上の男兒は一切門に入ることが出來無かつたのである、其れであるから其當時は婦人倶樂部に喫煙室があると、怪しいと言ふことになつて居たが、此頃は男子も公々然と出入することが出來て喫烟室も備へ付けられる樣になつた、就中アレキサンドラ倶樂部の如きは、最も完備したもので立派な食堂もあれば、立派な應接室もあるし、又立派な圖書室もあつて、加之に寢室が八つもある、其會員は總てゞ八百名で、其中の五百名は田舍の貴女であるが、會費は田舍の貴女は年四十圓、倫敦在住會員は五十圓餘だと云ふことだ、

廿世紀之改良劑廣告忘レ賜フナ

●百人が百人効を奏する確實なる專賣藥

醫學博士岡本先生方劑

梅毒の妙藥

第一期全快用一劑送料共五十錢●慢性全快保證藥價金貳圓也▲送料六錢

口中妙藥

治口散

一貼五錢大一貼十錢送料五個迄二錢…

此妙藥は口中のたゞれ○のどのはれ○舌の病○唇の病○はの病等總て口中の病によし

血塊月やくを下すに胃腸を害せず子宮をいためず苦痛なく必ず下る不しぎの妙藥

定價 特製四廻り分金壹圓 同半月分六十錢●七日分卅錢●三日分十五錢 送料各二錢宛

婦人藥王

流經散（りうけいさん）

●月やく止まるを憂ふる方は毎月一の日此藥を用るとなし四ケ月以上の閉止も特別製の方を連服すればず止程

よく下るとなり妙產の後古血又は血塊及び十七八歳にて月やくなき人にても忽ち下るの道にて請合ち折々目まひ物事を分わしき等人の立くらみのぼせ頭痛苦にして氣に用ひて實によくきく藥にして世間わりふれの月ざらひ等と天地の違ひ是をのめば醫者を要せず

陽物發達劑 專門博士の發明藥

強壯快神散（きやうさうかいしんさん）

一劑五拾錢▲二劑壹圓▲卅日分金貳圓▲四十五日分二圓八十錢◎送料一劑分二錢二劑以上各四錢郵券代用不苦

主治（しゆぢ） 効能（こうのう）

房事過度　手淫諸害　神經過敏

遺精　早漏　早老

頭痛　逆上　胃弱

酒害衰弱　陽物無力　不姙娠症

神經腦病　精液欠乏　ヒステリ

記憶減衰　心萎鬱悶　筋肉疲勞

服用三時間後より効力現出す

論より證據老人に一服を與ひ見よ確かに藥効顯われ筋肉等諸機能の發達し言に云れぬ愉快の感情を起すべし

經驗保證

毛生劑

定價 試み金卅錢◎小瓶金五十錢◎大瓶金壹圓 特製貳圓 送料四錢

本劑は多年經驗したる化學的作用のけはいぐすりにして官許を受けたる保證劑なり、

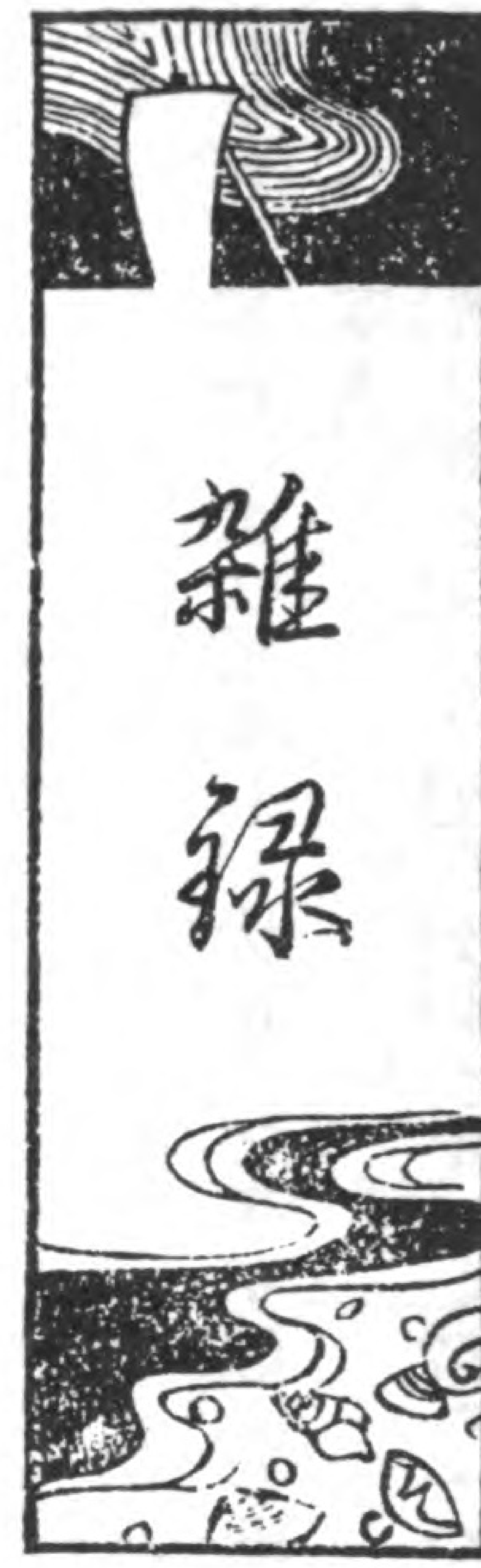
男女下の病の妙藥を專ら發賣す 容體示して注文あれ

目錄呈送

東京神田五軒町一番地 おなじみの元四つ目屋 實順堂

近來偽藥續々現ハル御注意アレ

◉電話下谷千三百二十一番◉



女性の天地

文學士　常盤榴丘

『予は毎朝寢床の中で新聞を讀むを習慣とせるが、今年三歲になる長男が、新聞は橫臥して讀むものと心得たりと見え、新聞が配達せらるゝや、先生ゴロリと橫になり、何やら口の中でムニャ〳〵言つて居る、イヤハヤ油斷も何もなつたものでない』是は嘗て讀賣新聞のはがき集に出でたる投書なり、予は當時之を讀みて、此一單文中にいひしらぬ妙味をおぼえ、此中には汲めども盡せぬ訓戒を含むを感じき、げにや眞似は兒童の普通にして、また生命なり、若し兒童にして此眞似なくんば、敎育の見込もなかるべく、又發達の餘地もなからん、此眞似ある所に、初て敎育は成立し、敎育ありて世の大人も豪傑も生ずるなり、

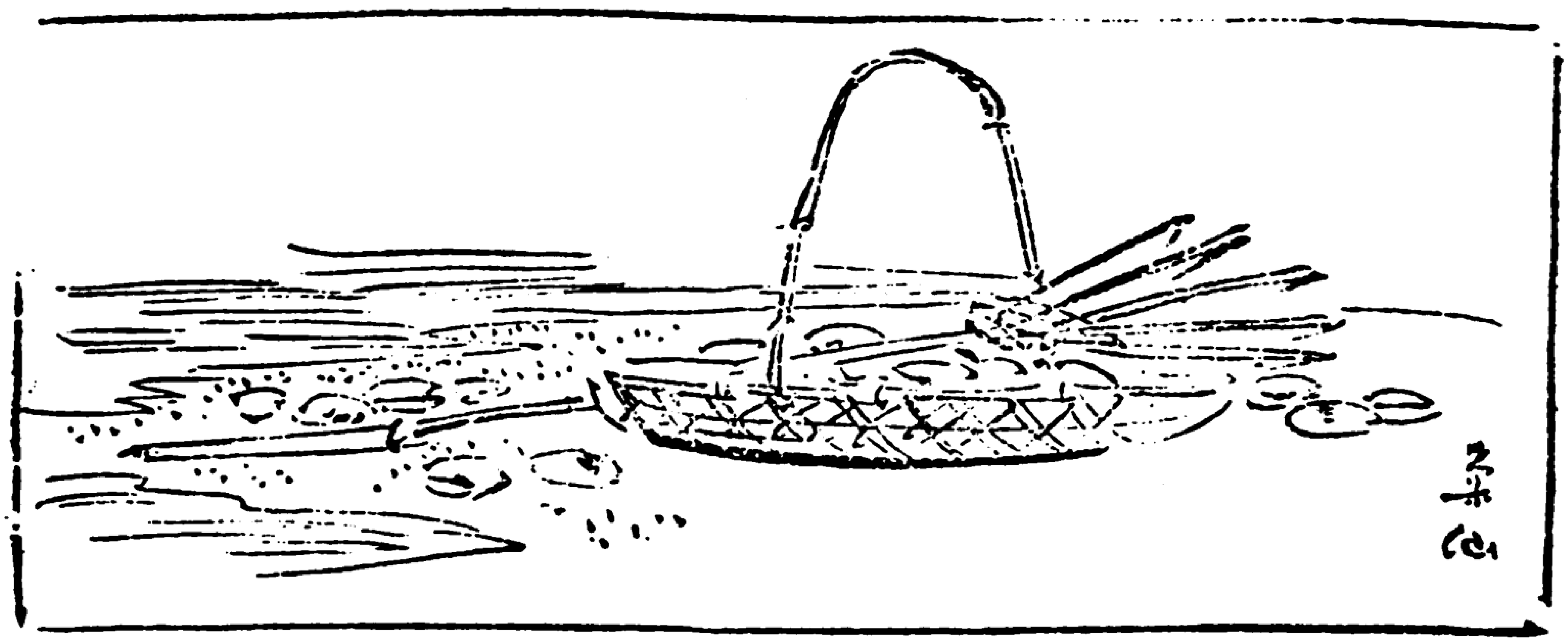
見樣によりては兒童敎育ほど世に困難なるものなかるべく、又見方によりては兒童敎育ほど世に面白き容易なるものはなからん、其困難なりと云ふは、或は罪は兒童に存するものにはあらで、父母師友の人格に缺ぐる所あるが爲ならざるか、敎育家が困難なりといふにはあらで、身を以て率うべき人格が、自分自身を取扱ふの困難にはあらざるか、良將の下に弱卒なく、將門には大將を出し、大人の周圍には人物集り、賢母の家庭に良妻を生ずるには、誰とて知らぬものなし、是等の人は所謂敎育者に非れども或意味に於ては活きたる敎育者なり、此活きたる敎育を受けたるものが良妻となり、人物となり、將器相材となるも決して怪むに足らず、

敎育とは敎育者自身が自己に類するものを作るの謂なり、其方法に至りては種々無量なるべしと雖、兎

も角結局は自分と同樣なるものを作らんとするにあり、よし然らずして或る理想的の人物を作らんとするにありといふもののあるも事實は不可能なるべく、自分は如何に氣をあせるも、兒童は一にも自分、二にも自分を眞似て、いつとなしに自分に似たる性質を成すに至るべし、議論は如何にあらうとも、實際は斯の如き途に出づべく、現今の學校組織に見れば最も多く生徒に接し、尤も多く生徒を率ゐる人の感化は、尤も多く生徒に傳はるなり、斯の如くなるを以て若し教育者にして缺ぐる所あらば、兒童はあらぬ方に走りて後來如何ともしがたきに至るべく、教育者にして先づ圓滿ならば、兒童が漸次自己に近づきつゝあるを見て非常の歡喜を感ずべし、若し兒童にして自己の思ふが如くならずして、あらぬ方面にのみ走らば、先づ生徒を咎むる眼を轉じ、自己の性格如何を顧み、大に戒飾し、大に人の子を賊ふを慚愧すべきなり、

予は教育者の語を以て、敢て教師を謂ふに非ず、予の意味に於ける教育者とは、實際上に於て身を以て兒童を率ゐるものゝ謂にして、此意味に於ては母たるもの實に教師にまさりて、大教育者の責任を自覺せざるべからざるなり、世の人は教育を以て學校の職分なりとし、學校にさへ出せば、兒童は大人豪傑になるかの思を爲せども、さりとは餘りになげやりの至り、世に掛換なき可愛しき我兒を學校にのみ任せきりにし、母たる人、父たる人が、何と爲樣と我關せず焉たる顔を爲し、自分の言語動作を謹まず、素行精神を等閑に附するは、豈淺ましき事に非ずや家庭の教育や實に兒童の第二の天性を馴致する一大學校なり、世の母たるものにして此一大責任を自覺するもの果して幾人ぞ、今日の女子にして苟も學校に通へる程のものは、皆家庭教育位の語は知らざるものなからん、而も其責任を自覺して、先づ自己の性格を陶冶せんと心掛くるものは、存外に少數なるやも知れざるなり、男子の職分は外にあり、女性の本務は内にあるは、天然の法則にして、世は如何に

進歩するも、此一大法則の動く事なかるべし、女子の教育を受けたるものは、動もすれば自分の本分を失却して、男子の職分内に闖入せんとの鋒を現はす事なきか、自己の一大責任たる家庭の範圍を脱出して、社會の舞臺に飛躍せんとの野心に驅らるゝものなきか、若し此野心に驅られて教育を受けつゝあるものあらば、是既に第一着を誤れるもの、其將來の目的はよし家庭の良母たるにありとするも予を以て之を見れば是則ち婦德に背反する方向に彷徨し、事實は良母たる能はざる域に迷ふなきかを憂へざるを得ず女性に貴ふべきは温良從順の德にありとす、若し苟も此德に闕ぐるあらんか是實に女性の價値を半減するものなり、斯くいへばとて予は女性を奴隷視し、器械視し、其柔弱無能なるを欲するにあらず、



女性とても男子と同じく胸裏常に理想の光明を有すべし、時ありて死すとも屈せざる主義あるべし、而も此理想と此主義は必ずしも温良從順の德と兩立せざるにあらず、理想を抱きつゝ、主義と終始しつゝ、而も温良從順なるを得べし、夫れ然り女性の德は温良從順にあり、然らば教育を受けつゝある時にも、始終之を念頭に忘れず、萬般の教育皆此德を助長せしむる如くせざるべからず和歌にあれ、國語にあれ、生花にあれ、茶又は琴にあれ、乃至悉く皆取りて以て自己の養分となし、以て此德を完成するの方便と爲すべし、自己の財産と爲すが如き感あらばそは大なる誤想なり、是等の教育の主眼は皆是女子の品性を高め、其淑德を

完成せしむる方便のみに過ぎざればなり、

近來女子に對する高等の教育を唱導するものあり、其目的の那邊に存するやを知らずと雖も、予は少くとも高等教育を授けんとの美名が、或は女性の淑德を失墜せしむるなきかを憂ふ、大學といふ、其名や實に美なり、其美名に惑はされて、若し男子と相馳逐し、活舞臺に飛躍せんとの目的を抱き、こゝに學ぶものあらば、予は是等女子の將來を憂ふるのみならず、國民の將來を憂へざるを得ず、あはれ女性の職分は內にあり、男子と天下を二分して其一を有す此半面の天地や、女子の一生を捧げて猶餘りある程の大責任なり、議論は如何にあれ、此大責任や女子が遲かれ早かれ、免れざる大責任なり、早く此責任を自覺して、一日も早く自己の天地に退かんとする女子は幸なるかな、若しあらぬ目的の爲に其半生を捨つるものあらば、其將來の苦艱豫期しがたきものあらん、

予は茲に於て大聲疾呼して女性に勸告す、複雜なる社會の常として種々の現象の崛起するを免るべからず、時に或は自己の野心を挑發する現象の起る事あらん、然れども女性の本務は飽くまで內にあり、此本務を完成するに於て有効なるものなりせば、悉く之を學ばんとする可なり、若し之に反するものなりせば、固く野心を制して他の言に耳を貸さゞるを意とせざるべからず、唯一路を進みて他を顧みざるは修學時代に於ける唯一の秘訣なり、社會に如何なる現象續起する事あるも、一意唯自己の品性を高め、溫良從順の德を馴致する方向に進まば、將來の家庭は幸福なるべく、此幸福なる家庭より而も自己に類せる淑女、品性高き男子の輩出するあるべく、其結果は母たる人の幸福のみにあらざるべきなり

海邊霞　　霞袖女史

浪の音は春にゆづりてきのふけふ
かすみをわたる須磨の浦かぜ

武田勝頼御臺北條氏

文學士　藤岡繼平

予昨秋學暇甲州に遊んで、嘗て關東隨一の武將武田氏の遺跡を探り、その興亡の迹を視て、感慨方さに無量。就中勝頼滅亡の際に於ける北條御臺の行動は轉た予をして感嘆措く能はざらしめたり、その悽絶の昔を語るも敢て無用にあらざる可し、

蓋し勝頼の御臺北條氏は、當時一方の旗頭小田原北條氏康の女、當主氏政の妹にして、嘗て天正三年三河長篠の敗後に於て、武田が國勢の不振を病ひ、北條と和親の絆を堅めん爲め、偏ら重幣贈賄の結果、始めて武田家に輿入せしもの、さらば勝頼と連理の契も、所謂政略的婚嫁てふ、當時戰國の常態に由て成立せしに外ならず、故に常識より考ふれば、琴瑟相和するの家庭は、到ても其間に望むべからず、况んや夫人嫁するの時、纔かに二七の妙齡なりしに於てをや、然かも情は尙ほ理を以て推すべからざるか爾來其家庭には、和風暖々として吹渡りし狀、われ實に之を其滅亡の秋に見る。頃は天正十年彌生の初めつかた、織田信長が武田に對する謀略の機は熟し、自らは世子信忠を相携へて、信州伊奈口より部將金森は飛彈口より、德川氏は駿河口より、なほ又勝頼の義兄北條氏政さへ、一方關東口の將として、その攻伐に加はりき、斯くて武田は四方の包圍攻擊を受け、げにや釜中の魚の今日、健氣なる夫人は先づ、日比守神と崇めまつれる、同國巨摩郡宮地の八幡社に願文を納れ、赤心こめて偏すら夫の武運を祈る、其文字や眞に悽絶、一字一句皆是れ涙、夫人の凜々しき氣象は自から文句に顯はれ、實に千歳の下吾人を泣かしむ、されど武運の果ては如何ともせん術やなけん、智勇兼ねたる勝頼も、部將小山田が、情理を以てくれ〱の甘言に乘せられて、小山田の屬城岩殿に赴かんとて、つい昨冬移りたる新府（韮崎）の館を立出で〻、落ち行くわはれ是非もなや、實に新府の住ひ長閑な思ひは春の夜の夢、御臺も墓

なき思ひ涙と共に、

うつゝにはおもほへがたき此所

　わだにさめぬる春の夜の夢、

館を出でしは、彌生三日の夜明け方流石故城の名殘惜しくて、振りかへり〳〵

　春かすみたちいづれとも幾たびか

　　わとをかへしてみかづきの空

常ならば長閑な春日も曇り勝、弦月西に沈む頃、淡き光に照されて、たどり着きし宿かしを（柏尾）こゝにまします瑠璃光如來、幸運祈る、其名もふさはし大善寺、佛の御前に念力こめて、ひとへに念ず後の世の事

　西を出で東へ行きてのちの世の

　　やどかしわをとたのむみほとけ

この寺の庵主は、昔て勝賴に忠やかなりし侍女なにがし、今墨染の理慶比丘尼、さらば御臺も諸共に、一夜をかたみに語りつゞけ、浮生のなげき哀れひとしほ、

明くれば四日のあかつき方、語る情緒は盡きせねどいつまで斯くてもあり難く、泣く〳〵袂ふりきりて進む駒飼岩見が館、暫く爰に滯りて、小山田の迎を待つ、待てども〳〵音沙汰なければ、我より使を立てられしに、思ひきや小山田の兵士、笹子峠の嶮に據り、却つて我を入れぬ仕儀、あゝ奸臣のわなに掛りし口惜しさ、それと聞きたる公の從兵、次第に落つる三々五々、げにや人の心は、薄き紙、それより薄き武田の運命、今は是非なく邊りの要地、天目山に落ち延びんと、駒を進むる田野の葛原、御臺今更歎きに沈めば、勝賴公は御臺に向ひ、

　小山田にたばかられ申すことも、御身いたわしきと思ひ參らせし故なり、故は如何にと申すに、かの都留の郡と申すは、相模近き所なれば、如何なる風の便りにも御身故鄕相模へ送り參らせ、我身いかにもならんと想ひし故なり（小山田の岩殿城は都留郡にあるなり）

と、優しき夫が誠の言葉、御臺は言下に之を斥けて

こは如何なる仰せぞや、假令輿車にて故里相模へ送るとも、返らん事思ひも寄らずや、ひとつ蓮の臺の縁と、思ひ染たる紫の、雲の上までかわらじと、契を結ぶ玉の緒の、あらん限りは素よりも、たえての後も別れめや、

勝頼今更感に泣き、さらばとかはす最後の盞、酌む間も近づく敵の轡の音、近づく最後今はの際、如何なる雁の便りにも言つてやらん故郷相模へ

かゑる雁たのむぞかくの言の葉を
もちて相模の國府におとせよ

又斯かる最後を聞くからは、はらからの嘆きもさぞと察しやりて

音にたてゝさぞな惜まん散る花の
色をつらぬる枝の鶯

今はとて、法華經五の卷取り上げて、心靜かに誦して後、刃を口に伏し給ひ、廿歳に足らぬ花の君、嵐に散りしあはれ健げさ、

如上述べ來る所は、御臺最後の實寫にして、凡て實話たり、それ夫人歸嫁の實情に至つては、既に右の如く、極言すれば政畧の犧牲となりしもの、然かも夫人の貞節秋霜よりも烈しく、その芳紀を問へば纔かに十九方さに今日高等女學校卒業の適齡に過ぎずして、尙ほ且つ情理の辨へある斯の如きは如何、素より當今社會の狀勢、影響する所なりと云へ、多く武田家々制の產出たらずんばあらず、由來武田家は諸種の制度に於て、實に關東の隨一たると同時に、其家庭の整齊に至つても、亦同家を推さゞる可からず、此の夫人の最後と言ひ、又かの理慶尼が爾來絕えず田野に殉難の主従を吊ふて、終始志を變せざりしが如き、あるは信玄の六女お松孃、嘗て織田信長に婚を約して果さず、人の他に婚嫁を勸むるあるも斷じて受けず、遂に墨染の衣に身を窶して、武州八玉寺の近在に閑居して、今猶信松院に其名殘を留むる等、何れも皆、其家庭の整齊を證して餘あるにあらずや、蓋し斯の如きは每に執て以て武人家庭の範とすべし、近頃戰爭の結果、頻りに再婚是非の論あ

り、予輩絶對的に再婚を非難するものにあらず、貞女不見兩夫てふ從來の道徳は、其主義に於ても、必ずしも今日の準據とするに足らずと雖、その再嫁是認の如きは、萬々不得已の後に出づるもの、事多く社會實地上の見地より論ずべき問題にして、決して之を以て主義理想となすべからざるなり、文昌の今日、肯て墨染の比丘尼、伏刃の愚をまねぶべからざるは勿論なりと雖、寡婦自から取るべきの途は多々別にあらん、理想は何處までも高潔ならざるべからず、理想は何處迄も高潔ならざるべからざるなり、

良人の選擇

文學士　伊藤南陽

社會の健全ならざるは、家庭の靜肅ならざるが爲なり、家庭の靜肅ならざるは、夫妻の合和せざるが爲なり、苟も社會の健全を保ち、其の幸福を圖らんと欲せば、其の根本たる夫妻をして、相合和せしめざるべからず、夫妻をして、相和合せしめんと欲せば夫妻の最も恰當にして、不似合ならざるを擇ばざるべからず、

夫妻の恰當にして、不似合ならざらんと欲せば、啻に夫の徳操、才能、性質、習慣、位置、血統、體貌等を精査せざるべからざるのみならず、夫が從事する所の事業をも擇ばざるべからず、敎育家たるか、文學家たるか、宗敎家たるか、將た農か、工か、商かを擇ばざるべからず、人性は適不適ありて、此に適するも、彼に適せざるなり、或は商家の妻となりて、己の全力を盡し、其家をして益繁榮富有ならしむべき技倆を有せるも、農家の妻となりては、己の技倆の十一を施すこと能はずして、空しく地中の黄金たらざるべからざる人あり、又或は敎育家、宗敎家の妻としては、極めて適當なる配偶者なるも、農工商の妻としては、甚だ不適當なるの人あり、此等の事を辨へずして、漫りに其人品を擇びしのみにて婚姻を營む時に於ては、時日の經過すると共に、琴

瑟の和諧を失ひ、終には破鏡の悲劇を來すべし、詩伯梁川星巖の妻紅蘭女史は、女詩人として、內助の好模範として、萬衆の瞻望注目する所となれるは、其材能の秀逸非凡なるによるべけれども、女史の夫を擇ぶに當り、啻に人品を擇びしのみにあらずして、其事業をも擇びしにあらずんばあらず、若し誤りて紅蘭女史をして、軍人の妻たらしめんか、農商の家に嫁せしめんか、到底今日得たる程の聲價を受くること能はざりしなるべし、其他『バットレル』夫人の英國に於て、廢娼論の主唱者たる名聲を、萬國に輝かすことを得しが如き『エンマ、ウエラード』夫人の女子教育の主唱者率先者たる廣譽を得しが如き『ジョーヂ、エリラット』の女史文學者たる令聞を得しが如き皆良人の助力を得たるに由る、良人の助力を得たるは、慥かに良人の事業の己れに適するものを擇びたるによらずんばあらず、

されば孃よ、汝の夫を擇ぶ時に當りては、啻に其人品を擇ぶのみならず、進んで其平生從事する所の事業をも精査せよ、さらば伊良都女の如く、

大和には大夫丈澤にありといへど
　なくて堪へぬは君ひとりのみ

と歌ふを得ん、此處に至りて始めて、整肅、質實にして、和樂壯健なる、自由光明なる家庭を築き得るなり、堅實多福なる家庭は、堅實多福なる社會を產み、黃鳥おとづれ、胡蝶舞ひ、江上の清風、山間の明月、一時に襲ひ來るの黃金社會を得るものなり、孃等よそれこれを三思せよ、

石鹼の撰擇

理學士　藤田碧水

通例人が石鹼を購ふ時、何を標準として求むるか、香良きを良品とするか、透明なるものを良しとするか、堅きものを德用なりと信ずるか、藥石鹼といふ名が實ありと思ふか、之を容るゝ箱、之に施せる模樣、其形、其色等外觀の美醜に意を留むること深

きに過ぎざるか、凡そ物を買はんには、最も能く使用の目的に適ふ品を擇ぶが肝要なり、それには先づ何のために之を用ふるかを知るべきは勿論、抑も此品は、如何にして製造せられしか、此品の如何なる性質が、我使用の目的に向ひて必要なるか、等を明かにせざるべからず、既に此等の事を知りたる上は能く其知識を實際に活用せざるべからず、茲に石鹸につきて、二三の事を述べんとす、是に由りて石鹸の理合を悟り、無用の所に財を費すことなき助けともならば幸なり、

第一、石鹸の成分に付き述べん、石鹸は其重量三割以下の水を含むを正當とすれども、不良の品に於ては、眞の石鹸の量が三割以下にて、水其他の雜物が七割以上なるもの少からず、甚しきに至りては、眞の石鹸の量が一割に足らぬものあり、二十匁の石鹸を買うも、効用を呈する部分が唯二匁なりとせば、其不良なる事實に驚くべきなり、然し通常二十匁の石鹸中、六匁までは水なるを正當と思はざる可らず

然れども、椰子油（椰子の實より製したる油）を原料とし、水硝子（濃き水飴の如き有様を呈し、殆ど無色透明の物質にして、ミヅガラスと稱す）食鹽、粘土等を加ふれば五割以上の水を加ふるも外觀上頗る堅きものを得るなり、實に堅きばかりが決して徳用なるにあらず、雜せ物に由りて石鹸の嵩を大きくしたり、堅くしたりすることは容易なりと知るべし、然し水硝子及び樹脂石鹸は相當の効用あるものなれば、之を加ふるも濫造にはあらず、粘土も赤多少洗滌の効なきにあらざるなり、

普通に人が身體を洗ふに用ふるものは、總じて化粧石鹸と稱す、此化粧石鹸は純良なる原料を用ひて造ると雖も、此等原料は固より廉價なるものなれば通常化粧石鹸の高價なるは外觀を裝飾するが爲に、無用の費を要すると、香料の甚だ高價なるが爲のみ種々有効の薬品を調和すと稱するものも、能く之を調ぶれば無用の混合物ならざるは稀なり、且つ如何に効力ある薬品と雖も、之を石鹸と共に使用せば、

殆んど何等の効を奏せざるは、論辯を俟たずして明かなり、嬰兒及び病人等の如き、特に皮膚の損はれ易きものは、特別の石鹼を用ひ、皮膚に害なきやうすべきこと勿論なれども、通常用ふるには、廉價なる品にても洗滌の功に於て異ることなし、洗はん目的にて石鹼を買ひ、實際に其効なき藥品又は香料のために、財を捨つるは詮なきことなりと云ふべし

第二、石鹼の除垢作用は、石鹼が皮膚纖維等を害せずして、能く之を清むるは如何なる作用に由るか、これ久しく明瞭なる解釋を得ざりし問題なれども、近年化學の理論大に進歩し、十分に之を說明することを得るに至れり、昔しより洗濯に灰汁（ハイアク）を用ゐたるは、人の能く知るところ、又現時は曹達（ソーダ）を用ふるもの多し、此灰汁が垢をおとすも曹達が垢を洗ひ去るも、石鹼が皮膚を清むるも皆同じ道理にして、何れもアルカリと稱する物質の作用に由るなり、灰汁にもアルカリを含み、曹達もアルカリ性を有し、石鹼も亦實に此性を有す、唯其強さに差異あるのみ、垢を除くは此アルカリの作用に由れども、之が強すぐれば、皮膚を痛め、纖維を害ひ、弱きに過ぐれば垢を除く効少し、石鹼は實に此アルカリが、强きにも過ぎず、弱きにも過ぎざる樣造られたるものなり、

右は石鹼が除垢する、化學作用につきていひたるなれど、此他に尙ほ肝要なる一事あり、石鹼水の甚だねばこきこと是なり、白布の汚點去るに糊等を用ふるは、人の熟知するところ、其ねばりけあるが故に、布を揉むに當り、器械的に布目の間より垢を運び出すことを助くるなり、粘稠なる石鹼液に、同樣の作用あること疑ひなきなり、

第三、石鹼に種々ある事を序に述べて置かん、以上に述べたる化粧石鹼と、洗濯石鹼とは之を硬石鹼といふ、此硬石鹼に對して軟石鹼と稱するものあり、これ毛織物の製造に於て、多量に製造せらるゝ所のものにして、常に半流動體を爲し決して堅まりて居らずこれがため、軟石鹼の名を得たるなり、此等硬

河原操子女史と蒙古

女史の經歷

蒙古喀喇沁より女子留學生三名を伴ひ、去る十日歸朝入京したる河原操子女史は泰宮殿下の御養育掛りなる倉田やす子、當代の女傑鳩山春子女史等と郷を同じくし、明治八年六月を以て信州松本に產れたれば、今年は正に三十二歲なり、女子の父忠氏は當時足輕士族にして、其廢藩の影響を受け、家祿を失して生計困に難を告ぐるに至りし爲め、忠氏は監司獄の一小吏に投じ、漸くにして其家計を繫ぐを得、今なほ信州長野の監獄署に勤續し居ると云ふ、然れば操子は素より充分の敎育を受る能はず、八歲の折松本なる開智小學(今の松本小學校)へ入學せしも父の長野轉勤と共に長野小學校に轉校し十六歲の春と云へば二十三年の四月に同地師範學校女子部に入學し、二十七年三月同校を卒業し、二年間同校の附屬小學に敎鞭を執り、二十九年四月に出京して、お茶の水の女子高等師範學校に入學せしも、病氣の爲め在學二年にて三十一年同校を退學するの止むを得ざるに出で、直に歸鄕して長野高等女學校の助敎諭となること三年病漸く癒ゆるを待ち再び上京し、下田歌子女史の門下生となり國文を專攻し、更に女史の薦めにより橫濱なる大同學校に敎鞭を執るに至り、又同時に同鄕出身の敎育家篠田利英氏此仲介にて佛國人某女史の設立にかゝる女學校にも鞭を執りて、此に佛語研究の動機を得、この兩校の成績共に頗る擧り、中にも大同學校に於ける經驗によりて、此に始めて支那人敎育の妙味を感じ更に下田女史の薦めによりて、上海なる務本女學堂の聘に應ずることとなれり、話頭一轉こゝに蒙古三十六王の一たる喀喇沁王は他の諸王と異り大いに心を日進文明に傾け特に日本の文明に心醉し、嘗て福島將軍(安正)と知合なるから、去る三十六年中來朝して我が文明を視察せしより、日本心醉の度は更に一層の深きを加へ、適當の女流敎育家を得て歸國せんことを欲し、是れを福島將軍に談りしに、適々將軍と同じ信州は松本の生れなる件の河原女史が、現て上海なる務本女學堂に敎鞭を執り居る由を知れるから、且つ是れ將た同じ松本生れの川島浪速と云へる人が、同じ上海の警務學堂總監を務め居ることとて、兎も角もと女史を推薦したるにぞ、王は大いに悅び、歸途上海に立寄り、福島將軍の紹介狀によりて、川島氏の手を經て、內田公使及び小田切領事にも會見し、女史招聘の儀を是非にと申し入れたるにぞ、公使首め大いに王の意を諒とし、女史にも其意を含め、漸くにして應招の約なりて、此に信濃三界に生れたる纖弱なる一女史の身の、喀喇沁府に入りて熱心育英の任に當ることとなれるは、去る三十七年一月と云へば、日露開戰詔勅の降れる一ヶ月前の事なり、

▽この後任　は鳥居龍藏夫人なり

女史の蒙古談

◎皇族子弟の教育　妾は去三十五年八月上海に渡り清人の女子教育に從事中、或人の知遇を得て、内蒙古喀喇沁王族教育に聘せんことを勸められ、三十六年十一月北京を經て蒙古に入り、爾來殆んど三ヶ年間、王府内に起居して、蠻風遑いなる貴族の子弟を指導しつゝありたるが、その初めは言語習慣の同一ならざると、特に蒙古語は南北清語に異なれるが故に、一時は非常に苦心したれども、日を經るに從ひ、漸次緩和し來りて、今日にては第二期及第三期生は、日本語を了解するに至り、現に今回同伴したる三女子は、一通りの談話を爲すことを得るに至れり

◎留學生の嚆矢　今回連れ來たれる女子于保貞(十五)阿蘭貞(十五)金淑貞(十三)の三名は、妾の手許に在りて教育したる喀喇沁王臣の愛子にして、頭腦も明快且つ體質も强なるを以て、日本留學を勸めたるに、父兄もよく承諾し、王も亦之れを許したり、然れど例の北京朝廷は、蒙古より留學生を出すを勸めるもの〻如く、蒙古王が日本に留學生を遣するの眞意果して何處に在るやなど、時々苦情を洩らすをなしとせず、然れど王は之を顧みず、是程日本の文明を慕ひ、是程日本が總てに親切なるを無視するに忍びずとて、遂に意を決し、女子三名を日本に同伴せしむることに決したり、

◎交通の不便　蒙古の氣候は夏季頗る冷しく冬季酷寒肌を透すが如く、特に三十年前妾の出發したる際は寒威の强烈なりしが恰かも蒙古王が北京朝廷に出張の序なりしを以て喀喇沁王の一行百五十餘名に加はり王の厚意にて駄駱に乘せられ、途中の宿驛十九日間を要し、漸く北京に着し、日本公使館に投じたり、燕京に於て妾が蒙古留學生を誘ひたること聞ゆれば、蒙古王に心配を掛くるの虞ありしを以て、同地に悉く日服裝に變じ、成るべく人目を避て行旅を取れ、芝罘に出で相模丸に便乘したり、幸に船暈をも催さず至極快樂に起居しつゝ、山水明媚なる内地風光に接するを得たるを喜ぶ、

◎王の日本崇拜　現代の喀喇沁王は先年微行して、大阪博覽會に來りし程ありて、日本の文物制度を研究するに、最も熱心なり王妃も亦日本信賴心を起し、相共に政務の餘暇、日本語及び日本を學び、漸次進んで今は會話に長じ、且つ日本新聞紙並に日本女學雜誌等を通讀了解するに至れり、王妃今年三十六歲にして、肅親王の令妹に當り、十八年前に入嫁し、當年四歲と三歲なる玉の如き女子二名を擧げ、寵愛に餘念なく、王府内の一族常に春風を以て充されたるなり、

◎王府内の事　府中の面積は頗る廣く家屋の構造は皆煉瓦を用ひ、室内の裝飾完美完善なりと云はんより、寧ろ清潔にして質素を旨とし、贅澤なる衣食の料を節して、専ら文明の器械を購買するに力め、特に日課の中、代數と幾何學は最も熱心に勉强し、其成績大いに見るべきものあり、常に疾く起きて政務の處理を終り、日本學問室に入り、一心に日本文明の練習をなし、課業に飽きたる時は、運動場に出でゝ、テニスの遊をなすを常とせり、

道づれは蝶よ雲雀よ花の旅

石鹸、軟石鹸の外に何は鉛石鹸とて、粘性あり膏薬に用ひらるゝものと、カルシユム石鹸とて醫學に用ひらるゝものとあり、此二種は水に熔けず洗滌の効なし

越の白梅

小森松風

越の白梅とは、假りに名づけし標題にて、まことは北越の女俳仙なる歌川の氣高き心、淸き言葉の匂ひを言出でんとてなり、

歌川は寛永の頃、越前三國の里に生れ、長じて荒町屋といふに、奉公せる賤しき女の身ながら、幼時より風流の志ふかく、點茶、生花のわざより、絲竹の道にも達し、殊に俳諧を好みけるが遂に此名は四方にきこえ、今の世までも越の山里に咲き匂ふ白梅の氣高さに、例へらるゝぞいともゆかしく、げに稀なる俳女にこそはありけれ。歌川は天より禀けし美貌の質に、柳の髮のいと長う、眉は初三の月に似て、愛嬌あふるゝ面ざしに、琴かきならしつゝ、長閑に歌ふ細聲は、ゆかし谷間の鶯が、玉打ち鳴らすにさも似たりと、道行く人も足止めて心引かれしばかりなる才女が身の上こそ感ずべき節、いと多ければ、玆にいさゝか傳記をものするになん、

歌川の才名は、夙に鄕里に知られけるより、一とせ江戸の侯なにがし、三國に來りて、親しく歌川を召し寄せ、くさ〴〵語らせ給ふことありき、その折、歌川云へるやう、妾とくより、花のお江戸を一見せばやと思ひ侍り、若し時を得て遊びなば、侯が邸にしばらく留め給ひてむやと冀ふに、侯は之をいと心よくうけ引き給ひぬ、それより東國の人と聞く時は必ずその住所姓名を詳しく問ひ正しては、東遊する事を約し置きぬ、

かゝる程に、一日主人に對ひ、おのが意中をしかじかと打明けて、今は此處彼處、知己も數多出來ぬれば、何卒百日の暇を給はりたしと切に乞へば、主人

も其心ばへを賞して、遂に之れを許しやりぬ、いで誰れ彼れをして送らしめんとありけるに、否とよ、妾は疾くより心構へして侍ればと云ふ〱、背の小笠に竹の杖、旅の調度ども取り出でゝ示すに、一家こぞりて皆涙にむせびあへり、

かくと見たる主人は、いたく歌川の身の上を案じ、吉き日を撰び出で立たすれば、昔なじみの友どちより、日ごと親しく交はれる人々も集ひ來りて、いたく名殘を惜しみ、互に交はす言葉さへ、涙にくれて出づればこそ、流石に離別の情に忍び難きも、何時迄かくてもあらねば、今は故山を後に見て、出で行く歌川を、或は三里、或は五里と附き添ひ來りて見送る者もありき、

さて見送りの人々に別れて後は、行方いづこかしら雲の、山又山とたどるも寂しき一人旅なれば、是よりは道すがら、かねて契り置きつる、知己をよすがに尋ね行き、幾許の日數を經て、やうやく江戸に着きぬ、

先づ心あてある侯の邸に尋ね行き、事の次第を申し入るれば侯は聞きて、いたく悅び、其由を家族の者に告げて、厚くもてなし、長の旅路に嘸や疲れけん先づ湯浴みして疲れを休めよかし、かくて後、對面しくれんと、婢僕に命じ給ひしかば婢僕は仰せのまゝにもてなし、今は夕餉も終りたれば、即ち侯は、近く歌川を召しよせ、いかなれば、かゝる樣にて來りしぞ、と問ひ給ふに、俳諧修業の爲めなりと答へつゝ、道中の事ども何くれと書き綴れる手帳をとり出でゝ示すに、侯は見て大に感じ、且つ驚き、且つ悅びて、長く邸に留まらんことを勸め給ふ、此時歌川の心中は、そも如何ばかり嬉しかりけん、

斯くて歌川は、日を經るまゝに、その同列の諸侯を始めかれの國主、これの北の方などより召さるゝまゝに趣きて、或は句を讀み、或は茶を點て、又は生花、彈琴の技藝に至るまで、いとめでたく手すさびければ、晝夜の暇なく、諸處より招かれて、今は高貴の邸に出入しげくぞなりにける、

かゝる程に一日、歌川は侯の前に進み出で、恐る恐る云ひけるやう、誠に君の御情によりて、年比の本意を遂げ、且つ思ひもかけぬ厚き惠みを蒙りし事は、行末永く忘れ候ふまじ、さり乍ら、國許にて約し來つる日數も、今は僅かにて充ちなんとし侍ればいそぎ歸國仕らんほどに、御暇を賜はりたき、と乞ひ願ふを、慈愛深き侯に、とやかくと差し留められて、なほ暫しが程は留まりぬ、後再び願ふに、故郷に歸りては、復と來る事も叶ふまじ、留まりて江戸の名所も見て歸れ、などすゝめらるゝ儘に、又しばしが程はとゞまりぬ、後三たび乞ふに、此度はとて遂に許されけり、

歌川の今ぞ歸ると聞きて、餞別の料に彼方此方より黄金、衣服あるは調度など、種々賜はり物多くありしが、これ等は歸國の後、皆主人に取らせ、さて心細げに云ひけるやう、妾この後、三年を經なば、別に一つの草菴を結びて、其處に生涯を送らん事こそこの世の願ひにて侍れ、いかで許させ給へやとて、もとの如く、再び奉公する身とはなりぬ、あはれ殊勝の行なるかな、かく歌川の如き心もて、主人に忠を盡するのは、今の世にそも幾人かある、

これより歌川は辛な憂き目忍びつゝ、専ら主人に仕へ、やがて三年にもなりしかば、主人もその志に感じて、遂に暇を與へしにぞ、歌川の悦び一方ならず三年が間、住み馴れし主人の家の門柳、柳の糸に後髪、引きとめらるゝ心地して、名殘をしくも立ち去りし後は、獨り出村の町はづれに、さゝやかなる草菴を結び、剃髪して歌川と號し、空ゆく雁に思ひを馳せ、雲井の月に筆とりて、浮世をよそに眺め暮しきとぞ、安永六年七月、遂に逝きぬ、辭世の句に、

　おく底も知れぬ寒さや海の音

歌川の句は、何れも麗艶巧緻、風韻殊に愛すべし

　目ざましき琴しらべけり春の雨
　爪紅のしづくに咲くや秋海棠
　叩いても心の知れぬ西瓜かな
　行く水の一夜どまりや薄氷

MISCELLANY IN ENGLISH.

英文雜錄

(承前)

THE CIRCUS BOY.

Though there were no beautiful ladies who seemed to need Larry's help, he found plenty of animals in trouble. The child had his father's love of animals, and he soon had a small menagerie of pets that he had saved from unkind treatment.

Miss Ann refused to allow his dogs and cats to be brought into the house; so he kept them all in a room over the stable which he called his castle, and played. They were distressed knights and ladies whom he had rescued.

One day a circus came to Still Harbor. All Miss Ann's friend said, "Poor miss Ryder! Of course that boy of hers will run away and go back to his old life. She is so fond of him, it will be very hard for her."

"Better now than later," said Dr. Haven. He still believed the circus child would grow up a bad man, and bring miss Ann disgrace and sorrow.

Even Miss Ann herself was troubled. She was afraid Larry really might want to go back to the excitement of the circus, the

小騎士の楯 (三)

さて、ラリーが助けて上げる樣なお姫樣は生憎入らつしやいませんでしたが、可愍相な獸は澤山居りました、ラリーは父に似て大層生物が好きで、獸が苛められて居ると直に救つて來るので、ぢきに小さな動物園が出來上りました。

ミスアンは犬や猫を家の中に入れる事を許しませんから、ラリーは厩の二階に、ありたけの獸を入れ、其處を自分のお城と名附け、この獸はみんな自分が救つて來た、お侍や、お姫樣だと云つて遊びました。

或日の事、スチルハーバーに曲馬の興行が御座いました、ミスアンの知合は『ライダーさんは御氣の毒だあの兒は乾度逃げ出して、もとの古巢へ歸るだらう。あんなに可愛がつて居らつしやるのを、まあどんなにか、辛い事であらう、』と噂を致しました。

例のヘーブン氏は『なんでも早いがましぢやと云ふて居りました。このドクトルは、まだ、ラリーが今にならず者になつてアンの顏に泥を塗つたり、アンに大變な心配をかけたりする事と極めこんで居りました。

アンも今度の事には流石によわりました。もしやラリーが、曲馬のあのドンチヤンの中へはいつて、いつか話をした綱渡りで

tight-rope walking he had told her about. So that evening she talked to him very Seriously, and told him a circus was a bad place for a little boys.

"Ours wasn't" said Larry.

"Perhaps not," said Miss Ann, but then you had your father to take care of you. This is different. Promise me that you will not go to the circus, Larry."

"Of course I'll promise, Cousin Ann," said Larry, "I don't know why yon think I want to go. If it was our own Show, of course I should want to see Pete, and old Tiger and all the animals. I wish I could see Pete just once."

Miss Ann did not answer. What she thought was, "If Kaufman's Show ever comes to this place I shall take Larry and go away."

The circus was very near Miss Ann's house.

There was a hay field below her garden, and the circus tents were just below that. One could hear the music, and the people laughing and clapping their hands.

In spite of what he had said Larry sometimes did wish to go. He had questioned the other boys, and learned that it was not nearly so fine as "Our Show" as he still called Kaufman's, but it would have been fun just to see for himself. Still,

もしたがりはせぬかと、心配で堪まらぬので其夕方眞面目な顏でラリーに向ひ、曲馬は小供によくない所だ、と諭しました。

『だつて僕のなんかさうぢやない』ラリーは聊か不服。

『それはさうでせう。だかね、ラリーや其時分はお父様が氣を附けて居て下さつたのでね、こん度とはまた違いますよ。ラリーねお前は決して曲馬などに行きはしまいね』。

『行くもんか。なぜ叔母さんは、僕がそんな所へ行きたがるとおもひなさるんだらう、ソリヤ僕等のならピートに會つたり、あの虎やいろいろな獸を見たいけれど、ア、ピートに一度でいゝから會ひ度くなつちやつた。』

アンは默つて居りましたが、心の中では若しクフマンの一座が來たら、ラリーを連れて何處か行つて了はうと思ふて居りました。

曲馬はアンの家のツイ側で興行されました。

アンの庭の下には枯野があつて、曲馬の天幕はそのすぐ下に見え、鳴物の響、笑ひ聲、拍手の音等手に取る樣に聞えます。

ラリーはあんなに御約束しましたけれど時には行つて見たくもなりました。

一寸他所の兒に聞いて見ましたらこの曲馬は『僕の僕の』と云ふて居るクフマン座ほどよくはないと解りましたが、自分で行つて見たら嘸面白いだらうと思ひました、併しお約束を破ら

he never thought of breaking his promise.

One day Larry found a ragged little boy crying behind the hedge.

"What is the matter with you?" asked Larry.

"Nothing," said the boy.

"Then what are you crying for?"

"Nothing," said the boy again. Larry took an apple out of his pocket saying

"Do you want this?"

The boy nodded, and began to eat at once. Larry saw a black bruise on his wrist.

"You come from the circus, don't you," he said.

The boy nodded.

"Do they beat you?"

The boy looked frightened.

"They said they would kill me if I told," he said beginning to cry again.

"Promise you won't tell."

"I won't, truly; but wait, I'll get you something to eat. What's your name?"

"Tommy," said the boy.

He seemed almost afraid to wait for the food, and took it and ran off as quickly as possible. Larry carried after him, "Come again tomorrow and I'll give you something more."

うなどゝ云ふ心は微塵も無かつたので御座います。

或日の事、ラリーは、ふと、垣根の傍に襤褸を着て居る兒が泣いて居るのを見附けました。

『オイ君どうしたの』。

『どうしもしないの』。

『そんならなぜ泣いてるの』。

『なぜでもないの』。

ラリーは衣嚢から林檎を出して

『君これやらうか』。

小供は點頭いて、すぐに食べ始めました、ラリーはふと小供の手に黑い傷があるのに氣が附き、

『君はあの曲馬のもんだらう、エ?』。

相手が點頭いたのでラリーはまた、

『みんなお前を打つの』。

小供はさもさもこわさうな風をして、

『おいらそんな事いふとみんなが殺すつて』またおいおい泣き出しながら、

『お前云ふんぢやないよ、いつけちやいけないよ』。

『云ふもんかア、一寸僕なにか食べるものを持つて來て上げやう、君なんて云ふの』。

『トメー』。

小供は食物を待つ間も心配でたまらなさうで食物を貰ふと、すぐ一目散にかけ出しました。ラリーは後から大聲で『もつと色々なものを遣るからまた明日來い』と申しました。

That evening Larry was quite.

其晩ラリーは穩しう御座いました。

The next day, he watched for the new boy, and when he came, Larry begged him to run away and come to Consin Ann.

翌日はあの兒が來るだらうと見張つて居りましたが、やがて來たので、ラリーはトメーに向つて、あの曲馬から逃げて、叔母さんの家へ來いと頼むやうに勸めました。

He told how kind she was, and about all the books and nice clothes and other things she gave him and he told Tommy she would be sure to tak: him, and be good to him too. And at last Tommy consented.

それで叔母さんの親切な事や、自分が頂いた本、着物、其他いろいろのものゝ御話をして叔母さんは屹度トメーも可愛がつて下さると申しました、でトメーも到頭納得致しました。

The circus was to start the next day, and they planned that Tommy should creep away and hid with Larry under the hedge till it had started.

曲馬の一座は其翌日スチルハーバーを立つ筈なので、トメーはそつと逃げて來て曲馬の人が立つて了うまで垣根の下でラリーと一所に隱れて居る事にきめました。

Grow up a bad man......................出來損る(惡しく育つ)

Bring miss Ann disgrace and sorrow...ミスアンニ恥をかゝせたり哀しい目を見せたりする.

To the excitement of the circus ......曲馬の賑かさに浮かされて.

Just once ....眞の一度.

What she thonght was——............彼女の思ふた事は———であつた.

In spite of what he said ....彼が前に言ふた事にも構はず.

The people laughing and clapping their hands ....笑つたり手を叩いたりして居る人々

Kaufman's ....Kaufman の Show の意.

Looked frightened........................恐れたらしく見へた

Creep away ....潜に逃げ去る.

光悦が母

松田竹嶼

我國の刀劍は日本武士の神魂であつて、此日本刀あるが爲に外國の侮蔑を受けず、益々吾が日本の武勇を世界に輝かしたのである、この日本刀の精華を言へば、直に本阿彌光悦のことが胸に浮かんで來る、本阿彌光悦は刀劍の鑑定及び磨ぎ拭ひに絕代の妙技を有した人で、然かも夫ればかりでなく、書畫も善くし、又陶器蒔繪に堪能であつたのである、彼が歸幽は寬永十四年二月三日で、今を去ること二百六十九年前であるが、今尙は其名が人口に膾炙して、然かも其作品が持て囃され、優に千金に値する高貴のものであるが、恁の如き大偉人が何うして本阿彌家に出たかといへば、一は光悦其人に天稟の才があつたにも依るであらうが、一は其母妙秀の薰陶が宜しかつた爲であらうと憶ふ、

本阿彌光悦は實に萬能を有する偉人であつた、余は光悦其人を追慕し、其事歷を探窮するに及んで、光悦其人ばかりでなく、母の妙秀が賢母良妻の鑑とすべき妻女であつたことを慕ふのである、

光悦の父光二は片岡宗春の三男であつて、本阿彌家に男子が生れぬところからして養子に貰はれ、本阿彌光心の女妙秀を妻とした、即ち此光二と妙秀との間に惣領として生れたのが名譽の偉人光悦であつたのである、妙秀は貞節堅固で且つ怜悧の聞えあつた淑女で、家庭教育の嚴格で育兒法の良好であつたばかりでなく、能く良人光二を助けて家政を整理した彼女は嚴格とは云ふ條子を愛する慈愛の心深く、其慈愛は單に我が子ばかりでなく、他人の子に迄其溫き心を通はせたのである、本阿彌行狀記に、

人の親の瞋恚を起して子を折檻するを見ては淺ましき事と申しける幼きものをば心のかぢけざるやうに心の勇むやうにと申けるまして繼子を憎む女ありと聞けば繼子の母が草のかげよりにくむべし我子よりも大切にしてきどくものに名を取れかし

繼子を憎ませ置く夫と聞けば腰拔男の樣に思はるゝなり、

とある、之を見ると彼の女が愛は決して吾が子にのみあつたのではなく、天の神が愛を廣く諸人に垂れ給ふが如く、人の子にまで及ぼしたのである、然うして其愛の反動としては、人の親が其子に折檻を加ふることを憎むだ、而かも子を養育するには心のねぢけぬ樣勇む樣にせねばならぬといふに至りては、殆んど教育の何たるやを解せぬ當時に於て、能く是れに着眼したのは尋常一樣の婦人でなかつたことが窺ひ知られる、世には繼子を憎む婦人が往々あるが彼の女は又之を甚しく憎むで、其憎ませ置く夫を腰拔男と喝破し去つたのは、能く其人をして愧死せしむべき善言である、併し彼の女は恁の如く慈愛に富むでゐたとは云へ、愛の爲に惑溺するやうな意志薄弱な婦人ではなかつた、或る塲合には慈愛を以てし或る塲合には嚴格を以てして、其嚴格は寧ろ過激に走る位であつた、夫れは本阿彌行狀記に、

何某とか云ひける者侍の娘を娶りけるが子を三人生みて後に疱瘡をしてみめ惡しくなりたりとていなせたりいよ〳〵大切にすべき事なるにとて人々見限りける去ることのならざる女數多あり親のある時貰ひて親死して後去ざるなり又親の身上衰へて後去ざる事なり又盛り過ぎて去ざる事なり光悦が弟宗智といふ者あり京中にて隱れなき大正直者なりしが彼の妻を離別せし者と時々出合ひけるを妙秀聞きて世に隱れなき畜生と伴ふものは即ち畜生なり我子にあらずとて勘當してけり是は餘りのことなりと人々申しければ我も左樣には思へども我一類の多ければかゝる義理の違ふ者もあるべきかと思ふ故に見せしめなりと申しける、

とあつて、二男宗智は京中に隱れなき大正直者とある如く、彼の女が薫陶に成つたのであるから、信義の人であつたことは言ふまでもない、從つて彼の疱瘡した妻を離別した者とは決して莫逆の友ではなく知己の家で折に觸れて出會した位の單純の間柄であ

つたらう、然る江慥の如き不信實の者と假令一回でも出會したことは以ての外の事だと勘當したのは嚴格も甚しく實に極端と云はねばならぬ、併し多き親族の爲に範例を殘すとして、愛を瓦礫の如く放擲して一刀兩斷に決行したのは、孔明が馬稷を斬つた勇斷で、云はゞ宗智は親族への見せしめとして犧牲に供せられたのである、尙ほ同行狀記に、

妙秀が子供を育てけるは少しにても善き事あれば殊の外悦び褒めけり、

とある如く、彼女は惡を憎むこと甚だしく、惡には寸毫も假借するところがなく嚴罰を加へたが、其反對に善を喜ぶことは、一通りでなかつた實に彼女は善惡を差別することが明斷で、優柔不斷事を曖昧糢糊の間に了るやうな事は斷じてなかつたのである、彼女が能く良人光二に盡して、事ある每に彼れを慰藉し、苦痛に苦痛せる良人の煩悶を解き、良人をして其事に安んせしめたは　同じ書に

秀吉の御代に石川五右衛門といふ盜賊ありて京中穩ならず光二が藏を破り一せきを取りけるが光二は娘の方へ行きて止宿致しけるが急ぎ歸り見れば諸方より賴み來りたる刀脇差をも數多盜み取る、光二申しけるは手前に所持の道具は苦しからず他所より預りたる道具を取られける事是非に及ばざる次第なりと申しければ妙秀聞きも敢へず腰刀を本阿彌へ御賴み候程の武士が盜人に遇ひたりとも是非返へせなど申さるゝ事はいかでかあるべきと申しけるとなり、

彼女が云ふ如く、本阿彌家は刀劍に於ける名譽の家であつて、其名譽の家に刀劍の鑑定なり磨きなりを依賴するのは武士たるもの丶名譽とするところである、夫れが縱令千金の價値ある高貴のものであつても、盜難にかゝつた場合返せといふことは如何にも武士らしくなく、名譽の家の災厄を見て彌が上に災厄を加ふるので、武士自身の名譽を傷けるばかりでなく名譽の本阿彌家をも傷けるのである、家の大事此時にありと云ふ急場に臨んで彼女が、臆せず恐れ

ず、事理明白の一言に良人を助けて、此難場を切り拔けたのは、所謂男勝りの女丈夫といふも、決して褒辭の過ぎたものではあるまい、

彼の女の前には富貴なく豪奢なく、赤誠のみ維事とした、夫れは同じ書に、

妙秀は男子二人女子二人持ちけり姉娘は尾形といふ者の方へ遣しけるが媒人僞りて身上能きやうに申しけれども殊の外貧しき者なり娘内心嘸かし若しかるべきと云ひて光二は大きに悔みける妙秀申しけるは身の貧なるは苦しからず富貴なる人はけんどんにてうと〳〵に成つるやらんと心もとなし此聟の親正直正路にて親に孝行の者なりと此事慥に聞及びし故に心つよく思ひて遣したり先祖の善心なるにまさりたる寶のあるべき第一夫婦中のことは心安く思はれて賴母しき事なりと申しけり、

之を讀むだならば、何人も感せざらんと欲するも能はざるであらう、彼女の眼前には幾戶前の藏があつても、幾個の千兩箱があつても決して快哉を呼ばず喜ぶものは夫れよりも唯一片の赤心であつた、彼女が一言一行は恁の如く儼然として侵す可からざるものであつたから、彼女に對しては、何人も恭儉己を謹み尊敬の念を抱かぬものはなかつた、夫れは行狀記に本阿彌一類は多分光二妙秀が孫曾孫也其上人からに恐れて大きにおもんじ、我も〳〵と孝を盡しけり」とあるので明かである、彼女は總てに嚴格であつたとは云へ、最も慈善心に富むで、憐れむべきものに對して、物を與ふることは塵芥を捨つるよりも輕しとし、惜ます與へて以て快として居つた、

大勢の子孫ども田舍物產其外時服抔度々遣しけるを時を移さず皆裁切り帶襟頭巾帛紗ほどに裁切り數多の人に取らせけり小袖を参らせても肩にもかけざればよしなしとて錢を遣はしければ、一入悅び其錢にて色々樣々の物を山塚ほど買ひ置き家を持ちたる者には箒塵取火打箱火箸又はいわうさゝらの類を取らせ六尺草履取にはわらんずこんごう女には糸綿鼻紙手拭をとらせ又厚紙を求め手づか

ら能くもみて乞食非人をも招き寄せ寒き時節は是を脊にあてよとて數多の者に得させける、とは又彼の行狀記に記するところである、而かも彼女は親に盡す子たるべきもの丶義務として孝道を盡し、決して虚言を吐くなと諸人に訓誨したとは、又行狀記の傳ふるところである、彼女は榮譽ある本阿彌家の主婦であつて、其上家附の娘であつたから衣服調度は何に不足なくあつたであらうが、死したる時唐縞の單物一つ、かたびらと袷二つ、浴衣手拭紙子の夜着、木綿の蒲團、布の枕ばかりにて此外何もなかりきと彼の行狀記の傳ふるのは、如何に彼女が寡欲で、平素節約を專らとして爲たことが窺ひ知られたのである、

積善の家には餘慶ありといふ古語があるが、余は本阿彌の家に於て此語の當れるを感ずる、其子光悦に於て榮え、後光悦の養子光瑳に於て、光瑳の子光甫に於て榮え、世々刀劍鑑定の名譽ある家として其名が遺つたは、彼女が與つて力あることは余が深く信ずるところである、而かも光悦が淸廉高潔絶代の妙技を以て世に鳴つたのは決して偶然ではない、所謂此母にして此子あるものであらう、

伊藤須磨子の傳

錦巷隱士

世の中には不幸にして、夫に棄てられる婦人も少なうないが、棄てられた後も其夫を怨みずして貞操を堅く守り、死に至る迄渝ることのなき伊藤須磨子の如きは、其類が決して多くはない、近頃流行の蝦茶式部とか庇髪とか云ふ女學士連中には、隨分如何はしい評判を受る者もあるから、教誨の一端にもならうと、其履歷の大畧を陳述します、

須磨子は信州上伊那郡某村の人である、年十八の時或人の許に嫁きました、須磨子は幼少より讀書が好で、殊に和歌に堪能でありました、某も亦一個の俊秀才子でありましたから、二人の緣は實に才子美人

の配合で、春の花秋の月に詩を作り歌を詠じ、夫唱へて婦隨ふの樂み他人も羨む程でありましたが、夫某は才學を抱て草深き田舍に老朽つるもつまらぬことであると、須磨子にも其旨を言聞かせ、東京に出て一旗擧げんと最愛の妻を故鄕に留め、心强くも鴛鴦の翼を分て東京に旅立ました、誰か知らむ此の一別は則ち終生の永別にて、夫妻終に相見ゆるの期なからんとは、

扨某は東京に於て官途に就きまして、次第に立身する内に輕薄な東京の風に吹かれて、所謂ハイカラ式と云ふものになつたのが、國元に獨り空閨を守る貞實なる妻のある事も打忘れて、新橋柳橋より赤坂下谷と藝妓遊びに浮身を窶す中に、少なからぬ俸給も限りあれば、限りなき贅澤の費用を償ふに由なく、負債積で山の如くになり、據ろなく國元の田地山林を殘りなく賣り拂ひ之を償ひました、須磨子は衣食すべき樣がありませんから、實家へ引取りましたが斯くても一向に夫を怨む氣色はなく、唯戀ひこがれ思ひに餘る時は、其心情を三十一文字に籠めて、東京に送ります、此の一字一淚血と淚で書た歌を讀んだなら、如何に無情なる夫も直に歸り來るとか、又は須磨子を東京に呼寄せるとか、人情必ず左樣せねばならぬ筈であるが、此時は某既に東京に於て小何と云ふ藝者を受出して妾と致し、此の惡魔に腸を喰拔かれて全く活きた脫殼であるから、妻が血淚の和歌も其心を動かす事が出來ない、彼是する内に夫は遂に病氣になり東京で死ました、此報を聞いた須磨子の嘆きは實に目も當られぬ位で、此時迄唯一の慰藉として居りました、和歌をも、今よりは誰に向つて其情を訴ふべきと申して、其時限り全く之を廢して仕舞ひ、餘りに悲しみ嘆いた爲か是より病氣になり、疾むこと三年の久しきに涉り、明治十七年の二月遂に歿しました、年僅に三十二歲である十八歲で嫁入りし、夫と同居したのは僅に六年間、夫が東京に出て以來其死ぬる迄、九年の間空閨を守り微塵も他人より批難さるゝことなく其生命を終つた、され

ば親戚も其志を哀れがり、遺骸をば姑の傍に葬りました、

須磨子の和歌の集を貞一集と申します、其集を見ますと花にも月にも乃至風の音鳥の聲、暑さにつけ、寒さに付け其詠み出てたる和歌は、皆夫を思慕するの情を籠めたもので、之を讀んでは恐らく涙を催さぬ者はなからうと思はれます、然るに此の貞婦を棄て顧みざるのみか、末には身の倚る邊さへなきに至らしめたる、某の如きは實に言語道斷と評さねばならない、此集には日露事件に就て有名な七博士の一人、高橋作衛氏の父君白山高橋敬十郎翁の序文があります、當世ハイカラ式の男女に讀ませたく思ふ、哀れな詩集であります、

蝦夷むすめ

川上小舟

蝦夷人は總して女子をメノコと云ふ、人の妻となつたるをバマチと呼ぶなり、蝦夷人は一體湯浴することなければむさくろしと雖も、中にうまれ付により奇麗なる者少からず、髪の毛は頭りの眞中にて左右へ分け、禿髪に振り亂して後ろへ垂れ下げ、襟のわたりにてふツつりと剪り、首筋は小刀もて剃り上ぐれど、剃りたる所は垂れ下りたる髪に掩はれて見えず、髪へは油など附けたることなくたまさかには水もて洗ひ、櫛の齒を入るゝことなり、櫛も手作りなれば飾りなどあるべき筈はなきに、耳へはニンカリと唱へて錫又は眞鍮等の耳輪を掛くるこそ可笑し、錫にて拵へたるをヤヽカンと云ふ下品なる耳がねなり、又先のくる〳〵と卷たる處にビードロの玉を挾みて外飾をなしたる耳かねもあり、或は樺太より來たる銀作りの耳環を掛くるもあり、又レクツンカニとて是も銀、眞鍮、錫などにて拵へたる輪を咽へ廻はし、胸へは珠數の如く日本細工のビードロ玉、寛永通寶の錢、大小の鍔など糸に通して掛くるなり、口の周り手足の臂のあたりへかけて入墨を爲す、是

をヌエと云ふ入墨の模様は各々好みに任せて一様ならず、着物はアッシにて拵へたるモヲルと云ふものこは底なき袋の如くなるものにて、之を肌に着し、其上にチミプを着るなり、チミプは着物と云ふことにて手羽アッシの事なり、メノコが着するアッシのチミプは無地多し、稀れに縫模様のあるを着するあり、帶はしめず草履も穿かず日々の勉めとては鯡の節には濱邊へ出て、鯖差小刀にて鯡の腹を割き、數の子白子を撰み出す事メノコの役なり、又山に行きては薪採り、食料に充つべき草の根を堀る、このメノコ等が水汲む桶はシントコと稱へて二斗入の明酒樽を用ゐ之を背に負ひて近き川に行く、やがて水を汲めばその桶に附きたる繩を額に掛けて家に運ぶなり、尤も川近き所はキヤランベと云へる手桶を用ひ又ニッシと稱して樺の木の皮にて作れる桶の如きものを提げ歩るくなり、このニッシは水のみならず運上屋へ酒など買ひに來るにも用ゐて風雅なる桶なり運上屋へ來りては、シヤモ（內地人に）向ひて物言ふことを謹しみ恥らひ無言にて差うつむく、そこにアイノ居れば、夫れを賴みに用向言出すなり、夫を持つことは、生れて二三歲の頃その女の親、聟に取るべき男の親と約束なし、小兒の頃より許嫁極りあるなり、若し其女、外の男と懇ろなどするときには、それこそ事六ヶ敷なりて、果ては多くのアシンベを取らるゝ事なり、茲にいと面白きはメノコの煙草吸ふことにて、一ぷくつぎて一口吸ひ、並居るメノコへ渡せば、其メノコ請取りて一口吸ひ、先へ戻し、互に一口づゝ吸ひて、二口と續けて吸ふことなく、一吸づゝにて終りまで一口づゝ吸ひ交はすなり、

雨中のすさび

紫菫女史

ふりはへて今日は來ませと、わりなき友許より消息して、いひおこしたまへり　嬉しさよ、いとまなき身も、かにかくして早や行きてんと思へば、身邊の

事どもおほよそになしおきて、午過るころより立ちいで、今日のみは降らでわれかし、と念じつゝ、一町ばかり過ぎけるに、ポツリと大粒の雨額にかゝりければ、立ち歸りて、雨具とりいでゝ、急ぎ行けるに、俄にふり出でし雨に、濡てを厭う春告鳥のそれにはあらで、こは道行人の人の軒端門口に雨やどりしけるが、彼方此方兩側に並みたちて、われまもらへ見る目つき口つき、あやしうも心づきなく、いと妬げになむ見えし、友許訪へは恰もよし、期せずして會すとやいはん、親しき友の君また一人來合せたる、一しほ心ゆきておかし、四方八方の談より、果ては例のはかなき花鳥の色香をさへあげつらひ、いつしか點燈時となりければ、あはたゞしう、いやのべて歸り來る途すがら、一人の友も同じみちさして歸りたまへば、なほ倶に盡せぬ物語りの末を續けて舊御茶の水水道橋を渡りて、只ある坂に出でけるが折しも亦一しきり降りいでけるが、さきよりも烈しければ晴るを待たんにはと、思へど近きわたりに立寄るべき軒もあらず、暮方の心もとなさに氣はあせりて、ほと／＼轉びもし滑りもしつべし、膝を折りて、足なふみたかへそと互に手ひき、傘すぼめてやう／＼辿りつきし上は、路狹くして泥途多し、前方を見渡せば建てつゞきたる二階屋、誰が人の子をややどすらむとぞ覺ゆる、妾常より斯かる家の軒下過ぐること、いと心うしと思ふ、いかに恐ろしき病の原因や、彼の『バチルス』などの其ほとり散りほふ心地せられてなん、雨中はことに甚だし、君は、いかになど語りかくる折、いみじき梅が香の匂へば、あな床し、いづれぞと見返れば、黑き垣根にそひて夜目にもしるき、白妙の花の咲きこぼれたるがあり、あはれこれ知らで過ぎにしか、と立歸り眺むるに、袖いとど濡れそぼちぬ、傘の下より友なる君

　ふる雨に袖振かへし見つゝゆく
　　梅は誰が家の軒の花ぞも

とやさしくも讀み出てたまへば、妾も

梅の花にほふあたりぞ春雨の

ふりはへてしも訪ふべかりける

そこはかとしめくる薫り、いと艶になつかしうて、濡れそぼたれし身のうさも、忘るゝばかりなりけり

誰が宿の軒端の梅か春知りて
　ふかくも袖ににほひぬるかな

春の人

黄華女史

黄鳥一聲春の福音をもたらして、茲に世は長閑に立ちかへりぬ、遠山は霞をこめて白雲の花の如く、野面は緑草のしとねをのべて、宛然路傍の人を迎ふるに似たり。花園には梅花馥郁として、百花百艸將に笑はんとし、水邊の楊柳はやうやく翠煙を帶び、百鳥のさへづる聲いさましく、流るゝ小川は潺湲として淸きこと愛すべく、そよふく春風は肌に心地よく山家も今は陽春の德澤に浴し、いとにぎ〳〵しき樣とはなりぬ、夜に至れば、月淸らかにして、軒端の梅も一しほ白く匂ひ、東風和かに馥郁たる芳香を送れるなど目にも耳にも觸るゝ限り、樂しからぬはなく、嬉しからぬはなし、嘗て冬のいかめしきをかこちし人、秋のあはれに泣きし人も、今や此の春光の恩澤に浴して、むすぼれたる胸中の憂もとけ、天さかる鄙も都もをしなべて、謳歌好樂し、和氣洋々として天地に溢れ、萬象悉く美を露はさぬはなしあゝ樂しき哉、愛すべき哉、春よ、

夫れ天地は一新せり、我等は之を如何なる心を以て迎へんとするか、此の愛すべき、うるはしき、樂しき、春をむかへんとするには、我等も亦宜しく春の人とならずんばあらず、春の人とは如何なる人ぞ、身に綾羅をまとひ、大家玉樓に其身を安んじ、山海の珍味に飽き、窈窕たる玉顏をもて愛を貪り、自恣放佚思ふまゝに行ひ、日に糸竹管絃を以て生を快樂の中に送れる人は、其の外觀いと麗はしく、琴瑟謳歌蝶舞ひ、鳥和するに似たりと雖も、こを如何でか春の人と名くるを得べき、つら〳〵是等の人の心中

を探究したらんには、如何にその心の卑くして優雅ならず、かつ常に平和を得ずして、愁然たる思の彼を離るゝ事なきか、眞正の春の人とは、たとひ身は軒かたぶき、壁落ちて月の通ふらんやうなるいぶせき伏屋に起臥し身には襤褸をまとうも、その心高尚優雅にして温厚平和なる人を云ふなり、凡て天地人生の善事は、皆此の心中の美妙より起るなり、抑も美とは如何なる事ぞ、花紅に柳綠なるは、是れ春の美なり、窈窕婀娜は、是れ婦人の美なり、綾羅錦繍は、是れ布帛の美なるものなり、凡そ形而下の美は、天地間におびたゞしくて、一々擧ぐるに遑なし、然れども是れ誠の美妙を盡したる者と云ふ能はず、即ち眞善眞美に至りては、一の奥妙秘密なる哲理にして容易に我等の解し得べき者にあらず、蓋し這裏には、



天下の眞理悉く胚胎し、一度發揚するに及びては、時未だ春ならざるに、春氣藹々然として天地に充滿する力あるなり、吁美其物を各自の心中に含蓄してよく其理を味はゞ、天地如何に樂しかるらん天地如何に神秀ならんそれ經に『心の淸き者は福なり、彼等は神を見んとすればなり』といへるが如き人は、美の理を味ひたる人と云ふべし、斯の如き人は、其氣濃厚にして乳酥の如く、其言溫

かにして春光の澤々たるが如く、一擧手一投足、皆平和ならざるはなし、ひるがへりて世間幾多の人を見よ、心中の美ならざるよりして、人の赤心に接しても、朋友の信義に對しても、凡て疑念をいだき、心に餘裕なく、常に春風そよがずして、凄愴たる嚴冬の氣象の絶ゆる時なし、

されど人生れながらにして惡なるにあらず、形こそかへがたけれ、心は花になさばなるべきものなり、こされば人、心の美を希はずんばあらず、心の美は、如何にして得らるべきか、これ其修養の如何にあるなり、人の心は其修養によりて美ともなり、醜ともなる者なれば、如何にもして其美を得んと計るは、これ人の世に處する務なり、されど今の人は、顯はれたる事には、心つき易しと雖も、隱れたることをば等閑になす、これ人心漸く輕浮に陷り、徒に外觀の美にのみ心を傾け、内部のことに至りては冷淡なるが故なり、凡そ物には表裏あり、内外あり、人には靈と形とあり、内外表裏の伴ふにあらざれば、決して物體を成立する能はざるなり、靈形伴はずんば眞善眞美の人と稱する能はざるなり、

眞善眞美は、何人にも願はしと雖、殊に婦女子に於ては然りとなす、それ婦女子は、優にやさしき姿容あり、此姿容を有するものにして、若し其靈の醜ならんには、これ豺狼に衣を着せたるに異らざるなり優にやさしき姿容に、其芳はしき心の宿りて、始めて眞善眞美を見るなり、此の眞善眞美を備へたる人こそ、いふ所の春の人なれ、

聞くならく、婦人は開化の引導者なりと、それ開化の引導者たる婦人が、率先して春の人となりたらんには、これに伴ふ夫も、又春の人とならざるを得ず夫若し春の人となつたらんには、生るゝ所の子女も亦春の人なり、子女春の人となりて、一家始めて春となる、一家春となりて、樂しき春の團欒を見るを得一家の春の團欒は、これを一社會に及ぼし、社會はこれを國家に及ぼし、有形の美妙と、無形の美妙とが合體して、眞善眞美を見るを得るなり、嗚呼逝

す〳〵もうらやましきは春の人か、

行く水

硯心女史

旦那参りませう、お安く参りますから何うぞ乗つて下さい、モシ旦那お安く、何うぞお乗りなされて、とうるさく云へど余は此時或る事を考へつゝ歩み居たれば、エー乗らないと云ふにやかましい、と叱りつけて見向きもせず歩み行きしが、猶後より縋り來りて、何處までゞも可うでございますから、五錢だけ乗つて下され、たツた五錢だけ、旦那何うぞ五錢だけ乗つてやつて下さい、

五錢だけ、餘りうるさく云ふが上に五錢丈と云ふ不思議なる頼みに、余は考への腰を折られ、不審の顔を捻向けて顧るに、老ぼれたる車夫の頻りに腰を屈めて、何うか助けると思召して、

年は六十に近かるべく、皺だらけの額に伸びたる白髪亂れかゝり、寒さに赤き鼻の尖には水鼻の點滴繁く落ちて胡麻鹽色の髯を濡ほす、身には紺の色褪めて淺黄よりも淺く番號おぼろげなるものを纏ひ、挽ける車もむさくろしく毛布は破れたるをだに持たざりけり、斯くても挽かでは食へぬ身の上なるべけれど、如何樣是にては五錢だけ乗る人もあるまじ、と余は俄にやさしき心起りて乗つてはやりしが、お前挽いて行けるか、彼はさも誇り顔に例の點滴の絶えぬ鼻うごめかさして、挽けますとも、何うぞお乗りなされて、

余は覺束なくも宅迄の賃錢を定めて、蚤もや居らんと氣味わるく乗り歸れり、車はやがて挽かれ行きしが、人の歩むよりは遙に遲かりけり、ならぬ堪忍するが堪忍とは此處の事なるべしと、余は有り丈の力を以て堪忍袋の口を握りしめ、流石に少しづゝ進む車の上に、強いて平氣をよそほひ居たり、されど余とて人の嘲笑を受けて何とも思はぬ程の勇者ならねば、如何で長く續くべきぞ、

帳場の車は早く、辻車は遲く、挽く男によりて遲速はさま〴〵なれど、病人など乘せたるは知らず、左無くして斯くまで遲き車の世の中に又とあるべしやされば此不思議なる事を物見猛き東京人の如何で其儘に置くべきや、忽ち道行く人の見物となりて、紳士も貴女も大人も小兒も皆足を止め目を凝らして見物せり、哀れと見る人のありやなしや、何れも冷かなる笑を含みたる目に、先づ老ぼれたる車夫を仔細に見て、やがて其目を余に注ぎて無遠慮に見やるのみか、さうとも見えぬが病人であらうかと呟き、又は餘り安く車へ乘らうとすれば得てして此樣のに乘當るものでとさへ呟く聲の余が耳に聞ゆる事幾度、余が堪忍袋は脆くも破裂してけり、

乘りし處より僅か二町ばかりの處にて余は車を下り歩く方が早いから歩いて歸る、併し可愛さうだから賃錢は與るぞ、と約束通りに與へしが車夫はさも面目なげに押戴きたるのみにて、濟ぬとも有難しとも只一口の言葉もなく茫然として立ちたるは、實に實に老ぼれたるものかな、

余はあらぬ慈善だてして圖らずも往來の見物となりたる馬鹿々々しさに舌打しつゝ家路に向ひぬ、されど歸りつきて此事話しゝに、やさしき我妻は、能くぞ乘つておやりなされしとていたく賞めけり、それより二十日ばかり經ちて、世はいよ〳〵寒くなれる或日の事、或家の戸口に立たる一人の乞食の思はずも余が目をひけり、余は乞食に知邊は持たぬ身ながら、何となく知れる人のやうに覺え、近く歩み寄りて能く〳〵見れば、まがひもなき彼の老ぼれ車夫にて着たるは彼の時のものながら、今は色の褪めたるのみならず、其處此處破れて襤褸となれり、老ぼれたる彼は余の顏を忘れたりと見え、しよんぼりと立てるまゝ會釋だにせざりき、

此日空は一面にかき曇りて雪模樣すさまじく、白き山々の方より吹きたる風は骨にしむまで冷たく、今年始めての寒さなりき、余は其夜孤燈に對して此哀れなる記事をものしけるが、動もすれば硯の水の凍

れるを幾度か火鉢にて解しき、噫彼の老ぼれ乞食、何處如何なる處に夜風を凌ぎて、霜と共に如何なる苦しき夢を結し、

伯林の女學生

伯林大學女學生の數は六百六十六人にして、其内譯は左の如し

獨逸婦人	四八三	露國婦人	一〇四
米國同	四三	英國同	九
墺太利同	七	瑞典諾威國	六
伊太利及バルカン同	八	和蘭同	二
佛國同	二	瑞西同	一
丁抹同	二		

之を年齡によりて分つに、二十一人は廿才以下三十才以下三百八十九人三十才以上の婦人二百五十三人なり、此の女學生中五百九十三人は獨身にして五十七人は既婚者、十二人は未亡人、四人は離婚者なり分科に就て見るに、神學科十六人、法科五人、醫科百〇四人、哲學科七十八人、文科二百廿五人、歷史科四十四人、美學科七十四人・地理科八人、數學科九人、教育科八人、博物科四十一人、政治科二十七人なりと、以て其傾向を知るに足るべし、

北京だより

一ふでもうしあげます、我どもは今度北京に着きまして、貴社から御贈り下さいました、たくさんの良いお藥を拜受いたしまして、皆々御厚情のほど、何ともおれいのもうしあげやうがないともうして、よろこんでをります、喀喇沁は不便の地でございますから、おくすりは何よりうれしうございます、二月には彼方へかへりますから、皆にもよくはなしてきかせるつもりでございます、私どもは充分にべんきやういたしますから、今後もどうぞよろしくおねがひもうしますさよなら

十二月十六日　喀喇沁女學堂生徒總代

舒　婧

國光社女鑑編輯局各位御中



教育所感

男爵 細川潤次郎

昔英國に一人の愚人あり、月々の收入を銀行に預け入れ、歳々に貯蓄したり、其後收入なくなりても、猶之を引き出だすことを知らずして、遂に貧窮を以て死にたりければ、人其愚を笑はざる者なしと、此事は一種の笑話に過ぎずと雖も、此を以て學者の、其學問を力めながら、此を實際に適用することを知らざるに譬へたり、此譬は頗る切實にして我國にても古來より言ひ傳へたる、論語讀の論語しらずと曰へる諺の意味に、善く〳〵相似たるものなり、若し此語を一種の諺として見る時は、何の弊害もなくして、學問を利用する爲の功あるべしとは信ずれども精密に研究する時は學問は決して金を銀行に預くることに比較すべきに非ず、金を學問の貨物とし、銀行を學問する人の腦髓とし、時々預け入るゝことを學問の方法とし、時々引出だすことを學問を實際に適用することゝする時は、學問と學問する人とはなれ〴〵れになりて、合同すべきものに非ず、且又學問するにも、學問を使ふにも、方法迂遠にして迅速ならず、從うて學問の價値も滅却せざることを得ざるべし、此れ之を辯明する必要ある所以なり、大凡學問技藝の科目は樣々なれども、其の中の大部分は躬行實踐すべきものなり、教育家の恒に言へる德育などは、全く躬行實踐の部分にして、德育の效果は其人の動靜云爲の際に顯はるゝ者なれば、時處によりて德育の原則を適用すと曰ふべきものに非ず、體育も固より其効果を身體に顯はすものなれば、是亦體育の原則を適用すと云ふべきものに非ず、智育に至りても大抵然らざるはなし讀み書き計算の如きは

智育の大部分を占むる者たることと言ふまでもなかるべし、普通の文字を記憶して、普通の書物を讀み、其の義理を辨へること、普通の文字を記憶して、手紙を認め帳簿を記入すること、數學の加減乘除を記憶して、日用の家政を辨ずること抔も、最初には人より習ひ得たることに相違なかるべきも、目に馴れ心に馴れ、手にも馴れて、遂には我が物となりて、恰も我手足を動かし、耳目口鼻を働かしむるが如く全く天性となつて、人より習ひ得たることを忘るゝに至りて、始て其用を辨ずるものなり、故に此



等も時處によつて、學問の原則を適用するものに非ず、適用の本義は犯罪を處分するに當り、刑法第何條に據ると曰ひ、民事なれば民法第何條に據ると曰ひ、官吏の任免に議院法第何條に據り議員に任ずとか文官分限令第何條に據り非職を命ずなど曰へるが如き事にして、法律の爲には必要なるも、此れとても法律適用の形式たるに過ぎず、眞に適用と曰ふべき例は、八幡太郎義家が下に伏兵あれば飛雁行を亂ると曰へる原則を適用して、伏兵に陷ゐることを免れたる如き是なり、是等は眞の適用なれども

日常の事に非ず、稀なる場合に用ひらるゝ事にして一體の學問は皆此の如きものに非ず、學問と人と合同して、學問を我物とする事は、學問の本體にして教育の主眼とする所なるべし、若し或人の說の如く學問を金に譬へ、學問する人の腦髓を銀行に譬へ、學問の方法を銀行に預け入るゝことに譬へ、學問を實際に適用することを銀行より時々引き出だすことに譬へなば、學問と人とは二物にして、一物に非ず恰も銀行の金と金を預けたる人の如し、二物にして一物に非らざるを入用あるに臨み、之を取り出だすが如きは、方法迂遠にして迅速ならず、急速の用には立たざるべし、夫を學問と心得て教ふる者は、之を以て教へ學ぶ者も、之を以て學ぶ時は、學問の本體を傷つけ教育の主眼を誤る者にして、其弊害大なりとす、

女子大學一期の大成

其の創設に際しては「女子の大學早尚」の聲に壓迫せられ、其の經營や、熟せんとするに當りては、女子の高等教育不必要」の論議續出する等、日本女子大學の位置をして今日あらしめたる成瀬仁藏氏の苦心慘憺や眞に想ふ可きなり、女子大學今や三十餘萬圓の基金を有し、其の事業としては幼稚舍、幼稚園小學校、高等女學校、大學（家政學部、國文學部、英文學部、教育學部）を建設し、更に二十二個の寮舍、圖書館、櫻楓館、共同購買會等の附屬機關成り其の儀容の堂々たる高田臺の一偉觀たるを失なはず內容實質の改善進步は固より前途遼遠たらむも、機關の設備より看る時は日本女子大學は僅かに、第一期の大成を告げたりと謂ふ可し、左に近來の開設にかゝるものと、來る四月の新學期より實施す可きものとを錄して、大方の參照に供す、

▽教育學部　高等女子師範學校同樣の性質を帶び、第一部は數學、物理、化學第二部は博物を專修科として倫理、社會學、心理學、教育學、英語、手工、體操、國文學、音樂等を副學科として兩部に課する

の制なり

▽小學校　は先づ尋常一年生若干名を收容して、本校々風の下に基礎を作らんとする也

▽幼稚園　應募の結果に依り甲乙兩組に編制するやも測られず、

▽幼稚舍　滿六歲以上の女兒三十名を收容し寄宿せしめて家庭保育を行ふ所なり

以上の設備を應用すれば、幼稚舍に育ちて幼稚園に學び小學校に學び高等二年を卒業したるものは更に高等女學校に學び、高等女學校を卒へて尙ほ餘力ある場合はおの〳〵志す處の大學各部を修め得るの順となるを以て、所謂修養の生涯はこゝに終始一貫することゝなるべし、

▽圖書館　堅固廣大なる煉瓦造にして講堂にも兼用するやう仕組まれ、廣さ三千人を容るべし、圖書館は一般女流の爲めに公開し講堂にも追々女子通俗講演に供せんとのことなり

▽櫻楓館　下層は書籍、雜貨等を販賣する商業部開設せられつゝあり其の一角には銀行部ありて每月四千餘金を取扱ふとのこと之に從事するものは一旦卒業して實修するもの、未だ修業中にて學資の足らざるもの等なり、二階の一半は研究室に供せられ、一半は「家庭週報」の編輯室となり、三階は櫻楓會員たる同窓者の出京又は其の他の場合に於いて本校を訪ふ人々の爲に、其宿舍と休息室とに備へられつゝあるなり、女子大學の「家庭週報」は其の材料凡て實驗的研究的にして、實用の方面よりいふ時は文學雜誌中屈指のものといふべし

▽購買會　七百人二十二寮舍の家族と家庭の需要に應せんが爲に設けられたるものにして、其の仕掛けは凡て本物なり、建物は三間に仕切られ、第一は西洋食用品を主として之に類する雜貨室、第二室は魚類肉類、第三室は米其他の干物類を收む、寮舍との取引の模樣頗る新式にして凡て簿記的也、每月決算し利益は各寮舍に按分率に配當すとのこと也、

以上諸機關の間に起臥衣食すれば、其の修養歲月と

共に長じて社交の婦人と爲り、主婦の婦人ともなり得可き也、

兩高等女學校の入學試驗

府立第一高等女學校本年度入學生徒募集數は本年一年生百五十名、裁縫科一年生三十名、及び本科の二學年以上五學年迄は若干名なるが、右は學年試驗に於ける及落者の都合に據るものにて、願書差出期日は去月一日より本月二十六日迄にして、既に願書を差出せしもの百餘名に達し、昨年と大差なき由、右の有樣にて志願者心得書の如き二千五百枚を印刷せしも、既に希望者に送付せし數二千二百枚を超過したりと、又第二高等女學校は一年生　五十名、二年生五六名にして願書差出期限は去月四日より本月卅一日迄なるが、是また五十餘名餘り、志願者心得書配附數は七八百枚なりと、而して兩校共試驗は同日に行ふ由なれば、例年の如き二股主義を行ふ事能はざるべく、從つて是非一方の學校を選擇せざるべからざるが故に、願書差出期限の終りに至り、兩者を對照すれば、面白き現象を觀るならんとの事なり、因に試驗期日は本科一年は四月二日、同二、三、四、五の各學年及び裁縫科は同月二、四、五の三日間なりと、

◎東洋女學校　小石川區丸山町に設立せる東洋女學校は、昨年四月開校以來、其成績頗る良好なる由なるが、尚來る四月新學年は第四年以下各級約百五十名を募集し、入學志願者は、來る三月廿五日限り願書を差出すべしと、

◎女子美術學校建設　官立東京美術學校教授岡田三郎助氏主唱となり、女子の圖畫教育、及女子實業家を養成する目的を以て、先般來より專門學校令により女子美術專門學校を設立せんとして計畫中なるが、昨今餘程進捗し、三月中には其校舍の建築に着手すべしと云ふ、

儒教主義の小學校

専ら孔孟主義の道徳を以て現今の少年を律せんとするは、常識ある教育家の目より見れば、種々の非難あるべしと雖も、其人の徳行如何にも奇特と稱えつべき價値あれば、玆に記すべし、大阪市南區長堀橋筋の豪商[illegible]田宇左衛門氏は、近來學生の風紀日に亂れて、文明の程度と相適はざるを慨き、昨年三月十萬餘圓の資金を投じて、同市南區周防町に修齊高等小學校と云へるを設立し、尋常小學卒業の兒童を收容し、精神的教育を施す由なるが、其科目は最も修身科に重きを置き、一週二三回同地の儒者として有名なる藤澤南岳翁を聘し、孟子論語等の講義をなさしめ、忠孝主義及び武士道を以て其品性を鍛練するに努め、目下の生徒は女生七十、男生五十として、來學期よりは益々擴張し、將來中學課程のものを設けんと、校舎の増築中なりと、特に氏は世の輕薄なるハイカラ女學生の擧動を忌み、女子教育のため更に多大の力を盡さんと云ひ居れり、

清國招聘の女教師

近頃婦人連が、學校の教師或は家庭の教師として、清韓地方へ招聘さるゝもの漸次增加せしが、小石川表町なる清韓語學講習所は、此種の婦人を養成する目的にて、昨年設立せしものなるが、今回第一期卒業生の中安藤貞子(三十)大塚春子(三十)片根清子(三十)加藤美代子(二十)山口たい子(三十)の五人は、服部博士夫人繁子女史の幹事たる、北京日本女學堂、及び今度新たに設立された華族女學堂、其の他家庭教師として清國へ招聘の相談あり、目下俸給に就て交渉中なりと云ふ、而して同講習所への入學資格は、女子師範學校又は高等女學校卒業以上の學力を要するよし、

外國に於ける女子教育家

諸外國殊に支那及び朝鮮の兩國に限りて、其國の風

俗慣習の上よりしても、男子より婦人の方家庭教師其他として歡迎せられ、近來學校出身の教師にして彼地に任に赴く婦人頗る多きを加へ、現に清韓兩國を始め、其他に在て教育事業に從事しつゝある、我國の女流は左の如し、

武井はつ、丹雲枝、丹とわ（以上淸國湖北省武昌幼稚園）▲安井哲河野淸、中島かつ（以上盤谷ワイヤンスクール）▲木村よし（北京肅親王家庭教師）▲河原操（蒙古喀喇沁女學堂）▲川島經、內田正、服部繁（以上北京女學堂）▲近藤淑（韓國元山源興學校）▲田中こう（同京城女學堂）▲服部ます（北京豫教女學堂）▲加藤みね（淸國四川省成都女學堂）

以上の中川島、內田、服部（繁）近藤の四女史は、良人と共に彼地にあるものなれど他は總て獨身にて、彼地より、招聘に應じて渡航せし者なり、然れど元山にある近藤女史の如きは、故籠手田安定男の三女にして、去る三十三年五月來て此の地に日本語學校を創立し、韓國の男女を收容して、良人牛次郎氏と共に久しく教育事業に從ひ、今度の日露戰爭開始に就ては、自己の門下生より通譯等二十一名を出して、我軍の爲に竭せしこと尠からず、又田中服部（ます子）の兩女史は、女子大學卒業の新進教育家にして最後の加藤女史のごときは、閨秀音樂家として、兼て瑞典式體操の教師として招聘されたるものにして何れも七十圓以上二百圓までの月俸を受けつゝあり因に記す、小石川の女子淸韓語講習所よりも安藤貞大塚彩、加藤美代、山口たい、片根淸の第一回卒業生を近く、北京の華族女學堂其他に向つて渡航せしむる筈なりと聞く、

教員檢定免許狀授與數

文部省にては中等教員檢定試驗を開始したるは、明治十八年一月以來の事なるが、爾來昨三十八年二月迄、同省より免許狀を授與したる總數は一萬五千四百七十九人なり、最近三年間に於ける免許狀の種類を擧ぐれば、三十五年度には九百九十一にして、內官立學校卒業二八一、無試驗檢定二四二、試驗檢定合格四六四、三十六年度には千百五十二にして、內官立學校卒業四五七、無試驗檢定二七九、試驗檢定

合格四一六、三十七年度には千七にして内官立學校卒業二六八、無試驗檢定三三六、試驗檢定合格四〇三なり、因に三十六年度に官立學校卒業多くして三十七年度に少きは、臨時敎員養成所の卒業者ありしに依る、同所は二ケ年卒業にして、本年は其卒業期なれば、本年は又多數なるべし、

學生と小說

大橋圖書館に於ける昨年十二月の閲覽者の類別、及び其人員數に就て見るに、學生千九百七十七人、官吏五十五人、軍人十五人、實業家八十五人、婦人八十五人、其他八百五十八人なるが、此等の者の最も多く閲覽する書は小說にして、其數和洋共に二千六百十五册に達し、之に亞ぎて多きは國、漢文學、外國文學書にして其數二千三百六十九册、歷史傳記の千三百六十四册、之に次ぎ、其他は數學、醫學、社會、經濟、統計、理學等に關するものなり、此の統計に依て見るに、多數の閲覽者は學生にして、又最も多く讀まるゝ書は小說とすれば、如何に學生が小說熱に浮されて居るかを知るに足るべしと、

家庭看護法の講習

家内に病人が出來た時に看護婦の手を借らねば、其處置が出來ぬといふは、チト不自由な話で、上流なら兎も角中流以下では看護婦を雇ふなどいふことは家事經濟上如何あるべきか否、手から病人を看護すると否とに拘はらず、婦女は此に對する心得がなければならぬ、現時の社會では琴三味線、茶の湯、挿花を熱心にやるものは多いが、此看護法を學ぶもの甚だ少いのは慨嘆の至りだ、

▽講習會　家婦が看護法の心得があれば、看護婦を雇ふにした所で、其取扱の適否を監督することが出來るし、醫師の治療を完全ならしむるの利益がある、之を修むるには別段手數を要するものでなくツて子女が家庭にありて、修學の餘暇、或は奧さん達でも家事の餘暇に立派に習得することが出來る、



文學士 男爵 千秋季隆君選

春の野

天

わか菜つむ野邊のをとめの姿まで
なにをねたしと霞みこむらん
東京 中島鎮子

地

いざや子らめも春の野に打むれて
うたひ遊ばん花のしたかげ
千葉 鈴木やす子

人

春の野に浮れこゝろははてもなき
とまると見えし蝶もとまらず
神戸 足立ゑい子

秀逸

柳にもさはらぬ野邊の春かせに
うごくはひとのこゝろなりけり
神戸 鶴見清子

梅咲きぬわか菜も生ひぬ春の野の
野守か家こそうらやましけれ
東京 岩垣貞子

春の野はかすみたなびきうらゝかに
土筆つむ子の歌ものどけき
岩代 菅野和子

はるの野の花をしとねにねふる子の
夢路やいかに樂しかるらん
東京 高橋珍子

はゝこ摘よめなさはらひつくゞし
のべの遊びを家づとにせん
東京 山口琴子

春の野にわかなすみれも摘いれてうれしさ袖にあまるけふかな
靜岡 竹内みつ子

春もまた富士のねおろし寒けれとかすみはてたるむさしのゝ原
埼玉 横田秋子

雲雀なく野にうかれて來て見れは野邊はすみれの花むしろかな　岐阜　中島素子

花にうかれ鳥こうたひて春の野にかへさ忘れてくらす今日かな　東京　林　琵子

佐保姫かまひのころもやふれにけんすゝろにもゆる野邊の若草　群馬　竹のふし子

去年の春君と摘みけりこの野邊にいま君在さすあゝわれひとり　東京　安部ふじ子

春されはこゝろものべへ誘ひきぬとり／＼花の香にひかれつゝ　愛媛　廣田蘭子

つくひすの初ねもきゝて花むしろたゝむも惜きはろの野へかな　秋田　古瀬とよ子

おひ人も野邊の若菜のむかしへりけふは少女とうちむれて摘む　三重　奥瀬かすみ子

なかき日を遊ひくらして歸るさのなほ惜しまるゝ春の野邊かな　但馬　岡田芳子

たのしさはつみしすみれと我袖にあふれけるかな春の野あそひ　伊豫　高橋もり子

こゝもよしかしこもよしと若菜つみこゝろそまよふ春の野邊哉　大阪　池田英子

あわゆきのきえにしのべにさとの子の菫かりする称そたのしき　東京　永井ふさ子

菫つむ子等のさゝめく聲すなりかすみのおくやひろ野なるらん　京都　下川登美子

春の日の長閑けき野邊をさすらへは花のかさしに胡蝶たはむる　東京　瀬藤ちよ子

大そらも花のにほひにみちぬらんすみれ色よき野へのゆたけさ　播磨　横田春枝子

名もしらぬ千草花さき蝶はまひみれともあかぬ春の野邊かな　大阪　林はま子

うちけふる飛火の野邊のやけあとにまたもえいてし春の若くさ　秋田　古瀬憔子

胡蝶まひ雲雀うたひてすみれさく春の野へこそのとけかりけれ　肥後　友永章子

うなゐらかこゝろの駒も春の野のつはなすみれにつなかれに德　肥後　友永常子

たのしさのかきりしみえぬ春の野に遊ふをとめか袖ののとけさ　對馬　青木まさを子

八重かすむなかに胡蝶のひら／＼と花にたはむる春の野邊かな　奈良　天野照子

夕ひはりおちくるまでも花摘みててふとむつるゝ春の野へかな　越路　松永繁子

去年に似ぬはなのふゝきにものゝ夫かこまならしつゝ春の夕暮　淸國　富成梓子

小女子か花にこてふとゝとり／＼にのそみもみちぬ春の野あそひ　愛媛　廣田政美子

朝かすみたなひきそめてうちわたす野川のきしの根芹つむみゆ　岐阜　豐田冬子

菅の根の長き春日を野にいてゝすみれつみつゝあそぶたのしさ　岐阜　山田ふさ子

うら／＼とかすみ棚引く春の野にあかるひはりの聲のしづけき　東京　永島ゆき子

のとけさなすみれに摘て春の野のをしきかへさの家つとにせん　福井　岩崎花子

久かたの春のひかりやみちぬらむみわたす野邊のみとり色濃き　大阪　木村春江子

行けと／＼かきりなきまで面しろきわか草野邊の春のけしきは　神戸　足立あさ子

うら〱とかすめる野へはとふ蝶の羽風も匂ふこゝちこそすれ　愛媛　高橋茂子

つはなぬきすみれつみつゝおのつから春の野守となりにける哉　東京　青木たま子

花わらひうぐひす歌ふ春の野にこてふとゝもにあそふたのしさ　薩摩　松原みね子

さほひめのかすみのとばり垂こめて春のけしきは深くさの野邊　東京　数島うた子

かすみたつ春の野原をみわたせはけにいひしらぬ景色なりけり　東京　碓井のぶ子

のとかにも笑ふこゑこそきこゆなれかすむ春野に若菜つむらん　新潟　小島まつ子

鳥うたひ花さきにほふのにいてゝけいとおみへゝ歌よまむかな　新潟　中林ひで子

若草のめのもえそむる春の野におかるひばりのこゑものどけし　茨城　荷見てる子

春の野のかすみの袖におもざくしわか菜つむなりにたり少女子　東京　西野いね子

春かせよひばりのこゑよ野のみちは涙にたゝよふ恋のゆらぎよ　長野　福澤咲子

富士の根のかすめるまゝに長き日の長閑に暮るゝ春の野邊かな　栃木　鎌田志計子

隔てなき友とうちつれて花すみれにほへる野邊に今日も來にけり　石狩　加藤すゑ子

あつさ弓はるの大野はなの花のこがれゐるさ衣にほひそふ　肥後　佐々木群子

花にとふ胡蝶も袖になるゝまてかすみわけつゝあそふ野へかな　三河　永井さい子

乙女子かたもとの色に萌えいつる野邊の若草つみてけるかな　福岡　森よしき子

すみれつみ胡蝶遂ひつゝ春の野にひれもす落すをとめたのしも　東京　林環子

春雨にのこりのゆきのきえゆきてのへなつかしき頃となりけり　野州　金子とし子

いさゝらは野に打いてゝ乙女らとかすみの奥のすみれつまゝし　岐阜　中島梅子

花のやとすみれの床のゆかしさにかへさわするゝ春の野へかな　熊本　日高かず子

うら〱とかすむ春野にはなたれて時得かほなるひばりけの駒　埼玉　横田やな子

とほ山は鶯けの雪にさゆれとも野へのわかくさもえ初めにけり　東京　土田八重子

春もまたあさ澤小野のはつわか菜よはひもひとつ摘みや重ねん　三重　奥瀬かすみ子

すみれつみつばなぬきつゝ思ふどち遊ぶ楽しさいつかわすれん　東京　伊藤芳子

若くさの萌えてにほへる野邊に出てゝ蝶とたはむる花の少女子　安藝　石井千代子

つほ菫さかゆる春になりしより野邊にくらさぬ日はなかりけり　三重　帆山静子

おいの手をとりつゝはるの野にいてゝ霞にむたる人のゆかしも　相模　能千茂子

春かせにたもとふかせてゆくのへの菫つくしにこてふとふなり　東京　黒秀子

うちわたす霞のとはりくさ〱の花のむしろをしきたへの野邊　但馬　田尻保代子

春の野にたのしく今日もあそはなむ桃とやなぎをわか友として　安藝　堂面千里子

京都　石橋こう子

春の野にしばしいこひて蒲公英をはなれし蝶のゆくへをぞ見る

府下　田中千賀子

何となくたゞなにとなくのどけきは春の野山のけしきなるなん

備前　近藤繁子

八重がすみ棚びく野邊のをちこちにあまた乙女の若菜摘む見ゆ

丹波　大槻とく枝子

うら〳〵と遠山かけてわか草のもえづる野へののとかなるかな

大阪　黒田代音子

のかなへむみやこ乙女が黒かみのかざしとみしは胡蝶なりけり

東京　永島ゆき子

うら〳〵と霞たな引く春の野にあがるひばりのこゑのどけさ

秋田　古瀬りく子

ゆきゝえてみとり色そふはるのゝは若なつみよくなりにける哉

相模　森田蝶流子

もえ出しみとり色こき春の野のかすみのおくに子らのこゑする

相模　大谷津芙蓉子

さくら散るふもとの野邊の松原をながはのこしてかすむ空かな

秋田　細矢はる子

春の野の長閑さまさるいとゆふにけふもひかるゝひとこゝろ哉

陸奥　相馬冬子

見わたせば花はわらひてとりうたひいつしか野へは錦おりける

越後　山田淑子

小ひつじの眠る彼方にすみれつむ少女のすがたうつしてやみむ

越後　山田涙子

咲つゞくはなの野山に長きひのくるゝもしらであそぶ今日かな

岐阜　松岡章子

八千草のもえいでてそむる春の野にをさまる風のゆたかにそふく

越中　横谷八重子

少女らがうたひのゝしるなはてみち夢やふれけん胡蝶舞ひたつ

山形　岡田雨無子

古井桁つゝみて萌ゆる若くさにこてふれむれるうすづき夜かな

福岡　三原つな子

春霞たなびく野邊にわかなつむこゝろもそらにかへさわすれて

東京　岩谷淺子

武藏野をはてあるものと見しひとは霞のおくゝなしらぬなりけり

東京　中島茂子

花の香の匂ふかすみのむさしのにたなびきわたる春のゆふぐれ

東京　小林芳子

薄く濃くすみれたんぽゝこきませてにしきとまがふ春の野邊哉

埼玉　湯淺はな子

夜半降りし雨に若菜のもえ出てゝ春はきたれりけさの野つらよ

東京　井上鶴子

うすかすむ春野の花にたわむるゝこてふひら〳〵行へのどけき

大阪　田中靜子

長き日にふりのたもとのつく〴〵しみつれとあかぬ里の乙女子

岡山　小山松枝子

牛かひのわらはとしばし天國のゆめや見るらんはなのむしろに

松山　上原のふ子

ちくさ咲く秋もあれどもかすみたち雲雀のあがる春野なかしも

松山　山田村多豆子

むらさきの菫さく野にいでてたゝむみとりも春はゆかしけれとも

能登　白百合子

朝行けば小くさの花の香やこりし眉にやさしうしめりおぼゆる

三河　原野いく子

花のかにゑひしこてふの夢さめて里のをとめのすみれつみけり

三河　金原しな子

ひばりなく聲とかすめる春の野にあそぶをとめのうた愛らしき

乳母車かたへになきてはるの野に稚兒守る姉のすみれ摘むなり　神戸　水越輝子

打むれてかへさもしらすあくかれて家路わするゝ春の野邊かな　横濱　船串喜代子

長閑なるかすみをわけて春の野に友うちつれて今日もくらしつ　横濱　船串米子

のとかなる長き春日もむらさきの野邊にし暮す今日そたのしき　奈良　山澤さよ子

ほの〳〵と明ゆく春のみとりのになくれのどけきもろとりの聲　新潟　岩本芳子

心あひし友うちつれて春の野にすみれたんほゝつみ暮らしつゝ　神戸　今西操子

野山のひと木の松のゆふかすみなかはなかれてあめふらんとす　埼玉　横田政子

乙女子か友をつとひて春の野にふみのまなひのつくしつみけり　神戸　尾澤わき子

古さとのかきねの垣も崩いてゝ小野のさゝはらはるめきにけり　大和　栗山たか子

なのはなにむつるゝ蝶のかけをみてわれも心のうかれける哉　大和　栗山俊子

里の子かこちふく風をまち〳〵て紙たこあけて野へにあそへり　陸前　前田河千年子

へたてなき友とむつれて春の野の若菜つむ日そのとかなりける　陸前　前田河みさを子

もろ鳥の聲におくれそやよ友と出れは胡蝶みちしるへして　群馬　林碌子

病いえし母を春野にたすけきてはては野ゝ茨につみしなゝくさ　伊賀　菊山かれ子

東京　松本松子

のとかなる春の野ホにあくかれてわらひなりつゝけふも暮しつ　東京　西尾けん子

梅か枝のうつろいつみにつくはひてすゝろ歌おもふ春の野の月　近江　井上熈子

うなゐらが飛ぶや胡蝶の跡追ひて遊ふ野邊こそのどかなりけれ　近江　大宮采馬子

比良山の殘んのゆきはきえはてゝひはり鳴、野に菜の花そさく　大阪　大森喜久子

雲雀なくこゑ聞ゆなりはるの野邊さかゆる君か千代もこもりて　和歌山　谷井清子

はるの野は目にも耳にもいとまなく花はわらひて鳥うたふなり　鹿兒島　伊東富子

きのふけふ春としられてみよし野に遊ふ乙女らあまたみえけり　京都　谷口好子

春かせに赤きリボンをなひかせてわか菜摘むらし乙女子のむれ　津市　神田みよし子

うら〳〵とかすみたなひく春の野に胡てふおひつゝ子ら遊ふ也　愛媛　樋口孝子

春かすみたなひく野邊のゝとかさに今日も暮しぬ花のもとにて　山口　村上操子

雲雀のみおかると見てし春の野は人も余所にはなさてつとへる　福岡　森よしき子

水くるま遠くめくれるおとはしてかすみのなかなひとすちの川　北海道　鈴木直子

おもしろく蝶も袖ふる春のゝにこゝろとけてもあそふけふかな　勢州　河口たか子

淡雪のとゝろにきえし淺みとり誰かたまくらのしとねなるらん　千葉　木村きよ子

あり明の月はかすみてたひ人のかけもおほろのはるの野の道

夢

天

なつかしき人さへ見えて夢ばかり
世にたのもしきものなかりけり

越前　松本花子

地

花をまつこゝろふかさに吉野川
わたると見てし夢のうき橋

東京　山本芳子

人

思ひきやはなのみやこの旅ねにも
なほふるさとの夢をみんとは

秋田　古瀬りく子

秀逸

茨城　荷見てる

さめてのちおもへばあはれわが心
なにゝまよひて夢となりけん

京都　下川登美子

春雨の音はなくともうたゝねの
夢のうきはし花にかゝりき

松山　上原のぶ子

さめずしてあらはと思ふ夢の世を
うつゝとなさば嬉しからまし

東京　敷島うた子

文にみしむかしの人に逢ひにけり
ゆめはいかなる路かよふらん

埼玉　横田政子

世の中をゆめとみなしてなに事も
さめたる時をおもひこそやれ

静岡　竹内みつ子

ぢごくゑの鬼をも夢に見つる哉
よにいましめのうたゝねをして

東京　中島茂子

よな〳〵にかよふゆめぢは月かげの
とさゝてゆるす須まのせきもり

神戸　足立あさ子

すぎゆきしむかしを今に見るものは
こゝろやわたる夢のうき橋

群馬　竹のふし

みいくさのやみぬと聞しゆふべより
夢もまどかになりにける哉

神戸　足立あい子

逢見ての殘ることばを思ひ寢のゆめ路たどりて知らせてしかな

愛媛　窪田政美子

音もなく散りしと見しは花咲きて友まつほどの夢にぞありける

越路　松永紫子

梅かをる窓にむすびし朝夢をとかむとすればうぐひすのなく

野州　金子とし子

うきことを重ね〳〵てたまさかにたのしき夢を見るぞうれしき

神戸　今西操子

なにごともうき世の中にうれしきはこゝろに叶ふ夢にぞ有ける

東京　山口琴子

しのばるゝなきたらちねとかたらひし夢はさめても袖ぞ露けき

東京　松本松子

かへりこぬむかしの人をうたゝねにしばし見せける夢ぞ嬉しき

神戸　水越輝子

すや〳〵と夢になりゆく垂乳子の頰のあたりを撫でゝ見るかな

越後　山田淑子

たらちねの母がそひ乳の手枕にゆめあたゝかくみどり子の笑む

津市　神田みよし子

かたらひし人の姿はきえうせておもかげのこる夜半のゆめかな

愛媛　高橋茂子

なつかしき友と語るとみし夢はさめてののちもうれしかりけり

東京　高橋珍子

おもふ事夢にみし夜はたのまれぬものとしりつゝ嬉しかりけり

肥後　友永常子

うたゝねのまくらの山にあやしとも掛りて見ゆるゆめのうき橋

肥後　友永章子

おもはざる事をも見えてうたゝねの夢やこゝろのまよひ成らむ

秋田　古瀬とよ子

よの中に夢てふものゝなかりせば戀しきひとも思ひいでまじ

備前　近藤紫子

しばしだに現にかへすよしもがな覺めてぞをしき夢のうきはし

筑前　松林獻子

月になき花にほゝゑむ夢のまをたゝうつせみのう　つなきよや

越後　牧はざ子

閨の灯をたゝくあられに夢さめておだうつ背子をおもふ夜半哉

大阪　林はま子

うさおほき浮世の中にたのしきはたゝ手まくらに夢むすぶひま

秋田　古瀬椎子

あこがれし花のこかげに宿りしてまたしもさくらの夢みてしかな

對馬　青木まさゑ子

一昨日もきのふもけふもこのゆふべ夢かと思ふいりあひのかね

相模　桑田紫流子

友のこゑ夢にもいりてあかぬまにあかつきつくる鐘ぞうらめし

秋田　細矢はる子

何事をみもしきゝもしよのなかにとがなきものは夢ばかりなり

福井　岩橋花子

なき友とあそびし昔ゆめにみて寢ざむる夜半のねやぞつゆけき

大阪　木村春江子

山深みまたゆき消えぬふるさとにかよふ夢路のやすくもある哉

陸奥　相馬冬子

いつとてもまた逢ふすべもなき友と語り合ひにし夢ぞこひしき

ふるさとの母と語りし夢まくらつれなくさます夜半のあらしよ　越後　出田浪子
友垣のまごゝろこめしふみみればこよひも夢もこのしまにつゝ　岐阜　松岡章子
花かけに胡蝶となりてうかれにしながき春日のうたゝねのゆめ　福岡　三原すな子
夢のうちにみしもゆめなり夢さめておもふも夢のうき世なりけり　東京　岩谷淑子
ころ果は夢に見るたにうれしきをつれなくやふるあかつきの鐘　神戸　鶴見清子
なき友とむつみかたりもつきぬまにさめてはかなしゆめの手枕　東京　小林芳子
なくさむるよすかともなれ夢ならでむかしに帰る道もなき身は　東京　青木たま子
花にまひ月にうたひつうたかたのはかなかりける夢のよのなか　岩代　菅野松子
あわ雪と消えたる母とむつましくかたると見しは春の夜の夢　石狩　加藤すゑ子
今しかたゆめ路いるらむ幼子のすみれ手にしてねむるやさしも　東京　笑　芳子
傷いえてますら武夫のかへります笑かほを夢に見るもうれしき　東京　古旋村よしみつ
思ふ事かならず見するものならは夢をたのまんことのおほきを　和歌山　谷井清子
冬の夜のみちかきひまにあたゝかく友とかたりし夢を見しかな　鹿児島　伊東富子
かひなしと思ひすてにし事をしもかなひし夢のなごりをしさよ　大阪　黒田代音子
楽しさのかぎりつくしゝけさの夢はさめて後にも猶しのばるゝ　東京　田中千賀子
しべりやのつゆと消えにし兄君とかたるは夢のはかなかりけれ　丹波　大槻とく枝
定めなき世とはおもへどしかすかに心にかゝるけさのゆめかな　東京　田中千代子
木からしの吹きしく夜半の手枕にさめて甲斐なきふるさとの夢　千葉　木村きよ子
歌反古をまくらにまどろむ春の夜の楽しさにいねたるうつくしき夢　能登　池野白百合
あれさみは孤燈すかたそのまゝに繙編けるまへに夢にいりたる　能登　池野いさみ子
相逢ひてむかしを語るともどりのなさけもふかき夢ぞうれしき　横浜　船串米子
ゆかしくも父果なきはなきかすにいりにしひとゝ語らひしゆめ　備前　松原みね子
うつし世とて猶も現にあらぬ世にいたねて見つる夢もあるなり　東京　西野つね子
うるはしき春の野らりの蝶かたつわれとたはれし夢のこひしよ　長野　福澤咲子
たらち根の膝にねむれるみどり子の笑顔や何のゆめむすぶらむ　東京　松祭たづ子
まどろみてたどるも夢路よもゆめちいづれの時かさめ果ならむ　新潟　岩木翠浜子
世の中は夢かうつゝかしらねともさめて後こそまことなりけり　東京　永島起美枝
夜ごと〳〵思ひみたれてうたゝねのゆめに心のうるはらしけり　栃木　福田志計子
やみぢよりやみぢにはしるまさ夢はいかに心をみちびきぬらん　肥後　佐々小琴子

今見しは夢としりつゝさめがたきこゝろは夢の中にやあるらむ　福岡　森　よしき

まのあたり亡にし友と語らひぬ怪しく奇しきは夢にぞありける　東京　林　環子

西ひがしむかしも今もへだてなく通ふゆめぢぞうれしかりける　東京　林　艶子

おもふことこゝろのほともあきらかに見ゆるぞ夢の力なりけり　岐阜　中島　梅子

ながながにひとりぬるよは故さとの夢さへ親にうとしかりけり　岐阜　中島　柴子

かへる人とめんとよびし我こゑにさむるもはかなうたゝねの夢　熊本　日高　かず子

結ふ間のうれしきふしの夢がたりかたるもおなし夢かあらぬか　埼玉　横田　秋子

武士のこゝろこめにしまくら太刀ゆめのむかしと成にけるかな　埼玉　横田　やな子

學び終へてわがふるさとに父はゝを見たるは夢か寄宿舎の夜半　東京　土田　八重子

燈火のかげはかすかに成たれどさやかに見ゆる夢ぞなつかし　神戸　尾澤　わき子

わかくさのもえでんはるを夢にみてしづかにねむる三笠山かな　伊賀　菊山　かね子

夢の間もわすれかねけり故郷のちゝはゝいかにおはしますやと　陸前　前田　河千年子

ゆめながら嬉しかりけれ故郷のおやはらからのつゝがなきこそ　陸前　前田　河みさを子

まくらへにはゝがみこゑとめさむれば音しめやかに春雨のふる　群馬　林　廣子

ほとゝぎす啼くと夢見てさめ果てしまくらに落つるあり明の月　三重　奥瀬　かすみ子

なきひととむつびかたりし今朝の夢さめて涙のいやまさりける　東京　永井　ふさ子

いたつきの床にいくたび夢むらん安のうき世をゆめ心地して　愛媛　廣田　せき子

つかのまもこひしと思ふなき母のひざにすがりし夢をみてけり　三河　榊原　きく子

夢のことはかなき物はなかりけり見たる影さへまぼろしにして　清國　岱　成梓子

はゝさまと呼びてすがりし夢のかひもなく跡さへも消えて燈の　東京　安部　ふじ子

何ごともさむるとしれる夢ゆゑによの人たれもたのまざりけり　下野　井上　絢子

亡き母のみあとこひしと泣きいりし夢のさめたる床ぞさびしき　大阪　田中　靜子

思ふどち友にこゝろをかたりつゝたどる夢ぢはたのしかりけり　岡山　小山　松枝子

おもふとも思はぬことを見る夢はおもひの外のおもひなるらむ　松山　田村　多豆子

去年逝きし父を偲びてよもすがら夢路にいらぬ夜半も有りけり　愛媛　樋口　孝子

あれ狂ふ駒よと見しはうつゝにて醒さめうれしき今朝の夢かな　東京　永島　蕾子

ゆめなりし風あたゝかき砂濱にやまひいえける母を見てしぞ　東京　森　ふさ子

よもすがらなき母ぎみをしのばれて夢ともしらで夢をみしかな　東京　美屋　竹照子

なき母にことがはさんと思ふまにさめてかいなき夢のあとかな　神奈川　渡田　治子

終りなく始めもわかぬ夢なるにまことなりとておもふをかしさ　東京　美屋武光子

けふなせることをさながら見る夜半の夢は夢とも思はさりけり　山口　村上操子

運命とかみの領せしはなぞのを夢に見しより目しひとなりぬ　能登　白百合子

うるはしき理想の國をゆめに得て小百合の花の眞なかに立ちぬ　能登　池野いさみ子

嬉しさに何かたらんとおもふまに夢やぶられぬち子のめさめて　三河　金原しな子

見初めたる夢にもうれし不二の山戀は見ぬとも日出度かりけり　横濱　船串寿代子

夢をみておくるあしたによしあしをかたる心ぞをかしかりける　東京　碓井のぶ子

春の野の夢にやよひしこひつしの星をみおくるまなこくもれり　新潟　小島まつ子

夢なりき人めまれなるやまなかにいつとせ曾ははぬ君におふとは　近江　大宮求馬子

短文

編輯局同人選

天賞

木津の舟人　近江　金子繁子

笠置の舊跡一覧。泉川に雲雀東風を得て、下り舟に帆をかけたれば、いと早く木津に着きぬ、笠置の案内者が南朝を說き、木津の舟人亦兩岸の名所を指敎す、彼等は其を誰より傳へられしや、

地賞

途上の夕　東京　大江鶴子

向ふの二階家の硝子障子に、薄う夕日がさして、柳の枝は搖めきながら影をうつして居た、それもいつしか消え去つて、四方は次第に薄暗くなつて行く、すると隣の西洋館の電氣燈がパット點いた、

人賞

牧場の春　備前　松本もと子

若くさ靑くもえて、牧場の春うつくしや、小羊は水を求めて走り、牛は草に飽きて眠る、雲間に雲雀の聲たかく、蝶々二羽もつれあひて低く牛の背をこえぬ、

選外秀逸

淋しき春　　赤坂　小田島とみ子

姉上の活け賜はりし紅梅も、果敢なくあせて、枕邊の詩集垢つきぬ、いたづきの未だ癒えぬ身のうら悲しさ、倚るとしもなく窓に倚れば、漸るゝ日影もわが運命かと佗しきに、解れ毛嬲る夕風冷たう籬が下の殘雪も小うなりぬ淋しきよ春。

初夏の田舍　　三重　奥瀬かすみ子

今日も蚊帳賣の人は來た、日は午、葉櫻の窓に糸車くつて居た婆さん、大きな目鏡越しに、ドレ〳〵と立ち上つて蚊帳を見て居る、日本晴の軒端に、けたゝましう雞が騒いだので、寐て居た小猫はむつくと起き上つた、

わかつきの蓮　　福岡　森よしき

その緑の葉に訪づれし朝風は、白露と共に星を碎きて池に落ちつ點滴の音は水紋を織りなして、輪廓は次第に擴がり、漣となり遂に莖は莖と搖れ、葉は葉とさゝやき、今し床しき香りは、亟々の蕾と共に、開きし曉の遂い花にぞありける、

天の川　　下野　井上倚子

筧の水音燈火のほのくらさ、さらぬだに馴れぬ旅の宿にねもやらず、小窓を押せば月白く、谷川の流を照し、右手那須山の煙は川に添ふて、はてしもしらず流れ行く、この煙と水の相合せしものは彼の天の川にてはあらざるか、

霜夜の笛　　群馬　竹のふし

厚衾數重ねても、霜凝る今宵は漫ろ襟元寒さを、何れの人のすさみなるらん、玉を轉ばす如き笛の音は、あはれ月に冴えて凍らんばかり、斯る夜半にこそ、月の都のうたげの樂もきこへつらめ、と思はれていとなつかし、

風呂たき　　備前　松本もと子

今日は吾が家に風呂たく番なり、水汲み入れて、焚きつくれば、煙ひく〳〵梅が枝をかすめて、夕の空に立ちのほるさま風情あり、籬一重隣の千代さんに風呂わきぬ、入りにきませと告ぐれば、はいと答へて、夕餉の支度にいそがしさま、

笑顔　　伊賀　蔣山かね子

あどけなきは幼子と老人の笑顔。物凄きは美人と氣違ひの笑顔。嬉しいのは夫と愛兒の笑顔。嫌いのは高利貸とハイカラ男の笑顔。氣にかゝるは姑と自分の笑顔。

あこがれ　下谷　鈴木つね子

女鏡の和歌欄にて天を得給ひし某の君、めでたき御才に御人柄も偲ばれて、あはれ樂しき交りをと朧月夜に家を出でしが、尋ね當てにし御住居、今更に心後れて生垣覗けば、明き障子に三の人影、わが慕ふ君は何れなるらむ、

妙ちやん　千葉　鎌田清子

三つの時慈母に先き立たれしあはれの妙ちやんは我が膝に抱かれて、スヤ〳〵と寢入りぬ、折ふし何處よりか眞白なる蝶の一つひら〳〵と舞ひ來りて妙ちやんの胸にとまるよと見る間にをゝ妙ちやんはいと平和なる笑顔を作つた、

あはれ少女　大坂　船越小仙子

姉が嫁入り先に可愛の子を殘して身まかりし跡へあはれ十五の少女、厭といふを無理に望まれて、泣いて姉夫の妻となりぬ、容姿風貌の世に臈たけて美くしく生れざりせば、かゝる不幸はあるまじきに、

梅花　岐阜　松岡章子

白妙の雪の峰に、凛烈たる寒風を犯して咲く梅花の、艶麗高うして香優れ、質實にして久しく花の兄として愛でらる、我等の勤もかくこそありたけれ、金殿玉衣の中に生ひ立ちし人に、偉人少なきは此のためしにや、實に床しきは梅の花よ、

紅梅　東京　田中千賀子

もうお隣の白梅は、四五日前からほころび初めたのに、家の紅梅はなぜ開かないのかしらんと、待ちどほしく思ひつゝ床に入つたり、其の夜咲いたにも咲いたにも、實に見事に咲揃うた夢を見たので、朝早くとんで出て見たらやつと一輪、

白梅　大阪　黑田代音子

お二階の掃除を濟して、欄杆から麗らかな旭に、一面きら〳〵とまばゆい川や堤を眺めて居ると昨日迄で氣が付かなかツた友田さんのお庭の白い梅が、遠目にも目立つ程開いて來た、青い生垣との配合の美しさ、何だか此處まで香ひがする樣だ、アヽ欲しい一枝でも、

鶯の聲　岡山　小山松枝

なつかしき梅花の節操をめでゝや、朝霜寒き中にも、ホーホケキヨとうたふうれしさ、みつからは清き香をしたひつゝ、美しき聲には世の春を知らしむ、まして外征の將卒、大かた凱旋して、暖き團居にこの初音をきゝたらんには、いかに、

春の一日　群馬　林廣子

去りぬる月の半になん、空も名殘なう晴れ渡りて、吹く東風も何れ已みを誘ひ顔なるに、そゞろ心もあくがれて、梅に名に負ふ社の邊りに、清き香を愛でなんと、一日を遊び暮しつる、思へば樂しき日にてありし、

深雪の里

越後　山田浪子

積雪丈餘軒を埋め、人跡絶てこゝ四ヶ月、きさらぎと云ふに吹雪窓を打ち、遠く野狐鳴て斷腸の思をなさしむ、茲に至て獨松柏色をかへず、我も松柏に習ひて、風雨烈しき浮世に戰かひ、堅き操を守らなむ、

古城の雪

相模　森田葉流子

櫻花の散りかゝると見るまに、いたく降り増りて、大吹雪となり目に入るものは、降雪に包まれぬ、石垣のたゞずまひ、殊にあはれに、緑にかゝる白妙は、松の千世を見せ、堀水こぼれるあたりは、白玉の浮島の如き、何れも昔懷しからでやは、

雪中の梅花

伊豫　益田春子

夜の間に降り積りたる此白雪、先づ姉君にと筆とる折しも、梅が枝片手に妹の、我も一花姉君にと手折らむとすれば、はら〱と枝離れ行ゝ哀れさよ、哀れ散りにけり、今一枝と雪ふみ分けて行く妹が優しさ、哀れこをきゝ給ひし姉君はとこよ、

幼兒

千葉　木村きよ子

月雪花さても美しの文字ゝ、しかも花の如雪の如美く清く、はた月にも比ぶべきすみ渡る心もてるは幼兒にこそ、しかもその濁りにそまぬ愛らしのさま、やがてはいかに天下の耳目をや驚動すらんかと思へば、また頼もしきは幼兒哉、

夜

大阪　田中郁子

萬籟死して聲なく、夜色沈々たり、月は破雲に隱れて、星光僅に岸頭の孤松にかゝり、河上朦朧として煙の如く、滿目の靜寂身は幻境にあるものゝ如し、

五色の糸

能登　白百合子

もし神樣が白い糸を善人の死骸の頸にまきなさるとすれば、黒い糸は惡人の頸に…………、黄ろい糸を高利貸の胸にかけなさるとすれば、紫は若い詩人の胸に…………、そして紅は戀になやむ乙女の胸に…………、

思ひ出

相模　大谷津芙蓉子

松の木の間に燈火きらめきて、笛の音かすかに消え行く時、あゝ思ひ出づるはなつかしき友が邊、諸共に手を取りて櫻ちり來る木かげに、心ゆくばかり語りて泣きて、泣きて語りし、去年の夕暮さてもこひしや、

妾、消えてもいーわ、

越後　松永繁子

妾どーして雪になんかなつたかしら、でも安心だわ、もー破屋の窓迄來たもの、そつと覗くと、おや寒い、吹雪つて、可愛孤子の美代ちやんが、暖い手でじつと握りしめるのよ、妾もー嬉いのに柔い肌に抱れた、嗚呼妾もーもー消えてもいーわ、

友の消息

播磨　横田泰枝子

親しき二人の友より、一時に屆いた封書と繪葉書、一は母君早世の悲しき知らせ、一は有馬の宿より、ホ子ームウンのたより、あゝ悲しみてよきか、喜びてよきか、筆取れば、あやなく涙は浮びて、にじみがちなる、御悔の手紙は認められぬ、

愛

三河　石川早苗子

愛は美善の源なり、愛は大地の賜なり、實に神聖にして侵す不可社會皆愛を以て秩序を保つ、嗚呼愛すべき哉、愛、

胡蝶塚　　大阪　木村春江子

雨はれし朝、可憐の蝶の姿を、落花の上に見出しぬ、白き翼は痛く濕りて、復舞ふべくも非ず、蝶は長き眠に就けるなり、此時より我が園の隅に、小やかなる木標は建られぬ、胡蝶塚とは妹の兒束なき筆もて、此の標に記されし文字になむ、

以下五篇、規定の百字を超過したれど、捨てんも惜しければ掲載す、以後此規定外のものは採らざるべし

心長閑の春　　播磨　榎倉とみえ

母と供に針にいそしみ居る折柄、一聲高く電報……、いそぎ見れば兼て出征有し兄の、今日しも神戸港迄て凱旋との知らせ、母勇喜び、他出なさるゝ父上の、早く歸りませばと、門に出づれば早父上も何處にてか聞れしと見えて、喜悦顔で、見事咲ける梅ケ枝を片手に歸り來られ、自に是を生よと渡さる、あゝ長閑なる此初春、

雪の朝　　大阪　池田英子

吹きすさひし夕べの嵐の名殘にや、ねぐらを出てしむら雀のさゝやきに、臥床はなれ、窓押し開きぬ見れば、荒しゝが儘の庭も籬もいつしかに面變り、一塵だもとゞめず、見渡す限り白妙の、木々の梢も花ならぬ、六花に光りを添へ、にほふばかりの美しさ、春にも優る此景色、あたりの草木は雪にうつもれ、中々に萌え出てん樣も無きに、獨り百花に先き立ち、風雪を事ともせて、我大和むのそれならで、咲きそめし梅の一二輪、げに月光に照らさるゝ花のこゝとく芳はしき香を放てる其美はしさよ、折柄あこがれて來し鶯の、それ梅が枝にとまると共に、はらはらと落つる雪の花それと同時に美妙の樂、唯恍惚として、神妙の樂園に遊ぶ如、訪ふ君のありせば、いかに興深からん、いく埋火の許に眺めやらん獨のわびしさよ、

同　　大阪　黒田代音子

朱のをばしまに、紅の裳長う、四方の景色に大和歌よみいで給ふあて人も、風の日、雨の夜も、山に海に火がすさはひ援けつゝ玉なす肌を襤に包む、賤の女も、同じ女と生れ來しを、などてかくけじめはあるならん、そゞろに思ふ雪の朝、あゝ雪ばかり慥かしきものはあらじ、九重の宮居も、柴の屋も白妙に粧ほひて、何れをそれとへだてなし、世の事なべてかくあらましかば、

妾の思　　東京　岩垣貞子

夕べ春の野に我れ立ちぬ、鶯はなきぬ……、あゝされど、妾は春をたのしむものにあらず、梅笑ふとも雛呼ぶとも、妾は伏家にとぢこもりて、みかへるのいとまなく、人生の春幾歳のたのしみ盛りを煩悶の兒となりておはるなり、あゝ、姿が春をたのしむ人となるは、死しての後?、妾は世に希望なき身なり、

評　さりとては心細きことをいはるゝものかな

述懐　　東京　原澤あき子

榮枯盛衰は世の習ひとこそいへ、はかなき物は女子にこそあれ二十年前は脊の君も未だ世におはせしかは、何かくと行末をのみ樂しみ暮せしも、ふとせる風の煩きやまふとなり、一年餘りなやみ給ふ、いかにかくと種々にみとりし甲斐もなく、ついにうせ給ふ同じ道にもと、ばかり悲しきも、いとし子の行末思ひやられしら

すゞくも十あまり五年六年をふりにたり、さるを去年の春、幸なき事の身にふり掛り、廿年餘り住なれし賤がふせやの、細き煙をさへ立兼て、

けふゝりの後のあしたのふる里と　見かへる軒に春雨ぞ降る

新體詩

地賞

花賣る童

東京　廣瀬健子

空にのこれる月かげを　笠にうつして我くれば
袖のしづくか朝のゆか　やれし衣もしめり果て
そゞろに憂の思はれて　歩みもおそき野邊の路
思へば去年の秋のくれ　杖とたのみし父うへは
入相つぐるやまでらの　鐘のひゞきと消失せて
かへらぬ旅に出ましぬ　のこるはわれと母上と
細きけぶりを立つゝも　流れてはやきとし月を
送りむかへて一とせの　むかしと今は成にけり
櫻にかすむはるのあさ　そらさへすめる秋の夕
花にあくかれ月にあひ　風流つくせる世の人の
樂みいつもたえざらむ　それに引かへ己が身は
いやしきわざを營みつ　今は花賣る身となりて
朝な〱にほどゝほき　道ふみ越てやう〱に
京洛の巷に來てみれば　口さかもなき京わらべ
こゝにかしこに群りて　われをながめて笑ふ也
花うるこゑの卑しとて　うしろ姿のをかしとて
のゝしる聲は聞ゆれど　思ひのしげき我なれば
しのぶ心はすみれぐさ　花なでしこの色も香も
都のひとはたのしめど　など我のみは憂るらむ
さはれ浮世は秋のそら　かはるは人の常なれば
識る人こそおろかなれ　我身の末はうもれ木と
いかで空しく朽ぬべき　心のこまにむちうちて
行末とほくうつろはぬ　ほまれの花を手折來て
なき父上にたむけばや　忘れぬみ墓のその前に

人賞

袈裟御前

大坂　木村春江

いつかは消る露の身の　もろき命は惜しまねど
情のもゆるやわむねに　つきぬ恨を秘め置きて
あだし刄のさびとなる　海さえにしぞ恨めしき
夫はしらねど我はしる　是ぞ別れのさかづきと

ふるふ手先につぐ酒の　中に交へし血のなみだ
せつなき心えも知らで　あましと君はゑひ給ふ
あしたの鐘に夢さめて　冷たきむくろ見給へば
猛き御胸もみだれんを　悟るよしなき春の君が
安げに見ゆる御ねがほ　ながめてたるゝ涙かな
火水の中ももろともと　ちかひし君に先立ちて
ひとり越行く死出の旅　あとに心ののこる身は
三途の川をわたるとも　靈はこゝらに迷ふらん
よわる心をはげまして　取るや片手につげの櫛
丈にあまれるくろ髮を　解きつ洗ひつ又梳きつ
結び上げたる我すがた　寫すもあはれ水かゞみ
月かげ西にかたむけば　とゞろく胸を押しづめ
かたしく袖や露のとこ　死をまつ現つ夢にして
小鹿の角のつかのまも　君が面影せめて偲ばん

選外秀逸

こぼれ梅　　三重　奥瀬霞子

お小夜十八村での美人　若い男の云ふ事聞けば
何の解きようぞアリャ石女と　人に呼ばれて莞爾笑ふ
花のかんばせ眉鎌月の　鎌を片手に花籠負ふて
可愛口元チョト紅點て　やさし額は芙蓉の花よ
春さ朧の月奴がねたむ　夏さ蛙がわい／＼騷ぐ
秋さ尾花が戀しと招く　冬さ雪奴の思ひが積る
男嫌ひの犬好き／＼で　見やれ明治の伏姫樣の
艶な姿の通つた趾にや　きつと香のない穢れ梅

春の日　　播磨　横田春枝子

おもき重着ぬぎかへて　花染ぎぬに身もかろく
山田の澤に根せりつみ　霞の野べにてふおひて
つかれて歸る夕まぐれ　もすその塵を洗はんと
春戶の小川に立よれば　底の小石のかずみえて
くむ手あふるゝ水清く　うつる緋桃の色のこき

茶　　神戶　足立あさ子

木の芽春雨ふるき世の、　かをりを今も汲て知る、
宇治の清水や栂の尾の、　松吹く風や釜の音、

須磨　　神戶　尾澤わき子

浪の關守る須磨の浦、　船さし止めてながむれば、
昔の竹の世はかはり、　青葉の松に笛の音、

尋梅　　東京　松原千代子

もれつゝにほふ紫の
八重の霞のおしみてか
紫なしろへにとめ行かん
袖につゝめる梅が香を

同

和歌の浦にて

さと打ちよするよこ涙の
みなそこ深く月すめる
かき亂すなるうたてさよ
和歌の浦わのもしほ草

奈良　山澤さよ子

梅

朝日さしそふ丸窓に
氣高き香紛々と
この花さかす梅が枝に
ホーホケキヨーとさへづりし
清き姿をうつしつゝ
あたりにちらす梅の花
いつこよりかは來りけん
その一聲もかほるなり

下野　井上倚子

菫

春の女神のやわらかき
ゆかりの色の香は高く
歌にうたわれ詩によまれ
姫のみ髮にかざされつ
こき色あせず匂ふなり
人の手よりも大いなる
吐息にふれて咲いでし
其名やさしき菫花
樹に忘がかれつ手折られて
玉のみ文の其の中に
汝は花なれど幸は

陸奥　相馬冬子

春の野

ましろに見えし雪きえて
千草は生えて木はめばり
吹くとも見えぬはる風は
野は面白くなりにけり
ひばりはなきて蝶もまひ
靡く柳にしるばかり

能登　白百合子

春の夜

春の夜はあたたかに
傷つきし人の子は
一とせの春とまた
ふけぬれどさはされど
かくてえもねむられず
けふの日と入りみだれ
思ひ出は空を行く
うつれどもいづれかは
美くしきあるはうき
けはひよと見るのみに
さはされどわれとわが
人しれず身をいたみ
君にやはつげ得べき
花ふゞきこゝろにし
とらへわびたゞうまし
なやましき花片の
いやさらにいたみいる
つくりたる傷なれば
死なんともいかでかは

東京　永井ふさ子

春の夜

北風さむき二月の
拍子木たゝく火の番の
天地淋しく人ねむり
空に殘れる十日月
足音たえて聲もなし
靜にふけ行く江戸の町

野州　金子とし子

新　年

彼方此方に賑しき
四海の波もおだやかに
あかつき告ぐるくだかけの
東の御空紅さして
四方山照らす初日影
かざる松竹注連なわも
かくも樂しき新年を
祝ひ迎ふも御君の
御厄拂の聲もたえ
世もあらたしう立初めぬ
初音の聲に目醒むれば
平和の女神美しく
軒ばにな日の御旗
ゆるがぬ御代の目出たさよ
千年百年かはりなく
深き惠みのためぞかし

備前　松本もと子

ゆ　め

華燭ゆらめく大廣間
幾世の契結ぶとて
うけ！盃はちらひに
あはやと見れば曉の
やつれはてたるわが身かな
今よひ戀しきかの人と
燃ゆる心や頰のほてり
思はずわが手すべらして
夢と空しく消えゆきて

折にふれて

千葉　鎌田清子

書斎の椅子にもたれつゝ
はるか彼方の細道を
行くをあはれと見て居たる
共に来にしは日頃我が
すみれの花束右手にして
さし出す様の愛らしさ
思はず我れは抱き上げて
二三のキッス續けたり

グラス窓をば打ち開き
小さき男の子の馬引きて
折りし床しき花の香と
いとも愛でぬる妹ちやんよ
さあ姉ちやんに上げませうと
その心根のやさしさよ
くれなゐもゆるその頬に
あゝ愛らしの妹ちやんよ

亡き妹

大阪　田中静子

思へば去年のきさらぎの
わが最愛の妹は
悲しむわれを殘しつゝ
ふたゝび春は来れども
日頃好みし梅の花
愛せし主は消えゆきて

春まだ寒き夕まぐれ
消えゆく雪と諸共に
あゝ黄泉に旅立ちけるよ
われ妹なきを如何にせん
淸きかをりを放てども
いく日待てども歸り来らず

逝きし友を惜む

大坂　黒田代音子

錦の衣綾の袖
眺床しき高殿に
心の儘の名所や
胡蝶むつるゝ春の朝
萬の業をいそしみて
花の盛のよはひにて
幸ある姫と世の人に
假初ならぬいたつきに
名殘をしくも消え行きぬ
躰てかくとは聞きつれど

うき悲しみも白雪の
月の桂も咲く花も
墨田河原に館して
雁鳴き渡る秋の夕
色香目出度き山櫻
雲井に高く嫁ぎまし
仰がれにしを傷ましや
春まだ淺き淡雪の
みつればかくろ習はしの
有し昔を偲ぶれば

同じ涙を止め得ず
双の袂を絞りけり

亡友を慕ひ給へる君に

東京　永島雪子

思ひ思ふて親しみし
哀れやさしき心やな
さは去りながら見給ひね
消へなむとして又光る
浮世の情理は斯如し
未た春若き君にして

君天外の士を思ふ
風にゆらめく燈火の
天外の士を慕ふ勿れ

はしため

東京　鈴木つね子

かつては汝も上京に
慈愛の園に生ひ立ちて
小唄に花とおごりしを
うらぶれ果てし昨日今日
戀に微笑む乙女子の
霜置く朝は裏道に
朱の前垂形ひそめ
氷踏みしめ井のほとり

粧競ひ！紫閣の
さがなき京の童が
慈悲なき人の婢と
柔肌馴れぬ粗衣や
根掛簪も欲しかるを
人目羞らふ小走りや
風荒ぶ夕暮は
玉手さらして米白ぐ

誰かしる

大和　栗山多加子

浮世のちまたのがれ出て
松はみとりにすなしろく
渚につなくさゝ舟に
沖の方えとみなれ棹
風波のこゑも靜なれは
あまが小うたふ舟歌を
こきにこき出す身の中の

はまの眞砂路たとり行く
夕陽西にかたふきぬ
身もやすらけく打のりて
さしてと渡るなみの上
心のとけきおもひして
きゝては興をそ覺えつ
たのしき思たれかしる

おもひで

踊らしの夏のけぬると
心ゆく幸の夜明くと
彼君は來ぬまたさりぬ
秋は葉落らし森かそも
訳口われし笛竹か
戀なきになく夏つばめ
されどわが若き血潮は
徒心いつはりや
明日をたのみの心には
木々のみどりは落ち散りて
新床に眞白花百合
頰あかきひとの柩に
わが花はわすれ草
生きながらなるわが墓に
かくこそ老いめ友よいま

能登　白百合子

春のよの夢ほろびぬと
それよりもはやがけり

『甘睡』羽うちてにげし夜か
忘られぬ破壊のわれ
梟の夜ともなりぬ
あゝ君ともろぎへの

『かなしみ』をうめ『睡』こそ
霜枯れの我や冬
美し粧がかざしにさうぞ
藤色の花すみれ

これなみだよりふさはしき
慰むな塋ふるな

石佛

永久にさか行く姫松の
冷き石を墓とし
戀に泣けるを見そなはす
戀に泣く子の手向花
望みの色も絶えせしを
『笠の松なら蔦かつら
肉を捨てたる朝あけに
怨みの色をもやせども
とかくに此の世もだひあり
枯葉落葉の二葉松
戀を捨てむのこの子亦

越後　松永繁子

太き二本たてにして
幾世はかなき人の子の
ちぎれの袈裟の石佛
葉さへ花さへ枯れ枯れて
なほ頼む哉戀の子よ
戀にもたひて里姫か
み生ひし蔦の今もなほ
あはれ涙をかけもせず
戀ははかなし戀せざれ』
獎まれては怨みある
抱きて泣きぬ石佛

短歌

天賞

東京　遠山八重子

蝶

夢の世の夢も見はてず散る花に
おどろかされて胡蝶飛ぶなり

地賞

丹波　山口敏子

春月

いひしらぬあはれをこめて匂ふなり
梅が香しらむはるの夜の月

人賞

東京　土田八重子

探梅

くさの家もまじる杉田の梅ばやし
鄙びぬこそみやびなりけれ

選外佳調

東京　土田やゑ子

鶯

木傳ひておのがちらせし花なるを
恨みかほしてうぐひすのなく

春雪　備前　松本もと子
藤原の大臣の車すきゆくや
みやこ大路を春の雪ふる

窓春雨　大阪　木村春江子
散る花を妹とかぞへしふるさとの
空なつかしきはるさめのまど

春野　神奈川　三谷さわ子
飯かしぐ夕の烟かすみぬる
春の野を行く馬子の一つら

春野の花　千葉　佐野篤子
若き畫師がこぼせし繪の具崩え出でて
地をかざるか春の野の花

朝雪　三原すな子
春秋のはなをめでてこしめにさへも
雪のあしたのおもしろきよや

折にふれて　備前　松本もと子
みちのくの飢えに泣く子のそのこゑを
おごる都の人に聞かせん

小松重盛　神戸　尾澤わき子
あめか下たのむ小松のかれしより
あらき風のみふくはらのさと

若菜　横濱　船串米
春日野の朝つゆはらひふみわけてみとりの若菜つきんとそ思ふ

同　神戸　今西操子
しつの女かもてる手籠やはるの野の深田に生ふる若菜なるらむ

同　東京　松原千代子
思ふとち心なのへのはつわか菜つまぬほとたにまつそたのしき

澤若菜　肥後　友永常子
春もまた淺澤みつのけふりよりもえてふかくも根さすせりかな

霞　大阪　船越小仙子
空のうみ星のはやしもかすみけり月のみふれもまとふはかりに

同　横濱　船串喜代子
わたのはらなみ路はるかに見わたせは霞そわたる春のあけほの

海邊霞　岐阜　中島素子
打いてゝ浦わつたひに見渡せはあまのとまやもかすみそめけり

孤島霞　肥後　友永常子
たちつゝく波のほよりや沖遠きはなれたしまもうちかすむらむ

鶯　大阪　池田英子
わか庭の梅にあこかれ尋れくるはつ音ゆかしきうぐひすのこゑ

同　武藏　青柳蝶生子
うくひすの春をいろ音のむさほりや隣りのたんな梅よりはしる

鶯知春　東京　碓井のぶ子
ひたすらにまなへるまとにうくひすの聲にはしめて春をしる哉

同　石川しげ子
賤か家に春告けかほにおとつれて今朝うくひすの初音するなり

窓前鶯　三河　永井さい子
とりいてゝよむ文の名の梅かえに初音をうたふまとのうくひす

竹林鶯　鹿沼　金子とし子
今日そきく乳母かせとやの竹むらにまた節なれぬうくひすの聲

殘雪　香川　星野ひさ子
春きても去年のしら雪消えやらて里吹くかせのさえにけるかな
餘寒　下野　木邑節子
春寒み老ならぬ身もともすれはたちはなれうしうつみ火のもと
同　東京　碓井のぶ子
玉くしけふたゝひさゆるきのふけふ寒さはいとゝ冬にまされり
梅　東京　安部ふじ子
のとかさに其の香を訪へば梅の花坊か笑かほにほろりと落ちぬ
同　群馬　林　廣子
まこ手らに諸手ひかれておい人の梅のその生をあちらこちらに
同　下野　井上尙子
春風にかみなふらせてさまよふ日梅のつほみのほころふをみし
同　牧　はぎ子
ふりつみし雪に耐えてやしつか家ののき端に梅の花咲きにけり
同　福岡　小島まさ子
たなひける野邊のかすみのいつこよりにほひこほるゝ梅の初花
同　大阪　池田英子
春なれと雪さへきえぬわか庭のうめのはつはなほころひにけり
・夜の梅　佐賀　笠原廣子
はなに起きてはなに休みてうくひすのゆめ溫かきよるの梅かな
同　北海　磯部照子
うくひすのこゑはなけれとおほろ夜の軒はの梅のかなり床しき
同　清國　富成梓子
よむ文のなかなる人のそらたきのそれかあらぬか夜半の梅か香
同　東京　永島ゆき子
はるの夜のかすみをわけて梅の花かなりもたかく咲き匂ふなり
神前梅　播磨　横田春枝子
おい梅のかなりもたかき神かせやおはしまなかきみやしろの庭
闕の梅　香川　星野ひさ子

日おもての園生の梅の咲きみちてかすみもれくる香こそ深けれ
梅馨袖　越中　横谷八重子
あそひてし杉田のさとのしのはるゝ梅か香なほも袖にのこりて
同　横谷やへ子
みやしろにぬかつきかへるわか袖にかをりてのこる亀井戸の梅
梅露　奈良　天野照子
うめか枝にむすふ白露したゝりてはなのかをくむ庭のいさら井
深山の梅　大阪　田中靜子
おく山のたにまかくれの梅の花きよきかほりを誰にかたらん
青柳風靜　京都　下川登美子
長閑なる[illegible]かたなりけり青柳の吹くとも見えぬかせになひきて
若草漸青　新潟　岩本翠浪子
玉くしけ二葉みつはの淺みとり春のいろそふ野へのわかくさ
春雨　神戸　足立あさ子
ぬしや誰とゝひいしつたひはる雨に濡れてそひらく庭の枝折戸
同　能登　池野いさみ子
拍子木に歌舞伎ふれ行くなには津や船にぬる夜を春のあめ降る
同　備前　松本もと子
春なれやこし路は雪のしろかるを京にのほれはあめほそうふる
閑中春雨　肥後　友永常子
かりかれのこゑも消え行れやの月にさひしさそへて夜雨のふる
春月　神戸　尾澤わき子
時守もおほろつき夜の影ふみてうつやつゝみの音のかすめる
渡春月　大阪　林はま子
渡し守さをさしくたす水のおもにかすみてすめる春の夜のつき
湊春月　大和　栗山たか子
波のはなはるめくころはみなと江の月もおほろにゝほひぬる哉
春曙　石狩　加藤すゞ子
消え殘る中洲のゆきのなかめよしいしかり川のはるのあけほの

春風　奈良　山澤さよ子
若菜つむ千箏のリボンもひら／＼と吹く春風にゆらぎそめたり
雲雀　松山　田村多豆子
み空よりおつる涙見れば夕ひばりおのがすみれの床は忘れず
桃　新潟　中林ひて子
親なひくおとゝきこえて桃あかきわら屋の軒にくたかけのなく
温泉のやとあたゝかに日はさして湯けむりしろう桃のはなさく
里桃花　京都　下川登美子
梅はちりさくらはまたきやま里に咲きこそにほへひめもゝの花
花　津　神田みよし子
こてふにはあらぬわれさへ咲匂ふ花のいろかになをまよひつゝ
古郷花　東京　敷島うた子
立かへりむかしの春やかたらましわかふる里のはなの木かけに
落花　新潟　山田濵子
馬ひきて花野をかへる笠の上にはら／＼かゝるやまさくらはな
同　陸奥　相馬冬子
たゝひとりのとかに歌をおもふとき瓶にさしたる梅のはなちる
春野の夢　千葉　鎌田清子
はるの野に花なしとねの夢しばしさくらの宮を見しぞうれしき
同　上総　鎌田壽賀子
金色のこてふとなりてはるの野に花とかたりしよへの夢かな
春の夕暮　福岡　森よしき子
しつか家ののき端のけふりすゑ消えて梅さくほとり鶏の聲する
春の夜　上総　鎌田壽賀子
月おほろほのかにかほるしら梅のはるの夜そゝろ夢こゝちなる
春夜の夢　千葉　鎌田清子
くれなゐの扇かさしてさくら宮に舞ひてくらせしはるの夜の夢
春山　但馬　西堂美津惠子
春の山かすみにまてもくれなゐのいろのうつるは花のさきしか

春川　東京　瀬藤ちよ子
田せり摘むきしの小川に舟浮けて水なふるなりさとのわらへら
なはの歌の中に　東京　高橋珍子
玉すたれかゝくる程はさむからてはなのふゝきに庭ましろなる
同　神戸　水越輝子
花鳥の色音はくれてをやま田にかはつ啼く夜のつきおほろなり
同　近江　上西園子
しつの家も春の八千くさ咲いでぬはなに貧富のへたてなくして
同　長野　岡田千穗子
うすゝみにゑかけるかこと大空のかすみのおくにみゆる山のは
霧生はかり旅にとてゆく人を送りてよめる　東京　小林芳子
百とりのいろ音ゆかしき春風をたもとにしめてゆきかよふらむ
行く春を惜む　東京　永井ふさ子
隅田川せきやの里よこゝろあらは暮れゆくはるをなほ止めてん
白藤　能登　池野いさみ子
龍さめて舞ふにかなしき金殿やあめにこほるゝしらふちのはな
湖邊の霞　近江　大宮求馬子
鳰のうみきりたちこむる朝ぼらけ船の帆とほく見えそめにけり
肥前霞　肥後　友永卒子
まとの月を宵さえ／＼てうつ見ればあられや風のつふてならむ
初ゆき　東京　林田糸子
宵の間に降りてや庭の梅か枝にはなともまかふ今朝のはつゆき
山家冬　栃木　山村くら子
消えのこる榾火かすかに山里のあられふる夜をむさゝびの鳴く
雪竹　東京　碓井のぶ子
すかたこそ雪にたわめと呉竹の世にうきふしのみさを正しき
雪中雀　丹波　大槻とく枝子
降りつゝくこのおほゆきに群すゝめえをはあさるか賤か軒はに

待梅信　神戸　足立ゑい子
馬に鞍おきても鞭てもまだれけりうめのたよりのけふや月が瀬

寒中梅の盛りを見て　相模　森田はる子
春とほき空にさきさく梅のはなたゝつむゆきと見るはかりなり

新年の山　牧　はぎ子
あらたまる年の始めのそらはれてさやかに見ゆるおちこちの山
高雄山ふもとの里に立つけむりとし立つ今朝はかすみとそ見る

新年河　石川　しげ子
ゆら〳〵と水に初日のてり添ひてながれきよけき信濃川つら

同　大阪　池田　英子
あら玉の年のはしめは川みつもすみわたりぬるこゝちこそすれ

新年懸　大阪　林　はま子
あた波もしつまりはてゝうくひすの聲ものとかに年たちにけり

立春海　東京　土田八重子
うつ豆に鬼も西へとながれうせてのとかに立てり春のさゝなみ

初鶯　群馬　竹のふし
たちならふ梅の小枝にさゝなきの春またあさきうくひすのこゑ

初春水　下野　木村節子
結ほれし水のこゝろも打とけて今朝しつかにもさゝなみそたつ

春氷　陸前　前川河千年子
春なからこちふく風も身にしみて今朝はたらひの水も氷れり
あつ氷かたしとみてもこゝろせよもろくもとくる春のこのころ

折にふれて　下野　井上倚子
花に眠る胡蝶としはし身をなさはかりねの夢はのとけかるらむ

同　愛媛　高橋茂子
たちよらはあつさ寒さもなかるらんみおやの森のはゝそはの蔭

同　越後　松永繁子
はしちかう夢やしらへん夕つきよ軒はのうめも香にゝほふなり
うふすなの森のさくらの散りちりて小雨ふる朝ともそこひしき

同　能登　池野いさみ子
うたの會やひと織ひそめて春のよひふし目となりぬ雲洞のかけ

同　伊豆　金田春子
大杉は日ことかすみぬこまやかに菜のはな黄なる伊勢の里かな

同　伊豆　廣田政美子
君思ふおもひつくしのゆめさめてまくらにひゝくあかつきの鐘

同　千葉　佐野篤子
なへて世にさきかけにほふ白梅の花のこゝろをこゝろともかな
征矢負ひて金髪かたになかれたる騎士のよそほひよ夕べの滝岡

嶺上雲　津　神田みよし子
雨となり風となるへきけしきをはをちのたか根の雲に見るかな

水　松山　上原のふ子
ふちとなり瀬と流れゆく川水はうきしつむ世のかゝみなりけり

朝　越路　松永繁子
みやこよりかへれる姉と花のあさそゝろあるきの興おほきかな

雞　薩摩　松原みれ子
時計るうつはある世もたのむゝなあかつききちかきにはとりの聲

時計　肥後　友永章子
時はかるうつはの針にかけのこゑたのまぬ世ともなりにける哉

凱旋　越後　石川しげ子
御いくさにいさをゝ立てゝ我背子の旋る今日こそ嬉しかりけれ

凱旋を祝して　東京　櫻井ひさ子
二とせも花さくことのなき家にうれしや笑みぬわがせこの面

凱旋の兄君を迎へて　羽後　鈴木しゆん子
つゝかなき身をは互に祝ひつゝにきりあふ手にまことこめたり

戰死　牧　はぎ子
おほきみのために失せにし武夫の高きいさをは千代も朽ちせじ

繪葉書　佐賀　笠原廣子
春の野ににほふすみれの一もとを葉書に植ゑしいもがあやふで

同

開けゆくみよのしるしは一ひらの紙のおもてにあらはれにけり　大阪　黒田代音子

[illegible]

朝日かけさしそふ花の下かけに手かひのれこのやすくれむれる　筑前　松林歌子

戀

なにとなく其の面影の身にしむは世に戀と云ふものにやあらむ　三重　奥瀬[illegible]子

小野小町

うつろひし花のむかしな兇ゆまていまも匂へりきみかことの葉　薩摩　松原みれ子

遠國の友に

すむ里は八重の雲路をへたつれとへたてぬ友のなつかしきかな　野州　金子とし子

救護解散につき友によする

はなれうき袂をこゝにわかつとも雁のたよりは聞かせてよかし　東京　林田米子

內作地動使の御巡視ありかたきまゝ

いかにせんわか大君の御つかひをさむさしのかす一岡たになし　陸前　前田河千年子

女艦衆題氷始結に天位に當選せしをよろこひて

小山田のみのりよからぬ民草をあはれみまして御つかひやたつ　肥後　友永章子

山の井のあさき言葉もふかしとてくまれしことのはつかしき哉

俳句

天賞

長き日　函館　都築春子

地賞

同題

ながき日や子にねだらるゝ遊び賃

梅

梅咲くや酒賣る家は十八町　飛騨　太田やす子

人賞

春風　備前　松本茂登子

春かせや胸掛あかき地藏かな

春一ダース　相模　倉橋よし江子

春雨にぬれて戻りぬ文使ひ

三ッ越せは乳母の里なり春の山

烏帽子折る京は室町春の宵

雁風呂やともし火暗らき莚壁

春風や貧者が家を玉のこし

梅の香や呉越の垣の隣りより

菜の花に千代紙着せし人形哉

寢ころむで芝生に仰く雲雀哉

行く京の繪圖出して見る宵の春

春の夜を花見道化の工夫かな

大佛や霞は冷えて花の雨

知る人と間違て呼ぶ朧月

春季雜吟　東京　一宮愛子

紅梅によき女棲む貸間哉
紅梅の隣へ逃げし小鳥かな
春の夜の猿楽更けし館かな
春の雪の鏡に映る湯殿かな
春雨やよき人眠る須磨の家
春の山白帆の影にかくれけり

同　京都　石橋こう子

南椽に小猫眠りて蝶の飛ぶ
茶のぬるき春の茶店や牛のなく
梅咲いて姉のお産も今日か明日
なき夫の位碑の前でするお産

羽子　石狩　加藤すゑ子

振袖を苦にせぬ羽子の上手哉

梅　福岡　森よしき子

火を消せば障子に梅の白さかな

春風　香川　星野ひさ子

春風に田鶴の毛衣戦きけり
普請場の檜匂ふや春の風

梅　同

梅一木目立つて寒し屋敷跡
日當てよき藪家なり梅長者

柳　越路　松永繁子

料理屋のつぶれて殘る柳哉
居酒屋に駒つなぎある柳哉

春雨　備前　松本もと子

春雨や一人はほしき妹かな

雛僧の火鉢にねむる餘寒哉　伊賀　菊山かれ子
東海に花の島あり名は日本　東京　林瓊子
行燈を笑ひ消しけり春の宵　山形　岡田南無子
迯る花嗣の花もそへにけり
山にあり野にあり人の春心
金屏のかゝやく雛の粧ひかな
羅や秋を透ける小短冊
曉の井戸に星見る餘寒かな
紅裏のあせたる戀や衣更
誰か墓へ手向けらるゝや花樒　越路　松永繁子
赤椿死にたる姉へ手向けたり
白魚は皆雌らしき姿かな　東京　磯矢みや子
春風や嫁入りのゆく舊街道　福岡　松本もと子
春雨や土橋を渡る蛇の目傘　相模　大谷洋芙蓉子
春の日や寺院の庭にさくら散る
友禪の裾泥にせし汐干かな　信州　小林つれ子
乳母少し居眠りしけり若菜摘

つみて來し若菜厨へ配りけり
若菜摘み佗みてまゝとしたりけり
馬車降りて姫君若菜つみたまふ
あら磯と乳母へとりつく汐干哉
寒からぬ風顔を吹く汐干哉
一舟は女はかりや汐干狩
泥の手にちよと帶解けし汐干哉
音樂やかるたの會や松の内
うらゝかの原に草つむ稚子の群
長閑さは花に眠れる蝶も見え
春の風愛うつ浪も靜なり
摘草に置きわすれたる日傘哉
摘草や練兵場に日もすから
陽炎や碧の空におこりけり
朧月武者の小路を馬盜人
佐殿か懐さゝかしおほろ月
雪の山氷の川の年明けぬ
おとなふる平和の二字や筆始め
清々と流れて行くや春の川
屠蘇酌んで平和の御代を祝ひけり
愛らしき稚子もならんで雛祭哉
出征の背子にも供えて雛膳
窓あけて隣の梅をなかめけり
見る毎に笑ひふくむや春の山
氏神の祭禮土産や花團子
古寺の見えて安堵や山さくら
長閑さや皆浮きそうな池の魚
春風や白ほの上る信濃川
花賣りの籠追ふて行く小蝶哉

信州　小林やすい子
越後　牧　はぎ子
京都　張田ひで子
新潟　牧　はぎ子
新潟　石川しげ子

春雨に音を忍ふ寡婦哉
島の來てふみ消すほとや忘れ霜
雪解けや此れ見よかしの松の瘤
春雨の棚に達摩と達摩かな
こつそりと見て來て花の噂かな
琴の音や何處やら梅の遠匂ひ
飾る間も下には置かぬ雛かな
流るゝと申す丈なり春の水
水よけて水ふむ朧月夜かな
春の水花の色ありにほひあり
菜の花や年々殖ゆる島の家
青柳のいとにむつましはなのかせ
雪の朝ゆきかくこらもさむけなり
ふくいくとかほる十里や雨の梅
野の露も借らす咲けり福壽草
かゝる夜に人の訪へかし梅の月
春風や手綱も取らぬ馬の上
伏兵のあるへき空や雲雀啼く
春の朝をはしま近く胡蝶飛ふ
うかれ來てなの花床にぬる胡蝶
きしを行く人うつりけり春の川
無住寺の裏の畑や梅の花
乙女子がすみれをつむや春の野へ
初日影障子にうつる千代の松
梅咲くや香り床しき里の春
梅散つて淺黄に解けし雪の朝
消えかれし花野の月や鶏の聲
囁きよせし松葉に春の夜の雨

東京　永井ふさ子
大阪　船越小仙子
三重　奥瀬かすみ
神戸　水越　輝子
近江　大宮求馬子
東京　高橋　珍子
群馬　林　濟子
伊賀　菊山かね子
神戸　尾澤わき子
近江　室谷ゆかり
東京　岩垣　貞子
野州　金子とし子
福岡　森　よしき

鶏ないて鐘に散り來る花の雲
起き出て苫かけなをす夜寒かな
新潟 岩本芳子

東風吹くや舟歌ねるき桃の宿
新潟 中林ひで子

春風や長堤十里春の草
外に湯をたてゝ客まつ桃のやと
外に湯をたてゝ客まつ桃の月
梅に月色よりも香の夜なりけり
鶯や暫しうきよをそとにして
芝の上をとけし雪水の流れけり
上の句のまたきにとるや歌かるた
力多き君を味方にかるたとり
歌かるたひとみをこらす膝の下
三日月を拝んて戻る汐干哉
横濱 船串米子

長閑さの中や華奏を滑る舟
光り持つ風も吹く日や歸る雁
出揃ふて見よし摘よし土筆
人の道踏んて出代戻りけり
横濱 船串喜代子

眞直な道踏ませたし藪入子
花の中かゝ濡れ立や朝の鳥
春の山剪れ矢拾ふて戻りけり
毛氈のちりしく瓶の櫻かな
東京 富田むか子

風に向ふ笠も小盆も花吹雪
花ちるや総門雨に鎖されて
召されさる詩人住みけり桃の家
早船の鈴ふる音や春の雨
騒夜や池塘の松の影參差
春の水千頃の野を浸しけり
草山のところ〳〵に春の水
瓦山や春風吹けは白き雲

春の雨歌舞伎ふれ行く濱花かな
能登 池野いさみ

いつまでも雪にして見む梅のはな
松山 上原のぶ子

飛石に置き忘れたるてまり哉
大阪 田中靜子

春雨にぬれてやもえし名なし草
伊賀 木津君子

うぐひすや鳴く度々の美しき
旅の名殘をしむや四日離
鶯のぬれて鳴く音や春の雨
金魚の池に落ち合ふ雪濁り
梅が香や月も三日の初明り
神戸 足立みい子

春日野や鹿に喰れて崩る草
紅梅や草分けらしき冠木門
一輪に三分の春や臥龍梅
神戸 足立あさ子

蘆の芽や寒さの拔けし鴫の聲
我もまたかくこそあらめ鼠む人
千金の春の姿や梅と月
大阪 木村春江子

枝折戸を挾んて垂るゝ柳かな
東京 磯矢みや子

春の夜や隣の格子鈴か鳴る
波津梅に京の鐘聞く霞哉
鶯に見られそ朝の亂れ髪
春立てと頂き白し遠の峯
群馬 竹のふし

雨はれの巣立うれしや雀の子
陸奥 相馬冬子

萬作や冬をこらえて春を待つ
越後 瀬川ちやう

鶯の初音や里の梅の枝
越後 笹岡はな子

暮きはや山は櫻てひとあかり
越後 阿部乙子

若草や尊き君か玉の杳
神戸 松風きよ子

凱旋の君勇しきさくら哉
櫻さく日本街となりにけり
花ちるや仁王の腕に二三片
繚衣春花の風に吹れけり

太刀は鞘おさまる御代の御殿かな
花咲かぬうちは花なり蕗の臺
笑ふのは山はかりかは百千鳥
風くせもつかず柳の伸ひにけり
桃咲くや香りの風は知らぬ里
古雛の古きにも似ぬ笑顔哉
寄居虫の宿にも居らぬ日和かな
梅の花水を隔て香匂ふ
初かすみたゝむく〱と春のやま
香こそ梅の知邊や雪の庭
買ひに來しお千代が船よ月おほろ
春水や蘭の芽二寸の淺緑
消殘る雪より明けて泊り山

長野　北澤清子
相模　高橋つれ子
秋田　平野初子
伊勢　河口たか子
尾張　平井はな子
東京　ふみ子

和歌兼題

四月（名所花 寫眞）　五月（卯花 渡し守）　六月（杜鵑 遠山の松）

小説　五頁以内（甲賞八圓、乙賞五圓）

短文　百字以内（天賞五圓、地賞三圓 人賞一圓）

和歌　兼題外にて、雜題及春季の歌

俳句　春の句何にても

新體詩　これも春の題及詠史、雜事、雜感

右懸賞募集す（賞金は、小説の外短文と同額の圖書切符を贈與す、兼題和歌は秀逸にも賞品あり）

投書規則

▽一　投書者は歌文の側に、一々宿所姓名を明記せられたし、單に名、又は號のみのものは採らず、

▽二　字體は楷書にして、おくり假名は平假名にせられたし、雜誌への原稿を手紙でも書かれるつもりにては困る、草書に變體いろはの多きものは採らず、

▽三　文も歌も、題の改まる毎に、用紙を改る事、此規則によれば葉書にても差支なし、相成るべくは半紙に認めて、開き封（第四種郵便物として）にておくられたし

雜題和歌は『はがき』にてもよけれど、一題づゝ別に認められたし、一枚に數人の作を記したる如きは採らず、

投書はすべて女子に限り、以上の規則も要するに女子らしき投書の仕方、所謂書生流にあらざるを、其人柄とゝもに採りたき也。

定價

一册 前金弐拾錢
三册三ヶ月分 前金五拾七錢
六册半年分 前金壹圓拾ゝ
拾弐册一年分 前金弐圓拾社

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行 金三拾錢
半頁 三十二行 金八圓
一頁 六十四行 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓

(色刷は特に御相談に應ず)

御注文規定

一切前金の事(但郵券代用一割増の事)●前金直收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に金錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十九年一月廿五日印刷
明治三十九年三月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 株式會社國光社
東京市京橋區築地二丁目二十番地
右代表者 橋本忠次郎
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人 河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 株式會社國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八番)

女學及家庭書類

島田佳矣・野口駿尾 共著 ●女子技藝 編物模樣圖案 全五冊 定價 桂ノ卷四十錢 棒ノ卷五十錢 廉ノ卷五十錢 繍ノ卷五十五錢 機ノ卷五十五錢 郵稅各二錢

櫻井鉤子著 ●女道叢話 全 定價金三十錢 郵稅金四錢

三輪田眞佐子著 ●女子之本分 全 定價金二十五錢 郵稅金四錢

三輪田眞佐子著 ●女子處世論 全 定價金二十錢 郵稅金四錢

磯部武者五郎著 ●家計簿記法 全 定價金十五錢 郵稅金二錢

藤野天城著 ●女子小觀 全 定價金二十錢 郵稅金四錢

堀内新泉著 ●女樂師 全 定價金卅五錢 郵稅金六錢

松川霞州著 ●結婚と家庭 全 定價金十五錢 郵稅金四錢

堀内新泉著 ●家庭の鑑 全 定價金十八錢 郵稅金四錢

女鑑編輯局編 ●[illegible] ひめかゝみ 全 定價金二十五錢 郵稅金四錢

著者	書名	冊數	定價	郵稅
梅澤清一著	◎清少納言と紫式部	全	金卅五錢	金六錢
澁谷愛著	◎萬國女子風俗	全	金二十五錢	金四錢
堀内新泉著	◎少女讀本	全三冊	各金十八錢	各金四錢
大町桂月著	◎常盤御前	全	金十三錢	金二錢
小林鶯里著	◎勾當の内侍	全	金十三錢	金二錢
濱田康著	◎袈裟御前	全	金十三錢	金二錢
國府犀東著	◎静御前	全	金十三錢	金二錢
長田偶得著	◎顔世御前	全	金十三錢	金二錢
杉谷正隆著	◎家庭訓歌 修身百首	全	金二十錢	金四錢
高瀬眞卿著	◎學校家庭 修身一夕話	全	特六十錢 並三十八錢	八錢 六錢
指原乙子著	◎女子文章軌範	全	金三十錢	金四錢

書名	著者	冊數	定價	郵税
日本米穀ノ將來	岡勇次郎著	全	定價金三十錢	郵税金六錢
國際貿易論	川崎直衛譯	全	定價金六十錢	郵税金六錢
臺風雜記	佐美錄三著	全	定價金三十錢	郵税金四錢
奢侈亡國論	白耳義リーヂ大學教授ラヴレー氏原著 文學士寺内淳二郎譯	全	定價金二十錢	郵税金二錢
德川の孔明	陸軍大臣寺内正毅題辭 保篠之亭甲雲軒編	全	定價郵税共金十五錢	
日露の英雄	山崎忠和著	全	定價郵税共金二十二錢	
銀行簿記學	倉庫銀行頭取中村清藏序 中村佐平著	全	定價金五十錢	郵税金六錢
土佐日記燈	故富士谷御杖述	全三冊	定價金一圓五十錢	郵税金十五錢
慶長以來國學家略傳	井上頼圀校訂 小澤政胤著	全	定價金一圓五十錢	郵税金十錢
豪吟集	弘田正郎編	全	定價金八錢	郵税金二錢
鐵血宰相語錄	幸田露伴序 村上濁浪譯述	全	定價金三十錢	郵税金四錢
江川坦庵	在法科大學 矢田七太郎著	全	定價金三十錢	郵税金四錢
石田三成	水主天姥著	全	定價金三十錢	税郵金四錢
山崎合戰	塚原澁柿著	全	定價金卅九錢	郵税金六錢

◀國光社出版圖書目錄▶

東京高等師範學校附屬小學校編纂 ◉ 學校生活 全 定價金廿錢 郵税金四錢

樋口勘次郎著 ◉ 教育者と國家社會主義 全 定價金八十錢 郵税金八錢

雜書類

登張竹風著 ◉ 讀書と修養 全 定價金三十錢 郵税金四錢

幸田露伴編 ◉ 四季物語 全 定價金五十錢 郵税金四錢

佐藤天風著 ◉ クレオパトラ 全 定價金廿五錢 郵税金四錢

醫學博士森鷗外著 ◉ 長曾我部信親 全 定價金十錢 郵税金二錢

安部正人編 ◉ 泥舟遺稿 全 定價金四十五錢 郵税金六錢

伯爵副島種臣題辭 從二位尾崎忠治題辭 鹿川宮内默藏著 ◉ 王學指掌 全 定價金一錢 郵税金十錢

從六位國府犀東序 故正三位文學博士栗田寛著 ◉ 天朝正學 全 定價金卅五錢 郵税金四錢

文學士吉丸一昌編 ◉ 名家修養叢談 全 定價金卅六錢 郵税金八錢

榎本虎彥著 ◉ 機術家と士 市川團十郎 全 定價金卅錢 郵税金四錢

小島[illegible]次郎著 ◉ 腦力增進論 全 定價金卅五錢 郵税金四錢

女鑑

明治三十九年三月一日發行　毎月一回一日發行　第拾六年第參號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

東京築地株式合社國光社印刷